
IS ~ B l u e Swallow ~

和利夫

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

IS ｝ Blue Swallow ｝

【Nコード】

N4355T

【作者名】

和利夫

【あらすじ】

とある世界で男は死に神の気まぐれで色々な待遇を受け、第二の生を授かった。

だが、生き返った世界では男は女として生まれ、愕然。しかし、そこで出会った人達とISの世界で波乱万丈な日々を送ることを決めた。

インフィニット・ストラトス

プロローグ（前書き）

別の小説が息詰まったので息抜きに書きました。

プロローグ

気が付けば目の前には何も無い空間が広がっていた。
いや、正確には何も無く無い。

地面の代わりに水面のような地面がある。不思議なことに『俺』はその水面の上に立っていた。だが、それ以外何も無い。真っ白な空間の中でただこの状況を理解しようと思いを巡らせる。

「おや？ 珍しいね。こんな所にお客さんが見えるなんて」

色々悩んでいると不意に声が聞こえて来た。

「ふむ、単に迷い込んだだけではないのかな？ とりあえず、自己紹介をしよう。私は君達が言う『神』だ」

神さま？ なんの事だ？

「おや、体が無いのに自我がちゃんとしてる。これは驚きだな？」

体が無い？ あ、ホントだ…俺はどうなったんだ？

「うむ、そうなる前の記憶がスッポリ抜けているみたいだね。いいよ。説明してあげる。簡単に言えば君は死んでしまったんだよ」

死んだ？ なんて？

「さあ？ 寿命で死んだんじゃないか？」

そうか

「あれ？ そんなにショックじゃない？」

ショックも何もここに来るまでの記憶が無いんだ。覚えているのは自分の名前ぐらい

「ふ〜ん…死ぬ直前の記憶だけでは無く。それ以前の記憶も無いのか…でも、君は運がいい！！」

なんで？

「輪廻転生の輪に入る前に私に会えたからだよ。本来ならこんなことはしないんだけど今日はちよつといい事があってね！ 特別に一つだけ願いを叶えてあげよう！」

願い？ なんでも？ いいのか？

「そうだよお〜！」

そんな神の言葉を聞いて俺は一つの願いを口にする。

空を飛んでみたいな

「おや？ 生き返りたいってとか言わないのかい？」

……………なんでもって言ったじゃん

「まあいいや！ じゃ、特別にちよつとしたサプライズだ。君の今の名前で生を受けれることにしてあげよう。後、ちよつとした『力』をあげよう」

名前はいいとして…なんで『力』を？　ってか、生って？

「名前は今の君が二度目の生を受けたような気休めだよ。まあ『力』は君の願いだ。あと、私も君に干渉出来るようにするからここの記憶もそのままにしておくよ」

世界？　自分がいた世界に生まれないのか？　ってか、なんであんたが干渉するんだよ？

「私が干渉するのはただの暇つぶし。君により充実した生を送ってもらうためさ！　そして、世界つてのは必ずしも同じとは限らない。並行に世界の姿は何万、何億通りに並んでいる。そのどこに生まれ落ちるかは…生まれるまでわからない。どう？　おもしろそうだろうか？」

パラレルワールドか？

「おや？　そう言う知識は残っているんだね。うんうん……君に抜けているのは生前の記憶だけか。知識はそのままであると……よし！　そろそろ君を送りだそう」

なんだ？　もう生まれる事が出来るのか？

「そうだよ。じゃ、行つてらっしゃい！」

ああ、ありがとう

そうして、『俺』は二度目の生を受ける事になり、自分の意識が

その空間から消えて無くなるのを実感した。

ちよつと、気の抜けた神様だったが……願いを叶えてくれた事には感謝しなくてはな。さて、『俺』はどんな世界に生まれる事が出来るのやら。

「精々、私を楽しませておくれよ……君が描く物語。どんな物になるのかね？」

場所は変わって、とある病室。

その病室では一人の女性がベッドで寝ており、ベッドの横には男性が椅子に腰を掛けている。

「無事に生まれたのか？」

「ええ……元気な子よ。さっきまで泣いていたのに、今は寝ているわ」

「お前もよく頑張ったな」

「ありがとう。ねえ？ 名前は考えてくれた？」

「ああ！ とびつきりいいのを考えたぞ！」

「あら？ あなたのネーミングセンスはどうかと思う時もあるけど

…一応聞いてあげる。どんなの？」

「…言い方が引つかかるが。まあ、いい。なんか電波を受信したみたいに閃いたんだ。この子の名前は」

男性は自信満々に生まれて来た子供の名前を告げる。

「ツバメだ」

こうして『俺』は二度目の生を手にしたのだった。

プロローグ（後書き）

感想などあったらお待ちしております。

第一話 兎と燕

八雲ツバメ。

それが二度目の生を手にした『オレ』の名前。生前の記憶で唯一覚えていた自分の名前である。どうやらあの神は本当に以前の名前をそのまま受け継ぐようにしたらしい。

訂正、『アタシ』の名前と言おう。
なぜなら……。

「女として生まれたからです……………」

部屋の隅でブツブツと何か独り言を言うツバメ。

神様の気まぐれで前世の男としての記憶を受け継いでいるので色々と悩む。

体が女なのに精神が男。

某少年探偵の方がもつといい設定だったぞ。

まあ、神様曰く。こればかりはどうにもならないらしい。済んでしまった事を気に病んでもしょうがないと思い、無理矢理納得した。

「ツバメ〜。御飯よ〜」

「は〜い」

至って平和な生活。

オレの家族は父と母とオレの三人。

まあ、父親は年中世界のどこかを転々としているので殆ど家にいない。なので、実質あたしは母親と二人で日々を堪能していた。

「じゃ、今日も頑張つてね」

「うん！」

二度目の生を受けて早六年。

若干の違和感がありつつもオレは現在小学校低学年として日々を過ごしていた。

そして今は自分の通う学校の通学路を通らず、公園内を歩いている。理由はこの先に『友達』が待っているからだ。そしてその友達と言うのが・・・。

「箒ちゃん！」

「ツバメ〜！ おはよー！」

篠ノ之箒。

二度目の生を受けて始めて出来た友達。

精神が男で体が女である俺はどのように人と接してよいのかわからず、一時期孤独な日々を過ごしていた時があった。だが、この箒はそんな俺に対して積極的に言うかなんというか…まあ、優しくしてくれた。それから、箒と共に日々を過ごしている内に友達になったのだ。

「お姉ちゃん。ツバメが来たから行くる」

「うん！ 行つてらっしゃい」

箒の横では、ベンチに腰掛けながらノートパソコンで何かを打ち込む女学生がいる。

彼女の姉。篠ノ之束である。

なんと言つか…あの頭から生えているウサミミが印象強く、始めはコスプレしている人かと思った。でも、どうやらそれが彼女のポリシーらしい。

彼女は自称『天才』らしい。いや、自称としなくても世間が認める『天才』だ。

何かの研究をしているのか、最近はどこに出かけるにしてもああしている。

「束さん。おはようございます」

「おはよ」

箒の時と180。態度が変わり、興味無く、ただ冷たく挨拶を返してくる束。始めは自分が嫌われているのかと思ったがどうやらそうでは無いらしい。

彼女は興味が無い人間にはただ冷徹な態度を取るのだと最近わかった。理由は知らないがそれが篠ノ之束と言う人間らしい。箒の話では今までに興味を持った人間は自分も含めて三人だけ。それってどうなのだろうと思うが深くは聞かなかった。

「あ、プリント落としてますよ」

そんな束の足元に一枚のプリントが落ちていたので俺はそれを拾い上げる。

「？ 航空力学？」

プリントには手書きで数字の羅列が並んでいる。

普通の子供なら単なる模様にしが見えない羅列。だが、前世の知識を持っているオレにはこれが何を意味しているのかがわかった。

ここに書かれているのは航空力学に関する『数式』であると。

「それが、わかるの？」

「あっ……」

思わず口にしてしまったことに後悔する。

今のオレは小学生であり、こんな物がわかるはずも無い。実際、隣でプリントを覗きこんでいた篤は頭に？マークを浮かべた用に首を傾げていた。

だが、束の反応は意外と言ったように目を見開いていた。

「これ、わかる？」

そう言つて束は俺にパソコンの画面を見せて来る。

正直、わかりませんと言えはいいのだが。

目の前にいる束の気迫に負け、正直に答えてしまった。

「プログラミング。…でも、なんのプログラムかはわかりません。なんか、複雑すぎる。何かの学習機能？　みたいなものですか？」

正直に答えると束は先程までの冷徹な表情をせず、その瞳をキラキラと輝かせている。

そして、突然俺の事を抱きしめてきた。

「凄いよ！　凄いよ！　篤ちゃんと同年なのにわかるんだあ！　君も天才だあー！！」

なんだが嬉しそうにする束。自分の頬を俺の頭に高速ですりよせてくる。

その間、俺は彼女の大きな胸に埋まり、窒息寸前。

「（やべっ！ 苦しい！！ …でも、いい！！ もうちょっとだけこうしてたい！）」

などと、男子ならではの欲望むき出しで状況を堪能していた。

「名前。なんて言うの？」

「…ツバメ。八雲ツバメです」

「ツバメ…じゃ！ ツンチャンだね！」

それなんてツンデレ？と思ったが口にはしない。ただ、嫌そうな顔だけはしておいた。ささやかな反抗だよ。

しかし、そんな反抗も虚しく束は一人で浮かれてオレに付けたあだ名を連呼していた。

もう、いいや・・・

「今度、家においでよ！ 束さんと遊ぼう！」

「えーっと…何度もお邪魔してます」

「あれ？ そうなの？」

はい、何度もあるあなたのお宅にお邪魔させていただいてますよ。
まあ、大抵あなたは部屋に籠るか、挨拶しても無視してくれますがね。

「ツバメ！ 早く行かないと学校遅れちゃう！」

「あ！ そうだった！」

篤の一言に俺は自分が学校に行く途中であつたことを思い出す。
無理矢理、束の胸から脱出する。その時、束が残念そうな顔を
するが気にしない。

「いつてらっしや〜い！」

「行つてきま〜す」

元気よく手を振る束が俺達の事を見送り、それに答えるように篤
と一緒に手を振って返事をする。

どうやら俺は篠ノ之束の『四人目の興味対象』になれたらしい。

第二話 高校受験です

時は流れて、オレが小学校4年になった時。

世界は動いた。

世界各国が日本に向けて放ったミサイル攻撃。

それを全て撃墜する篠ノ之束の作製したIS『白騎士』。

後の『白騎士事件』である。

全世界に大体的にISの存在をアピールした束は各国にISの作製法を提供し、その姿を突然消してしまう。

そして、日本政府も束の家族を重要保護と言う名目で各地を転々とさせられてしまう。束とはその時以来合っていない。

たまに連絡のやり取りはしているのだが、何せ居場所を聞いても子供が一人で行けるような場所では無かったり、連絡出来たと思ったらまた引越すなどの繰り返しであった。

向こうも色々大変らしい。

そんなこんなで中学三年の冬である。

「それでね。今度あたしIS学園の受験するんだ」

『そうか！ 私もIS学園に行くことになったんだ！』

そして今日もそんな筈と近況報告の連絡をやり取りしている。

携帯電話と言う物は便利だ。向こうがどこにしようとする連絡が取れるのだから。まあ、政府連中が盗聴している可能性があるがね……。

オレと箒は携帯電話を手にしてから頻繁に連絡を取り合っていた。そして今は高校受験の話をしており、IS学園を受験すると箒に報告していた所だ。

「へえ〜！　じゃ、一緒だね！　また箒と会えるのが楽しみだ！」

『私はあまり行きたく無かったが…ツバメが行くとわかったら楽しみになった！』

「あつ。でも、その前に私が受からないと入れないけどね」

『ははは！　それもそうだな。頑張れよ』

「うん！」

箒はオレがIS学園を受験するとわかるとやたら嬉しそうにしてくれた。

「あ、そうそう。この前一夏くんがね〜」

『一夏がどうかしたのか！？』

「そんなに過剰な反応しないでよ。…この前ね。別のクラスの女の子に告白されたんだ〜」

『なっ！？　本当か！？』

いちいち反応が面白いな。

「で、その女の子がね。ストレートに『付き合ってください！』っ

て言ったのに一夏くんだったら『なに？ 買い物？』とか言っちゃってんだよ」

『はあ……あの馬鹿者が』

「で〜も〜。そんな一夏くんが好きな箒ちゃんはどうなのかなあ〜？」

『なあ！？ う、うるさい！！』

先程から出ている一夏と言う人物は箒の幼馴染である織斑一夏の事である。

そして、箒の想い人。

箒がオレの前から消えてもそれは変わらず、今でも好きでいるらしい。

だから、たまに一夏の事を報告するとやたら嬉しそうにして来るのが電話越しでもわかる。

「一夏くんって本当、朴念仁だね。もはや朴念神？ 箒も積極的にアプローチが必要だよ？」

『せ、積極的につて！？ そんな、会えない人にどう積極的にすればいいんだ？』

「別に電話の一つでもすればいいんだよ。で、その繰り返し！ 男の子は意外とそんな行為にグツと来るんだよ！」

実際、元男のオレが言うのだ。オレだったらそれで相手の事を気にするようになってしまっただろう。まあ、一夏はどうかかわらんかな。

「こないだ電話番号教えたでしょ？ 試しにしてみたら？」

『は、恥ずかしい!!』

「はあ…」

コイツもコイツだ。奥手過ぎてあの朴念仁を射止めるには相当な苦労が必要とされるだろう。他人事だが、想像するだけで気が参りそうになる。

「あ、ごめん。そろそろ切るね。明日の準備しなくちゃいけないから」

『ん？ 明日何かあるのか？』

「何って…IS学園の受験日」

『あ、明日なのか！？ ご、ごめん！ もしかして勉強の邪魔をした？』

「ううん。勉強は一通り終わってるから大丈夫だよ。それに箒の声が聞けてなんだか落ち着いたし」

『ツバメ…』

「ニシシシ！ 後は頑張って来るだけだよ！ そうしたら箒と春から一緒だから」

『ああ、頑張って来い』

「ありがとう。じゃ、今度は結果報告する時ね」

『ああ、おやすみ』

「うん、おやすみ」

そう言っただけでオレは携帯の通話終了ボタンを押した。そして、明日の準備を済ませてベッドの中に潜り込む。

「本当は合格確定なんだけどな……」

実はオレは篠ノ之束が失踪した直後。彼女と会っていた。

そして、オレはIS理論を叩きこまれ、いつの間にか助手のような事をつい最近までしていたのだ。そして高校受験をする時、束が勝手にIS学園への入学手続きを済ませてしまい、そこへ自動的に行くことになっている。

決して裏口入学じゃないぞ。

試験は形式のような物なのだ。一応、オレは篠ノ之束から推薦をもらっているのだが、非公式なものなので試験は受けなくてはいいじゃないらしい。

まったくもってメンドクサイ……。

「ツンチャンにはいつくんのことを守って貰いたいの！」

不意に束から言われた言葉の意味を思い出す。
いつくんとは織斑一夏のことだ。

聞けば織斑一夏は俺の気付かぬ間に誘拐などされていたらしい。何故誘拐されたのかは束から話してくれなかったたのでその言葉の意味が解らない。

オレも、筈と別れてからオレと一夏は共通の友達がいることでそれなりに仲良くなった。だから、誘拐されたと聞かされた時はさすがにショックだった。無事に帰って来てくれたのはよかったのだが、もし最悪な事態になったらと思うと悪寒で体が震えてくる。

二度目の生を受けて、この世界で出来た友達。それが危険にさらされているとわかると怖かった。

だが、この世界にはISと言う『力』がある。

「（いいぜ、守る力を手にしてなんでも守ってやるよ）」

守ると言っても自分に出来る事など限られているかもしれない。だったら、せめて自分の手が届く範囲の人は守ってやる。

そう決心した途端。俺の意識は睡魔に負けて眠りに付いてしまった。

翌日。試験会場では大事件が発生してしまった。

「一夏くん……………なに、やってるの？」

「ツバメ……………ISを動かしちゃった」

この会場にいるはずも無い人物がここにいる。そしてそいつは男だと言うのに女性しか動かせないISを動かしてしまったのだ。

オレは束の言葉の意味をここで理解して深くため息をついた。

第三話 天燕（あまつばめ）

『ツンチャーン！ 入学おめでとう！！』

「……………」

無事IS学園へと入学が決定したオレは電話越しのテンション高めの声を聞いてウンザリしている。

『アレアレ？ もしかして元気無い？ どうしたのかな？』

「…どうしたもこうしたも。一夏くんをIS学園に入れるようにしたのは束さんですよ？」

『何のかとかな』 束さんには何の事かさっぱりわかりませ〜ん』

そんな調子で嘘を言われても、なんとなくわかる。
この人確信犯だ！

「なんだってそんな事をする必要があるんですか？」

『ヒ・ミ・ツ』

「はあ……………」

ってか、秘密なんて言っている時点で認めてるじゃん。でも、これ以上の事は話してくれなさそうだから聞くのを止める。

『それより！ 束さんからツンチャンに入学祝いがあるので～す！』

「入学祝い？」

『ツンチャン専用のISだよ～』

「アタシ、専用？」

専用と言う言葉を耳にしてオレは反応する。

ISの『専用機』。特定の企業がその人のために作ったISの呼称。

現段階では各国の代表候補生などが持っている数体しか開発されていないと聞く。それをオレが手にすると聞いて少しテンションが上がりそうになった。

『うん！ それでね～入学式前に渡したいから早めに学校の方に来てほしいんだ～。ダメ？』

「いいですけど……なんでです？」

『専用機の実戦データ収集でえ～す！ 今回作ったツンチャンの専用機は他とは勝手が違うのでその実験！』

「はあ～……」

そして、上がり気味のテンションはそんな束の言葉によって右下がり落ちて行くのであった。

数日後。IS学園入学式前日。
どの生徒よりも先にオレはその学園の前に立っていた。

「ひっれ〜な……」

見渡す限りに広がる学園。もはや何かのテーマパークのように広く、下手したら迷子になってしまうのではないかと思った。

「八雲ツバメだな」

「あ、はい！」

そんな学園に見取れていると俺に声を掛けて来る女性がいた。

鋭い目つきで長身でスーツ姿。

いかにも仕事の出来るような人だった。

そんな女性がオレを出迎えてくれた。

「すまん。入学は明日だと言うのに」

「いえ、あの人の事です。もう慣れました」

互いに苦笑いをしていた。

ちなみにこの人は一夏の姉で織斑千冬だ。互いに面識は無かったがこの人も束の友人と言うことで俺と言う存在の話を聞いていたらしい。俺もいつも束から「ちーちゃんね〜」と耳にタコが出来そうなくらいに話を聞いていたので知っていた。

「では、早速お前の専用機のテストを開始するがいいか？」

「はい」

そうしてオレはこのIS学園へと足を踏み入れる。

千冬に更衣室に案内され、そこでISスーツへと着替えたオレは広いアリーナのだ真ん中に立たされていた。

『では、天燕の運用試験を開始します。準備はいいですか？』

「はい！」

『ISの展開をお願いします』

アナウンスの指示して来た通りにオレは先程渡された天燕の指輪に念じる。

「（……来い）」

念じると指輪は光。その光が俺の体を包みこんだ。

現れたのは白と青が特徴的なカラー。

ただ、他のISと比べて一回り小さく、両手両足に付いている装甲も従来のISに比べて非常に軽く感じた。つまり、装甲が非常に薄いのである。そして、背中には飛行のための反重力力翼の代わりに可変式の翼があり、そこから光の粒子が噴き出していた。さしずめ光の翼と言った所だろうか。

「（完璧な高機動型だな…こりゃ…）」

『展開までの時間0・24秒。では、次は飛行テストです』

「了解」

空を飛ぶとイメージするとオレの体は宙に浮いた。その際、光の粒子が翼から強く吹き出していた。

「なるほど。この粒子は推進剤か…ってか、コレって」

などと、一人で納得したオレは適当に天燕で空を飛ぶ。

そして、驚いた。

今まで束の実験で何度かISを操縦したことがあったが、この天燕は相当な物だったからだ。自分がイメージしていたスピードよりも速く動き、自分の反応速度に応じて方向転換、停止してくれる。これほど自分とフィットした感覚をしてくれることにオレは驚いていたのだ。

『予定コース順調。天燕の飛行テスト完了です。では、最終試験。対IS戦闘を行います』

途端にアリーナのピットから一つの影が飛び出してきた。教師陣が流用しているISだ。操縦者は自分とさほど変わらない程の身長で、その割には発育した胸が特徴的なメガネを掛けた女性だった。

「八雲さん。これからよろしく願います」

「あ、はい」

「私はこのIS学園で織斑先生の服担任をしている山田真耶です」

「八雲ツバメです」

「じゃ、早速始めちゃいましょう」

「お願いします！」

そうして俺は山田先生と対峙した。

所変わってアリーナのモニター室。

織斑千冬はそこでモニターに映し出された映像を見ていた。

「やあーやあー！ 千冬くん！ 調子はどうだい？」

そして千冬の背後から呑気な声が聞こえてくる。

千冬に取って聞き覚えのある声であつたが、その声の主を見て千冬は呆れた。

「……束。それは変装なのか？」

「なっ！！ 私は篠ノ之束ではありませんよー！！」

実際、その人が身に付けているのはよく宴会用で付けられる鼻眼鏡であつた。それ以外はいつも見ている篠ノ之束が身に付けている服装とウサミミ。変装している本人はこれで完璧だと思っ
ているらしく、他人から見ればもはやただの変人であつた。

「ツンチャンの天燕はどう？」

「順調だ。性能も第三世代にも劣らない」

「うんうん ツンチャンもそれに適応してくれるから大助かりだよ」

「しかし、私達以外でお前が興味持つ人間がいるとはな。彼女は何者だ？」

「えーっと……箒ちゃんの親友で、私の助手！」

「いや、もっと根本的な事を聞きたいのだが……」

「うーん…私に続く天才？」

「なぜ疑問形なんだ？ それに天才とは？」

「彼女はね教えたことをすぐに理解して、自分の物にしちゃうんだ。私のIS理論もあつという間に理解して、それに似た理論を独自で作っちゃう程に」

「IS理論に似た理論？」

「そう！ その理論を見せてもらった時はビックリしたよ。こんな理論もなり立つんだあーって！ それで、実はあの天燕には彼女の理論と私のIS理論組み合わせで作った物なんだよ」

「なんだと？」

「だから、あの天燕はISは敷いて言えば新しいIS。第三世代を飛び越して、第四世代とでも言うのかな？」

「第四……世代……」

「でも、まだ発展途上で完成には程遠いけどね。もっと正確に言っちゃうといっくんの専用機みたいに第三、第四の中間地点にカテゴライズされるのかな？ あ、決着ついたみたい」

束がそう言うともモニターの様子を窺った。

モニターには地面に倒れている二人の様子が映し出されていた。二人のISのエネルギー残量は0を表示している。試験なので勝敗など関係無いのだが、勝敗を付けるとしたら両者引き分け。おまけに、二人共目を回しながら気を失っていた。

「はあ……医療班。二人の確保」

アナウンスでそう報告し、話の続きを聞こうと束の方を振り向く。先程まで隣にいた束はいつの間にかいなくなっていた。私はまたため息をつき、とりあえずモニター室を後にすることにした。

明日から、新しくIS学園にやってくるガキ共を迎え入れる準備をしなくてはな……。

第四話 神降臨！（前書き）

息抜きのつもりで書いたらなんだか止まらなくなってきた！
：

第四話 神降臨！

IS学園に来てから今日という一日が終わろうとしていた。

「だめだ…まだ気持ち悪い…」

オレは自分がこれから三年間使用する宿舍の部屋に案内され、自分のベッドに倒れこむようにしている。

そして、重度の疲労で体が鉛のように重く感じた。

何故、そんな状態になったかと言えば……理由は今日の天燕の性能テストのせいだ。あの山田真耶という教員。元日本代表候補制というだけあって、実力はかなりのものだった。それを引き分けに持ち込めたのは天燕の性能のおかげだろう。

「…まだまだ…弱いな、オレ」

ボソリとそう呟く。

）
）
）

己の実力を知り、これからどのようにしようと考えていた時。突如、俺の携帯が鳴った。

誰だろうと思う、携帯の着信画面を見ると登録されていない番号がそこに表示されていた。

だが、俺はこれが誰からの電話なのか知っていたので通話ボタンを押して携帯を耳に当てる。

「もしもし」

『やつほゝ！ 第二の人生をエンジョイしているかい？』

電話の相手は俺をこの世界に送った張本人。神様であった。

「……………おかげさまで」

『そうかそうか！ それならいいんだ』

「で？ なんの用だ？」

『おや？ 用が無かったら駄目だったかい？』

「神様はよっぽどお暇だと見える」

『つれないねえ。まあ、確かに暇なんだけど』

「疲れているから手短に頼む……」

『あいあい。了解しましたよ』

オレはたまにこんな調子で神様とコンタクトを取っている。なぜ携帯に神様が電話してくるのが謎だが……まあ、あの人の単なる気まぐれだろう。だから、あまり気にしないでいる。

『ついに君の願いが叶ったことの祝福と能力の解放をしてあげようかと思って』

「願い？ 能力の解放？」

『なんだい？ 忘れたのかい？ 君が最初に私にお願いしたことじ

やないか。空を飛びたいって』

「ああ〜そんなこと言ってた。でも、なんで今なんだ？ 俺はもつと前から飛んでいたぞ？」

『それは仮の翼でだろ？ 今日君が手にしたのは正真正銘の君自身の翼だよ』

「オレの、翼」

神様に言われて俺は指につけていた指輪を見る。

天燕。それが俺の本当の翼。

『で、能力の方なんだが』

「ん？ オレの能力は順応性じゃないのか？」

オレは物事に対して理解するが人並み外れて早い。どんなに難しい物事でも一回教えてもらえればすぐにそれを理解してしまうほどだ。だから、オレはこれが神から与えられた能力の一つだとずっと思っていた。

『それは生前から君の持っている知識だよ。私はそのことに関して何もしていない。元からある君の能力と言ってもいい。それで、話を戻すが……君の翼。天燕なんだが、操作していて疲れるだろ？』

「…たしかに」

『まあ、人間の体であるの速度は対応できないからね』

神の言う通り、天燕のスピードは速すぎた。オレの動体視力や反射神経ではその動きに対応できず、それなりにスピード制限をしなければならなかったのだ。

『なので、君に特別な『眼』をあげよう』

「眼？」

『『神眼』とでも言おうか？ まあ、全てを見通すことができる眼だね。ちょっと痛いから我慢してね』

「お、おい！

ッ！？！？」

まだ心の準備ができていないというのにオレは眼球辺りに激しい痛みに襲われた。痛みはほんの数秒ぐらいで引いたが、あまりの痛さに涙がボロボロ出てきて止まらない。

つてか、マジで痛い……眼球をくり抜かれて、無理やり何かを詰め込まれた感じだ。まあ、そんな経験ないから本当にそうなのかと聞かれればただの例えとしか答えられないのだが、そんな感じです。

『はい、おしまいっ！』

「…テメエ」

『後は天燕のISコアとのリンクができるようにしてあげるよ』

「…はあ？　つて…お、い…」

神は人の話を聞かずにどんどん俺にプレゼントを渡して来る。そ

れはいいのだが『神眼』なんてなんかネーミングが恥ずかしくね？
そんな事を思っている内に俺の意識は闇へと落ちた。

次に目を覚ませばオレは空の上に浮かんでいた。
奇妙なのは目の前に広がる景色は空と雲しかなく、下を見ても地上らしきものは見えない。

《誰？》

不意に声が聞こえて来る。

《あなたは誰？》

オレは声の方を振り向くとそこには一人の少年がいた。
なんというか、普通の男の子だ。年齢は5〜6歳ぐらいだろ。髪の毛はほんの少し赤みがかかった茶色で瞳はこの蒼天と同じ綺麗な蒼色をしていた。

「はじめまして、八雲ツバメだ」

とりあえず、自己紹介をする。

《ツバメ……。僕の所有者の名前だね。意外とここまで来るのに早かったね。ってか、早すぎない？》

「ちょっとした事情があつてな。まあ今日は挨拶だけだ」

《ツバメって女だね？　　なんだか、男みたいな喋り方だね》

「これが俺の本性だよ。君に猫かぶってもしょうがないし」

《猫？　猫ってかぶれるの？》

「ああ…いや、そういう訳ではないんだが」

《？？？》

言葉が難しくて理解できなかったのか少年は首をかしげながら頭に？マークを浮かべている。まあ、無理もない。こいつはまだ生まれて間もないからそういった理解がまだできないのだから。なので、今度暇なときにでも教えるでしょう。

「とりあえず、今日は挨拶だけだ。また、ここに来るよ」

《うん。あ、そうだ…》

「ん？」

《自己紹介。僕はツバメのISコアの管理人格。名前は天燕。ツバメと一緒にだね》

名前に燕を持つ者同士。天燕と名乗った少年はそれが嬉しかったのか笑顔を俺に向ける。

それはそれは無邪気な笑顔だった。

オレの精神が完全な女だったら悶え死にそうだった。男としての部分があるから何とか堪えることができたが……。

ってか、かわいすぎる！　これがいわゆる『萌え』と言うやつか。

「……ああ、これから宜しく」

《うん！》

軽く天燕の頭に掌を置き、優しく撫でる。天燕もそれが嬉しくてえへへと笑ってまた笑顔を向ける。

やめろ！　その笑顔は眩しすぎる！　心が浄化されてしまう！！

次に目を覚まして時にはもう日は昇っていた。
時刻を見れば朝の6時。

「そついえば今日は入学式……」

まだ時間的に余裕がある。新入生が登校してくるのが8時ぐらい。
入学式は9時から。ってか入学式初日から授業っておかしくね？

「…さて、今日も一日頑張りますか！」

こうしてオレのIS学園での学生生活が始まる。

第四話 神降臨！（後書き）

感想などお待ちします。

第五話 クラス代表三つ巴バトル開催決定！（前書き）

やっと原作に入れました。

上手く出来てるか不安ですけど温かい目で見守りください。

第五話 クラス代表三つ巴バトル開催決定！

俺、織斑一夏は現在窮地に立たされている。

「……………」

もはや緊張を通り越して背中から変な汗が滝のように流れてくる。もうシャツが背中にくっついて気持ち悪い。

え？ 何故そんなことになっているかって？

それは俺が新たに高校デビューを飾ろうとしている今日初日。クラスメイトは女子しかいないからだ。

傍から見た男子は「何？ このハーレム？」とか「おい、YOUちよつとそこ代われよ」とか言われそうだ。

代われるものなら代わってやりたい。

そして、この敵地のど真ん中で支援物資が届かないという恐怖を味わってくれ。

「（これは…想像以上にきつい…）」

不意に窓側の席の女子を見る。そこに座っているのは6年ぶりに再開をした幼馴染の篠ノ之箒である。俺はそんな幼馴染にアイコンタクトでSOS信号を発信する。

あ、目を反らした……。

箒に見捨てられたことがショックだったが、とにかくこの窮地を脱出したいがために今度は廊下側の一番後ろの席に座る女子を見た。こちらは小学校から現在まで同じ学校に通っている八雲ツバメだ。

ツバメに筈同様のSOS信号を発つしようとするが……やめた。

「（あいつ！ 俺があたふたしているのを楽しんでる……!）」

ツバメさんは現在口を手で押さえ、声を殺し、顔を伏せて、小さく震えていた。もう、声に出してしまった方が楽だろうに……。

「……くん。織斑一夏くんっ」

「は、はい!？」

「あ、あのね。大声だしてごめんね。お、怒ってる？ 怒っているかな？ 自己紹介、『あ』から始まって『お』の織斑くんなんだよね？ 自己紹介してくれるかな？ 駄目かな？」

「いや、あの、そんなに謝らないでください。……ってか、自己紹介しますから、先生落ち着いてください」

俺はひたすら頭を下げる眼鏡で一部例外を除いて小さい山田先生（さつき自己紹介した）に落ち着かせるように言う。

山田先生は顔をあげ、俺の手を握り嬉しそうにした。そして、クラスの視線がさらに俺に注がれる。

「えーっと……織斑一夏です。よろしくお願いします」

とりあえず、自己紹介。

席を立ち、後ろにいるクラスメイトに向かって頭を下げて、上げた。本来ならこのまま着席をするのだが、振り向いたことが失敗だった。彼女たちの視線が痛い程俺の体に突き刺さる。「え？ 終り？」とか「もつと喋ってよ」的な空気が教室を支配していた。

「……以上です」

だが、空気を読まずここで終了。何人かは芸人みたいに机からコケていたがそんな過度な期待をされても困る。無茶ぶりもいいところだ。

パアアン！！

「いつ　　！？」

しかし突然俺の脳天に痛みが走る。何事かと思い後ろを振り返ると…。

「げ！？　関雲！？」

パアアン！！

「だれが三国志の英雄だ。馬鹿者」

そこにいたのは俺のよく知っている人がいた。姉の織斑千冬だ。なんで、貴方様がここにおられるのですか？という疑問に頭がいっぱいになって俺は放心状態となった。

そして、その直後。クラスの女子が甲高い声をあげて、黄色い声援がクラスに響いた。

一時間目のIS基礎理論授業が終わって、オレは懐かしの親友の席へと向かった。

「ほーおーきー！」

「ツバメ」

実に6年ぶりに再開する篠ノ之篇。

外見はあまり昔と変わらないが成長する所はちゃんと成長しており、立派な女性となっていた。

「SHRの時、一夏くん面白かったね。お腹がよじれるかと思った」

「はあゝ…なんだか頼り無く感じてしまったよ」

「それより、もう挨拶したの？」

「いや…まだ…」

「はあゝ…」

モジモジする篇を見て俺はため息を吐く。人の事言えないですぜ？ お姉さん。

「とりあえず、話をする！ でないと、ズルズルしちゃうよ！」

「うっ…」

「しょうがない…。おーい！ 一夏くん」

「なあっ!？」

もはや強行突破だ。あれ？ 違う？ 合ってる？ まあいいや。
箒はこの手に関して無理やりにもきっかけを作ってあげないと
行動しない。なので、オレが二人のかけ橋となつてしんぜよう。

「ツ、ツバメ…なんだ…」

「うつわ…酷い顔…」

「うつせえ、人の苦悩を笑いやがって」

呼び出しに答えてやってきた一夏は何故だか酷くやつれたようだ
つた。

「ほら、箒！」

「ああ…」

箒も腹をくくつたのか、その気になったようだ。

「…ちよつといいか」

「え？」

そして、箒は一夏を連れて教室の外へと出てってしまった。さて
はて、久々の再会はうまくいくのかね？

「ねえ、八雲さん」

「はい？」

そんな二人を見送っていると同じクラスの子に話しかけられた。

「八雲さんって織斑くんの知り合いなの？」

「うん。小学校から同じ学校だったよ」

「そ、そうなんだ。…ねえ？ 織斑君ってどんな人なの？」

「見ての通りの人だよ。でも、やる時はやる奴で自分の考えは曲げない真つすぐな人だよ」

「ふ、ふーん…」

おやおや、まさかこれは…。

「何？ 気になるの？」

「そ、そんなんじゃないよ！！」

慌てて否定するその女子は両手を突き出し残像が見えるほどブンブンと振っていた。だが顔は真つ赤にしている。

…篝さんや。敵は意外と多いかもしれません…。オタオタしてたらあつという間に愛しの彼が取られてしまうかもしれませんよ。

「再来週行われるクラス対抗戦に出る代表者を決めないといけな

い」

そんな事をいきなり言ったのは織斑千冬である。

三時間目はISが持てる実践で使用する各種装備の特性に付いての説明なのだがこれも重要なことらしいので今決めることになった。クラス代表はクラス対抗戦や生徒会の開く会議や委員会への出席……言うなれば委員長のようなものである。

「はい！ 織斑君を推薦します！」

「私もそれが良いと思いますー」

などとクラスの子が面白半分で一夏の事を他薦している。

当の本人は必死に抵抗し辞退しようとしているが教師の千冬は厳しい言葉で却下。なので、無投票当選で一夏がクラス代表に決まるうとした時だった。

「や、八雲ツバメを推薦します！」

ん？ 一夏の奴なんか言ったか？

「ツバメは中学の時に生徒会長を務めた事もあります！ 俺より仕事は出来ると思いますー！」

「！？」

コイツ！！ オレを売りやがった！！！ そこまでして自分は助かりたいかああああああ！！！！

「うむ、それは頼もしいな。ではこの二人で投票を行うか？ 他に

誰か候補はいないか？」

「待つてください！ 納得がいきませんわ！」

そこに待ったを掛けたのはイギリス代表候補生のセシリア・オルコットである。先程の休み時間も何かと一夏に突っかかってきて、ギヤーギヤー喚いていた。何かとプライドが高そうな人だ。

どうやら自分がクラス代表にならなかった事に不満があり、自らを自薦して来たのだった。よしよし。この二人が相手なら票はそっちに流れて確実に俺は落ちるだろう。

「決闘ですわ！」

「おう。いいぜ。四の五の言うよりわかりやすい」

ん？ なんか話を聞かずに一人で安心していたらおかしい方向に話の流れてるな。

「さて、話はまとまったな。それでは勝負は一週間後の月曜日。放課後、第三アリーナで行う。織斑、オルコット、八雲はそれぞれ用意をしておくように。それでは授業を始める」

あれ？ ちょっと耳がおかしくなったかな？ 今先生なんて言った？ 決闘するのは一夏とセシリアだけじゃないのか？ ってか、今自分の名前も出た？

「えっ！？ アタシも！！」

「話は聞いておけ馬鹿者。お前も他薦で名前が上がっているんだ。辞退は認めん」

バツサリと千冬はオレに反論をさせず、とつとと授業を開始し始める。

ギロリとオレは一夏に視線を向け、アイコンタクトである言葉を伝える。

……………ブ・チ・コ・ロ・ス

それが伝わったのか一夏は顔を青くして顔をオレから背けた。

クラス代表の選出方法が決まり、とりあえず授業が終わった後一夏を絞めた。そして本日の授業が終了して、オレは自分の部屋へと帰って来ていた。

「そうだ。死のう」

「な、何言っているんだ！」

「はあ……」

いきなりのネガティブ発言に突っ込みを入れるのは箒である。

ちなみに現在、箒は俺の部屋へと来ている。このIS学園の生徒は二人一部屋の寮に住むことになっているのだが、生憎俺の部屋には相手がいない。無駄に広い部屋を一人で独占できるのも良いし、精神が男の俺にはちよつと刺激が強いから大助かりであるがハブラれた気がする。ちなみに箒は俺の隣の部屋らしい。

「それより、箒さん。一夏くんと進展はありましたか？」

「今日一緒にいたから知っているだろ……」

「箒はもうちょっと素直になった方がいいかもね」

「そんな急に言われれも……」

「そうでもしないとこのIS学園は一夏くんにとって誘惑が多いところだよ？ モタモタしてたらあつという間に他の子に取られるよ！」

「あう……」

シュンつと落ち込む箒。

普段の箒は気の強い。だから、思ってもいないことを言ってしまう少し誤解を受けることもある。多分、今朝の一夏とのやり取りにも何かあったのだろう。嬉しさ半分、虚しさ半分と言った表情で帰ってきたのだ。何があったと聞いてみれば、「久々に会ったのに覚えてくれてた」とニヤケながら言い、「でも、幼馴染として覚えていた……」と肩を落としていた。

「うーん……なにか一夏くんと距離を縮める方法はないかね？」

「……すまない。ツバメ」

「んー？」

オレは一人でウーウー唸っていると突然、箒が謝罪してきた。箒は

膝の上に載せている手を強く握り、小さく震えている。

「わ、私の為に色々考えてくれるのには感謝してる。でも、私が不甲斐なくて・・・ごめん」

「何言っているの？　これはね、アタシの自己満足よ」

オレは震える筈の手にそっと自分の手を添える。

「え？」

「親友が困っているのにほっとけないの！　だから、アタシの気が済むまで筈の事を助けてあげる！！　うまくいかないからって何！？　次をうまくやるためにまた一緒に考えてあげるっての！！」

いかん……少し感情立ってしまった。

でも、オレが言ったことに嘘偽りは無い。本心からオレはこの子の事を助けたいと思ったのだ。それがオレの篠ノ之筈に対する『恩返し』なんだ。

この世界で、こんな境遇に馴染めなかった俺を導いてくれたのは彼女なんだ。他人にとって小さな理由なのかもしれない。彼女が居なくても俺は世界に馴染めたかもしれない。

でも、オレにとってはそれが立派な理由で、彼女がいたから今のオレがあるのだ。そして、オレは今の生活が好きだ。そう思わせてくれるようにしたのも彼女なんだ。だから、彼女との出会いに感謝し、彼女の取り巻く世界も幸せな物にしたいと思う。

「うう……………ありがとう……………」

「いいよ」

箒は声を殺しながら泣いている。オレはそんな泣き顔が見えないように自分の胸に箒の顔を隠すように抱きしめた。

束さん。ごめんなさい。形は違うけど……約束は守ります。

しばらくして、やっと落ち着いた箒は元の調子に戻った。
目じりはまだ赤いが何かスッキリしたような表情になっていた。

「本当にありがとう。おかげでスッキリした」

「うんうん。今日はもう戻ったら？ そんな顔でルームメイトと会う訳にも行かないからシャワーでも浴びなよ？」

「ああ、本当にありがとな」

そして、箒は隣にある自分の部屋へと戻って行った。

「さてはて、どうした物かね？」

ベッドに寝っ転がり、箒と一夏をどうやってくつつけようと考え
ることにしたオレ。

しかし、数十分後。隣の部屋からものすごい物音が聞こえて、意
外な形で二人の心の急接近させるチャンスが到来してきたのだった。

第五話 クラス代表三つ巴バトル開催決定！（後書き）

感想お待ちしてまーす。

第六話 特訓開始！

昨晩はちょっとした騒動があった。

「なあ」

「……………」

「なあ、いつまで怒ってるんだよ」

「…怒ってなどいない」

「顔が不機嫌そうじゃん」

「生まれつきだ」

「ブッ!!」

現在オレこと八雲ツバメと織斑一夏と篠ノ之箒は一年生寮の食堂で食堂を取っていた。で、ただいま箒さんは超ご機嫌斜め。理由は昨晩にちょっとした事件が発生したからだ。

何の事件だつて？ そりゃ君たち。あれですよ。

これなんてエロゲー？ 的なイベントが二人の間にあつたわけですよ。

「うわっ！ 汚ねえ！！ おい、ツバメ！ 味噌汁吹くなよ!!」

「う、ごめん…でも…おかしくて…」

そしてオレは絶賛思出し笑い中。あまりにもできすぎた状況に
もうこれは笑うしかないのですよ。
だが、ちょっとした問題がある。

「…なあ、篤」

「な、名前で呼ぶな！」

「…篠ノ之さん」

「……………」

微妙に気まずい空気が二人の間に流れてしまったのだ。
なんとか修正しようとオレも頑張ったんです。
でも、無理だったんです。

そしてもう一つ問題が発生してしまったのです。

「ねえねえ、織斑くんさあ〜」

「はいはい！ 質問！」

「今日のお昼ヒマ？ 放課後ヒマ？ 夜ヒマ？」

突然だが朝食を取り終え、本日の授業二時間目が終了と同時に一
夏の元にクラスの女子が我よ我よと駆け寄って行く。昨日の騒動は
他の女子たちの耳に入り、出遅れなかったために唯一の異性に猛アタッ
クをしてくるのだ。女子に囲まれ一夏は困っている様子。

「……………」

その様子を自分の席から見ていた箒は大層ご立腹の様子である。

「……さてはて。どうした物か」

だからオレはこの状況を何とかしようとまたウーウー唸って考えるのだった。

「箒。なんでもいいよな？ なんでも食うよな？」

「ひ、人を犬猫のように言うな。私にも好みがある」

昼休み。

私は一夏に無理やり連られ食堂にやって来た。ちなみにいつも一緒にいるツバメはいない。誘おうとしたがなぜだか断られてしまった。

まったく、昨日あんなことをしておきながら何故貴様は平然と私と接してられるのだ。

わ、私は今にでも…気が狂いそうだというのに…。もしかして、こんなこと思っているのは私だけ？ だったらちよつと虚しい…。

「ふーん。あ、日替わり二枚買ったかこれでいいよな。鯖^{サバ}の塩焼き定食だつてよ」

「話を聞いているのか、お前は！」

「聞いてねえよ。俺が先までどんだけ穏和に接してると思ってたんだ馬鹿。台無しにしゃがつて。お前、友達がツバメ以外にできなかったらどうするんだよ。高校生活暗いとおまんないんだろ」

うう…一夏のくせに変な所に気が回る。

「私は別に・・・頼んだ覚えはない！」

「俺も頼まれた覚えがねえよ。あ、おばちゃん、日替わり二つで。食券ここで良いですよ。」

一夏は相変わらず左手で私の腕を掴んでいる。たぶんこの手を離したら私が逃走すると思っっているのだろう。

「いいか？ 頼まれたからって俺はこんなこと、普通はしないぞ？ 箒だからしているんだぞ？」

「な、なんだそれは……」

「なんだもなにもあるか。おばさん達には世話になったし、幼馴染で同門なんだ。これくらいのお節介はやらせろ」

「……………」

心の中でため息を吐いた。

コイツは私を幼馴染以上には見ていない。でも、幼馴染だから私の事を気に掛けてくれている。それはそれで嬉しい事だ。しょうがないから今はそれで我慢してやる。

だから…。

「そ、その…ありが
」

「はい、日替わり二つお待ち」

必死な思いで、一夏に感謝を言おうとしたら食堂のおばちゃんに遮られた。おかげでタイミングを逃してしまう。

一夏も私が言おうとした言葉など気にせず、楽しそうにおばちゃんと談笑している。

「……………」

ツバメ。私が素直になるのはもう少し時間が掛りそうだ……。

そんなこんなで放課後。

一夏と篤は学園内にある剣道場でセシリアと俺に対する特訓をしているのだが……。

「どういうことだ」

「いや、どういふことって言われても……」

ギャラリー満載の中、オレはそんなギャラリーの中で二人をみていた。

二人は剣道の防具を付けてちょっとした試合をしていたのだが、ものの10分で一夏の方が箒にコテンパンにされている。

でも、なんでこんなことになったんだ？　なんだかんだで二人はうまく行っているんだ？　もしかして、オレってお役ごめん？

……まあ、いいや。

「どうしてここまで弱くなっている!？」

「受験勉強していたから、かな？」

「…中学では何部に所属していた」

「帰宅部。三年連続皆勤賞だ」

「…直す」

「はい？」

「鍛え直す！　IS以前の問題だ！　これから毎日、放課後三時間私が稽古をつけてやる!」

「え。それはちょっと長いような　　ていうかISのことをだな」

「だから、それ以前の問題だ!」

こうして一夏のIS修行ではなく、剣道修行が始まったのだった。

ザマァー見ろ。

オレを巻き込むからこうなったんだ。もっと箒にコテンパンにやられてしまえ。

「ツバメさん！　お願いします！」

「……………」

しかし、事態はまたも変な方向に進んでしまった。
箒の剣道特訓が終わり、夕食を食べ終えた後、一夏はオレの部屋にやって来て土下座をしている。

「俺にISについて教えてください！」

「……………」

本人はこのままだとISに関する知識を得る事が出来ないと予感して危機感を感じたらしい。箒にこの後頼もうとも思ったが、また剣道場でしごかれそうになって逃げて来たとか。なので、オレの所に来てISに関する勉強を見てもらいたいとか。

「一夏くん。君の立場わかってる？」

「……………重々承知しております」

「君はあたしを敵に回したんだよ？」

「いや、敵の又敵は味方と言いますか……」

「あん？」

「…いえ、なんでもありません」

おっと、思わず本性が出てしまった。

さて、この馬鹿をどうしたものか…。

確かに、このままでは剣道の修行だけで一週間が終わってしまう。かといってコイツは俺を敵に回したのだ。そこまでしてやる義理はない。

さてはて、どうしたものか…。

「あつ」

「え？」

いい事を思いついた。

「じゃ〜条件付きで教えてあげてもいいよ」

「ほ、ホントか!？」

「うん」

「で？ 条件と言うのは…」

「そんなに恥ずかしい事じゃないよ。一夏くんでも簡単に出来る事だよ」

「言い方が引つかかるけど…なんだよ？」

「クラス代表決定戦終わった後にデートして」

「.....はあ？」

「夏はオレの言葉を聞いて意味が解らず、固まった。」

第七話 セシリアVSツバメ（前書き）

何度書いても戦闘描写って難しいですね。

上手く展開が表現出来ていればいいですが…。

第七話 セシリアVSツバメ

皆さんこんにちは！ 八雲ツバメです！

本日は誠晴れやかな天気になっておりまして、もう皆で平和的に外でピクニックにでも行きたい気分ですね。はい！

「八雲。逃げようとするな」

「…はい」

などと考えてコソコソその場を退散しようとしていたら織斑先生に捕まった。

「では、これよりクラス代表決定戦を始める。織斑に用意した専用機がまだ届かないので先にオルコットと八雲の模擬戦を開始する。尚ルールは大会ルールを使用。二人共いいな？」

「はい！」

「…はい」

「では両者！ 各ピットで待機」

そんなこんなで始まってしまったクラス代表決定戦。正直、未だにオレのやる気はグラフに示すと右下下がりだ。…もう、あれだ。どうにでもなれって感じた。

「八雲。今回の模擬戦では天燕の性能テストも含んでいるから…手を抜くなよ。もし抜いたとわかれれば…」

「全力でやらせていただきます！」

だから、出席簿を構えないでください！　もう、やる気出まくりですから！！

「ツバメ。大丈夫か？」

「あ、筈。一夏くん」

オレは第三アリーナのAピットで出撃準備していると筈と一夏がオレの様子を見に来てくれた。

「その……なんだ。ごめん。こんなことに巻き込んで」

一夏は申し訳なさそうにオレに謝罪してくる。

「謝るぐらいなら始めからしないでよ。まあ、どうでもいいからいいけど。約束は守って貰うからね」

「お、おう！　男に二言は無え！」

「よしよし」

そんなやり取りを一夏としていると筈は何の事だと首を傾げていた。

とりあえず、オレは筭に気にするなどだけ言っておく。

「しかし、大丈夫か？ 相手は代表候補生だぞ？」

「大丈夫だよ。ISでの模擬戦は始めてじゃないし。あたしには心強い味方がいるから」

「……そうか、頑張つて来い」

「うん」

親友の声援を受けてオレはピットの出口に身体を向ける。

「おいで……天燕」

そして天燕を呼び出す。

オレが身に纏うのは青と白が特徴的なカラー。従来のISより小さく、だが背中にある可変式の翼だけ見れば人に翼が生えたようなIS。

「……綺麗だな」

「ああ」

後ろにいた二人は天燕の姿を見取れていた。

たぶん、天燕の可変式の翼から噴き出している粒子の光が幻想的な演出をしているのだろう。

戦闘待機状態のISを感知。操縦者セシリア・オルコット。ISネーム『ブルー・ティアーズ』。戦闘タイプ中距離射撃型。特殊

装備有り

天燕のハイパーセンサーで感知した報告を聞き、俺は各種チェックを行う。

よし、今日のお前は絶好調だな。

《ツバメ。よろしくね》

「（あれ？ お前コンタクト取れるの？）」

《うん。なんか取れるみたい。迷惑だった？》

「（…いや、そんな事ないよ。じゃ、ちょっと遊びに行こうか？）」

《はい》

突然の天燕からのコンタクト。どうやら、後ろの二人にはこの声は聞こえてないらしい。

ISを展開させるとコンタクトが可能になる。それがわかるとオレはまだ会って間もないこいつが頼りがいのある相棒になりそうだと思った。

「じゃ、行ってくるよ」

「ああ」

「勝って来い！」

そう言って、オレは天燕で飛翔し、ピットを飛び出して行った。

「あら？ 変わったISですこと」

「まあ、試作機ですから」

ピットを飛び出せば、そこに今回の相手がいた。

天燕とは違い、鮮やかな青色の機体。フィン・アーマーを四枚、背に従え、王国騎士のような気高さを感じさせるIS。

それがセシリア・オルコットの『ブルー・ティアーズ』。

「正直、あなたと戦う意味は無いんですけど…クラス代表は誰にも渡せませんの」

「アタシはクラス代表には興味無いんだけど…ちょっと応援してくれる人の期待にこたえないといけないから」

「では、わたくしとブルー・ティアーズの奏でる円舞曲^{ワルツ}でその人達の期待を私が摘み取って差し上げますわ！」

セシリアは手にしている六七口径特殊レーザーライフル《スターライトmk?》の銃口をオレに向ける。

それと同時に試合開始の鐘はなった。

「天燕とブルー・ティアーズの模擬戦開始。各機のデータ収集を開

始します」

第三アリーナのモニター室。そこで素早くコンソールを操作する山田先生が横にいる織斑先生にそう報告する。ちなみに私は一夏と一緒にこのモニター室でリアルタイム映像を見ていた。

「凄いです。天燕は前回のテストより格段に動きがよくなっています」

「うむ。八雲もよくセシリアの攻撃をかわしている。もはや天燕の性能だけでは無い。ちゃんと『視えている』」

モニターに写っているツバメはセシリアの攻撃をかわし続けた。攻撃が当たらないことにセシリアは若干の苛立ちがモニター越しでもそれが感じられる。このままいけばセシリアは無駄弾を使ってエネルギーを使い果たしてしまうだろ。

「うわっ…あんな攻撃も出来るのか。ツバメもよくかわすぜ」

一夏は二人の戦いを見て感心し、学習している。次に戦うのは一夏なのだ。先に相手の戦略を観れる一夏は少しでも相手との差を埋めようと必死になっている。

「…ツバメ」

しかし、私の中では何か複雑の物が渦巻いていた。なんだろうか。この気持ちは…。

自分でもよくわからない。私はこんなことで悩む人間だったのだろうか？

私はそこまで弱く無いと自負している。剣道に身を投じ、精神を

鍛え、頂点に立った。だが、ツバメ達のような専用機持ちの前では私は弱いと感じてしまう。

「（ああ……これは嫉妬か）」

この気持ちは『力』を持った者達への嫉妬なのだと気付いた。

「筈？ どうした？」

「え？」

不意に一夏が声を掛けて来る。

「心配か？」

「……………」

「ツバメなら大丈夫さ。アイツが俺達の期待を裏切ったことなんてあったか？」

「…無いな」

「なら親友のお前が目を反らしてどうする？ 最後まで期待してやれ。そうしたら、アイツはそれに答えてくれる」

「勝負は感情論で解決しないぞ」

「気持ちの問題だ」

「そうだな」

そうだ。今は自分の事より彼女の身を案じよう。

そして、どれだけの距離が私達の間にあるのかを見極めよう。

ツバメ、私はすぐにそこまで駆け上がって行くからな。

「この！ この！ ちょこまかと！」

あの八雲ツバメと言う方の動きはなんですよ！ 先程からわたくしの攻撃がかすりもしない！

「うわっ！ 今のは危なかった…」

とか言いながら余裕で避けているではないですか！？ 完全な死角からの攻撃のはずだったのに、彼女にはそれがわかっていているかのようにレーザーをかわす。

それは、燕の如く。鮮やかな飛行技術で。

もはや、彼女に死角など無いのではないかと思えてくる。

「フ、フン！ 避けてばかりでは勝てません事よ…！」

「…生憎この天燕には特殊武装が無いんですよね」

「…え？」

今、彼女はなんて言いました？ 武器が無い？

「な、舐めてますの！？」

思わず、叫んでしまった。

武器の無いISでどうやって勝敗を付けようと言うのだ。だが、先程ブルー・ティアーズのハイパーセンサーで武装はありと確認した。確か、固定武装があると。

……あ。

「思い出した？」

彼女がそう言うと、天燕の翼が大きく外に広がった。それにより翼から散布される粒子の光はより強い輝きを放っている。

キュイイーン！

「！？」

刹那、わたくしの横を何かが通り過ぎていった。

ブルー・ティアーズの警告音と同時に身体が反応しなければ直撃していた。日頃の訓練に感謝しなくてはならないとこの時思った。

「凄いですね。今のをかわすなんて」

その『何か』を放った彼女の方を見て見る。今の一撃で決めるつもりだったのか、わたくしの回避に少しばかり驚いたような顔をしていた。

「…加速粒子砲…砲身も無しにそんなこと」

「これが天燕の現在ある唯一の武器『蒼燕^{そうえん}』。翼から散布される粒子は飛行のための推進剤だけで無いの。圧縮させ、こっやって放つ事も出来るのよ」

言葉と同時に今度は単発では無く、連射してツバメは蒼燕を放つて来る。わたくしはその射線に入らないように回避するが、彼女は蒼燕を放ちながらわたくしの後を追いかけて来た。

「（くっ！ ビットを戻してスピードを上げないと！ 追いつかれる！）」

攻防の逆転。戦闘機で言えばドックファイト状態。後方から迫って来る敵機から必死に逃げようとするが相手はしつこく自分の背後を追い掛けて来る。

先程まで自分が一方的に攻撃をしていたにも関わらず、今では逃げの一手。ブルー・ティアーズのスピードではあの天燕に捕えられてしまうのも時間の問題。このままでは自分は負けてしまう。

こんなこと誰が認めるものか！

感情の爆発。内に溜まった物が出て来る。

わたくしはイギリス代表候補生なんだ！

憧れの人の名を守る者なのだ！

だから、ただではやられない！

わたくしはセシリア・オルコットなのだから！

「捕えた！」

蒼燕を回避しながら、体を反転させ、スターライトmk?のスコ
ープを覗き、目標を捕えて、引き金を引く。放たれたレーザーは真
っ直ぐツバメに向かって放たれた。ツバメも回避しながら攻撃して
来るとは予想していなかったらしく、ビックリした様子だった。
だが、これも回避されてしまう。

「今ですわー！」

そして今度はスラスターとして戻した四つのビットを展開。ツバ
メが回避した方向に向けてレーザーを順番に放つ。

一つ目のレーザーを回避され

二つ目のレーザーも回避され

三つ目のレーザーも回避され

四つ目のレーザーも回避された。

だが、それでいい。それでわたくしの勝ちです！

ビットの攻撃命令終了と同時にスターライトmk?で放ったレー

ザーがツバメに直撃し、彼女の体に空洞を空けた。

「……え？」

ちょっと待つて。なんで、空洞が空くのです？ ISには絶対防御と言う操縦者を守るシステムが備わっている。いくらスターライトmk?の砲撃が直撃したとしても人の体に穴を空けることなど出来ないはず。なのになんで!?

ドゴン!!

「ッ!？ キヤアアアアア!!!」

そんな疑問で思考が滅茶苦茶になっている時。突然、真横から衝撃が襲って来た。そして、わたくしはその衝撃を殺せず、そのまま地面へと墜落してしまった。

バリアに直接ダメージ。エネルギー残量28。実体ダメージレベル大

「な、なにが……」

倒れている体をなんとか起き上がらせようとするがうまく力が入らない。だが、何が起ったのかを理解しようと視線だけを上空に向ける。

先程自分のいた位置には彼女がいた。わたくしの事を見下ろしている。

その姿はとても美しかった。

粒子が空中で光を放ち、彼女の背中から光の翼が生えているかのようだった。

「セシリア・オルコット」

彼女がわたくしの名を告げる。

「あなたの強さに感服いたしました。その強さを手にするまでにどれほどの努力と苦労したかが窺えます」

彼女の態度とは先程までとは違った。どこか凛々しく、神々しい。そんな彼女が真っ直ぐな瞳でわたくしの事を見ている。地面に横になりながら彼女の言葉を耳にし、少し涙が出そうになった。

「ですから、私の全力を持ってそれにお答えさせていただきました。負けたことに恥じないでください。今回の負けを次に生かしなさい。あなたはまだまだ強くなることが出来る人です」

この人はわたくしが積み重ねてきた物を理解し、そしてそれに全力で答えてくれた。

これ程嬉しいことは無い。

わたくしの周りにいるのは親の残した財産を狙い、顔色を窺う者ばかり。今までESで勝負して来た人達も同じだ。どこかで手を抜き、本気で勝負して来ない。

いつしか、自分の強さを疑うようになった。

わたくしは本当に強いのだろうか。

代表候補生を名乗るに相応しい強さを持っているのだろうか。

でも、この人はわたくしの強さを認めてくれた。その言葉を聞いて今までの努力が報われたような気になる。

「グス…ま、参り…ヒック…ました」

目から溢れる大粒の涙が止まらない。

手でどれだけ抑えようとしてもどんどん溢れて来る。

そして、わたくしは震える声で自分の敗北を認めた。

『試合終了！ 勝者 八雲ツバメ！！』

第七話 セシリアVSツバメ（後書き）

これなんてトランザム？

第八話 転校生は親友セカンド（前書き）

セカンド幼馴染ならぬ親友セカンド。

うん語呂わりいな…。

第八話 転校生は親友セカンド

なぜこうなったし。

「では、一年一組代表は織斑一夏くんに決定です。あ、一繋がりでもいい感じですね！」

もう一度言う。なぜこうなったし。

「先生、質問です」

「はい、織斑くん」

「俺は昨日セシリアに負けたのですが、なんでクラス代表になってるんでしょうか？」

そう、昨日のクラス代表決定戦で俺は後一步の所でセシリアに負けてしまった。負けた理由は至って簡単。俺の専用機『白式』のガス欠。白式の装備『雪片式型』の特性を理解せず、シールドエネルギー残量を気にせずにいたのがいけなかったらしい。

あ、かつこ悪いとか言うなよ…。

ちなみにツバメとは対戦していない。セシリアとの対決の後、ツバメの天燕に不都合が生じたとかで俺達是对戦出来なかったのだ。

「それは」

「それはわたくしが辞退したからですわ！」

山田先生が理由を言おうとしたらその本人が理由を述べた。相変わらず様になっている腰に手を当てるポーズ。あ、そこはどうでもいいか。

「まあ、勝負はあなたの負けでしたが、しかしそれは考えてみれば当然の事。なにせわたくしセシリア・オルコットが相手だったのですから。それは仕方のないことですわ」

あんなこと言ってますがツバメには負けてるんですよ。あの人。

「それで、まあ、わたくしも大人げなく怒ったことを反省しまして、
しまして？」

「“一夏さん”にクラス代表を譲ることにしましたわ」

何と言つありがた迷惑。あれ？ 今名前で呼ばれた？

「いや、それならセシリアに勝ったツバメに譲ればいいじゃないか？
あれ？ そう言えばツバメは？」

クラスを見渡すとそこにいつもいる彼女の姿が無い。たしか、朝食の時は一緒に食べていたから風邪で休みなんてことは無いと思うけど。

「八雲は今日から週末まで休みだ」

俺の疑問に答えてくれたのは山田先生の横で椅子に座っている千冬姉だった。

「え？　なんで？」

バシン！

「……な、なんでですか？」

「八雲のISは別の人が開発した物だが、アイツが構築したIS理論を元にされている。だから自分で整備する必要があつてな。今はこの学園の整備科の方にいる。時々今回のような事があるからクラス代表としての役割に支障をきたすと考え、アイツも辞退した」

ざわ…ざわ…

どこその賭博師の効果音のようにクラス中が千冬姉の言葉を聞いて騒ぎ始めた。

「八雲さんって自分でIS理論を組めるの？」

「ってか、そんなこと出来るの篠ノ之博士ぐらいでしょ？」

「もしかして、私達のクラスってすごい人の集まり？」

「頼んだら私の専用機作ってもらえるのかも」

「あ、私も！」

そして招集が付かない程に騒ぎ出す。そんな中、俺は不意に窓際の席にいる筈を見てしまった。

「……………」

篤も知らなかったらしく目を見開いて驚いていた。

だが、俺はそれで納得をした。

クラス代表決定戦が決まった日。俺はツバメにISについて教えてもらったことがある。ツバメの説明は悪いが山田先生よりもわかりやすく、頭の出来がいいとは言えない俺でも理解できる程だ。今までは単に教え方がうまいなあゝとその程度に思っていたが自分でIS理論が作れてしまえば当然だ。

アイツ、凄い奴だったんだな。

「静かに！ とにかく、八雲はしばらくこちらの授業を欠席する。それとクラス代表は織斑一夏。異存はないな」

はーいつと俺を除くクラスメイトが一丸となって返事をした。
もはやこのクラスに俺の意思は存在しないらしい。

なぜこうなったし。

「では、今日は解散しましょ。八雲さん。またあなたのIS理論に付いて聞かせてね？」

天燕の整備に整備科へと足を運んだ途端。オレに付いての噂（オレは知らないが）を聞いた整備科の生徒達に囲まれわんやわんやとされ、精神をガリガリ削られた。

本当なら天燕の整備をしに来たのに今日一日がそんな質問攻めで

終わってしまった。

もう一度言おう。なぜこうなったし。

オレは気だるい気分で寮の食堂へと向かって学園の外を歩いていった。ちなみに今は夕食後の自由時間だ。なぜ、こんな時間に食堂へ向かうのかと聞かれれば自分の夕食を済ませるためだ。それまであの連中はオレを解放してくれなかったのだ。これからあそこに通うと思うと気が重くてしょうがない。

「あれ？ ツバメ？」

「ん？」

不意に声を掛けて来た人物がいた。

オレはその方を向くとそこには小さな身体に不似合いな大きなボストンバックを持った少女。

特徴的なツインテールが目立つ女の子がそこにいた。

「……鈴、ちゃん？」

「わー！ ツバメだあ！！」

途端に、オレが鈴と呼んだ少女が抱きついてきた。

鳳・鈴音^{ファン・リンイン}。小学校の時、筈とすれ違いでオレの通っていた小学校に転校して来た少女だ。

そして、オレの第二の親友でもある。

「ツバメもこの学園に通ってたの？」

「うん。鈴ちゃんはどうしたの？　なんでここにいるの？」

「転校して来て今着いた所！」

「転校？　こんな時期に？　あー、一夏くんを追い掛けに？」

「わーわー！　そ、そんなんじゃないからー！」

オレがそう言うのと鈴は顔を真っ赤にして強く否定する。どうやらそれが理由らしい。昔からこいつの行動はわかりやすかった。さしずめ一夏がIS学園に通うニュースを見て、軍人である鈴の叔父にでも無理矢理頼んだのだろう。

そして、オレ達は一年が宿泊する寮に向かいながら世間話をしていた。

「でも、久しぶりね！」

「そうだね。一年ぶりぐらい？　連絡はしてたからなんか実感は無いねえ」

「でも、実際に会ったら実感する物があるよ」

「たとえば？」

「えーっと…とにかく嬉しい！」

なんともアバウトな…。

「そう言えばツバメは何組なの？　さっき手続きしたらあたしは二

組って言われた」

「あたしは一組だよ」

「ふーん…一夏と同じクラスか」

「ありゃ？ 情報早いね」

「手続きした時に受付の人に聞いたの。一夏ってクラス代表になったんだって？」

「え？ そうなの？」

まあ…予想はしていたが。

「自分のクラスなのに知らないの？」

「あたしは今日一日整備科の方に行ってたから」

「整備科？ なんで？」

「フッフッフ！ 実はあたしも専用機を手にしたのです！ そして、その整備を自分でする事になってるの！」

「へー」

ありゃ？ あまり驚かない？ ちょっと、無駄にポーズ取ったのが恥ずかしいじゃないか。

「反応薄いなあ」

「だって、あたしの専用機『^{シェンロン}甲龍』の龍砲はツバメが考えた武装理論を元に作られたんだよ」

鈴はそう言いながら右手に付けていた黒いブレスレットをチラ付かせる。

「え？ そうなの？」

「うん！ 始めはビックリしたよ。理論提案者の一覧にツバメの名前があったのには。だから、ツバメが専用機持つても不思議じゃないって思ったの。ねえ？ ツバメの専用機ってどんなの？」

「天燕って言うの。待機状態は指輪なんだけど・・・今は整備科のラボに置いて来ちゃった」

「じゃ、今度見せてよ！」

「うん、いいよ。っと、寮にとっちゃーく」

鈴との会話に夢中になっていると俺達は寮の玄関ホールに到着した。オレは飯がまだだったので鈴と一緒に食べるかと誘ってみたが、鈴はもう済ませてしまったらしい。それに、長旅で疲れたのか今日は部屋に行って休むと言ってその場で別れた。

鈴と別れてオレは再び目的の場所へと向かう。しかし、その目的地に向かうに連れ、なんだか騒がしくなってくる。食堂でなにかやっているのか？

「というわけです！ 織斑くんクラス代表決定おめでとー！」

「おめでと〜！」

食堂にやって来ると大勢の女子が食堂の一角を占領し、手にしたクラッカーを乱射させていた。一瞬何事だと思ったが壁に掛っている紙を見て状況を把握した。

『織斑一夏クラス代表就任パーティー』

それはもうデカデカと飾られている。そこに参加している女子達はいわい、キャキャと飲み物片手に楽しく騒いでいたが、当の本人は何故だか暗い顔をしていた。

「あ、ツバメ」

そしてこちらの存在に気付いた。

「え？ 八雲さん！？」

「どこ！？」

「あ！ あそこ！！」

一夏がオレの名前を呼ぶと何故か参加者の視線がオレに集中する。オレ、何かやったかな？

「八雲さん！ 自分でIS作ってたってホント！？」

「私の分の専用機って作ってくれる！？」

「え？ え？ え？」

突然、オレの周りを取り囲むようにそんな彼女達が質問してくる。状況はわからなかったがオレは心の中でこう思った。

なぜこうなったし。

「なるほど、整備科に足を運んでいる内にそんな事が・・・ってか、アタシが作ったのは篠ノ之博士のIS理論に手を加えた程度で自作じゃないよ」

「でもそれってすごくねえ？」

やっとの思いで質問攻めから解放されたオレは本日のメインパースンがいる席で御飯を食べていた。そして、なんであんなことになったのかを聞き、その補足説明をした所だ。

ちなみに御飯は自作のオムライスだ。上に国旗が立っているのがワンポイントだぞ。

「でも、それは企業レベルで行える行為ですわ。それを学生の内から行えることは誇りに思ってもいいのではなくて？」

「たしかに・・・事実それが採用されてISが作られたのだからな」
そんな補足説明を褒めたたえるのはセシリアと箒だった。二人共

ちやつかり一夏の両サイドを陣取り、間に挟まれている一夏は少し困った様子。

まあ、気にせずオレはご飯を口に運ぶのだが。

「どこでその技術を習得したのですか？」

「言えない」

「え？」

「教えたら命が無くなるかもしれないから」

冗談で脅してみました。ですが、効果抜群。セシリアさんの横で話を聞いていた一夏は顔を真っ青にして引き気味です。

「つてのは冗談で、普通にISを開発していた事業に知り合いがいて習っただけだよ」

「ハ、ハハハ……」

おうおう、見事に顔を引きつらせてますね。あれ？ 箒さん。なしてそないにオレの事を睨むような目で見るのですか？ ってか、怖いです。

「そう言えば一夏くん。鈴ちゃんって覚えてる？」

「鈴？ 鈴ってあの鈴？」

「そう、あの鈴ちゃん」

箒の視線に耐えられず、オレは話題を変える事にした。

「なんかI S学園に転校して来たみたいだよ？ さっきそこで会った」

「本当か！？」

「本当、本当」

鈴の名前を出した途端。一夏は懐かしの人の名前を聞いてぱあっと表情が明るくなった。鈴は一夏に取ってセカンド幼馴染なのである。小学校の時から付き合いで、鈴が帰国する最後の日まで一緒にいた仲である。

「うわーそうなんだ。どうだった？ 元気にしてたか？」

「うん、相変わらずだったよ。ってか、あんまり変わって無かった」

アハハハハ。と二人で笑っていると一夏の両サイドにいる箒とセシリアは話に付いて行けず、若干の放心状態だった。

「ああ、鈴つてのは箒とすれ違いで小学校に転校してきた奴なんだ。だから、俺達のセカンド幼馴染なんだよ。ってか、アイツI S操縦者なんだ。はじめて知った」

「ちなみに中国代表候補生だよ」

その言葉にいち早く反応したのはセシリアだった。ガタンとテールを叩き、その場で立ち上がる。

あ、国旗が倒れた。倒さないようにしていたのに。ショックだ。

「聞き捨てなりませんわ！　一夏さん！　クラス対抗戦に向けて、より実戦的な訓練をしましょう！　わたくしも協力は惜しみませんわ！　なにせ専用機持ちはわたくしと一夏さんとツバメさんだけなのですから」

オレの専用機は整備中ですがね。

「そうだな。やれるだけやってみるか」

「やれるだけでは困りますわ！　一夏さんには勝っていただきませんと！」

「そうだぞ。男たるものそのような弱気でどうする」

「織斑くんが勝つとクラスの皆が幸せだよー」

「フリーパスだからー」

セシリア、箒、クラスメイトの順に色々好き勝手言う。後半の方はもはや己の欲望だったのは気にしないでおこう。

こうして、クラス代表就任パーティーはいつの間にかクラス対抗戦の作戦会議の時間となってしまった。

翌日。

結局、天燕の整備で徹夜した俺は寮の部屋へ戻ろうとしている所に鈴に捕まり、「ビックリさせようと思ったのに！　なんでバラしたのー！」と怒られた。

なぜこうなったし。

第八話 転校生は親友セカンド（後書き）

本文がなぜこうなったし！

いや、言いたかっただけです・・・。

第九話 戦士の休息 新たな友情誕生（前書き）

友人A「なあ？」

和利夫「どうしたんだ。小説仲間の友人Aくん」

友人A「一夏とツバメのデートってどうなったの？」

和利夫「あっ」

つてなやり取りがあり、オリジナルストーリー展開！
期待しないでください。

第九話 戦士の休息。新たな友情誕生

「ふああゝ…ねむ…」

天燕の調整をして四日目。曜日で言えば金曜日。今日で整備科に通うのは最後となり、やっとこの徹夜続きから解放される。そう思うとオレの気は一気に緩みはじめ、物凄い眠気が襲うのであった。とりあえず、寮の自販機でコーヒーでも飲んで頭をスッキリさせよう。

「あ、ツバメ」

だが、そんな状態であるオレの目の前に一人の人物が目の前に現れる。

このIS学園で唯一の男子生徒。織斑一夏だ。

「一夏くんどうしたの？ 暗い顔して？ ってか、ホッペ赤くなってるよ」

「いや…ちよつとな…」

何かを悩んでいたらしいく、一夏の表情は優れない。おまけに誰かに殴られたのか彼の頬は少し赤くなっていた。

コイツとしては珍しい光景だった。ついに誰かの地雷を踏んでしまったか？ いや、今まで踏まなかった試しが無いか。

「…アタシ、自販機の所まで行くけど？ 何か飲む？」

「え？」

「ツバメさんが奢ってしんぜよ」

「あ！ おい！」

オレは一夏の手を無理矢理引つ張って寮の自販機へと足を運ぶことにした。

「なるほど…鈴ちゃんとそんなことが」

「…ああ」

寮の自販機でオレはコーヒを二つ取り出し、一つを一夏にあげた。一夏は受け取ったコーヒを飲まずに頬に当てて腫れを冷やしている。

そして、どうしてそうなったのかを聞き出した。

オレが寮に返って来る前。鈴が箒に部屋代えを申し出に來たらしい。そして、その際に鈴は一夏と昔したある約束事を確認した所、一夏は間違って覚えていたのだ。それで鈴は怒り、その場にいた箒にも冷たくされ部屋に居づらくなってしまうたとか。

「ってか、それって一夏くんが悪いよ。鈴ちゃんはそんなつもりで言っただんじゃないと思うし」

「なんだよ？ 酢豚奢ってくれるって他に意味があるのか？」

「はあ…」

オレはコイツの間違った認識に心底呆れる。

いや、まあ、鈴も鈴だ。よりによってなんで酢豚をチョイスしたのだろう？ 中国では酢豚が代名詞となっているのだろうか？

「なあ？ 俺どうしたらいいのかな？」

「言葉の意味を理解して、鈴ちゃんに謝るべきだね」

「言葉の意味…。ツバメはわかるのか？」

「だいたい」

「教えてくれないのか？」

「こればかりは」

「はあ…だよな…自分で理解できるに努力するよ」

「そうしなさい。じゃ、あたしはもう寝るね」

「あ、ツバメ。ちょっと待て」

一夏の話聞き、何をどうするべきかがわかった所でオレはその場を去ろうとした。だが、一夏はまだ何か用があるらしくオレを呼び止める。

そして、何故か顔を赤くしながら口ごもっていた。

「そ、その…ツバメとの約束」

「約束？」

「ほら、クラス代表を決める時…ISについて教えてもらったんだろう？」

「ああ〜そうだったね」

「そ、それで、教えてもらう代わりに出した条件…デデデ、デートするって」

「…あつ」

「……………もしかして忘れてた？」

「あ、あははは！ いや〜最近忙しくて〜」

そう言えばそんな約束してたな。本当に最近は忙しくてすっかり忘れてた。

一夏もそんなオレの態度を見て少し呆れ気味にしている。いや、お前だけにはそんな顔されたくないぞ。

「じゃ〜明後日！ 日曜日に行こうか！」

「え？ き、急だな」

「いや？」

わざとらしく、下から一夏の顔を覗き込むようにする。何を感じたか一夏は少し怯んだようだった。

女子の上目使いってホント効果があるんだな…。

「わ、わかった。じゃ、日曜日な」

「OK」 詳しい事はまた明日にでもね」

「お、おう」

そう言っただけは一夏と別れ、一人部屋へと戻る。

その途中オレはニヤリと三日月のように口を歪め、携帯を取り出してとある人物に連絡をした。

日曜日。

俺、織斑一夏は学園に外出届を出して街へと繰り出していた。
なぜ街に来ているかって？

それは…アレだ…。

本日は八雲ツバメとの約束通りにデートをする事になったからだ。

「でも、なんで駅で待ち合わせなんだ？ 学園から一緒に行けばいいのに」

そして、肝心の彼女は今この場にいない。ツバメからもらったスケジュールで何故か駅集合となっていたのだ。これにどんな意味があるのか疑問に思いツバメに確認を取った所、その方がデートらしいとだけ帰ってきた。

「…なんか、ドキドキしてきた。俺、デートなんて初めてだし」

普通のカップルがデートする時はこんな感じなのだろうか。俺はそんな事経験したことが無いのでよくわからないが、とにかく心臓がバクバク鳴り響く。女子だらけの学園で多少は女子に対する免疫（別に女子が苦手ではないぞ）は出来てきたものの、この状況はどうやらそう言うものは関係無いらしい。

「はあ…胃が痛い…」

「ふ、フン。不甲斐ないぞ。一夏」

「え？」

人が頭を抱えて悩んでいる所に突然声を掛けられた。俺はその声を掛けて来た人物の方を向くと思いが一時停止する。

そこにいた人物は

「…箒？」

「な、なんだ？」

「どうしてお前がここにいるんだ？」

「そ、その…ツバメが急用で来れなくなって、その代理で、来た」

「はあ？」

目の前に現れたのは俺の幼馴染の篠ノ之箒だった。しかし、目の

前にいる箒はどこかいつもと違った気がした。

どこが違うかと聞かれれば…返答に悩むのだが、そんな気がしたのだ。

俺の今の心情のせいだろうか。何かとそんな所に目が行き届いてしまい、そういうことを察知してしまう。

ん？ ちょっと待て。ツバメは急用で来れないって？ ああ…これが俗に言うドタキャンなんだな。始めてされたぜ。

「どうした？」

「…いや、ちょっと待ってる」

箒に待てと言い俺は自分の携帯を取り出す。そして、光速とまでは行かないが素早く指を動かして携帯を操作し、電話を掛けた。

『もしもし？』

「ツバメ！？ どう言っことだ！！」

電話を掛けた相手は本来ならここにいる人物である。

『あーごめん。急用ができちゃってさあ。行けなくなっちゃった』

「で？ なんで代わりに箒が来てるんだ？」

『いやー今日は観たい映画があつて、そのチケットを持ってたんだけど。もったいないし、代わりに箒と観て来てよ…って思つて。代理を出しました。あ、チケットは箒に持たせてるから』

「はあ？」

『まあゝそんな訳だから！ 帰ってきたら色々な意味で感想聞かせてねえゝ』

「あ！ おい！」

プツプツと俺の携帯から電子音が鳴り、絶望した。

ツバメさんそりゃあんまりですよ。さっきまでの俺のドキドキはなんだっただなあああ！

「終わったか？」

「え？」

ちょっとした絶望を味わっていた刹那。 箒は俺が電話を終えたかと聞いて来る。

「な、なら行くぞ！ もうすぐ上映の時間だ」

「え？ あ、おい！」

半ば強引に箒は俺の手を取ってきた。

目の前にいるのは6年ぶりに再会した幼馴染なのに、その行為が俺の心臓の鼓動をまた早くした。

街へと繰り出した一夏と箒の二人。 そんな様子を影で見ていた人

物がいた。

「ニシシシ。作戦通りにうまく行ったみたいだな」

一人で悪役の用な笑いをしながら二人が消えて行った方を見つめるその人物は物影から身を晒し、二人の後を追おうとした。

まあ、その人物と言うのはオレ、八雲ツバメなのだがな。あ、ちなみに今は周りに知り合いがないので男言葉なのはあしからず。

「さてはて、撒いた種はうまく花を咲かせるかね？」

今回のデート。実は始めからこうするつもりであった。一夏に言った急用も当然嘘だ。最近の箒は一夏との仲も順調であったが未だに一線を越えるような間柄にはなっていない。なので、『一夏に異性を意識させてから箒とデートして、ラブブイチャイチャになってもらおう作戦！』を考え付いた訳です。

いやいや、そんなに褒めるなよ。照れるじゃないか。

しかし、オレは視界には一夏達とは別に奇妙な物を捕えてしまっている。

「…セシリア？」

一夏と箒から離れた場所で金髪ブロンド縦ロールの令嬢、セシリア・オルコットがいたのだ。

なんともまあ、憤怒の炎を宿らせている。おまけにISの部分装甲展開をしてスターライトmk?で狙撃までしようとしていた。

「おお、怖っ…。ってか、瞳からハイライトが消えているのは気の

せいか？」

恐ろしき、乙女の純情。

だがさすがに学園外でのIS展開で問題を起こすのは不味いと思
い、オレは彼女の元へと足を運ぶことにした。

「……………」

現在、わたくしセシリア・オルコットは織斑一夏の後を付けてい
た。

先日から一夏さんは何かおかしい。そう思ったのは昨日一緒に朝
食を取った時。食事にはあまり箸をつけず、何を話しても上の空で
心ここに有らずと言った感じだった。おかげでISの訓練もわたく
し直々に指導しているにも関わらず、まったく集中してくれなかつ
たのだ。始めは調子が悪いのかと思って心配して影ながら一夏さん
の行動を監視していたのだが……。

それがこの有様だ。

まさか、わたくし以外の女の事で頭が一杯だったとは何とも如何
わしい！ それでもわたくしの上に立つお方ですか！ なんとかし
て一夏さんの目を覚まさなければ！

「はい！ ストップ。武器を納めなさい」

「ッ！？ つ、ツバメさん！？」

不意に背後からわたくしの脳天に手刀を軽く降ろしてきた人がい
た。

わたくしを本当の意味で打ち負かした人。八雲ツバメがそこにいたのだ。

「何やってるのよ？ こんな所で人でも撃ち殺す気？」

「あ、あなたには関係ありませんわ！」

「はいはい。とにかく、街中でそんな物騒な物は閉まってね」

「…くっ」

彼女がそう言うわたくしは大人しく手にしたスターライトmkの展開を解除した。その際に彼女はどこか遠くを見ており、そしてなぜかため息を吐いた。

たしかそちらの方向は一夏さん達が向かった方向。

「ねえ？ これからお茶でもしない？ いいお店知ってるんだど」

「え？」

「よし！ 行こう！ さっさと行こう！」

「なっ！ ちょっと！」

ツバメさんはわたくしの了承を得ずに腕を掴む。そして、その場から無理矢理引っ張られるのだった。

これから一夏さんに間違いがあつてはならないように阻止しなくてはならないのに！

「離してくださいああああああああああい！！！」

日曜日の街。多くの人が行きかう中でそんな少女の声が鳴り響いた。

『やめて！　こんなことして何になるの！？』

『フツ、もう遅いんだよ。俺はもう引き返せない所まで来ちまったんだ』

一人の男性が泣きすぎる女性を振りほどいて目の前にある扉を開け、その場を立ち去ってしまう。女性は大声で泣き、彼の名前を呼び続けた。そして、外から一発の銃声が鳴り響いて来るのであった。

「なあ？　なんで主人公は死んじまったんだろな？」

「自分が死ぬことで罪が償われると思ったんだろ。やり方はアレだが、男らしいじゃないか」

「ふーん」

現在、私と一夏は先程観た映画の感想を話しながら某有名ジャンクフード店の一席で昼食を取っていた。ジャンクフードと言うのはあまり好きではないので私はサラダとジュースだけを注文し、一夏は二つ目のハンバーガー口にいる。

「悪役の奴もなんだかそれなりの事情があつて悪役つて感じもしなかったな。むしろ、最後はアイツの方が主人公ぽかったし」

「正義、悪なんて分類は実際曖昧だ。人は自分が信じた信念が自分にとつての正義になるのだから。いろいろあるのだろ」

「そっかー。箒はやっぱ好きなのか？」

「ブフツ！？」

映画の話からいきなり自分の好みについて聞かれ、私は飲みかけのジュースを嘔き出してしまった。正面にいた一夏にそれが思いつきり掛つたのは言うまでもない。

「（い、いきなりなんだ！ どうしてそんな話になる！？ いや、好きか嫌いかと聞かれれば好きだし、お前もずいぶん男らしくなつたと思うぞ。テレビでお前の顔写真を見た時は純粹にカッコいいと思ったし、放課後の訓練だつて根は上げるが、最後まで頑張る姿勢もカッコいい。いやいやいや、その前にどうしてその質問をして来るのだ！？ こ、こいつは私に何を言わせたいのだ！？）」

「お、おい。大丈夫か？ ホラ」

「…すまない」

思考がグルグルする中、一夏は私にチリ紙を差し出してくれた。私はそれを受け取り、ジュースで汚れてしまったテーブルを拭く。

「で？ 好きなのか？」

「なっ！ 何を言っているだ！？」

「え？ いや、映画に登場した主人公みたいな奴が好きなのかあゝ
って思って…」

「……………え？」

一夏が質問の意味がなんのかを答えるとグルグル回った思考がピ
タツと止まる。

「いや、やけにあの映画の登場人物について喋るから好きなかと思
って」

そして止まった思考が再び動き出すと顔がどんどん熱くなっ
てきた。

恥ずかしい…。自分の勘違いで色々考えたのがとてつもなく恥
ずかしくなってきた。

「本当に大丈夫か？ 顔が真っ赤だぞ」

「…ああ、大丈夫だ。問題ない」

「そ、そうか。ならいいけど…」

そう言えば一夏はこの状況をどう思っているのだろう？ ツバメ
にはば無理矢理このようなデデデ、デート（デートと言うのが恥
ずかしい）をセッティングしてもらい、いつものように振る舞えな
と言われたが…いつも以上に余計なことを考えてしまう。

なんだかんだで一夏は普段通りの振る舞いだし、舞い上がってい
るのは自分だけではないかとまたいつかのように考えてしまう。

「…ん？　一夏、どうしたのだ？　さっきからキョロキョロして」

「うえっ！？　な、なんでも無いぞ！？」

「??？」

チラリと一夏の方に視線をやると何やらソワソワした感じていた。
なにか気になる物でもあったのだろうか。

「な、なあ。箒」

「ん？」

「この後どうする？　映画観ただけじゃつまらないし、どこかで遊んでくか？」

「え？　そ、そうだな。そうしよう！」

「じゃ、決まりだな」

そう言つて一夏はカフェのトレイを持って席を立ち上がる。私もその後に続き、これからどうするかを考えながら一夏と一緒に店を後にした。

少し一夏の顔に赤みが掛っていたのは気のせいだろうか？

「ん〜！ まさかこんな島国でこのような美味しい紅茶を飲めるとは思いませんでしたわ」

「気に入ってもらえて何よりだよ。連れて来た甲斐があつた」

「じゃなくて！ わたくしは」

「お待たせしました。ご注文のフルーツタルトとチーズケーキになります」

「あ、どうも〜」

「あら、こちらもおいしそうですわ」

「でしょ〜？」

一夏さんを追跡している途中。わたくしはツバメさんに連れられ午後のティータイムをたしなんでいた。天気もいい事ですし、こう言ったオーブンカフェでお茶をするのもいいものだ。

そう、本来の目的すら忘れて。

「忘れてませんわ！」

「わっ！ 急にどうしたの？」

パンツ！とテーブルを叩いて何かに反論する自分。

「あ、失礼しました。それよりツバメさん。どうしてあのような場所にいたのですか？」

「んー？ アタシはただの買い物だよ。セシリアさんこそあんなところで誰を狙撃しようとしたのかな？」

「うつ…」

嫌みたらしく先程の愚行の理由を突きつけられるとわたくしは押し黙ってしまう。そして、反論する気も失せ、大人しく席に着き、紅茶に口にした。

「やあーやあー君達。可愛いね。今暇？ 俺達とどこか遊びに行かない？」

そんな時だった。

何とも頭の軽そうな男性数人がわたくし達に声を掛けてきたのだ。この日本社会ではこういつて気楽に軟派をする輩がいると聞いたことがある。男女優劣が変わったこの現代社会でもまだこんな存在が生存していることにビックリするが、どうでもいい。

「その制服ってIS学園のやつだよな？ スッゲーーお嬢様なの？」

話もしていないのに勝手に喋るな。わたくしの優雅な一時を邪魔するな。

「ねえー無視しないで俺達と遊びに行こうよ？ 楽しい所に連れてってあげるから」

そう言っつて男の一人がツバメさんの腕を掴み上げる。その軽率な行為にさすがのわたくしも頭に来て、また席を立ち上がるうとするが目の前にいるツバメさんに止められた。そして、彼女はニッコリ

と笑い、言葉にする。

「Thank you for a wonderful invitation Mr. But I don't want to go with you guy」

（素敵なお誘いありがとう。でも、あたし達はあなた達と行けないわ）

「え？ あ？」

突然ツバメさんは英語で喋り出し、目の前にいる男達は目をパチクリさせながら訳のわからない顔でいる。

「Cecy. What you thinking this guys? I don't like it」

（セシィ。この人達の事どう思う？ アタシは好みじゃないんだ）

そして、英語でわたくしに話を振るツバメさん。男達はもはや何が何だかわからない様子であたふたしていた。それを見ておもわず笑いそうになってしまった。

この行為の意味をわたくしは察知し・・・。

「Yea I agree. I don't like to. Wow maybe this guy can understand English I think that making fan time」

（そうですね。わたくしの好みでもありませんわ。でも、この方達が英語を理解できるなら楽しい時間にはなりそうですけど）

「It is cruelly. So sorry. Get another person do you like」
(それは酷い……。ごめんなさい。他の人を当たってください)

わたくし達の会話を聞いていた男達はなんだか得体の知れない物を見るような感じでその場を去って行った。

失礼な。こつちからすればあなた達の方が十分得体の知れない物ですよ。

「……ぷっ」

「……ふふふ」

「「あははははは!!」」

男達が姿を消して少し。わたくし達は声を上げて笑った。

「ああ、おかしいかったですね。見ました？ あの顔！」

「いや、セシリアさんが乗ってくれなかったらどうしようかと思っただけ……。にしても、凄い間抜けな顔だったよね？」

「ところでツバメさんはどこで英語をお習いで？ 発音も完璧でしたし」

「たしなむ程度だよ。ISの研究とかしていると海外事業と連絡取ったりするから覚えたの」

「そうでしたの。たしなむ程度にしてはかなりの物でしたわよ。でも、久々に母国の言葉を喋れましたわ。外国にいますと言葉を忘れそ

うで困ります」

「ああゝわかる。たまに忘れそうになるよねゝ。なんならたまに英語で会話する？ アタシも勉強になっていいし」

「それは助かりますわ。是非お願いします。それと…」

「んー？」

「先程のセシイつと言っのは…」

「あ、ごめん。嫌だった？ 英語だと人の名前ってなんとなく略しちゃうんだよね。ごめん」

「い、いえ！ そんなことないです！ …その、これからもそう呼んで構いませんことよ」

ツバメさんにそう呼ばれると、妙に嬉しくなる。

前の模擬戦で彼女はわたくしに本気で挑んで来てくれた。なんとなく前から彼女とは話をしてみたいと思っていた。そして、そう呼ばれたことで本当の意味で友達になったように思えたのだ。

「そつか。じゃ、セシイもアタシの事もさん付けで呼ばないこと！」

「ふえ！？ わたくしもですか！？」

「ええゝだつて不公平じゃん。アタシが一方的に仲良くしているみたいでえゝ」

「で、ですが。これは癖みたいな物で……」

「じゃーアタシも呼ばない」

「あう……」

ツバメさんはニヤニヤしながらわたくしをからかってくる。

「わかりましたわ…ツ、ツバメ」

「な〜に〜？ セシイ？」

「よ、呼んだだけです！」

「よし、これからアタシ達は友達だね。よろしく！ セシイ！」

そう言っ、ツバメは自分の右手をわたくしの前へ差し伸べて来た。わたくしもそれに答えるようにツバメの手を握った。その時若干まだ恥ずかしさがあつた所為でまともにツバメの顔を見れなかったのは言つまでも無い。

こうしてわたくしは学園に来てから始めての友達が出来たのだった。

後日談。

一夏と篤のデート報告を篤から聞くと篤は一夏と楽しい時間を過ごせたことに喜び、いつも以上に明るかった。しかし、話を聞く限

りではまだまだ二人の関係が進展する様なことは無く、オレは短くため息を吐き、作戦が失敗したと思った。

あの朴念神は難攻不落の要塞だと改めて認識させられたのだった。

第九話 戦士の休息。新たな友情誕生（後書き）

友人「デートして無いじゃん」

和利夫「・・・ごめん。書いてたらセシリアメインになった。反省はするが後悔はしない」

友人「英語あつてるの？」

和利夫「そこは突っ込まないでください。文法なんて物は存在しない」

友人「だめじゃん」

和利夫「・・・そうですね」

第十話 課せられる試練

「ふっふっふん」

地球のどこかにある篠ノ之束の研究所。今日も私は優雅に逃避行中なのです。

え？ 誰から逃げているかつて？

まあ、いいじゃない。どこの誰か知らないけど追って来るのだから逃げるのが人の性なのです！

ポーン

「あゝツンチャンからメールだ！」

私がいくつもあるモニターを巧みに操作しているとモニターの一つからメールの受信を確認した。

ちなみにこの連絡先を知っているのは世界で三人だけ。

妹の篝ちゃんと、親友のちーちゃんと、篝ちゃんの親友で私の助手をしてくれるツンチャンの三人！

それ以外の人からメールが来ても受信拒否！ あ、でもいっくんもその内この連絡先を教えないとな。

「何？ 何？ 『天燕稼働実験経過報告書』。おゝ！ ツンチャンは仕事が早いね！ 束さんはそう言う子が大好きです！」

送られて来たメールに添付されているファイルを開くとツンチャンのIS天燕に関する資料が開かれた。

「IS模擬戦での戦闘報告。戦闘に勝利するも機体の稼働限界を超

越し再調整の必要あり・・・うゝん、やっぱり欠陥機のISにはキツイかあゝ」

私はツンチャンの報告を見て椅子に全体重を掛けて持たれ掛った。そして、天才である私の頭脳を悩ませる。

世界に存在するISはどれも『未完成』の物ばかりだ。それに比べてツンチャンの天燕はいつくんの白式同様・・・いや、それ以上の欠陥を持っている。どんな欠陥かと聞かれればツンチャンが作ったIS理論と技術を使っている所為だ。

彼女は天才だ。

天才の私が認める天才だ。私が教えたIS理論を元にしていとは言え、それを自分なりにアレンジし、新たな理論を作ってしまう程に。

その理論を提示された時、私は始めて鳥肌が立つ程の感動をしたと思う。

反重力力翼に代わる飛行システム。

従来のISに使用されている装甲より強度で軽い炭素素材の採用。

ハイパーセンサーより高度な高性能センサーシステム。

絶対防御をより完璧にした防御システム。

イグニッション・ブーストをより早い加速装置。

……他に上げたらきりが無いだろう。どれも私が思いつきもしなかった技術ばかり。

だが、その理論はいまだ未完成の物だ。

机上の空論とでも言えはいいのだろうか……。

現代にある技術では再現不可能な物ばかりなのである。

けれど、これを見てしまった私はこの理論を完成させたいと思っ
てしまった。だからツンチャンの理論を出来るだけ再現させ、天燕
を作り、ツンチャンに託した。言わば天燕はツンチャンのIS理論
と技術を完成させるための存在。未完成にも劣る未完成品なのであ
る。

「さあ〜って！ 今日も天才アイドル束さんは開発がんばるぞー！」

そして一人で意気込み、目の前にある全身装甲ISの開発を再開
させた。

五月。

高校生活も早く一カ月が経とうとしていた。そして今月はクラス
対抗戦もあり、各クラスのクラス代表も放課後アリーナを使用して
訓練に励む。もちろん、オレ達のクラス代表である織斑一夏もその
一人だ。そして実戦形式の訓練が出来る最終日。一夏は鈴との不仲

は解消されておらず、訓練最後の日に彼の暴言により鈴を怒り狂わせ、火に油を注ぐ状態になってしまった。

くくく

そんな出来事があった夜。

寮の部屋で一息入れているとオレの携帯に着信が入る。携帯のディスプレイを見れば登録されていない番号が表示されていた。が、構わずその電話に出る。

「もしもし」

『やあーまたもや神様だよー！』

電話に出るとやたらテンション高めな神様が喋って来る。少しウザかったのですがそのまま通話終了ボタンを押そうとすると『あー！ヤメテ！切らないで！』と電話を耳から離しても聞こえるぐらいに叫んで来た。

たまに思う、こいつは本当に神なのか？

「……で？ なんの用？」

『ちよつとした報告だよ。予言と言ってもいいかな？ まあ、それを伝えるに』

「予言？」

『近い内に君の前に試練が訪れる。これは避けられない試練だから気を付けてね』

「……………」

『それとその試練は君だけでは無く、君の大切な友達にも課せられるものだから。失敗すると君だけじゃなくてその友達も失うことになってしまいかもね』

「どう言う意味だ？」

『そのままの意味さ。そして、その試練は始まりに過ぎない。これから幾度と君達の前に立ちはだかるから』

「あなたはその結末を知っているのか？」

『いや、知らないね。知っていたら私の楽しみが減ってしまうから』

「暇人め……………」

『人じゃないよ。神様だよ』

皮肉で言ったつもりが真面目に返された。
なんか余計にムカつく。

だが、この神様の言うことは無視が出来る物では無い。自分以外の人に危険が及ぶと言う忠告。下手したらその人達を失う可能性もあると……。

「はあ……わかった。忠告どうも」

『いやいや、これで君の描く物語が面白くなるなら私はなんでもするよ』

楽しければ何でもいいか。

『そうだね。私には娯楽が少ないから』

「勝手に心を読むなよ」

『全知全能の神の前に隠し事は通用しないよ』

フム、改めてコイツが神である事を認識なくてはならないな。

『そうしなさい。そうしなさい。そして、私を崇めなさい』

「よし、神の象徴である物を全力で踏みつける事をオレの日課にしよう」

『神の否定！？ キリスト教信者も驚愕の行為！？ そんな事日課にされても困るよ！！』

「安心しろ。冗談だ」

『でないと天変地異を起こしてやる！！』

器の小さい神様だな。オレの行為で天変地異が起こるなら世界の犯罪者を消し去ってくれよ。

「まあいい」

『よく無い！！』

「ありがとう。とにかく気を付けるさ」

『あれ？　なんか胸がキュンとする……君はアレか？　俗に言うツン』

お礼だけ言つてとりあえず通話を切った。

そんな事言わせねえーよ！　その属性は箒だけで間に合ってますから！

「さてはて、どんな試練が待ち受けているのやら……」

そしてやって来たクラス対抗戦当日。

神様からの忠告を聞いてから特に何も無くこの日を迎えた。

第二アリーナ第一試合では我が一組代表織斑一夏と二組代表凰・鈴音の対決が始まるうとしていた。

「サンキューツバメ。ツバメが白式の整備してくれたおかげで早朝訓練もかなりいい動きが出来るようになった」

「そんな事無いよ。動きが良くなったのは一夏くんが成長しているからだよ。コーチもよかったんじゃない？」

「かもな。これで負けたら恥さらしだ」

現在、IS出撃用ピットではオレが一夏の白式の最終調整を行っている。普通なら一般生徒は立ち入り禁止なのであるが白式の状態

を万全にするためオレが申し出をし、許可を得た。

まあ、これは口実で本当の理由は『ここ』が一夏と鈴に一番近い距離だからだ。

「（どうも嫌な予感がする。神様が言ってた試練はもしかしたら今日起こるかもしれない）」

ここ数日。背筋がザワザワする感じが多かった。始めは何だろうと思ったが、今日と言う日を迎えてそれが悪寒だという事がわかった。なにかとてつもない物に背中を触られている感覚とも言えはいいだろうか。とにかくそんな感じた。

「これでよし！ 最終チェック終了だよ！」

「ああ！ ありがとう。じゃ、行って来る！」

全てのチェックを終えると一夏は白式の反重力力翼を展開してピットから飛び出して行った。

その際、オレはまた背筋がザワザワする感覚に襲われていた。

「一夏。今謝るなら少しくらい痛めつけるレベルを下げてあげるわよ？」

「雀の涙くらいだろ。そんなのいらねえよ。全力で来い」

超満員の第二アリーナ。俺はそんな大勢の人が見ている中でその

中心へと向かう。そして、先にスタンバイしていた鈴がオープン・チャンネルで話し掛けてきた。

鈴のISは肩の横に浮いたスパイク・アーマーがやたら攻撃的な自己主張をしている。アレで殴られたら、すげえ痛そうと思ったがツバメにアレについて聞かされていたのでそこまで深く考えなかった。

「鈴ちゃんのアンロック・ユニットは龍砲と呼ばれる衝撃砲なの。だからアレで物理的に殴られる事は無いから安心して。でも、衝撃砲は砲身と砲弾が目に見えないからハイパーセンサーの大気の変化に目を張る事。でないと物理的に殴られるより痛い目にあうよ」

ツバメ様感謝感激です。それを知らなかったら変な警戒心を持つたまま戦う羽目になる所でした。

『それでは両者、試合を開始してください』

試合開始の合図。ビーとブザーが鳴り、それが鳴り終わると俺と鈴は動いた。

ガキイン!!

金属がぶつかる音。俺は動くと同時に手にした雪片式型を構え鈴に向かって一閃。しかし、鈴の持つ武器と鏢迫り合いになる。

「ふうん。初撃を防ぐなんてやるじゃない。けど」

鈴が手にしているのは異形なまでの大きさの青龍刀。両端に刃が付いており、鈴はそれをバトンの用に振りまわす。遠心力も加わって鈴の攻撃は威力を増し、俺はその攻撃を捌くので精一杯だった。

「（まずい。このままじゃ消耗戦になるだけだ。一度距離を取って）」

「甘いつー!!」

パカッと鈴の両肩に浮かぶスパイク・アーマーが開き、球体の中心が光出した。

「来る!？」

「え?」

しかし、そこには予想を反した光景が広がっていた。

見えないはずの砲身が『見える』のだ。そして、見えないはずの砲弾も『見える』。半透明で空気の歪みのような物が砲身と砲弾の形を作り、見せてくれているのだ。

聞いていた話と違い一瞬戸惑ったが俺は鈴がどこを狙っているかが解り、それをゆうにかわす事が出来た。

「なっ!!　かわした!？」

龍砲をかわされた事に驚く鈴。

そう言えばツバメがこんなことを言っていた。

「白式にちよつとした『仕掛け』をして置いたから」

そうか、それがその仕掛けなんだな。

「ハハハ」

「な、何がおかしいのよ!？」

「いや、俺はいい仲間に恵まれてるなと思ってな」

「はあ？」

そして俺は再び雪片式型を構え、鈴に突撃する。

「なんだあれは……？」

ピットからリアルモニターを見ていた篤は呟く。

「衝撃砲ですわね。空間自体に圧力を掛けて砲身を生成、余剰で生じる衝撃それ自体を砲弾化して打ち出す　ですが、府に落ちません。一夏さんのあの動きは砲弾がまるで見えているみたいです」

そんな呟きに答えてくれたのは同じくリアルモニターを見ていたセシリアだった。確かに鈴の衝撃砲は凄まじい物である。だが、それをかわす一夏の動きにも驚かされていた。

「確かにアレは『視て』、『かわしている』動きだな。大方、八雲辺りが白式に手を加えたのだろう」

今度はセシリアの反対に立っていた千冬さんが答えた。

「たぶん衝撃砲の砲身と砲弾を生成する際にできる空間の歪みを視覚化できるようにしたんだ」

「そんな事が出来るんですか？」

「でなければ一夏の動きが説明できない」

そんなやり取りをしているセシリアと千冬さん。

だが、私はそんな話を聞いておらず、目の前のモニターだけをただじっと見ていた。

「（一夏・・・）」

セシリアとの戦闘よりも激しい戦い。筈は一夏の無事だけを祈っていた。

「くそっ！　すばしっこいわね！！」

先程から甲龍の龍砲が全然一夏に当たらない。初弾をかわされてからずっとこの調子だ。なので龍砲自体を当てるのは諦め、一夏の回避方向を限定させ、回避した先に回り込み、切り付ける戦法を取っているのだが。

「遅い！！」

元々あの白式と甲龍のスピード性能が違うのか後一步の所で逃げられてしまう。

「くう！　このー！！」

あたしは内心焦っていた。

一夏は予想以上に強かったのだ。どうやったか知らないけど、見えない砲弾をかわし、持ち前の機動力を生かし、それなりの剣術で戦ってくる。

「鈴」

「なによ？」

「本気で行くからな」

一夏の表情は真剣で真っ直ぐあたしの事を見て来る。不甲斐なくあたしはその気迫に押し負けそうになってしまった。

「な、なによ…そんなこと、当たり前じゃない…。と、とにかく、格の違いってのを見せてあげるわよ！」

青竜刀を構え直し、気合いを入れる。

ここで負けたらアンタを見返せないじゃない！

絶対、アンタに勝ってあの日の約束を思いださてあげるんだから！

そう思い、あたしは龍砲のチャージをフルパワーに充電しようとした時だった。

ズドオオオオオンッ！！！！

突然の衝撃。何かがアリーナの遮断シールドを貫通して落ちて来た。

何かが着弾した所には爆煙が舞い、ハイパーセンサーの表示する簡易解析を見るまでも無く、その威力の凄まじさを物語っている。

「な、なんだ？ 何が起こって……」

一夏も状況が飲み込めなかったのか混乱した様子だった。

そして炎の海から異形の姿をしたISらしき物が姿を現した。

第十一話 単一仕様能力（ワンオフ・アビリティー）

「なんだ、アレは……」

八雲ツバメは一夏と鈴が先程まで戦っていたアリーナ上空にいた。

突然の襲撃者が現れ、教師陣の早めの対応によりアリーナ観客席は防護シャッターが起動し、オレはシャッターが閉まる前に天燕を展開、外へ飛び出していた。

「……あれが試練って奴か？」

襲撃者の落下地点では激しい炎が巻き起こっており、その中心にいる者を天燕のハイパーセンサーで捕えると姿がハッキリ見えた。深い灰色をしているISらしき物の手が異常に長く、つま先よりも下まで伸びている。しかも首と言うものがなく、肩と頭が一体化しているような形をしていた。おまけに全身に装甲を纏っており、その不気味さが増している。

『一夏、早く！』

そんな全身装甲のISに見取れていると鈴がオープン・チャンネルで話すのが聞こえた。見れば二人でアイツどうするかで揉めている。だが、アレがそんな事を待ってくれるはずもなく、遮断シールドを貫通させたと思われる高出力ビームで鈴を攻撃。間一髪のところで一夏が鈴を抱きかかえて守った事にオレはホッと胸を撫で下ろす。

そして、気持ちを切り替え、二人の元へ飛んで行った。

「二人共！ 無事！？」

「ツバメ！？ どうしてここに！？」

「それより今は避難！ アタシが食い止めるから早く外へ！」

「ダメだ！ 女を置いて行けるか！！」

「なっ！？」

二人にこの場から逃げるように指示するが頑固な一夏はそれを聞こうとしない。オレはそんな一夏を相手にハアーと深くため息を吐いた。

『織斑くん！ 凰さん！ って、八雲さん！？ どうしてそこに！？ いえ、それよりも今すぐアリーナを脱出してください！ すぐに先生達がI Sで制圧に行きます！』

そんな時、割り込みで通信を入れて来た山田先生。
オレが二人に指示したようにここから逃げると伝えて来る。

「 いや、先生達が来るまで俺達で喰い止めます。いいな？
鈴、ツバメ」

「だ、誰に言ってるのよ。そ、それより離しなさいってば！ 動けないじゃない！」

「ああ、悪い」

一夏の腕の中で暴れ出す鈴。そんな二人を見てオレはヤレヤレと

思う。なんとも緊張感の無い光景。

まあ、そこがこいつ等らしいっちゃらしいんだけどな。

「一夏くんの一度決めたら意地でも通すって今に始まった事じゃないし、それでいいよ。……ハァー」

「なんでため息吐くんだよ？」

「別に」

お前はもう少し人の心情を察するスキルを磨いた方がいいぞ。現在進行形でそれで苦労してるんだから。

「一夏、あたしとツバメで援護するから突っ込みなさいよ。武器、それしかないんでしょ？」

「その通りだ。じゃあ、それでいくか」

キンツとお互いの武器の切っ先を当てる二人。オレは一夏や鈴のような武器は持っていないので横でそれを見ているだけ。

いいな。それ、ちょっとカッコいいじゃないか。オレもなんか武器持とうかな？

そして、オレ達は未知なる敵に向かって飛びだした。

「くそっ！」

「一夏っ、馬鹿！　ちゃんと狙いなさいよ！」

「鈴ちゃん！　右に回避！　狙われてる！」

「え？　うわっ！？」

何度目のアタックだろうか。先程から一夏のアタックがことごとくかわされてしまう。

オレの蒼燕と鈴の龍砲であのISを牽制し、一夏が止めを刺すというシナリオなのだ。

あの巨体が人間離れした動きを披露する度に見事にそれが失敗してしまうのだ。

「一夏っ、離脱！」

「お、おうつ！」

おまけに敵は攻撃を避けた後、必ず反撃に転じてくる。しかもその攻撃方法が滅茶苦茶だ。長い腕を回しながら一夏に接近し、その高速回転を利用してビーム砲撃まで行つて来る。

「（まるでコマだな…。いや、それよりも…）」

あのISから感じる違和感。

死角からの攻撃は完璧に捕え臨機応変に対応しているが反撃のターンが一定過ぎる。

なんと言つか、あのISの動きは『機械的』なのだ。

「なあ？ ツバメ。あいつの動きってなんか機械じみてないか？」

「ISは機械だよ」

「そう言うんじゃないって…アレに人が乗っているのか？」

「……………」

自分が感じた物を一夏も感じていたらしい。

「無人機なんてあり得ない。ISは人が乗らないと絶対に動かない。そう言うものだもの」

オレ達の違和感に答えたのは鈴だった。教科書通りの返答をして来る。だが、それは飽くまで教科書に載っている答えで最先端の研究がそれを可能にしているかもしれない。

「仮に、仮にだ。無人機だったらどうだ？」

「なに？ 無人機なら勝てるっていうの？」

「ああ、人が乗っていないなら容赦なく全力で攻撃しても大丈夫だしな」

一夏はそう言い切って、手にしている雪片式型を見つめる。

「全力も何もその攻撃自体が当たらないじゃない」

「次は当てる」

おお、カッコいいじゃないか。鈴もちっとドキツとした表情しちゃって〜。

「言い切ったわね。じゃあ、そんなこと絶対にあり得ないけど、アレが無人机だと仮定して攻めましょうか」

「そうだね。で、作戦はあるんでしょ？ 一夏くん」

「ああ、ツバメは今まで通りにアイツを牽制してくれ。鈴、龍砲をフルチャージでブツ放せ」

「いいけど、当たらないわよ？」

「いいんだよ。当てなくてなくても。じゃ、早速」

作戦が決まり、それぞれが行動を開始しようとした時だった。アリーナに設置されているスピーカーから大音量の声が響いた。

『一夏あつー！』

何事だと思い、オレ達はそれぞれISのハイパーセンサーで中継室の方を見た。見ればそこには箒の姿があつた。そこにいるであろう審判とナレーターはすぐ横で気を失っている。たぶん、箒が伸してしまったのだろう。

『男なら……男なら、それくらいの敵に勝てなくてなんとする！』

肩で息を切らしながら、一夏に向けて喝を入れる。しかし、当の本人はビックリした用に目をパチクリしていた。

「……………」

まずい！

そう気付いた時。敵は箒に興味を持ち、あの長い腕を箒に向けて構えていた。そして、腕に着いている砲身にエネルギーを溜め、発射させる。

ワンオフ・アビリティー
《単一仕様能力発動確認。『ELS Driver System』
起動》

箒が俺に喝を入れた瞬間。あの無人機ISから高出力ビームが発射された。

光線は真っ直ぐ箒に向かっている。
コンマ何秒と言っ一瞬の時間で俺は絶望した。

このままだと箒が死ぬ。

アリーナにも遮断シールドはある。
だが、あのビームを前にシールドは紙切れのような物だ。

俺は何も守れないのか？

白式を手にして、皆を、仲間を守ると自分に誓ったじゃない

そこには八雲ツバメがいた。

天燕の可変式ウィングを身体の前で広げ、翼から放出する光の粒子で膜のような物を作ってビームを防いでいたのだ。

「な、
なんで？」

しかし、問題はそこでは無い。

ツバメはつい数秒前まで自分と一緒に「ここ」にいたのだ。
 ビームとは光だ。そして光が進む速度は光速である。あの無人機
 ISと筈の距離を目算で計っても一秒もかからないだろう。

それをどうやって一瞬で『あそこ』まで移動した？

瞬間移動？ いや、そんなことあり得ない。ツバメが先程までいた位置を見て見るとわずかに天燕が放出する光の粒子がその場に残っていた。そして、その粒子はツバメが移動したと言う痕跡を残している。

一体何があつたんだ？

「一夏ああああああああああああああ！！！」

俺が色々思考を巡らせていると不意にアリーナ内に大きな声が響いた。ISの通信やアナウンスでは無く、普通の地声だ。

声のした方を見ればそこには一瞬で移動したツバメがいた。何故か天燕は電池が切れたかのように起動しておらず、地面に膝をついた状態だった。たぶん、エネルギーを使い果たしたのだろう。

[illegible]

その声に反応して俺は無人機ISの方を向く。アイツはまた筈と

ツバメに向かってビームを放とうとしていた。

「鈴、やれ！」

「わ、わかったわよ！」

ツバメはたぶん、次を防ぐ事は出来ない。次にあのビームが放たれたら今度こそ終わりだ。

そんな事はさせない！

俺は鈴の衝撃砲の射線上に躍り出た。

「ちよつ、ちよつと馬鹿！ 何してんのよ！？ どきなさいよ！」

「いいから撃てー！」

「ああもうつ！ どうなっても知らないわよ！」

鈴の放った衝撃砲を背中に受け、俺は『瞬間加速^{イグニッション・ブースト}』を作動させる。そして、衝撃砲の巨大なエネルギーを利用して加速。

「オオオツ！」

加速中、ISが加速Gを軽減してくれているとは言え、身体に軋むような痛みが走る。

俺は…千冬姉を、箒を、鈴を、そしてツバメを、関わる人すべてを…守る！

必殺の一撃は、敵ISが幕達に向けて突き出していた右腕を切断した。しかし、その反撃で左拳をモロに受ける。

零距离からの砲撃。

だが、恐怖は無い。

俺はたぶんこの時、してやったと笑っていたと思う。

「狙いは？」

『完璧ですわ！』

そんなISの通信と同時に青い複数のビームが無人機ISを撃ち貫く。

観客席からセシリアによるブルー・ティアーズの狙撃。
遮断シールドはさっきの一撃で破壊した。そんな状態であの狙撃

を喰らえばひとたまりもない。ボンツ！ と無人機ISから小さな爆発が起こり、地上に落下していった。

『ギリギリのタイミングでしたわ』

「セシリアならやれると思っていたさ」

確信染みた口調でそう言う。しかし、そんな俺の言葉が意外だったのか、帰って来た言葉はひどく狼狽ろうたいしていた。

『そ、そうです…。とっ当然ですわね！ なにせわたくしはセシリア・オルコット。イギリス代表候補生なのですから！』

「ふう。何にしてもこれで終わ」

《敵ISの再起動を確認。警告。ロックされています》

「！？」

片方だけ残った左腕。それを俺に向けていた敵IS。

次の瞬間、迫り来るビームに向かって俺は突進した。そして、真っ白な視界の中で雪片が相手の装甲を切り裂く手応えを感じた。

学園地下五十メートル。そこは学園でも一部の人間しか入れない隠された空間。

「すまん。八雲」

「いえ、気にしないでください。織斑先生」

私は八雲を連れてそこへ向かっていた。先の戦闘で天燕がまた再調整を必要とされ、あの襲撃して来たISと一緒にここへ運ばれた。そして、天燕を再調整出来るのは彼女しかおらず、特例としてここに招き入れた。

「天燕の調整はこれからここを使用してもいい。だが、一応この存在は機密扱いになっているので口外しないように」

「はい」

「それからお前に見てもらいたい物がある」

エレベーターが目的の階層に着くと鉄の扉が左右に別れ、開かれた。

扉が開かれるとそこは電気もついていない暗い通路。何百本と言う電気ケーブルが部屋中に張り巡らされ、ジャングルのような場所。そんな通路を進むと私達は目的の部屋へと到着する。

電磁パネルに暗証番号とカードキーを差し込み扉が開く。

「織斑先生」

部屋にいたのは私の副担任をしている山田真耶だった。ただ、普段よりきびきびした動きを見せており、いつもの雰囲気は無い。他にも白衣を来た女性が何人かいた。

「解析結果は？」

「今、出ました。機能中枢は織斑くんの一撃で破壊されてしまいました。……結論を言うとアレは無人機です」

その言葉を聞くと私はその無人機が寝かされている手術診察台のような台を見た。

寝かされた無人機ISはまさに手術の途中かのように腹を切り裂かれ、中身が丸見えだった。

「山田先生。八雲に解析データを見せてやってくれ」

「いいのですか？ 一応、生徒なんですよ」

「コイツだってIS研究者の一人だ。なにより、あの篠ノ之束の所で助手をしていたのだぞ？ いい意見が聞けると思うが？」

「わかりました」

真耶はそう言ってブック端末を取り出し、八雲にそれを手渡した。

「八雲さん。一応、機密になるので口外は絶対しないでくださいね」

「はい」

短く返事すると八雲はブック端末に目を通す。

「ところで山田先生。こいつのコアは？」

「未登録の物が使用されていました」

やはりか……。

「心辺りがあるんですか？」

「いや。ない。今はまだ　　な」

そう言って私は先程の一夏達の戦いを映し出していたモニターに目をやる。

「……ゴーレム」

「ん？」

ブック端末を八雲に見せてから数分。八雲はなにかを見つけ、ボソリと呟いた。その声は私以外の人間には聞こえていなかったらしい。真耶を始め、他の人は別の作業でそちらに意識が集中していたからだ。

「あ、いえ。この壊れたプログラムソースどこかで見た事あるなあ
くっと思って……」

「……どこでだ？」

「……東さんの研究所です」

やはりこいつにコレを見せたのは正解だと思い、私の疑念は確信へと変わった。

第十二話 恋の宣戦布告！（前書き）

これにて原作一巻分が終了！。

そして、今回は短いです。

ごめんなさい。

後、これまでのお話で誤字脱字が多かったので修正しようと思います。

話は変わりませんのでご安心を。

第十二話 恋の宣戦布告！

謎の襲撃者を倒してから数時間。織斑一夏の疲労はピークを迎えていた。

保健室で鈴との約束を完璧に思い出し、なんとか和解することが出来た。だが、何故か鈴は不服そうにしており、見舞いに来てくれたセシリアと鈴が口論になってそれをなだめるのに疲れた。

そして、部屋に帰れば箒の味なしチャーハンを食し、腹は膨れるものの少し物足りない。そこから山田先生が部屋に来て、箒の部屋替えが決まり、何故か箒の奴は怒りながら部屋を出て行ってしまった。

俺が何をしたと言うのだ？

同居人がいなくなった部屋は無駄に広い。する事も無かったのもう寝ようかと思い、ベッドに横になったのだが……。

「寝れん……」

妙に頭が冴えて寝れなかったのだ。

「……何か、飲み物でも飲もう」

どうしようかと思い悩んだが、特に名案が浮かばず、とりあえず渴いた喉を潤すために自販機へと向かう事にした。

「あれ？ ツバメ？」

「んー？」

俺が自販機に辿り着くとそこにツバメの姿があった。

風呂上がりだったのかいつも目にする制服姿ではなく、なんともラフな格好だった。ショートパンツにタンクトップ。おまけに湯上りで首からハンドタオルを掛け、セミロングの髪が水分を含んで異様に色つぼく見える。

水も滴るいい女とはこういう事を言うのだろうか？

丁度ツバメも自販機で飲み物を買い、缶コーヒーをその場で飲み干そうとしていた。

「どうしたの？ 買わないの？」

「あ、いや。買うよ」

そんなツバメに見蕩れるていると、俺は慌てて百二十円をポケットから取り出し、自販機にお金を入れて飲みたいジュースを選ぶ。ガコンと自販機から出て来たジュースを取り出し、一口だけその場で飲んだ。

「そう言えば大丈夫なのか？ 天燕がまた調整されるって聞いたけど」

「んー？ まあ、明日からまた整備科で作業だね。でも、先生が学園内にあるちよつといい整備ラボを貸してくれるみたいだからそんなに時間はかからないよ」

「そっか…お前は大丈夫なのか？ その、身体とか」

「明日辺りは筋肉痛だねえ。一応お風呂でマッサージしたけどアタシそういうの苦手でうまく出来ないんだよ」

ん〜と背筋を伸ばすツバメ。その際、程良い大きさの胸を張りだす物だから俺は高速で視線を反らした。

「あ、一夏くん」

「な、なんだ？」

「アレ。久々にやってよ」

「ああ〜アレか。いいぜ。じゃ、部屋に戻ろっぜ」

「うん！」

ツバメの願いを聞き入れ、俺達は部屋に戻ることにした。

「……………」

筈は先刻、山田真耶に連れられ一夏と別の部屋へ移動させられた。そして今は来た道を戻り、一夏の部屋へと向かっている。

「（一夏と別室…やっぱり、不安だ。なにかと目を張らなければだらしがないところがあるし…よし！ 毎朝様子を見に行こう。朝稽古

と言って誘えば自然だな。うん！」

などと考えている内に目的の部屋へ到着する。

そして、部屋のドアをノックしようとした時だった。

「あ……だめ……」

え？

小さかったがかすかに女性の声が聞こえた。

「（一夏の部屋から女の声？ ……え！？ まさか！？）」

私はドアに耳を当て、中から聞こえて来る会話に集中した。

「何言ってるんだ。ちゃんとほぐさないと気持ちよくなるぞ？」

ほぐす？ なにをだ？

「でも、痛いのはイヤ……もっと優しくしてよ」

痛い？ 優しく？ って、この声はツバメ！？

「ほら、今度はこっちだ」

今度はどこになにするつもりだ！

「……ああ……くう……すごいね。一夏くん」

何がすごいんだ！ ツバメ！

「まあゝな。家では千冬姉にしているから馴れてる」

千冬さんと！？ ソレはソレで問題があるぞ！！

「え！？ そんな物まで使うの！？」

何を使う気だ！？

「いいじゃん。ツバメとこうするのも久々だし。結構利くぜ？」

始めてでは無いのか！？ ツバメ！ お前だけは信じていたのに！！

聞き耳を立てて数分。思考は恥ずかしさと怒りで一杯になり、私の顔は熱を帯びていた。たぶん、鏡を見れば耳まで真っ赤になっているだろう。だが、そんな事はどうでもいい。

……………とりあえず、肅清だ。

そんな結論を導き出した瞬間、ドアを蹴破り、部屋に突入。

「何をしているかあああああああああああああああああ！！
……………あ？」

怒りを爆発させて部屋に入る。だが私は部屋の中に入り、二人の

行為を見て怒りが一気にクールダウンしてしまった。

一夏はツバメの足を片手で掴み、反対の手で持っていたツボ押し棒でツバメの足の裏をそれで押していたのだ。

「……………え？」

「ほ、箒？」

「イタイ！ イタイ！ そこはイタイって！！」

一夏はビックリした用に私を見てくる。対してツバメは痛みを訴えながら一夏の頭を枕でボスボスと叩いていた。

「な、何をやっているんだ？」

「何って…足裏マッサージ」

「箒！ たすけてー！」

そこで全てを理解した私はまた急激に顔が熱くなり、目眩がしてその場に倒れた。

「箒？ 大丈夫か？」

「…ああ」

現在、俺の部屋では倒れた箒をベッドで寝かされ、その介抱を俺とツバメでしていた。

ちなみにツバメは箒が目を覚ますとまた俺のマッサージをするように言い、今度はツバメの肩を揉んでいる。

箒の奴、風呂にでも入ってのぼせたか？ いや、まだ制服姿だからまだ風呂は入って無いはず。でも、顔が赤かったし。なんでだろう？ 風邪か？ 五月って暖かくなったり、寒くなったりするからな。俺も気を付けよ。

「急に倒れてビックリしたぞ？ ってか、いきなり部屋に入ってきた時もビックリしたけど」

「…うつさい」

怒られた。何か気に障る事でもしたのだろうか？

「…ツバメ」

「うにゃ〜？」

マッサージを受けて程良く気持ちよくなっていたのかツバメは気の抜けた返事をした。

「色々とすまなかった。それと…今日は助けてくれてありがとう」

「じつとしてられないのはわかるけど、あんまり無茶はして欲しくないな」

「…ごめん」

「解ればよろしい！」

ニツコリと笑うツバメ。箒は少し涙目になっていたがそれに釣られて優しく笑う。

箒ってあんな風に笑うんだなと俺は思った。俺の前ではいつも機嫌悪そうにしているし、俺にもいつかあんな笑顔向けてくれないかな？

「さて…アタシはそろそろ寝るよ。今日は何だかんだで疲れたし」

「そうか」

ツバメはそう言い、俺はツバメの肩を揉むのを止めた。

「一夏くん。マッサージありがとう。またお願いするね」。箒も一回一夏くんのマッサージ受けてみたら？ 癖になるよ？」

「おう、いつでも言ってくれ」

「…やめてくれ」

む、そこまで拒否しなくてもいいだろ。俺のマッサージテクは千冬姉の折り紙付きだぞ。

「じゃ、二人共おやすみ」

「「おやすみ」」

そう言つてツバメは自分の部屋に戻つて行つた。ちなみにドアを開け閉めする音は無い。さっき箒がドアを壊してくれたのでこの部屋のドアは無いのだ。

後で直さないとな……。

「私も戻る」

「ん？　そうか？　無理しなくてもいいぞ？　消灯までまだ時間あるし」

「いや、戻る」

「お、おう……なら送るよ」

まだ熱でもあるのか箒の顔はまだ少し赤かった。足取りはしつかりしているが上半身が少しだけ左右に揺れている。

途中でまた倒れるんじゃないかと心配し、俺は箒を部屋まで送ることにした。

「……………」

「……………」

寮の廊下。俺は黙つて箒の後を付いて行く。と言うか部屋を出てからここまで俺達の間会話と言う物は無かった。少しだけ気まずい雰囲気だ。

「い、一夏」

しかし、そんな空気を打ち破るように箒が声を発した。

「なんだ？」

「ら、来月の、学年別個人トーナメントだが・・・」

そう言えばそんな物が六月末に行われるらしい。生徒の自主参加で個人戦。学年別で区切られている以外は何でもアリのトーナメント。

「わ、私が優勝したら」

箒は俺の方を振り向いて告げる。

「っ、付き合ってもらおう！」

びしっと箒の人指し指が俺に向けられる。

「.....はい？」

第十二話 恋の宣戦布告！（後書き）

天燕の説明を含めた話にしようかと思ったのですが・・・。

異様に長くなったのでやめました。

コメントくれた方々へここで謝罪します。

誠に申し訳ありませんでした。

第十三話 コンタクト（前書き）

シャルルとラウラ登場。

第十三話 コンタクト

「ええとですね、今日は転校生を紹介します！ しかも二名です！」
突然ではあるが教卓に立っている山田先生がそんな事を言い始めた。

瞬間。大抵の女子が声を上げて驚く中、ツバメはあまりの五月蠅さに両手で耳を塞いでいた。

「シャルル・デュノアです。フランスから来ました。この国では不慣れな事も多いかと思いますが、みなさんよろしくお願いします」

そして、招かれた転校生二人。

先に自己紹介をしたシャルルと言う生徒を前にしてまた皆が声を上げてソニックウェーブ並みに発狂する。もちろんオレは両手で耳を塞いでいたのでそれほどダメージは無い。

しかし、世界には不思議な事が起こる物だな。と俺はシャルルを見て思う。

なぜなら…。

「男子！ 二人目の男子！」

「しかもうちのクラス！」

「地球に生まれてよかった〜〜！」

最後の感激の言葉は意味不明だが、シャルルは男なのである。一夏と同じ男子用の制服を身に纏っている。そして、ここにいると言

う事は一夏と同じで男の身でISを動かす事が出来る存在って事になる。

「（束さんがいたら興味もつかない？ …あれ？ デュノアって確か…）」

「あー、騒ぐな。静かにしろ」

「み、皆さんお静かに。まだ自己紹介が終わってませんからー！」

一人で考えていると織斑先生と山田先生が騒ぐクラスを沈める。先生の言う通り、自己紹介はまだ終わっていない。

シャルルの横に立っている銀髪を腰の辺りまで伸ばしている少女。軍人のような気迫を感じさせる。でも、特徴を聞かれればその銀髪や軍人のような雰囲気より彼女の付けている眼帯と答える人の方が多いと思う。

「ってか、ああ言う眼帯って本当にあるんだな。自作なのか？」

「……………」

クラスがやっと静まりかえるものの、当の本人は未だに口を開こうとしない。

「……………自己紹介をしろ。ラウラ」

「はい、教官」

「ここではそう呼ぶな。もう教官ではないし、ここではお前も一般生徒だ。私の事は織斑先生と呼べ」

「了解しました」

軍人のような返答をするラウラ。いや、織斑先生を『教官』と呼ぶ辺り本当の軍人なんだろう。

「ラウラ・ボーデヴィツヒだ」

「……………」

なんとも短い自己紹介。入学式初日に短い自己紹介した誰かを思い出す。

「！ 貴様が……………」

パシン！！

突如、教室内で何かが叩かれた音が響いた。オレは音の発生源を見て見るとラウラが一夏をビンタしていた所だ。

……一夏……ついに女性から叩かれるような事をしてしまったのか？オレは悲しいぜ……。ハンカチがあったら目頭に当ててヨヨヨと泣いたフリをしたい。

と言う冗談はさておき、突然のラウラの行為でクラス中がキョトンとしていた。

叩かれた一夏も何が何だか解らず、放心状態であった。

「私は認めない。貴様があの人の弟であるなど、認めるものか」

その一言でやっと我に返った一夏。

「いきなり何しやる！」

「ふんっ」

だが、ラウラはそれ以上一夏の相手はせずツカツカと姿勢正しい足取りで空いてる席へ 　では無くオレの方に向かって歩いて来る。

え？ 何故？

「八雲ツバメだな」

そしてオレの席の横に立ち、その足を止めた。
もしかして、オレも彼女に何かしてしまったか？ いや、一夏同様初対面だ。だが、その初対面の一夏に対してあの態度だ。あれか！ ドイツ人は気に入らない奴の顔も見たらとりあえずぶん殴れ！
みたな習慣があるのか！ ヤバい！ 非常にヤバいぞ！ 幸いなのは彼女が次に出る行動が解っている事だ。それなら、初撃に備える事が出来る！

なので、グツと身構え。取れもしない迎撃態勢をするが……

「あ、握手してください！」

「…はい？」

そんなオレの予想と裏腹にラウラは恥ずかしそうに自分の右手を差し出していた。

所変わって、第二グラウンド。今日は一組と二組で実習訓練をする事になっている。ツバメはそんな集団の中で空を見上げてボーっとしていた。

現在、ISを身に纏った山田先生とセシリアと鈴の代表候補生組が上空で対決していたからだ。

「フン、二人の連携が甘いな。即席とは言え酷過ぎる」

などと実況を解説しているのはオレの隣にいるラウラ・ボーデヴィツヒである。

「あ、やられた」

「所詮この程度か…実戦を知らん愚か者め」

「…あんまり本人達の前では言っちゃだめだよ」

「善処いたします。八雲博士」

「はあ…」

クラスでラウラに握手を求められた後。ラウラはずっとこの調子なのである。

何故こうなったかを聞けば、オレが昔立案したIS戦術理論に感銘を受けてファンになったとか。

「アレって束さんが軍に依頼されて引き受けておきながら「メンドクサイ!」とか言ってるオレに押し付けて作らせた物だぜ? しかもかなり適当に作った気がする。」

後で気付いたが、提出された戦術理論には束さんの名前では無く、オレの名前で提出されていたのには驚いたなあ。

「ねえ? ラウラさん。その『博士』ってのはやめない? 今はクラスメイトだし、同い年だし」

「私は敬意を払うべき人には最大の敬意を払います。それと私の事はラウラと呼び捨てで結構です。博士」

「…アタシ、博士号持って無いから正確には博士じゃないんだけど」

「そんな事関係ありません」

「はあ…」

うん、なんかこのやり取りをする事に疲れた。

「では、これから各グループに別れてISの装着訓練と動作訓練をする。グループのリーダーは専用機持ちがする事」

「やった! 織斑くんと一緒だ!」

「うー、セシリアか…さっきボロ負けしてたしな。はあ…」

「鳳さん！ よろしくね。後で織斑君のお話聞かせてよっ！」

「デュノア君！ わからないことがあったら何でも聞いてね！ ちなみに私はフリーだよー」

「ツバメちゃん。よろしくね！ 今度私に専用機作ってよ！」

「……………」

各グループの女子は専用機持ちを中心におしゃべりしながら集まる。だが、そんな中でラウラのグループだけは会話がなかった。

何とも気まずい雰囲気。見ているこっちも気まずくなる。

「おい、八雲」

「はい？」

織斑先生がオレに声を掛けてくる。

「ボーデヴィツヒのグループと合同で実習をしろ。アレでは日が暮れてしまう」

「うえ！？」

「返事は「はい」か「YES」しか受け付けない。私達は他のグループも観なくてはならないからな。頼んだぞ」

何とも理不尽な選択。もはや拒否権すら与えられないとは。

「…と言つ訳でよろしく。ラウラ」

「よろしくお願いいたします。博士」

「じゃ、始めにISの装着だけど…これって立ったままロックされてる？」

目の前にあるのは学園で支給される訓練機。『打鉄』と『リヴァイヴ』の二機。

訓練機は専用機のような待機状態は無い。操縦者はそのまま『着る』と言つた感じでISを装着しなくてはならないのだが、装着する際にはISを座らせた状態にしないと次に装着する時一苦労しなくてはならないのだ。

「はあ…山田先生がすっかりしたんだね。しょうがない。天燕」

とりあえず、天燕を展開するオレ。空を飛んで立たされたままの打鋼の背後に周った。

その行為を見ていた一同は何をするのだろつと言つた表情だった。もちろん、ラウラもだ。

まあまあ、君達。今からちよつとした『人形劇』が始まりますから。

「（天燕。ISネットワークを介して目の前にいる打鉄のコントロールをオレに寄こして）」

《わかったー。 おはようございます！ 打鉄さん！》

《 他者による外部アクセス確認。 アクセス者を天燕と断定》

数秒の時間を置いて、目の前にいる打鉄の『声』が聞こえた。

天燕の人格管理者はISネットワークを使って他のISコアの『意思』と会話が出来らしい。らしいと言つのはオレがこの原理を把握しきっていないからだ。

オレ自身がコンタクト出来るのは天燕だけである。

他のISともコンタクトが取れるか試しに何度かコンタクトを取ってみようとしたが、ウンともスンとも答えてくれなかった。だが、天燕を通して相手側からコンタクトをして来てくれると、こういう事が出来る。まあ、簡単な遠隔^{リモート}操作だけなのだが。

《あのね。これから皆で打鋼鉄さんに乗りたいんだけど今のままじゃ乗れないんだ。だから、僕の操縦者にコントロールさせたいんだけど、いい？》

《了解。コントロールを天燕の操縦者八雲ツバメに移行》

《ありがとうー！ ツバメー！ 動かしてもいいって！》

「（サンキュー天燕。それと打鉄も）」

コントロールが移った事を確認するとオレは何も無い空中にいくつものモニターが浮かび上がる。そしてモニターを操作し、打鉄を座らせるように命令した。

ブシューー！！

機体を支えていたジョイントからエアーが抜ける音が聞こえる。そして、打鉄は無人のまま器用に地面に座わったのだった。

「はい、お終い　次はつと・・・」

そして、打鉄同様。リヴァイヴにコンタクトを取り、同じように地面に座らせた。一通りの作業を終えるとオレは天燕に「ご苦労さん」と言い展開を解除して地上に降り立った。

「はーい！　これで乗れるよ。最初は誰に・・・」

あれ？　皆さん口を開けてどうしたんだ？　ラウラまでボーっとして。可愛い顔が間抜けすぎるぞ。

「ISが…無人で動いた…」

誰かがボソツと呟いた瞬間だった。

「なんで！？　どうやったの！？　ツバメちゃん！！」

「ISって人が乗ないと動かないんでしょ！？」

「すごい！　さすが、自分でIS作れちゃう人なんだね！！」

グループの女子が一斉にオレの周りに集まり質問攻めにして来るのだった。

「あー…えーつと…」

「おい！　貴様等！　博士が困っているだろうが！！」

質問の答えに困っているとラウラがオレと女子の間に立って引き

剥がす。

あ、ラウラって基本いい子かも。

「大丈夫ですか！？ 博士！！」

「う、うん。ありがとう。ラウラ」

でも顔近いよラウラ。ってか、そんなに手を強く握らないでください。身体の割には力が強いぞコイツ。

「……ところで」

「ん？」

「後でこっそり教えてください」

「……………」

ラウラの欲望も他の皆と同じだった。所詮そんなものなのか。色々な事に絶望するぞ？ コノヤロ。

そんな事を思っているとオレ達のグループ全員は織斑先生の出席簿アタックが脳天に飛来して来た。なので、さっさと皆で起動実習を再開させる。

「バカモーン！！ ISは自分の手足だと思え！！ そんなチンタラしてたら日が暮れるだろうが！！ このウジ虫があ！！！」

訓練が開始されてからラウラは自分の古巣に戻ったかのように生き生きとしていた。

軍曹や！！ ここに鬼軍曹がある！！

「私の階級は少佐ですよ？」

……いや、そう言う訳では無くてね。

第十三話 コンタクト（後書き）

シャルロット党もいいけどラビッツ党もいいよね？

第十四話 銀の過去、金の未来（前書き）

タイトルに深い意味は無い！

内容だってタイトルのそのままです。

後、主人公の一人称を「オレ」から「アタシ」に変え、完全な女にしてみました。

前からもそうですが、違和感などがあつたらお申し付けください。

6月5日

読者様達の申し出により主人公のキャラを戻しました。内容はさほど変わっておりません。

第十四話 銀の過去、金の未来

ラウラ・ボーデヴィツヒには憧れの存在が二人いる。

一人は自分の元教官。織斑千冬。

軍の遺伝子強化実験により私と言う存在が生まれた。目的は『より強い兵士を生み出すため』。実験素体は何体もいたが私はその中でも優秀な成績を収めていた。格闘、狙撃、体力、戦術訓練、戦車、戦闘機。どれをとっても私はエリート。

疑いようの無い自分の力に迷いなど無かった。

しかし、世界が変わって軍は私に『役立たずの欠陥品』の烙印を押す。

『白騎士事件』

世界にISと言う兵器の力をアピールさせ、世界のバランスを変えた事件。

我がドイツ軍もそのISの兵器転用に力を注ぎ、その研究が始まった。

そして、私はIS適合向上のためヴォーダン・オージェの移植をする事になる。

だが、移植されたヴォーダン・オージェは不適合。私の右目は金色に変色し、ISの適正までもを私から奪っていった。

ISを使えない兵士などいない。

生まれた理由を否定された気がした。いや、完全なる否定だ。

おかげで私は自分の存在意義に疑問を持つようになった。

なんのために生まれたのだろうか？

生まれる前から戦いを存在意義として来た。それが目の前から無くなってしまい、私に残った物は何も無い。ここにいる意味など無いのではないのだろうか？ 私は世界に拒絶されたのだと思った。

このまま消えてしまいたい。

そう思った矢先。暗闇から私を救ってくれたのが織斑千冬だった。血反吐が出る思いをして、彼女の教えをこの身に刻みこむ。何度も、何度も、何度も、体力が無くなるまで努力した。その甲斐あって、私は再びエースの称号を手にすることが出来たのだ。

だから、私にとって織斑千冬は絶対的な存在なのである。そして、その経歴に泥を塗った彼女の弟を私は許さない。アイツと言う存在さえいなければ織斑千冬は完璧なのだ。

だから私は織斑一夏をこの手で

。

そして、もう一人が八雲ツバメである。

この場合は教官へ抱いた憧れとはちよつと違つかもしれない。

ISの戦術訓練の講義を受けている時。

「ISを使つてどのような作戦が出来ると思う？」

講師がそんな質問をしてきた。

装備次第で火力の調整を可能とし、幅広い作戦内容を遂行することが出来る兵器。つまり、どんな作戦にでも対応ができる。

「そうだな。どんな作戦にでもISは活躍する事が出来る。だが、この論文にはそんな当たり前の事が書かれていない。なんでだと思っ
う？」

当時の私は純粹に何故だろうと思った。そして、その答えを講師
が告げる。

「要約すると『敵が行動に移る前に最大の火力で攻撃してしまえ』
としか書いていないからだ」

「ッブフ!!」

私は笑いを堪えて苦しんでいた。周りにいる受講生もそんな私を
見てビックリしたようだった。

「単純だが理に適っていると私は思う。ISの機動性、拡張領域を
一杯まで使った装備、これを前にしてしまえば相手の戦力など関係
無い。まあ、敵がISなら話は別になるかもしれないがな」

本当にだ。本当に単純である。

もはや戦術もクソも無い内容。だが、私はそれが気に入ってしま
った。

力Ⅱ 攻撃力

それが私の中にある方程式。そして、この論文はその方程式を肯
定とした内容だったのだ。

それから、私は彼女が書いた論文を読み漁った。

気付けば日の出を拝む事も何度もあった。

声を出して笑ってしまった事もあった。

真面目に納得する事もあった。

実際に演習でやってみて凄いと感心させられることもあった。

私は彼女の書く論文の虜になってしまっていたのだ。ISが使えるようになって単純に面白いと思ったのはこの時からだった気がする。つまり、私が彼女に抱いた憧れは『好きな本の作家に憧れる』と同じなのだ。

後日、これを書いた八雲ツバメと言う人物が自分と同年だと知った時には驚かされた。あんな面白い事を自分と同年の子が考えてまとめたのかと思うと色々興味が湧く。

いつの日かお目に掛りたいな。

だがそんな思想も意外な形で叶うとは当時のラウラはまだ知らない。

午前の訓練が終了して学園の屋上。八雲ツバメはそこから見える空をただ眺めていた。

「（今日もいい天気だな……）」

「ほら、あ〜ん」

「あ、あ〜ん……」

現在、オレ、一夏、箒、セシリア、鈴と転校生のシャルルはここで昼食を取っている。そして、一夏は箒お手製の唐揚げを箒に絶賛あ〜んをしているところである。

口から砂糖でも拭き出しそんな展開だな…。

「い、いいものだな……」

「だろ？ うまいよな、この唐揚げ」

「唐揚げではないが……うむ。いいものだ」

箒さんはとても幸せそうであった。

「「一夏！（さん！）」」

しかし、その行動に火がついたセシリアと鈴。自分達が作った（セシリアはサンドイッチ。鈴は酢豚）を一夏に向けて突き出している。

「皆、仲がいいんだねえ」

そしてそんな光景をノホホンと見つめるブロンドの貴公子。
アレをどう見て仲がいいと言うのだろう？ いや、その通りかも

な。

「ところでチュ」

「……………噛んだ？」

…はい、かみまみた。

「シャルルでいいよ。僕もツバメって呼ばしてもらってから」

「…ありがとう」

うわぁ〜とてつもなく恥ずかしいぞ！！ 穴があったら埋まりたい！ 入りたいじゃなくて埋まりたい！！

「…シャルル君はデュノア社の御曹司なの？」

「え？ うん…そうだよ」

あれ？ なんか暗い表情になった。御曹司とかあって複雑な家庭なのか？ うむ、地雷踏んだかも。

「というよりツバメって自分でISを作っているって聞いたけど…ホント？」

「正確には出来あがった天燕を整備、調整しているだけだよ」

「そうなんだ。凄いね」

「デュノア社製のISパーツっていいよね。安定性があるし、アタ

シの天燕も色々に使わせていただいてます」

「え？ そうなの？」

「うん、最近は拡張領域のメモリーをデュノア社製に替えてみたんだ。そしたら、相性良くて大助かり！ 機動の処理速度もグーンって上がったんだよ」

「あ、ありがとう」

何故か嬉しさ半分、恥ずかしさ半分で下を俯いてしまうシャルル。しかし、すぐさま元の表情に戻り、オレに詰め寄ってくるのだ。

「ね？ ツバメから見てデュノア社ってどう見る？」

「え？」

「正直に言ってくれてもいいから！」

「う、うん」

一体どうしたんだろ？

「安定した第二世代型を中心に開発しているのはいいんだけど…今の時代、世代交代始まってるでしょ？ それに付いていけないかなあ…って感じがする」

「…やっぱ」

「でも、拡張領域の容量が凄いからそれを軸に第三世代を作ったら

すごいかもね」

「え？」

「シャルル君のラファール・リヴァイヴ・カスタムIIは通常のリヴァイヴより拡張領域が二倍でしょ？ その技術を応用してISの特殊兵装パッケージ切り替え出来るようにすればいいんじゃないかな？」

「パッケージを切り替え？」

「どの世代もそうだけど、パッケージってかなり拡張領域を占めちゃうでしょ？ それに、いちいちパッケージを外したりもするのでもンドクサイよね。だから、拡張領域をさらに広げるか、パッケージ自体のメモリーを縮小するかして、一体のISに複数のパッケージを組み込むの」

「……」

ありや？ 変な事でも言ってしまったか？

まあ、この技術の原理はアレですよ。変身ヒーローが戦況に合わせて色んな姿に変身できるって奴。

アレってカッコいいですよ。オレは今は女の子だけど男の子は憧れるよね。

「す、すごいよ！ ツバメ！ そんな事思いつきもしなかった！」

っわ！ いきなり顔を近づけないで！ ドキドキする！

「そ、そうかな？」

「うん！」

…… ああ、色々と眩しい笑顔。

もうこの人本当に男なのかと思えて来る。握つて来たても男の子にしてはプニプニして気持ちいいし、色々反則ツス！！

「ねえ？ よかったらいつか色々ISについて教えてよ。ツバメのアイディアは面白いから」

「うん。いいよ。アタシの部屋は一夏の隣だから暇な時にでも呼ぶか来てくれれば」

「ありがとう！」

「なあ？ さつきから二人はなんの話してんだ？」

オレとシャルルでそんな話題で盛り上がっていると女子三人からやっとな解放された一夏が話しかけて来た。

うわっ！ セシリアのサンドイッチで凄いやつれてる。そんな君に正 丸を差し上げよう。

「ツバメにISに付いて色々聞いてたんだよ」

「ああ、ツバメの教え方はうまいからな。シャルル。俺の事も頼ってくれていいんだぞ。IS以外で」

胸をトンと自分で叩く一夏。出来ればISに関しても頼れる存在になってほしい。

「ありがとう一夏！ えへへ」

ふむ、一夏のボケをスルーですか…やるな、ブロンドの貴公子め。

「つと。そろそろ戻ろう。昼飯食った後に更衣室までダッシュはキツイ」

「そうだね。じゃ、ツバメ。後でお話聞かせてね」

こうしてオレ達は午後の授業に備えて屋上を後にするのである。

「男同士っていいよなあ」

「そ、そう？ よくわからないけど、一夏がいいならよかったよ」

一夏の発言により、アタシを含めた女子から変な誤解が生まれた。

「…男同士がいろいろって何よ…」

「…不健全ですわ…」

「…灯台もと暗しに気づかぬ愚か者め…」

「一夏くん…まさか、そっちの趣味が…」

オレはしばらくの間、
一夏から10メートルの距離を取ろうと心
に決めたのだった。

第十四話 銀の過去、金の未来（後書き）

感想お待ちしてます

第十五話 居場所（前書き）

前回、キャラ改善をいたしました但思った以上に不評でしたので元に戻します。

後、天燕の第十一話で出て来た単一仕様能力のシステム名を変えました。十一話の方も改善済みです。

この場を借りてお詫びいたします。誠に迷惑おかけいたしました。

第十五話 居場所

シャルルとラウラが転校してきて五日目。本日は土曜日。授業も午前中で終わり、午後は自由時間となっている。

そんな中、学園の地下ラボで八雲ツバメは目の前にあるモニターを見て頭を悩ましていた。

「おやおや。何を悩んでいるの？ 天才少女八雲ツバメさん？」

オレがうーうー悩んでいると不意に背後から声を掛けられた。

「天才って…アタシは先輩程の天才じゃないですよ。楯無先輩」

「あら、謙遜しなくてもいいのに」

手にした扇子を開いて口元を隠し、笑う。オレは開いた扇子に書かれている「もっと褒める」という文字に苦笑いした。

更識楯無。

彼女はこのIS学園の生徒会長である。そしてそれを意味する事は「学園最強」の称号を持つ。

何故そんな彼女と一生徒であるオレと面識があるかと言うと、単に一年でISを組み立てている生徒がいると言う事で興味を持ってくれたらしい。実際の所は不明である。

「天燕の調子はどう？」

「順調…とは言えませんが。色々問題は山積みですよ」

「どれどれ……あら？ フレームの強度を上げたの？」

「機動性が売りですから……それに耐えられるフレームを作らないといけないんです。他にも拡張領域を広げてハイパーセンサーの処理能力を上げたりとか……」

「このままでも十分な気がするけど？」

「ダメですよ。これだと起動時間が他のISより極端に短いんです。此間の事件もEシステム一回使っただけでエネルギーが無くなりましたし」

「Eシステムね……厄介な物を作ったものね」

Eシステム。

正式名称ELS Driver System。エルスドライバー・システム

天燕に搭載されている粒子エネルギー生成装置。

自分でも忘れガチであるがオレは前世の知識を持ってこの世界に生まれた。

そして、このシステムはそんな知識の一つである。束さんにISに付いて教えてもらっていた時期。オレは自身の内にある知識とISに関する知識が合わさったらどうなるのだろうと考えた。なので、試しにそれ等を組み合わせた理論を作ってみることに。するとそれは面白いぐらいに組み上げられ、完成。出来あがった理論を束さんに見せると四日間ぐらい部屋に引き籠ってしまい、再開した時には屍のようになっていたのにはビックリしたな。

「このシステムが完成したら篠ノ之博士並みの革命が起こるんじゃない？」

「そうですかねえ？」

しかし、楯無先輩が言うようにこのシステムは完成していない。
この世界にある技術では今の段階が限界なのである。

「ふふふ、あなたは自分のしやうとしている事の重大性に気付いて
ないのかしら？」

「うゝ…確かにこれが完成したら大変なことになるかもしれませんが
でも、それでも完成させてみたいんです」

「それは何故？」

「…たぶん自分の欲望に貪欲なんです。自分の翼で空を、どこまで
も高く飛んでみたいんですよ」

「ずいぶん単純な理由ね」

本当にだ。

「でも、私は結構そう言うの好きよ。…やっぱり、あなたとは気が
合いそうね」

楯無先輩は広げていた扇子をパンと閉じ、どこからともなく一枚
のディスクを取り出した。

この人は手品師か？

「これは？」

「私のIS。ミステリアス・レイディに関する資料。特別にツバメちゃんにコレをあげましょう」

「え？」

「色々な技術が詰め込まれているから役に立つ物があるかもよ」

「い、いや！ あー！ なんて！？」

「私の理由も単純。『それが完成したら単に面白くなりそう！』だよ」

閉じた扇子を口元に当て、可愛らしくウィンクする楯無先輩。

うん、同性からも人気がある理由が解る気がする。

「あ、ありがとうございます！」

深々と腰を九十度曲げ、頭を下げてお礼をする。

「うん、お礼はいいから生徒会に入ってよ」

「それはお断りします」

「即答ッ！？」

お礼同様に頭を下げ、誘いを断るオレ。楯無先輩もショックを受けた様に肩を落としていた。

だって、生徒会って面倒臭そうだし…。

「まあいいや。気が変わったらいつでも来てね。歓迎はするわ」

少し浮かない顔をして楯無先輩はそう言って部屋を出て行ってしまふ。部屋に残されたオレは彼女が部屋を出て行った後にもう一度だけ頭を下げ、ディスクをパソコンに早速読み込ませる。

「……ハハ、スゲエ。楯無先輩……やっぱ、あなたはオレ以上の天才ですよ」

ディスクの内容を見て、オレは思わず本性を更け出してそう口にしてしまった。

楯無先輩から資料をもらったその日の晩。

「……………」

「……………」

「……………」

現在オレは何故か一夏の部屋に招かれ、オレ、一夏、シャルルの三人は物凄く気まずい空気の中で一時間ぐらいこうしている。

え？　なんでこうなったかって？

じゃ、ちょっとそこから説明しよう。

「　　」

ラボから一人上機嫌に寮に帰って来たオレは鼻歌なんか歌ってスキップなんかしてたんだ。楯無先輩からもらったデータは色々役に立ち、天燕の開発が大きく進展したんだ。そりゃ、気分だって浮かれるさ。でも、部屋の前までやって来るとそんな気分も無くなってしまう。

「……………」

「い、一夏くん？」

なぜか部屋の外で体操座りをして放心状態の一夏が目の前にいたからだ。ってか、あの時の表情はなんか魂みたいな物が抜けていたかもしれない。

「………… ツバメさん」

「何故にさん付け？」

「……俺、よく解らなくなっちゃたんだ」

「何が？」

「男と女って何なんだろう？」

「はあ？」

何を悟りだしたんだ？ コイツは？

「い、一夏」

そんな会話をオレ達がしていると一夏の部屋からシャルルの声が聞こえて来た。

「ひゃい！」

そして返答に何故か声が裏返る一夏。オレは横で訳も解らず首を傾げており、状況が飲み込めなかった。しかし、二人の会話を聞いている答えを導き出す。

ハッ！もしかして二人は！！

「そうか、一夏くん…そう言うことが…」

「な、なんだよ」

「シャルルくんと…その…ううん！何でもない！」

「なに顔を赤くして…ハッ！ツバメ！お前は重大な勘違いをし

「ているぞ!!」

オレが何を言いたいのか伝わったのか、一夏は必死にその考えを否定して来る。

「いいの！ それも立派な個性だと思うから！ 安心して、誰にも言わないから」

「ち、違う！ お前の考えていることは一切していない!!」

「明日はお赤飯を炊いてあげるよ!」

「あああ!! 面倒だ!! ちょっとこっちに来い!」

「え!? シャルルくんだけじゃ満足出来ずにアタシまで!! だ、ダメだよ!」

「いいから!!」

半ば強引に腕を掴まれオレは一夏の部屋に入れられる。

そりゃ、オレも今は女だし…。異性に対してそれなりの感情を抱いたりするさ。しかし、お前だけはダメだ！ お前は箒の想い人なんだ！ オレは箒を裏切る事なんて出来ないんだ！

「そんな！ アタシは箒を裏切るような事はでき、な……………い?」

「ツ、ツバメ!?!」

しかし、そんな思考も目の前にいるシャルルを見て止まる。

「すまん！ シャルル！ ツバメが変な誤解をし始めるから・・・」

「へ？ へ？」

「シャルル…さん？」

目の前にいるのは間違いなくシャルル・デュノアである。

風呂上がりなのか束ねていた髪は程かれており、学園指定のジャージ姿であった。

だが、いつもと外見が違う。

オレの視線はシャルルの体を一点集中して凝視してしまった。

「胸が、ある？」

そう、シャルルの胸には無いはずの膨らみが付いていたのだ。

「……しかも、アタシの胸より大きい」

何かに負けた気がして、オレはその場で膝を付いてしまうのだった。

そんなこんなで今に至る。

「で？　なんで男装なんてしてたの？」

「それは、その…実家の方からそうしろって言われて…」

この空気に耐えらなくなったオレは話を切り出すことに。シャルルもその質問に答えようとするがどこか表情が暗い。

「実家っていうと、デュノア社の？」

「うん。僕の父がその社長。その人から直接の命令なんだよ」

「命令って…親だろ？　なんでそんな」

「僕はね、一夏、ツバメ。愛人の子なんだよ」

その言葉を聞いて先程まで質問していた一夏が絶句してしまう。

「引き取られたのが二年前。ちょうどお母さんが亡くなったときにね、父の部下がやってきたの。それで色々と検査する過程でIS適応が高いことがわかって、非公式ではあったけれどデュノア社のテストパイロットをやることになってね」

それからシャルルは家の事を語る。

父親とは滅多に会えないとか、本妻から邪険に扱われていたとか。一夏もそんなシャルルの話を真面目に聞いていて拳を強く握り締めていた。たぶん、怒っているのだろう。

「なんとなく話はわかったが、それがどうして男装に繋がるんだ？」

「…注目を浴びるための広告塔。それに、同じ男子なら一夏くんや白式から何らかのデータが持ち出せると考えたんでしょ？ あの人を考えそうなことだよ」

一夏の疑問にオレが答える。

「…うん。って、ツバメは父と会った事があるの？」

「アタシもＩＳ開発とかに携わる身だからね。何度かデュノア社から開発をやらなかったって言われてたんだ。何度も断っているのに。で、あんまりにもしつこいから一度だけ本社の方に出向いたんだよ」

「そ、そうなんだ」

「それから社長直々に迎えに来て会社案内をしてくれたんだ。でも、なんか第一印象から好きになれなくて適当に話を流してた」

「ハハハ…」

シャルルはそんなオレの話に力無く笑う。だが、表情は笑っていない。

「…ああ、なんだか話したら楽になったよ。聞いてくれてありがとう。それと、今までウソをついていてゴメン。二人共」

「いいのか？ それで」

「え？」

「それでいいのか？ いいはずないだろ。親がなんだっていうんだ。」

どうして親だからってだけで子供の自由を奪う権利がある。おかしいだろ、そんなものは！」

「い、一夏……？」

いきなり一夏が声を荒げる。そんな一夏を見てシャルルは少し怯えた表情をし、オレは心の中でため息を吐いた。

……ああ、また始まった。こいつの『良い』癖が。

「親がいなけりや子供は生まれない。そりやそうだろうよ。でも、だからって、親が子供に何をしてもいいなんて、そんな馬鹿なことがあるか！ 生き方を選ぶ権利は誰にだってあるはずだ。それを、親なんかに邪魔されるいわれなんて無いはずだ！」

たぶん一夏はシャルルと自分を照らし合わせていたんだと思う。過去に一夏から親に捨てられたと聞かされた事がある。だから似た境遇のシャルルと自分を重ねて感情を抑えられなくなっているのだ。

まあ、そんなこと関係無しにこいつは人のために怒れる奴なのだ。それが織斑一夏の『良い』癖。欠点は感情的な故、周りがあまり見えていないところだが。

「でも、一夏くん。ここで君が怒ってもシャルルの問題は解決しないよ」

「どう言うことだよ？」

酷な事をするがオレは現実を一夏に付きつける。

「この問題はきつとフランス政府が付き止めるのも時間の問題。彼女にはいられなくなるかもしれないし、代表候補生を降ろされて、牢屋に入れられるかも知れないんだよ」

「そうなのか？ シャルル」

「……うん」

シャルルの抱えている問題を述べると一夏は確認するようにシャルルに聞く。シャルルもそれが正しいと答え、一夏はこの問題に対する答えを即答する。

「だったら、ここに居ればいい」

「「え？」」

「特記事項第二、本学園における生徒はその在学中においてありとあらゆる国家・組織・団体に帰属しない。本人の同意が無い場合、それらの外的介入は原則として許可されないものとする　つまり、この学園にいれば、すくなくとも三年間は大丈夫だろ？　それだけの時間があれば、なんとかなる方法だって見つけられる。別に急ぐ必要はないだろ」

こいつは驚きだ。感情的になっっていると思ったが意外と冷静だった。ってか、特記事項なんてよく覚えていたものだ。

「一夏」

「ん？　なんだ？」

「よく覚えられたね。特記事項って五十五個もあるに」

「…勤勉なんだよ、俺は」

「そうだね。ふふっ」

一夏の意外な面を見て、シャルルが笑う。しかしその表情は屈託が無く、心から笑っているようだった。

……おい、一夏何顔赤くしてんだ？　ってか、さっきからシャルルのどこを凝視している。

「一夏は胸ばかり気にしているけど…見たいの？」

「な、なに？」

「……………」

一夏の視線に気づき、シャルルは胸に手を当てて顔を赤く染める。そして、シャルルの爆弾発言にその場の空気は凍り付くのであった。

コンコン

「「「!?!?!」」」

「一夏さん、いらっしゃいます？　夕食まだ取られていないようですけど、体の具合でも悪いのですか？」

いきなりのセシリアの訪問。オレ達はいきなりの事だったのであ
たふたしてしまう。

「い、一夏くん！ とりあえず、適当に相手して来て！」

「お、おう！」

「シャルルも隠れて！ って、なんでクローゼット！？ 布団の中でいいから！」

「あ、そつか！ って、ツバメは！？」

「はっ！ どうしよ！？」

などと小声でやり取りしていると部屋のドアが開く音がした。

断りも無く入って来るな！ …ええい！ ままよ！！

「…何してますの？」

「いや、シャルルが何だか風邪ッぽいっていうから、布団をかけてやってたんだ。それだけだぞ、ははは…」

「…日本では病人の上に覆い被さる治療法でもあるのかしら？」

そんな治療法は無いと思うぞ。まあ、現状がそうになっているからそう思っても仕方ない。

「と、とにかく、あれだ。シャルルは具合が悪いからしばらく寝るって。夕食はいらなないみたいだし、仕方ないから俺一人で行こうって話をしてたんだ。よし！ セシリア。一緒に行こう！ うん！ そうしよう！」

「え？　ち、ちょっと。デュノアさん、お大事に」

一夏は部屋に入ってきたセシリアの背中を押しだすようにして部屋を退出。二人が退出した事を確認するとシャルルは布団の中から起き上がる。

「ツバメ。もう行ったみたいだよ」

「ぶはあー…布団の中って息苦しいね」

セシリアの突然の訪問。オレの身近には隠れる場所も無く、咄嗟にシャルルと同じ布団の中に潜り込んでいたのだ。そして、詰まりそうになった息を吐き出し、大きく深呼吸をする。

「ふふつ、ごめんね。苦しかった？」

「ううん。平気。…それで、シャルルはこれからどうするの？」

「え？」

「一夏くんの言った通りにする？」

「…僕はここに居てもいいのかな？」

「決めるのはシャルルだよ？　でも、ここはもうあなたの居場所にもなってるんだから」

「僕の居場所？」

「一緒に笑って、怒って、泣いてくれるような人がいて、ここに
いる事が楽しいと思えばそこはもうあなたの居場所。アタシは少
なくともそう思うな」

かつて自分に居場所をくれた人の事を思い出す。オレも一夏の事
馬鹿に出来ないな。

「そっか…ここは僕の居場所になってたんだね」

「そう感じるならそうなるね」

「ありがとう、ツバメ」

「いえいえ、アタシは特に何もしてませんよ」

「それでも、ありがとう」

シャルルは黙って自分の右手をオレに向けて付き出す。

「シャルロット・デュノア。それが本当の『私』の名前」

「うん、よろしくね。シャルロット」

オレはシャルロットが付き出して来た右手を握り、握手した。不
思議とオレ達は笑顔になる。

「じゃ、ツバメさんはもう部屋に戻るね。シャルロット、一夏く
んに変な事されないようにね」

「うえ！？…一夏ってやっぱりそう言うことするのかな？」

「まあ一夏くんに限ってそんな事はしないと思うけど……何せ、朴念仁ならぬ朴念神だからね」

「ボクネンジン？　どう言う意味？」

「乙女の純情が解らなくて馬に蹴られて死ぬような人」

「ああなるほど」

あ、それは解るんだ。って、これって余計なフラグ建てた？　…まあ、いいか

「じゃ、おやすみ」

「うん、おやすみ」

こうしてオレは一夏とシャルロットの部屋から出て、自分の部屋へと戻って来た。そしてベッドに倒れ込むようにして悩む。

一夏の提案は一時凌ぎにすぎない。根本的な所を解決しなければシャルロットは学園を卒業と同時に逮捕なんてことになってしまうのだ。そしたらシャルロットに未来なんかは無いし、一夏やその友達が悲しむかもしれない。

「しょうがない…オレも一肌脱ぎますか…」

オレは自分の携帯を取り出して、とある場所へと電話を掛けることにした。

第十六話 強さ

『学年別トーナメントの優勝者は織斑一夏と交際できる』

月曜日。八雲ツバメはこんな噂を教室で聞いて呆れていた。

「（エライことになっているな……）」

そんな事を思いながら自分の席からチラリと箒の方に視線を移す。表面上は平静を装っている。だが、内心はかなり焦っているのだろつ。微妙に落ち着きが無かったのだ。

「（箒からそんな事聞いてたけど…まさかそれがこんな風に広まっているとはな…）」

この噂は確認しただけでも学園中に広まっている。先程も二年生がこの教室にやって来て、「学年別で優勝しても有効なの？」とか表彰式で発表が可能なのか？」とか質問しに来ている程だ。

「本当だってば！ この噂、学園中で持ち切りなのよ？ 月末の学年別トーナメントで優勝したら織斑君と交際でき」

「俺がどうしたって？」

「……きゃああつ！？」

そしてそんな噂をしている女子の輪にご本人登場。
ってか、ちゃっかりセシリアと鈴の奴がその輪に交じってる。

「で？ 何の話だ？ 俺の名前が出てたみたいけど」

「う、うん？ そうだったけ？」

「さ、さあ、どうだったかしら？」

セシリアと鈴は一夏の目を見ずに話を逸らそうとしている。そしてお互い自分のクラスや席にサッサと戻り、話をうやむやにした。

「なあ？ ツバメ、アイツ等どうしたんだ？」

「…さあ？」

「（な、なぜこうなった……）」

一時間目が始まり、平静を装いながら篠ノ之箒は内心焦っていた。

「（あの話は私と一夏だけの話だろうっ！！）」

焦っていた理由は例の噂についてである。あの時の約束がこのような形になるとは本人も思っていなかったのだろう。しかも、これが学園中に広まっているとなれば余計に厄介なことになったと頭を抱える。

「（いや！ 私が優勝すれば問題は無いのだ！）」

それに自分は昔とは違う。あの頃のような憂さ晴らしで暴力に似た強さでは無く、一夏には本当の私の強さを知って貰いたい。だから、この学園別トーナメントで優勝出来れば私は本当の私になれる気がする。

「（今度こそ私は強さを身誤る事無く勝つことが出来るのだろうか？）」

しかし、若干の不安はある。だが、これを成し遂げれば自信は付く。相手にも己にも勝つことが出来る強さが欲しい。

いつしか箒の頭の中では一夏との約束よりも己の何たるべきかで意識が一杯になっていた。

その際、織斑先生に質問され、答えられず、出席簿アタックを喰らったのは言うまでも無い。

「一夏、今日も放課後特訓するよね？」

「ああ、もちろんだ。今日使えるのは、ええと」

「第三アリーナだ」

「ってか、学年別トーナメントに向けてしばらく一年は第三アリーナしか使えないんだよね？」

「「わぁっ！」」

うおっ！ こっちがビックリした。いきなりオレと箒で声を掛け
たぐらいでそんなに驚く事ないだろうに。

「……そんなに驚く程のことが。失礼だぞ」

「お、おう。すまん。ってか。箒達も第三アリーナに行くのか？」

「うむ。学年別トーナメントに向けて私達も実戦的な特訓をしよう
と思ってな」

「そうか、俺も負けてられないな！」

「……………」

箒の意気込みを聞いて一夏も一緒に意気込む。だが、そんな一夏
を見た箒はちよつと複雑そうな顔をしていた。

「ねえ？ 箒。一夏くんって本当にあの約束を承諾したの？」

一夏達に聞こえないように小声でオレは箒に話しかける。

「そ、そのはずだ。学園中に広まっている方は知らんが、私との約
束はさすがに覚えているはずだ」

「でも、その割にはトーナメントに向けて意気込んでるよ？」

「うう……………」

そして、二人でチラリと一夏の方に視線を向ける。一夏はシャルロットとどのような特訓をしようかと話していた。明らかに嫌な予感しかないのは気のせいだろうか？

「ねえ？ 思ってたんだけど……万が一、一夏くんがトーナメントで優勝したら約束はどうなるの？」

「……考えていない」

「はあ……そんな事だろうと思った」

「……すまん。あの時はこの約束をすることで頭が一杯で」

「いいよ。恋する親友を応援することがツバメさんの役目ですから」

「…ツバメ」

「とりあえず、特訓がんばろ！ ね？」

「ああ！」

ドゴンッ！……

「「「「「！？」」「」「」

いきなりの事だった。

オレと箒が意気込んでいると第三アリーナ方から物凄い轟音が響

いて来たのだ。オレ達は何事かと思い、観客席に向かって走り出す。そして、目の前の光景に驚愕する。

「セシリア！ 鈴！」

グランド中央。爆煙の裂け目から二人の姿を見た一夏がそう叫んだ。そして、もう一つ、爆煙の中から姿を現す影がいた。

「ラウラ」

姿を現したのは漆黒のISを駆るラウラであった。ドイツの第三世代型IS。ドイツは現在第三世代型ISの量産の目途が付いていない。実質あのISはその量産に向けての試作機なのだろう。そんなISがグランドから上がる爆煙の中から姿を現したのである。

どうやら、三人は二体一の模擬戦をしているのだが、圧倒的有利なはずの鈴達がラウラ一人に押されていた。

「このオ！」

負傷しながらも鈴は甲龍の両肩にある龍砲を放とうとするがラウラは平然としており、その射線から回避しようとしなない。

「無駄だ。このシュヴァルツェア・レーゲンの停止結界の前ではな」

「くっ！ まさかこうまで相性が悪いなんて…！」

ラウラは右手を鈴に向けて付き出し、何かのバリアーを張る。すると、鈴の甲龍はピクリとも動かず、放とうとしていた龍砲にチャージしていた砲弾はそのままチャージを止めてしまった。

「（A I Cか…また、厄介な物を）」

A I C。

正式名所、アクティブ・イナードシャル・キャンセラー。

I Sの浮遊、加速を停止させてしまおうシステム。アレを前にした
I Sは文字通り見動きが取れない状態となってしまう。

「まさか、ドイツで完成させていたなんて……いや、それよりも
……）」

ゾクッ！

そして、あのレーゲンを目にしてから背筋に悪寒が走る。

「（あの時と同じだ）」

一夏と鈴のクラス代表戦に感じたこの悪寒。それがあのI Sから
感じられる。

「おおおおおおっ！」

不意にオレのすぐ横から叫び声が聞こえた。振り向くとそこには
白式を展開した一夏が『零落白夜^{れいらくびやく}』でアリーナのシールドを切り裂
いていたのだ。

ありとあらゆるエネルギーを消滅させる『零落白夜』によって切
り裂かれたバリアー。一夏はその切り裂かれた間から飛び出し、イ
グニッション・ブーストで一気にラウラの元へと接近する。

「その手を離せえ……！」

「ふん……。感情的で直線的、絵に描いたような愚図だな」

「なら、これでどう？」「

「なにっ！？ ガアッ！！」

ラウラが突っ込んで来る一夏に向けてA I Cを発動させようとした瞬間。オレは天燕を展開し、ラウラの背後に回っていた。さすがのラウラもオレの存在には気付かず、オレの放った拳をもろに受けて吹き飛ぶ。

「……さすが、博士ですね。あの愚図を皿にして接近するとは」

「困にしたつもりは無いけど……結果的にそうなるのかな？」

「やはり、貴方とあの人はここに居るべきではない。どうです？ 私と一緒にドイツに来ませんか？」

「嬉しいお誘いありがとう。でも、アタシはここでしなければならぬ事があるからお断り」

ラウラの誘いを丁寧に断ったつもりでいたが、ラウラはその言葉を聞いて表情を歪めた。そして、己の怒りを声に乗せてオレ達に言う。

「……何故なんだ。貴方もあの人も……何故私を拒絶する！……
……そうか、そいつがいるからだな。そいつが消えれば！……この世に
存在しなければ！！」

「!？」

ラウラはレーゲンの大型レールカノンをオレではない別の何かに向ける。一瞬なんだと思ったが天燕のハイパーセンサーが何を狙っているのかを教えてくれた。

オレの背後に居るのは一夏だ。

一夏はラウラにやられたセシリアと鈴の無事を確かめている。だからこちらの事を気にしていないのか自分が狙われていることに気付いていない様子。

レーゲンの攻撃力はセシリアと鈴のISを見れば一目瞭然だ。二人共ISの絶対防御で守られているとは言え、機体はどこどころ損傷し、ISアーマーの一部は消滅してしまっている。

一夏はともかく近くに居る二人がそんな攻撃を喰らえばひとまわりも無い。最悪死ぬかもしれない。

「バカヤロオオオオ!!!」

オレはラウラが大型レールカノンを発射するより速く動いた。狙うはレーゲンの大型レールカノンの砲身。

「甘い!」

しかし、それが狙いだったのかラウラはオレに向けてPICを発動させる。

「そっちの方が甘いよ」

だが、オレはラウラが発動させたAICには捕まらない。

天燕は高機動特化のISだ。

そのスピードはどのISよりも速く、追える物はまずないだろう。だから、その速度を生かしてP I Cが発動する前にその範囲から逃げ出す事が出来る。

ガンッ！！

そして、オレはレーゲンの大型レールカノンの砲身を蹴り上げた。ギリギリのタイミングだったのかレールカノンの弾は蹴り上げたと同時にドンツと轟音を響かせ空に向かって砲弾が発射された。発射された砲弾はアリーナ天井にあるシールドエネルギーに当たり、爆発する。

「くっ！ 邪魔をするな！！」

「うわっ」

ラウラは両手首に装着した袖のようなパーツから超高熱のプラズマ刃を展開してオレに襲いかかってくる。

「フン！ 先程の威勢はどうした！」

「くっ！ このっ」

「あのイグニッション・ブーストで私から一気に距離を取る事も出来るだろう。大方、エネルギーがもう底について使えん状態みたいだな！」

まったくもってその通りです。もうエネルギーが73しか残ってません。

ラウラはオレを逃がさないと前進しながら両手のプラズマ手刀を振り回し、オレは後退しながらそれを避けている。

「何故だ！？ 貴方は私と同じ側の人間ではないのか！ 力を求め、力で立ち塞がる物を打ち砕き、前に進んで来たのではないのか！？」

「アタシはそんなつもりで力を求めたつもりは無い！」

「なら、貴方はなんのために力を求めた！？」

「アタシは」

ガキンツ！

「……やれやれ、これだからガキの相手は疲れる」

「！？」

突然オレ達の間に入って来た影がラウラのプラズマ手刀を手にしたIS用接近ブレードで受け止めた。

一瞬何事かと思ったがその影の正体を見てオレは驚愕する。

「織斑先生！？」

そこに居たのは我らの担任。織斑千冬だった。だが、驚く所はそこでは無い。織斑先生はいつもと変わらないスーツ姿で170センチはある長大な武器を生身で振りまわしていたのだ。

この人は本当に人間か？ とすら思える。

「八雲、今失礼な事を考えなかった？」

「い、いえ！ 滅相もございません！」

す、鋭すぎる……。怖え。

「模擬戦をやるのは構わん。が、アリーナのバリアーまで破壊する事態にならなくては教師として黙認しかねる。この戦いの決着は学年別トーナメントでつけてもらおうか」

「教官がそう仰るなら」

「異論はありません」

オレ達は素直に頷いて、織斑先生の提案に賛同する。そして、お互いISの装着状態を解除した。

「では、学年別トーナメントまで私闘の一切を禁止する。解散！」

パン！ っと織斑先生が手を叩く。それはまるで銃声の様に鋭くアリーナに響いた。

第三アリーナの件から一時間が経過した頃。オレはセシリアと鈴の見舞いを済ませいつものラボへ向かうとしていた。

ドドドドドドッ！

「ん？ わっ！？」

廊下を歩いていると突然のイノシシの群れ：もとい、大量の女子の大群が土煙を上げて正面から突っ込んで来る。しかし、皆さんの目は飢えた獣のように鋭く、なんかもう怖い。なので、オレは咄嗟に壁に身体を張りつけてその集団をかわすのだった。

「…な、なんだ？」

彼女達が向かった方向は確か保健室。皆で怪我した訳でもないし、まさかセシリアと鈴のお見舞い？

だが、その答えはオレの足元に落ちた一枚の紙が答えてくれた。

「……今月開催される学年別トーナメントでは、より実戦的な模擬戦闘を行うため、二人組での参加を必須とする。なお、ペアが出来なかった者は抽選により選ばれた生徒同士で組むものとする……なるほど、皆さん一夏とシャルロットがお目当てね」

だが、そうなるとオレもパートナーを探さなくてはならない。まあ、幕に言えば一緒に組んでくれるから後で聞いてみる事にしよう。

「……………」

「あ、ラウラ」

手にした紙を見ながらオレは廊下を歩いていると正面からラウラの姿が見えた。ラウラもオレの存在に気付き、規則正しい足取りをピタッと止める。

「……………」

「……………」

妙に気まずい……。事が事だからなんて話しかけていいか解らん。

「……貴方だけは私のことを解ってくれと思っていました」

「え？」

そして、そんな気まずい空気の中先に開いたのはラウラだった。

「私は貴方の書いた戦術理論に感銘を受け、己の力を身に付けてきたつもりです。でも、今日貴方と手合わせして……解らなくなりました」

「……………」

「貴方は何のために力を得たのですか？」

先程とは違う表情をするラウラ。感情的ではあるが、先程の怒りは無い。今あるのは迷いだ。彼女の表情がそう物語っている。

「ねえ？ ラウラ？」

「……………はい」

「アタシとコレに出ない？」

そう言つてオレはついさつき拾つた紙をラウラに付き出す。

「学年別トーナメント…申込書？」

「アタシの強さを知りたいなら、アタシの側で戦う所を見ててよ。もしかしたら、その疑問の答えが見つかるんじゃないのかな？」

「貴方の、強さですか？」

「そう！」

「……………」

ラウラは手渡された申し込み用紙に再び視線を降ろす。そして、ポケットに入れていたペンを取り出し、申し込み用紙に何かを書き込んだ。

「いいでしょう。貴方の近くでその強さを見極めさせてもらいます」

そして、申し込み用紙を突き返し、オレはそれを受け取る。用紙を見れば名前の欄にラウラ・ボーデヴィツヒと書かれていた。

「じゃ、よろしくね！」

「はい」

第十七話 学年別トーナメント開催（前書き）

気付いたらPVアクセス10万を超えてました！

ここまで来れたのも皆さんのおかげです。

誤字・脱字・駄文な所もありますが・・・これからもうろしく願
いいたします！

第十七話 学年別トーナメント開催

六月、最終週に入り、IS学園では月曜日から学年別トーナメントが行われる。生徒は第一回戦が行われるまで、雑務や会場の整理、来賓の誘導を行っていた。

それからやつと解放されると急いで更衣室でISスーツに着替える。俺、織斑一夏とシャルルは男子用に用意された更衣室で着替えている。

ちなみに今年は例年と違い、ペアでの大会参加となっている。だから俺はシャルルとペアを組み参加することになっている。

そして準備のため色々最終チェックをしていた。

「一年の部、Aブロック一回戦一組目なんて運がいいよな」

「え？ どうして？」

「待ち時間に色々考えなくても済むだろ。こういうのは勢いが肝心だ。出たところ勝負、思い切りのよさで行きたいだろ」

「ふふつ、そうかもね。僕だったら一番最初に手の内を晒すことになるから、ちよつと考えがマイナスに入ってたかも」

「ああ、そうかもな。……お、モニターに対戦表が発表されるみたいだ」

「あ、ホントだ」

更衣室のモニターが突然映り出し、今大会のやぐらがズラーっと出て来る。そして、俺達是对戦相手の名前を見て驚いた。

「「え？」」

第一試合、織斑、デュノアVS八雲、ボーデヴィッヒ

大観衆が見守る中、オレ達四人はグラウンド中央で対峙していた。

「……ツバメ。どう言うことだ？ 抽選でそいつと組んでいる訳じゃないよな？」

「……………」

うわぁ…マジギレですかぁ。普段怒らない奴ほど怖いって言うけど、一夏はそう言うタイプだな。

一夏はオレを睨むようにして質問をして来る。が、オレは何も答えない。

「やめなよ、一夏。……ツバメ、なんでボーデヴィッヒさんと組んでいるのかには理由があるんだよね？」

「……そうだよ」

「なら、聞かない。でも、勝負となったら手加減はしないよ」

そして、そんな一夏をなだめるようにシャルルがオレ達の間に割って入って来る。

「こっちもそのつもり。何せこちらのラウラちゃんが張り切ってますから」

「ふん。待つ手間が省けたというものだ。って、ちゃん付けはやめてください!!」

「ええ〜……可愛いのに〜」

「……………」

おや？ 二人共なにそんなに鳩が豆鉄砲でも喰らったようにして？ これからオレ達戦うんだから緊張感持とうぜ？

そんなこんなで試合開始のブザーが鳴り始めた。

「叩きのめす!!」

開戦と同時に俺は雪片式型を構えて、イグニッション・ブーストを使ってラウラの元まで飛び出す。

「おおおっ!!」

「ふん……………」

しかし、ラウラはこれを読んでいたと言わんばかりの表情をして右手を突き出した。

A I C。慣性停止能力。こいつに捕まれば見動き一つ取れなくなる。

だが、俺にはその対策方法がない。なので……。

「くっ……！」

「開戦直後の先制攻撃。わかりやすいな」

アッサリと書いていいぐらいに捕まってしまふ。ラウラに向けて振り下ろした雪片は動きを止めてしまった。いや、正確には白式の腕の動きを止められた。そして次第に胴、足と動けなくなる。

「……そりゃどうも。以心伝心で何よりだ」

「ならば次に私がなにをするかわかるだろ？」

ガキンツ！ とラウラのIS。シュヴァルツェア・レーゲンの右肩に付いている大型レーザーカノンの砲身が俺に向けられた。そして、白式のハイパーセンサーが敵からのロックオン警告を知らせてくれる。

「焦るなよ。なににも一対一じゃないんだから な？」

「うん。させないよ！」

そこへシャルルが俺の頭上から飛び出して来る。シャルルは手に

している六一口径アサルトカノン『ガルド』による爆^{バースト}破弾をラウラに喰らわせる。

「くっ！」

シャルルの攻撃によりラウラの砲撃は空を切る。さすがに不利と思ったのかラウラは俺を捕えていたA I Cを解除して急後退する。

「逃がさない！」

シャルルは即座に銃身を正面に突き出した突撃体勢へ移り、左手にアサルトライフルを呼び出した。

これこそがシャルルの得意とする技能『^{ラビット・スイッチ}高速切替』。事前呼び出しを必要としない、戦闘と平行して行えるリアルタイムの武装呼び出し。シャルルの器用さと瞬時の判断力があってこそその技能。

「（そう言えばツバメはどうしたんだ？）」

シャルルがラウラを追撃している間。俺はもう一人の敵に視線を向ける。

「（いた。って、何してるんだ？）」

アリーナの壁際。そこにツバメの姿があった。ハイパーセンサーのカメラでズームして見ると何やら空中に浮いたモニターを操作している。

マジで何やってるんだ？

「一夏っ！」

「え？ うおっ！」

余所見をしていると、ラウラはワイヤーブレードを飛ばし俺を攻撃して来る。何とかシャルルの掛け声で反応し、雪片式型で弾く事ができた。

「お前達の相手は私だけで十分だ！！！」

そして、ラウラのプラズマ手刀が俺に襲いかかってくる。連続で放たれる斬撃と突撃を混ぜた正確無比な攻撃は俺を圧倒し、押され気味にされてしまう。しかも、ちゃっかりシャルルに向けてワイヤーブレードを射出して牽制もして来る。

こいつもなかなか器用だ。俺を相手にしながらちゃんとシャルルの動きを見ている。

「（しかし、なんでツバメは戦いに参戦しないんだ？ もしかして、ラウラ一人で俺達を倒そうとしている？ だったらっ！！）」

強気で攻める俺。目の前にいる相手に集中して雪片式型を構え直し、ラウラの猛攻を受け止め、こちらも斬撃を放つ。

「ぐっ！」

さすがのラウラもこの連撃に押され始めた。そして、俺の動きを止めるためにAICを発動。再度、ピタリと俺の動きは止まってしまいがシャルルのサポートによりそれも長く続かない。

「いける！」

アリーナに設置されている観察室。そこでモニターに映し出される戦闘映像を眺めている人達がいた。

「ふぁー、すごいですねえ。二週間ちよつとの特訓であそこまでの連携が取れるなんて」

戦闘映像を見てそう感心するのは一夏達のクラス副担任。山田真耶である。

「やっぱり織斑君ってすごいです。才能ありますよね？」

「ふん。あれはデュノアが合わせてくれているから成り立つんだ。あいつ自体はたいして連携の役には立っていない」

そして、そんな辛口評価をするのは私。織斑千冬だ。

「そうだとしても、他人がそこまで合わせてくれる織斑君自身がすごいじゃないですか。魅力のない人間には誰も力を貸してくれないものですよ」

「まあ……そうかもしれない」

山田先生の言う通り、一夏には人を惹きつけるなにかを持っている。カリスマとも言えはいいのだろうか？ ふん、生意気なハナタレ坊主が成長したものだ。

「それにしても八雲さんは何をしているんでしょう？　アリーナの壁際に行っただけり動きません」

「さあな。こればかりは私もわからん」

そして、一夏と似た魅力を持っているこの八雲ツバメ。あのラウラと一緒にペア申請をして来た時には驚いた。一体なにをしたのだと聞きたくなったがなんとなく聞くのを止めた。聞いても答えははぐらかされそうになると思ったからだ。

ワアアアッ！

そんな事を思い出していると会場が一気に沸いた。その歓声がこの観察室に直に響くぐらいに。

「あ！　織斑君、零落白夜を出しました！　一気に勝負を掛けるつもりでしょうか」

「さて、そう上手くいくかな？」

「またまた、そんな気にしてないような態度をしなくても」

「山田先生、今度久しぶりに武術組み手をしようか。せっかくだ、十本ほどやろう」

「いつ、いえいえっ！　私はそのっ、ええとっ、生徒達の訓練機を見ないといけませんからっ！」

慌てて首を振り、手を振ると物凄い勢いで組み手を断る山田先生。

「私は身内をネタでいじられるのが嫌いだ。そろそろ覚えるように」

「は、はい…。すみません…」

シユンと落ち込む山田先生を見て少しやり過ぎたかと反省する。
だから、ぽんと軽く頭を撫でることにした。

「さて、試合の続きだ。どう転がるか見物だぞ」

「は、はい！」

「これで決める！」

零落白夜を発動させた俺はラウラへと直進する。

「触れれば一撃でシールドエネルギーを消し去ると聞いているが…
…それなら当たらなければいい」

ラウラのA I Cによる拘束攻撃が連続で襲いかかろうとしていた。
俺はそれらの目に見えない攻撃を急停止、転身、急加速で何とか
かわす。

「ちよろちよると目障りな……！」

AICと一緒にワイヤーブレードも攻撃に加わり、ラウラの攻撃は熾烈を極める。

でも、こっちはそっちと違って一人で戦っている訳じゃないんだぜ？

「一夏っ！ 前方二時の方向に突破！」

「わかった！」

射撃武器でラウラを牽制しながら、俺への防御も抜かりがない。つくづく味方でよかったと思う。もし敵だったら背筋が凍る。

「ちっ……小癪な！」

ワイヤーブレードをぐり抜け、俺はラウラを射程圏内へと納めた。

「無駄だ。貴様の攻撃は読んでいる」

「普通に斬りかければ、な。 それなら！」

「！？」

斬撃が読まれるなら、突撃で攻める。俺は今まで足下へと向けていた切っ先を起こして、体を前へ持って来る。これなら、単純に腕の軌道を捉えにくいはず。それに線で捉えるより点で捉える方がはるかに難しい。

「無駄なことを！」

ビシッ！ と前進の動きが凍り付く。A I Cの網が完全に俺の体を固定した。

「腕にこだわる必要はない。ようはお前の動きを止められれば」

「……………ああ、なんだ。忘れていたのか？ それとも知らないのか？俺達は ふたり組みなんだぜ？」

「！？」

慌ててラウラが視線を動かすが、もう遅い。零距离まで接近したシャルルが、素早くショットガンの六連射を叩き込む。

次の瞬間。ラウラの大型レールカノンが轟音を立て、爆散した。

「一夏っ！」

「おう！」

ラウラのA I Cは対象物に意識を集中しなければ効果を発揮しない。だから、今みたいにコンビネーションで攻めれば大した脅威にはならないのだ。

つくづく、この大会がふたり組でよかったと思う。

「……！」

ラウラが距離を取ろうと後退するが、俺は再度、雪片式型を構え直し、突撃する。

今度こそ避けきれないタイミング！

絶対必殺を確信した一撃だった。だった、のだが

キュウウウン……………

「なっ！？ここにきてエネルギー切れかよ！」

思った以上にラウラの攻撃でもらったダメージが大きかったらしい。零落白夜のエネルギー刃は音と共に小さくしぼみ、そしてそのまま消えてしまう。

「残念だったな！」

瞬間。ラウラの声が近く感じたと思った時。ラウラは俺の懷に飛び込み、両手にプラズマ手刀が展開されていた。

「限界までシールドエネルギーを消耗してしまっではもう戦えまい！あと一撃でも入れれば私の勝ちだ！」

その通りだ。あと一撃でも攻撃を喰らえば俺のシールドエネルギーはゼロになってしまい負けが決まる。だから俺はラウラが放つプラズマ手刀の攻撃を必死に弾く。

「やらせないっ！」

「邪魔だ！」

ラウラは俺への攻撃を緩めず、援護しに来たシャルルに向けてワイヤーブレードを射出。プラズマ手刀とワイヤーブレードの攻撃はどちらも精度が高さとスピードを伴った攻撃が俺達を襲う。改めてコイツの技量のすごさを感じさせられた。

「うあっ！」

「シャルル！ くっ」

「次は貴様だ！ 墜ちろっ！」

シャルルがダメージを受けたことに気を取られていると強い熱源のような感触と電流が走ったかのような痺れが俺を襲う。

「は……ははっ！ 私の勝ちだ！ 見ろ、ツバメ！ 私は一人でも強いんだ！」

「まだ終わってないよ」

「なっ……！ イグニッション・ブーストだと！？」

勝利を確信し、高らかに勝利宣言しているラウラに超高速で突撃する物体があった。

イグニッション・ブーストを使用したシャルルがラウラとの距離を一気に詰めたのだった。

「こんなデータはなかったぞ！」

「今始めて使ったからね」

「な、なに……？ まさか、この戦いで覚えたというのか！？ だが、私の停止結界の前では無力！」

ドンッ！

ラウラがA I Cを発動させようとすると渴いた銃声が聞こえた。そして、銃声と同時にラウラの体は衝撃に襲われる。

ラウラが視線を巡らせると俺と目があった。

シャルルの残弾アリのアサルトライフルを構えた俺とだ。

「これならA I Cは使えまい！」

「こ、のっ……死に損ないがあっ！」

だがラウラは冷静だった。俺の射撃の腕はたかが知れていると判断し、迫りくるシャルルに向けてA I Cを発動しようとしたのだ。

「でも、間合いに入る事は出来た」

「それがどうした！ 第二世代型の攻撃力では、このシュヴァルツエア・レーゲンを墜とすことなど」

そこまで言っつて、ラウラはハッとする。

そう、単純な攻撃力だけなら第二世代型最強と謳われた装備があることに気付いたのだ。

そしてそれは、ずっとシャルルが装備していた盾の中に隠されていた事も。

「この距離なら、外さない」

盾の装甲が弾け飛び、中からリボルバーと杭が融合した装備が露出する。

六九口径パイルバンカー『灰色の鱗殻』グレー・スケール。通称

「盾殺し（シールド・ピアス）……………！」

初めて、ラウラの表情に焦りが見えた。それは、文字通り必死の形相。

「「おおおおっ！」」

両者の声が重なる。シャルルは左手拳をきつく握りしめ、叩き込むように突き出す。それは俺が行ったのと同じ、点の突撃。

しかもイグニッション・ブーストのおまけ付きだ。全身停止は間に合わない。ピンポイントでパイルバンカーを止めなければ、直撃だ。

「みんな、アタシのこと忘れてない？」

シャルルの盾殺しがラウラのボディに決まろうとした瞬間だった。

「うああっ!!」

突然、何かがシャルルの横から突撃して来た。シャルルの体はその衝撃を殺せず、横へ吹き飛ばされてしまう。

「な、なんだ!？」

俺はいつたい何がシャルルに突撃して来たのかを確かめた。そして、そこにある物体を見て驚愕する。

「剣が、浮いている?」

そう、そこにあつたのは二本の剣。ただその剣はISが持つ接近型ブレードとは違い、俺の雪片式型のようなエネルギー刃を発している。

そして、驚くことにその剣は空中にフヨフヨと浮いていたのだ。しかも、光る粒子を撒き散らしながら。俺はその粒子を見てこれが誰の物かをすぐに理解した。

「な、何をしている!？」

「いや、約束の十分過ぎたし、ラウラちゃんピンチそうだったので」

「ちゃん付けするな！」

俺がシャルルを襲った剣を見ていると、そんな会話が聞こえて来る。会話のした方を向くとラウラの他にもう一人いた。

先程まで戦いに参戦していなかった八雲ツバメがそこにいたのだ。

「ツ、ツバメ？」

「じゃ、ここからはアタシも参戦ってことでよろしく！」

第十七話 学年別トーナメント開催（後書き）

感想お待ちしております。

第十八話 V a l k y r i e T r a s e S y s t e m U n b o o t (前書

平日になると更新が遅れてしまいが…何とか書けた!!

でも、意味不明かも…

ぶっちゃけオリ展開に仕上がってます。

第十八話 Valkyrie Trace System Unboot

「今から敬語を禁止します!!」

「はあ？」

突然のツバメの宣言にラウラ・ボーデヴィツヒは首を傾げてしま
う。

「コンビを組む以上！ アタシ達はより親密な友好関係を築かなければなりません！」

宣言した本人が早速敬語を使って力説しているが…そこは触れな
いでおこう。

「確かに…お互いを知ることにより良いコンビネーションが可能に
なります」

「こらあ！ 敬語は禁止って言うているでしょ!!」

「あ、すみません」

「注意した途端にまた敬語！？ なかなか心を開いてくれないラウ
ラちゃんにツバメさんは悲しい想いで胸が一杯だよ……」

ヨヨヨとハンカチを取り出して出てもない涙を拭き、嘔泣きを
するツバメ。そこまでする必要性はないと思うのだが……ん？ そ
れよりこの人は、私の事を今なんと呼んだ？

「ところでラウラちゃん」

「ラ、ラウラちゃん!？」

「親しみを込めてアタシはこれからそう呼ぶことにしたの」

「そんな親しみはいりません!! 今まで通りに呼び捨てで構いませんからやめてください!」

柄でも無い呼び方に私は戸惑ってしまう。いや、でも……悪くはイヤイヤ、何を考えているのだ私は!! そんなのダメに決まっている! 何より恥ずかしい!

「なら、ラウラちゃんもアタシに対して親しみを込めてよ。でないと、やめない!」

「あう……」

「うおッ……戸惑う表情は普段のクールぶりから想像出来ない物を持っている。やるね! ラウラちゃん!」

「わ、わかりまし……わかったからその呼び方はやめろ」

「おお! よく出来ました! だが、もう一息だよ! 今度は博士とかじゃなくて、普通にアタシの名前を呼んでみよう」

今、思う。この人はこんな人だったか? なんか、今まで持っていたイメージがどんどん崩れて行く。だが、このまま放置してしまえば一生この人は私のことをちゃん付けで呼ぶだろう。それは何としても阻止しなければならぬ。と言うか嫌だ!

「ツ、ツバメ……」

部下でも無い者呼び捨てで呼ぶと言つのは若干恥ずかった。

「何？ ラウラちゃん？」

あれ？ ちゃん付けのまま？

「なっ！ 名前で呼んだのだからちゃん付けをやめろ！」

「ええ、結構可愛いと思うのに」

「か、可愛い！ な、何を言っているんだ！ そんな訳無かるう！
！」

可愛いなど初めて言われた。この私が？ 部下から「カッコいい」とか「凛々しい」とかの褒め言葉は言われた事はあるが可愛いなど言われた事は無い。

……イカン、何故か顔が熱くなってくる。

「いやいや、実際可愛いと思うよ？ 肌白くて、髪の毛も手入れしたらサラサラになるし、顔だって悪い方じゃないし、一部の異性には受けが良いと思うよ！ ラウラちゃんマジ天使って！」

「なっ なっ なっ なっ ！！」

ツバメが訳のわからない事を言っただけ私の思考は完全にショートする。特に最期の一言は何だ？ 頭から煙でも出てるんじゃないかと

思った。それほど顔が熱いのだ。だが、そんなショートした頭でも私はとある答えを導き出しすることができた。

「わ、私は可愛くなんかなあああああああああああああああああああああ
ああああい！！！！！」

敵からの逃亡。まともな思考が出来なくなった私はそんな事を叫びながらツバメから逃げ出していたのだ。

「……やっべ、可愛い」

ボソリとそう呟くツバメ。もちろん、敵前逃亡した私の耳にはその言葉は聞こえなかった。

その後もツバメは私の事をちゃん付けで呼び、私を困らせてくるのだった。

「はあああっ！」

「くっ！」

オレは両手にしたエネルギー刃を発した剣を横一閃に振り、シャルルに斬りかかる。シャルルはそれを近接用ブレード『ブレット・

スライサー』でいなし、後方に飛んだ。

「このっ！」

ドンッ！ と高速切替でブレードから両手に連装ショットガンを展開し、オレに向けて散弾の雨を降らす。

「遅いよ！」

だが、天燕の移動速度はどのISより速い。だから、散弾が広がり切る前にその回避。そして、手にした二本の剣をシャルルに向けて投げつける。

「！？ ブレードを投げた！？ わっ！！」

あまりにも意外性のある行動だったのかシャルルの反応は微妙に遅れた。ギンっとリヴァイヴ・カスタムの装甲に剣がかすれる音が聞こえ、少しダメージを受けてしまったのだ。

「まだまだ！！」

「シャルル！ 後ろだ！」

「！？」

オレがそう宣言すると投げ放った剣が軌道を変え、再びシャルルに襲い掛る。一夏の声に反応できたおかげか、シャルルは緊急回避で体を捻り、剣をかわす事ができた。が、それでも剣は軌道を変え何度もシャルルに襲い掛るのだ。

「セシリアのブルー・ティアーズみたいな物だね……でも、それなら!!」

シャルルは襲い掛る剣をかわしながら冷静に分析。そして、その弱点を見抜きイグニッション・ブーストで一気にオレとの距離を詰めて来た。盾殺し（シールド・ピアース）を構えながら。

「操縦者はビットの動きに集中しなくちゃいけないから他の行動に制限が掛る。一気に懷に潜り込めばこっちに勝機だってあるんだよ!!」

「……それはどうか？」

「え？」

その考え方は正しい。でも、それは従来のビットならではの弱点なんだよ。生憎、この天燕は特別製だ。

シャルルが完全に盾殺しを放とうとした瞬間。オレは天燕の可変式ウィングを広げ、蒼燕の集中砲火をシャルルに喰らわせる。そして、その背後から剣型のビットがシャルルを切り刻んだ。

「ぐうう……なん、で？」

む。今のを喰らってまだ動けるか。意外とシャルルのISは防御力があるんだな。

「このセイバービットは特別製なの。普通のビットだと思つと今みたいに痛い目みるよ？」

セイバービット『羽斬^{はねきり}』。

それがこの剣の名称。小型のエルスドライブを剣自体に組み込む自立飛行を可能とさせ、手に持ち接近戦闘も可能なビット。

本来シャルルの言う通り、ビット系の武器は操縦者が意識を集中させて操る。なので、他の行動が疎かになる。そう言った面をどうやってカバーしようか悩んだオレはこう考えた。

オレが制御しなければいいじゃん。

そこでコイツが登場だ。

《いっけー！ そこだー！ ビューン！！》

「（うまく操ってくれるのはいいが、もう少し静かにしろよ）」

《だってコレおもしろいんだもん！》

新しいおもちゃを手にしたかのように天燕は羽斬を縦横無尽に操作し、シャルルと一夏に攻撃している。

つまり、セイバービットのコントロールはオレでは無く、この天燕自身にさせているのだ。

そうすることでオレは他の事に集中出来るって寸法。

うん、我ながらいい相棒を持った。

《えへへへ》

「さあ！ どんどん行くよー！」

《はーい！》

「（アレがツバメの強さ……………」

ラウラ・ボーデヴィツヒは目の前で繰り広げられる戦いを目にして呆然とする。

ツバメは、今まで自分が苦勞して相手をしていた二人を圧倒的な力で押しているからだ。

「（なぜだ…ツバメと私の何が違う。ツバメだって強い力で二人を圧倒しているではないか…一体何が違うと言うのだ）」

「ラウラ！！」

「この！」

「！？」

瞬間だった。戦いの中で呆然としていた私を織斑一夏がデュノアのアサルトライフルで私を狙撃したのだ。

完全なる油断。軍人として戦場での油断は死に繋がる。だから、そう言った事の無いように色々訓練を重ねて来たつもりだった。しかし、理解不能な事態を前に私はその教えすら忘れてしまった。いた。

ドンツと渴いた銃声が聞こえた時には私は地面に倒れていた。

「なにやってるの!?!」

倒れた私を心配して、私の元へ近づくツバメ。いかにも心配していると言った表情をしていた。

何をそんなに慌てているのだコイツは? 私に構わないでサッサとアイツ等を倒せばいいだろ……。

ドドドドドドドドドドドドドドドドツ!!!!!!!!!!

「くっ!」

連続で発砲される銃声。ツバメは二人の猛攻から私を庇うようにしてエネルギーシールドを展開し、それを防いでいた。

「私に構うな! 見捨てろ! お前一人でも勝てるだろうがっ!」

「違うよ…アタシ一人で勝っても意味が無いの」

「勝つことに何が必要だと言っただ! 勝利に犠牲は付き物だ! 弱い私を犠牲にしろ!」

「アタシはそんな犠牲を出してまで勝ちたくない!」

「なっ!?!」

「誰もが笑っているハッピーエンドの方が言いに関まってる！ アタシはそんなハッピーエンドを迎えたくて！ 皆を守りたくて！ 力を手に入れた！ そこにはラウラも含まれてるんだ！」

何を言っているんだコイツは。そんな事不可能に決まっている。そんな物は偽善だ。

そんな偽善で強くなれるものか。

私が弱いから守られる？

私を守ってお前がやられたら意味が無いだろ？

何故だ？ 何故そんな事をする？

わからない。理解出来ない。

私は教官の教えで教官の強さに憧れた。

いつしか彼女のようになりたいと思った。

強くて、凛々しくて、堂々として、自信に満ち溢れていた。

私はその強さを目指して、最強の座に還り咲いたはずだ。

役立たずの烙印を押した奴らに私の取り戻した強さを見せ付け、見返した。

だが、ツバメのこの強さはなんだ？

教官とは違う強さでもあるというのか？

何が違う？ わからない。理解できない。

私が弱いから理解出来ないのか？ 今より強くなれば理解できるのか？

もっと強い力が欲しい。

ドクン

私がそう願うと心臓の鼓動が高鳴り、声が聞こえた。

気付けば私の意識は暗い闇の中にあった。

『 願うか ? 汝、自らの変革を望むか ? より強い
力を欲するか ? 』

「……………黙れ」

意外にも私の口から出たのは拒絶の言葉だった。

『……………何？』

「私は力を求めた。貴様が私のなんだかは知らない。貴様の答えに答えれば力が手に入るかもしれない」

この時、どうして私が力を拒んだかわからなかった。

なぜ？ こんな事を言ってしまったのだらうと頭の中で思う。

だが、思考とは別に言葉が勝手に出る。

「　　だがな、私はお前から力を求めない！！　自分で見つけ、理解しなければ意味が無いんだ！」

……そうか、私はどうすればいいのかわかっていたんだ。

「ツバメは自分を見て学べと言った！　だから私は彼女を見て、強さとは何かを学ぶ！　今ここで貴様から力を貰えばそれはその事を放棄することになる！　だから、私は貴様から力を受け取らない！　私は最後まで彼女を見続けるんだ！　それを！！　邪魔をするなあああああああ！！！」

叫んで喉が張り裂けそうなる。私はこんなに感情的な人間だっただろうか？　いや、私は彼女に変えられてしまったのかもしれないツバメと日々を過ごして、いつの間にか私は彼女に毒されてしまった。

彼女と過ごす日々が楽しいと思った。

それは、教官に指導してもらっていた日々と似ていた。あの時は自分が強くなっていると実感してそれが嬉しかった。

しかし、ツバメとの日々はそんな実感は無い。だが、それ以外は全て一緒だった。

楽しくて、楽しくてしょうがない日々。

そんな日々を過ごしていると自分の中にある何かが温かくなる物を感じるようになった。それが心地よくて、たまに強さよりもこの温かさが何かと疑問に思ったこともある。教官の名誉に泥を塗った織斑一夏に対しての憎しみもそこには無く。ただただ、温かい日々。

『……………後悔は無いのだな？』

「無い。貴様に力を貰わなくてもいつか自分の手で掴み取ってやる」

『……………意外とはやく見つかるかもな』

「何？」

意味深い言葉を残して、今まで聞こえていた声が聞こえなくなった。

そして、暗い闇から眩い光にへと変わっていく。

「ああ……………温かいな……………」

光に包まれて私はそう感じた。教官やツバメと共に過ごした日々に感じた気持ち。

「私は……………この気持ちを大切にしたいんだ……………どうすれば、この気持ちを無くさずに済む？」

答えは決まっている。

「この気持ちを守るために……強くなろう……」

そして、まずはこの気持ちをくれた人達を守るとしよう。

第十八話 Valkyrie Trase System Unboot (後書)

ラウラと一夏のフラグを潰してしまう展開……………。

ごめんなさい。あとあと、一夏さんにはフラグを建ていただきます。

第十九話 神様いたら何でもアリだよな？（前書き）

原作二巻がコレにて終了。

―修正―

様々な人に指摘を受け、四組クラス代表はモブと書いてしまいました。たがちゃんとしたキャラクターだったので、新しく出て来たオリキヤラの設定を変えました。

原作知識が疎く誠にすみません。この場を借りてお詫びいたします。

第十九話 神様いたら何でもアリだよな？

『本日をもって、学年別トーナメントの全てのプログラムを終了いたします。生徒の皆さんは各自、担当の場所にて整理を行ってください』

アリーナ内でそんなアナウンスが聞こえて来る。アナウンスが言った通り、今日で学年別トーナメントは終了した。

「すごかったね～。特に二年！ 生徒会長がダントツだったよねえ」

「三年もすごかったよ！ やっぱ、企業からのスカウトを受ける先輩達って感じてさあ」

「でも、一年は意外な人達が優勝したねえ～。でも、さすがって気もする」

「だよな」

女子更衣室ではそんな話題で持ち切りだった。そして、そんな彼女達が学年別トーナメントの結果が写し出されているモニターを見て騒いでいた。

学年別トーナメントが終了した日の夜。八雲ツバメは部屋である場所に電話を掛けていた。

『もしもし　珍しいね！ツンちゃんから電話くれるなんてえ！』

電話の向こうから聞こえるハイテンションの声にオレは短くため息だけ吐く。

『おゝやゝ？　元氣ない？　皆のアイドル束さんが相談に乗るよ！』

「いいです。それよりこないだ送ったシュヴァルツエア・レーゲンは見てくれました？」

『あゝあのドイツの専用機？　見たよ……。……で、ツンちゃんが言ってた通りVTシステムが積まれてたね』

VTシステム。正式名称Valkyrie Trase System。ヴァルクユリー・トレース・システム過去のモンド・グロツソの部門受賞者の動きをトレースするシステムの事である。

「で？　やはりそれが原因と？」

『そうだねえ。なんでこんな不細工なシステムを私のISに積むかなあ？　ま、そんな奴等はもうお仕置き済みなんだけどね！』

「お仕置き自体は止めませんけど……ほどほどにしておいてくださいよ」

『あ、そうだ！ それと例のアレがついに完成したよ』

「アレが完成したんですか？ 意外と早かったですね」

『ツンちゃんの送ってくれた天燕のデータのおかげだよ！ ツンちゃんはやっぱ天才だねえ！色々と面白い技術を考えてくれるから大助かり！ 後は本人が連絡して来るのを待つだけ』

「それはどうもです」

『おやおや？ あんまり嬉しく無い？ せつかく褒めてるのに』

「アタシより天才の束さんに褒められても嫌みにしか聞こえません」

『えへへ！そんなに褒めないですよ！照れるじゃないですか！。じゃ、こっちの最終調整が残ってるから！ あ、ちーちゃんから電話だ。ごめんね！また連絡するよ！』

「お願いします」

束さんとの通話が終わるとオレはベッドに横になる。そして、目をつぶり、眠りに入ろうとした。

え？ 話が見えない？ じゃ、ちょっとその話をしようか。

学年別トーナメントの結果を言えばオレとラウラは初戦敗退。一夏達との試合。オレ達が優勢に戦況を運んでいたが途中ラウラのレ

ーゲンが強制停止してしまい、戦闘不能。残ったオレも元から少ないシールドエネルギーだったのでシャルロットの猛攻に押され敗退で、試合終了後。オレがレーゲンの強制停止した理由を解析した。そしてレーゲンの中にVTシステムが積みこまれているのを発見したんだ。だが、VTシステムはISコア内部に組み込まれており、オレにはどうする事も出来ない。だから、束さんにその取り除き作業をお願いしたって訳だ。

しかし、まさか筈が大会で優勝するとは思ってもみなかったな。まあ、これで筈は晴れて一夏とカップルになる訳だ。

ドンドンドン！

オレの意識が眠りに入ろうとしていた時。部屋のドアから物凄いノックの音が聞こえて来る。

「どちら〜？」

「ツバメ！ ボクだよ！ ちょっと開けて！」

ドアの向こうに居る声の主はシャルロットだった。何やら慌ただしい様子である。意識は睡魔に負けそうだったが、オレはだるい体を起こして自分の部屋のドアを開ける事にした。

「どうしたの？」

「こ、これ！ どう言う意味！！」

ドアを開けるとシャルロットは息を荒げながら携帯をオレの目の前に突き出して来る。オレは睡魔でハッキリしない視界を凝らして

突き出された携帯の画面を見るとそこにはフランス語で何かが書かれていた。

「ああゝそれ？　そこに書いてある通りだよ」

「なんで!？」

そんなに怒鳴るとブロンドの貴公子で通っているイメージが台無しだな。寮の廊下にいる女子がこっちを見てるぞゝ。

「ふゝ……とにかく、入って。話をするから」

「……………うん」

「じゃ、話してもらうつよ」

シャルロットを部屋に招き入れてからちよつと。まあゝそのちよつとはオレが彼女に飲み物を用意していただけなんだが……。

「いいけど。なんで、一夏くんまでいるの？」

「俺だつて無関係じゃないぜ？」

飲み物を用意している途中。一夏もオレの部屋にやって来て話に参加することになったのだ。

「それよりツバメ！ 説明して」

「だから、そこに書いてある通りだよ。アタシがフランス政府にIS技術提供をする代わりにデュノア社の不正に対して目を潰れって話をしたの」

「なっ！ ホントか！？ シャルル！？」

「うん。ここに書いてあるメールの内容は今回の不正に対する会社への処置……って言ってもこの事を内密にしろって事ぐらいの事しか書いてないけど。でも、なんでそんな事したの？ ツバメ」

一夏の質問にただ淡々と答えるシャルロット。そして、その真意を知ろうとオレに詰め寄ってくるのだった。

「それが、アタシに出来る最善の解決策だからだよ。ってか、アタシに出来るのはそれぐらいしか無いからね」

「それぐらいって……十分すぎるよ。なんでそこまでしてくれるの？」

「んー……敷いて言えば困ってる友達は見捨てられないのがツバメさんの性分なのです」

「え？」

「IS学園のいる間はシャルロットの身は安全だよ。でも、それでもアナタは三年間この罪を背負って行かなきゃいけない。そんなの面白くないでしょ？」

「……………」

「そんなくだらない物を背負って生きるより……さつさと綺麗な体になって楽しい学園生活を送っていたかどうかと思った次第です」

「ツバメ……」

「それに、ここを卒業した後の就職が決まったと思えばいいんだし！向こうもそれなりの待遇をしてくれるみたいだからね」

「……ぷっ、なにそれ。でも……ありがとう、ツバメ。僕なんかのためにここまでしてくれて……ここへ来た理由は最悪だったけど、一夏とツバメに会えてよかった」

先程までの真剣な表情とは変わって、シャルロットは笑顔になった。オレと一夏はそんなシャルロットを見て、なんとなくそれに釣られて笑った。

「よし！それじゃ問題解決を祝って飯でも食いに行こうぜ！今日は俺が奢ってやる！」

おおー！なんか太っ腹な一夏くん。では、お言葉に甘えて普段食べられないスペシャルディナー（2000円）を奢ってもらおう。

「アハハ、ありがとう。でも、ボクが二人にお礼したいからボクがお金を払うよ」

「いっやつ！こういう時は男の俺が奢る。シャルルももつと甘えろって普段から言ってるだろ？それに、俺が出来る事なんてコレぐらいしか無いし」

「まあまあ、お二人さん。とりあえず、そう言う事は食堂に行ってから決めましょうね！」

「そうだな。よし！　そうと決まればレッツ・ゴーだ！」

「「おおー！」」

さて、そんなこんなで俺はツバメの計らいでシャルルの問題を無事に解決した事を祝って三人で寮の学食で夕飯を食べる事になったのだが。

「「「篠ノ之さん！　神代さん！　優勝！　おめでとー！！」」」

「

「あ、ありがとう」

現在学食では盛大なパーティーが行われている。もちろん主役は今回の学年別トーナメントで優勝した俺の幼馴染である筈だ。

「よっ、筈。優勝おめでとーさん」

「い、一夏！？」

なので、お祝いの言葉を掛けてあげたのだが何故か驚かれた。っ

てか、周りにいる女子もなんだがざわついている。何故だろう？

「しかし、本当に優勝するとはな。すごいぜ」

「い、いや。その……ありがとう」

「ん？　なんだ？」

「……………何でもない」

「そうか？」

「それよりも一夏！　その……約束の件なんだが……」

モジモジした様子で何かを呟く箒。トイ　おっと、さすがにこのワードは女の子に失礼か。ともかく、頬を赤らめて何かを言いたげにしている。そして、周りにいる女子も一層に騒ぎ始めた。

「約束？　ああゝアレか？　いいぜ。付き合ってやるよ」

「何！？」

「だから、付き合ってやるって……………おわっ！？」

ガバッと箒は俺の制服を掴み、身長差を利用して締め上げてくる。
く、苦しい……………。

「ほ、ほ、本当、か？　本当に、本当に、本当なのだな！？」

「お、おう。ってか、苦しい……………」

「な、なぜだ？ 理由を聞こうではないか……………」

パツと締め上げから俺を解放した筈は腕を組みながらコホンコホンと咳払いをしている。ちなみに俺はマジな咳をしていた。肺に詰まった酸素を吐き出し、新しい酸素を吸い込む。

「そりゃ、幼馴染の頼みだし。付き合うさ」

「そうか！！」

何とも嬉しそうな顔をしている。そんなに嬉しいのか？ その

「買い物ぐらい」

その言葉を発した瞬間だった。筈を含めたその場に居る女子にピシッとなにか亀裂が走ったような音が聞こえた気がした。ってか、皆さん硬直していない？ 気のせい？

「……………だろつと……………」

「ん？」

「そんな事だと思っただわ！！」

ドゴン！！

「いっふっー！」

見事なまでの足、腰、腕、拳までの体重移動。その衝撃は俺の腹部を見事に捕え、締め上げで新しく肺に取り入れた酸素は全て吐き出され、軽く呼吸困難になる。それより、何故このような事になったのだろう。そして、周りにいる女子の皆さん。何故思いつきりガッツポーズをなさっているのですか？

「ふん！」

「うごおお……」

ズカズカと立ち去ってしまう箒さん。俺は箒の放った一撃で身体をくの字に折り曲げながらその場にうずくまってしまう。

「一夏つて、わざとやってるんじゃないかって思う時があるよね」

「ほんとほんと……」

そんな俺を見て、シャルルは苦笑いしており、ツバメは心底呆れたような顔をしていた。つてか、助けてください……。――。

「ところで、箒のパートナーだった神代さんってどんな人なんだ？
ここにはいないみたいだけど」

一夏が箒の拳から回復して、オレ達は三人揃って月見うどんをすすっていた。ちなみに今日のスペシャルディナー（2000円）はすでに終了していた。シヨックだ……。

「んー？ たしか三組のクラス代表の人だよ。でも、そんな人いたかな？」

「酷いなあ。そりゃ私って影薄い方ですけど」

「ああ、ごめんごめん」

「！？！？」

さも始めからいたかのようにオレ達の輪の中に混じっていた少女に皆が驚く。一夏なんて月見うどんのスープ噴き出してしまっている。

「初めまして！ 織斑君！ シャルル君！ 三組クラス代表の神代千住です！」

神代千住と名乗る少女。見た目は大和撫子風のお嬢様と言えは伝わるだろうか。腰まで伸びた黒髪で前髪は市松人形のように揃えており、『和』を象徴したような少女だった。が、喋り方からして性格はそんな『和』からかなりかけ離れている。

「ツバメちゃんは人生を謳歌してる？」

「！？」

そして、彼女の一言でオレは再度彼女に驚かされる。

一夏達はその言葉の意味がわかっていないのでオレの反応を見て首を傾げていた。

コイツもしかして……………

「あ、織斑君にデュノア君。ここにいましたか。あ、神代さん。優勝おめでとうございます」

そしてこのタイミングで山田先生が登場。相変わらず、サイズの合っていないメガネと大きな胸を揺らしている。あ、一夏の奴変に意識して山田先生から視線を反らした。

「朗報ですよ！ なんとですね！ ついについに今日から男子の大浴場使用が解禁です！」

「おお！ 本当ですか！？」

ほう、男子の大浴場が解禁されたか。でも、それって不味くないか？

「ですから、早速二人で湯船に浸かってください。鍵は私が持っているので着替えを持ってきてくださいね！」

「はい！………つて、あ」

「どうしました？」

「い、いえ！ なんでもないです！」

「じゃ、お待ちしておりますね」

そう言つて山田先生は小走りでその場を去ってしまった。

「ど、どうしよう……シャルル」

「こ、困ったね……」

自分のしでかしたことに後悔する一夏。当たり前だ。そこにいるシャルルは男装をしている女子なのだから。しかも、山田先生が大浴場の前で待っているとなると必ず二人で行かなければならない。

「シャルルくん。平気？」

「うん、なんとかするから大丈夫。じゃ、行つて来るよ」

とりあえず、目の前にあるイベントは二人に任せよう。

「いつてらっしゃーい」

神代はそんな二人は見送りながら残ったオレと一緒にその場に残っていた。

「……なんでアンタがここにいる？」

「釣れないなあゝ私とツバメちゃんの仲じゃない」

「この世界に干渉する気は無かったんじゃないのか？ …………… 神様」

神様。オレをこの世界に送ってくれた張本人。

それが、今、オレの前に人として存在する。ってか、この神代の声はいつも電話でやり取りしていた声とまったく一緒だ。何故初めに気付かなかったのだろ。まあ、どうでもいいのだが……。

「どうでもいいってのは酷いんじゃない？ それより、私がここへ来た理由なんだけど」

「……………」

「ただの暇潰しです」

「……………」

初めの沈黙はただ真剣に彼女の言葉を聞こうとしていた。だが、二回目の沈黙はただ彼女が述べた理由に心底呆れて言葉が出なかったのだ。

「あ、安心してこの子の身体は寄り代みたいな物だから常にここに居る訳ではないから」

「……ちよつとまで、なんだ？ お前はこの神代千住って子の身体に移ってここに來たって言うのか？」

「そうだねえ。あ、安心してね。この子の意識はただいまおやすみ中だからこの会話が彼女に知れる事は無いから」

「そこまでしてここに来るかよ。普通」

「そこまでして来るのです。私は」

「はあー……………」

呆れて何も言えない。神故か、コイツの考えていることは束さんをも凌駕しており、理解に苦しむ。

「さて、本題に入ろうか」

「はあ？　なんだよ、本題って」

「別にただ遊びに来た訳じゃないよ。ツバメちゃんに伝えたい事があつてね」

それなら、いつもの電話でも済むのではないのかと思うが考えるのを止める。

神代に乗り移った神の口調は先程までのふざけた様子は無かったからだ。

「第二の試練を受けていた事に気付いてた？」

「第二の試練？　そんなもん何時受けたんだよ？」

「ラウラ・ボーデヴィツヒ。彼女の存在が第二の試練だったんだよ」

「ラウラが第二の試練？　なんだよそれ？」

「彼女は強さを求めるあまり修羅の道を歩もうとした。君が何もせず、あのまま戦いが行われていたら彼女は完全な修羅となっていたんだよ」

そうだったのかと心の中で思う。

いや、自分はどこかでそんな未来を想像していたのかもしれないな。

「試練って言うのは何も戦いだけで解決する物ではない。今回のような事もあると言う事も覚えておいた方がいい。そして、それはまた起こり得る可能性だって事を」

もはやいつもの口調は無く、真剣に話をする神。だが、オレそんな神の言葉を聞いて笑ってしまった。

「いいね。戦わずして勝つて感じて。そっちの方が平和的だ」

「フフ、相変わらずツバメちゃんは面白い発想をするね。こっちの方が戦う事より大変だと言うのに。だから、君の描く物語は面白い」

「別にアンタに見せるために人生を歩んでいるんじゃない。オレはオレのやりたい事をやっているだけだよ」

「『何か守る』と言う行為はより一層の苦勞が伴うけど？」

「……………それでもだ」

「よし、わかった。そんな君にコレをプレゼントだ」

神はそう言つて制服のポケットから一枚のディスクを取り出す。オレはそのディスクを黙って受け取った。

「なんだよ？ コレ？」

「ツバメちゃんが前にいた世界の技術だ。それは君の新しい力となるハズ。是非とも有効活用してね」

「はあ？ そんな事していいのかよ？」

「いいのだよ」

キラリと可愛く星でも出そうなウィンクしてくる神。それだけ言
って席を立ててどこかへ行ってしまった。
そして、オレは手にしたディスクに再び目をやり、書かれたラベル
をボソッと読み上げる。

「……E L S D r i v e r S y s t e m A C E U n i t
」

篠ノ之箒は食堂で行われているパーティーから抜け出し、一人I
S学園の第三アリーナへとやって来ていた。

「（正直、今回の大会はあの神代がいたから勝てたような物だった
……… 本当の実力で私が優勝した訳ではない）」

学年別トーナメントで私は抽選で三組の神代とタッグを組むこと
になった。この神代千住と言う人物は意外にも強い。専用機を持た
ずとも他者を圧倒する力を持っていた。それ故、私は己の実力を痛
感されてしまう。自分のしたことなど、彼女のサポートぐらいのこ
としか出来なかったのだから。

「（ツバメとならもっとうまくやれたのか？）」

始めはツバメの奴にパートナーを頼もうと思っていたが、ツバメ
はあのラウラ・ボーデヴィツヒと組むと言って断られてしまった。
それ自体は別に問題は無い。何やら嫌な予感がすると言われ、自分

もそれに納得したのだから。

ツバメは異常なまでの危機察知能力がある。

小学生の頃、二人で下校をしていた時。珍しくいつもと違う道を帰ろうとツバメが提案して来た事があった。普段は目的も無く寄り道をしないツバメにしては珍しいことであったが、その時は別に気にせずその提案に乗った。

そして、翌日。いつもの通学路でトラックが歩道に突っ込むと言った事故が発生した。ちょうど、自分達がその道を通る時間にだ。もし、あの時ツバメの提案に乗っていなければ私はこの世に存在していないのだろう。考えただけでも恐ろしい。

「（まあ、今回は外れたみたいだが……それよりも……）」

自分の携帯画面を開き、登録されている番号に電話を掛ける。プルルルルと電話の呼び出し音が聞こえ、電話を掛けた相手の声が聞こえた。

『やあやあやあ！ 久しぶりだねえ！ ずっとず～～～～と待ってたよ！』

「……………姉さん」

私が世界で一番嫌いな人。でも、今はこの人に頼る他ない。

『うんうん。用件はわかっているよ。欲しいんだよね？ 君だけのオンラインワン、代用無きもの（オルタナティブ・ゼロ）、ハイエント第の専用機が。モチロン用意してあるよ。最高性能にして規格外仕様。オーバースペックそして、白と並び建つもの。その機体の名前は

紅椿

ㄅ

第二十話 仲直り（前書き）

原作二巻が終了と前回言っておきながら三巻にも入っていない……。

まあ、二巻と三巻の間の小話だと思ってください。

第二十話 仲直り

学年別トーナメントが終わった次の日。ラウラ・ボーデヴィツヒは自室のベッドの上でウーウー唸っていた。

「…………やはり、謝った方がいいのだろうか？」

あの試合を終えてから、色々考えた。

教官やツバメを見て、強さとは人それぞれの形が存在すると。

そして、自分も何かのために力を身に付けたいと思えるようになった。

この事に気付かせてくれた人達を守りたいと。

「…………だが、わからん。どうすればいいのだ」

しかし、そこには問題がある。あの織斑一夏だ。今まで彼に対しては憎しみしか感情を抱いていなかったが、今はそれも無い。実質、憎しみが消えてから興味が無くなった。だが、教官の弟でツバメと友人関係である織斑一夏とはこれからも接点を持つようになるだろう。

だから、今のままでは何かと気まずい。前の自分ならそんな事気にはしなかったのだろう。だが今は何とかしたいと不意に考えてしまふ。しかし、私は自分から人と接することが苦手だ。生まれてから15年。習ったことは軍人としての知識ばかり。はたしてどうしたものやら。

「…………あいつに聞いてみるか」

私は軍から支給された通信端末（ISが無いため、緊急用に用意

した衛星携帯）を取り出し、とある人物に連絡を取ることにした。

『……こちらIS配備特殊部隊『シュヴァルツェ・ハーゼ』副隊長クラリツサ・ハルフォーフ大尉です』

少し眠そうな声。寝ていたのか？ 日本とドイツとの時差は約8時間。こっちは昼の12時だから向こうは朝の4時か。それなら申し訳無い事をしてしまったな。

「うむ。すまんなクラリツサ。朝早くから」

私が電話を掛けた相手は私が受け持った部隊、IS配備特殊部隊『シュヴァルツェ・ハーゼ』の副隊長を務めるクラリツサ・ハルフォーフ大尉。自分より年上でよく部隊のために働いてくれる私の部下である。

『……構いません。して？ 緊急ですか？ 定時報告の時間でもないですし』

「いや、その……ちょっと、プライベートで相談があるのだが……」

『……隊長が、プライベートで、私に？』

電話越しではあるがクラリツサの様子は窺えた。なにせ、私は部下にプライベートについて話などした事が無かったのだ。まあ、自分が人と接する事を拒んでいた所為でもあるが、そんな私がいきなり「プライベートで相談がある」など言えば皆驚くだろう。

「クラリツサは私より人生の先輩だ。それで……ちょっと相談した

い事があるのだ」

『……わかりました。お話を聞きましょう』

「うむ。よろしく頼む」

ドイツ軍宿舎。クラリツサ・ハルフォーフ大尉の部屋。

現在の時刻は朝の4時。普通ならまだ寝ていられる時間であるが、私は緊急用の通信端末への着信音で目を覚まし、「こんな時間に誰だ」と内心怒りながらその端末の着信番号を確認する。

着信の相手は我が、IS配備特殊部隊『シュヴァルツェ・ハーゼ』通称『黒ウサギ部隊』の隊長を務めるラウラ・ボーデヴィツヒ隊長であった。それを見て、私はハアと短くため息を吐いて着信を受諾する。

『すまんなクラリツサ。朝早くから』

「……構いません。して？ 緊急ですか？ 定時報告の時間でもないですし」

しかし、この隊長の言葉に私はとある疑問が頭によぎる。

なぜならあの冷静沈着・ドイツの冷氷と呼ばれ、部隊内でも人間

関係に問題がある私の悩みの種が部下を気に掛けたのだから。普段の隊長からは全く想像出来ない行為。

『いや、その……ちょっと、プライベートで相談があるのだが……』

「……………隊長が、プライベートで、私に？」

これまた驚きの内容。

もはやこの電話の声の主は本当に隊長なのかと疑いたくなるくらいだった。しかし、言葉を詰まらせてちょっと恥ずかしそうに喋る隊長がやけに可愛く思える。ん？ なにか鼻の奥から鉄の匂いが……。

『クラリッサは私より人生の先輩だ。それで……ちょっと相談したい事があるのだ』

私の中でなにかが壊れるような音がした。

「（あの隊長が自分に相談、だと？）」

軍人として笑うと言う行為は必要とされない。だが、この時ばかりは顔の筋肉が緩んでしまった。不思議と心が温まるような気もした。

何と言つか微笑ましかつたのだ。

「……………わかりました。お話を聞きましょう」

『うむ。よろしく頼む』

それから、私は隊長の抱えている悩みを聞いた。IS学園に転校した初日の出来事。学年別トーナメントまでの間、八雲ツバメと共に過ごした時間の事。織斑一夏と対峙し、自分が感じた事。全てを包み隠さず話してくれた。

「なるほど、事態は把握いたしました。隊長はその織斑一夏と仲直りがしたいと……」

『……そうだ。その……アイツとの関係を修正しなければ今後の任務に支障をきたすと思ってな……早急に、手を打っておかねば思っ
つて………』

などと言っているが内心かなり恥ずかしくがっているのが手に取るようにわかる。

『それに……だ……私は異性にどう接していいか、わからん』

「……………グハッ！」

『どうした！？ クラリッサー!!』

「……………いえ、問題ありません」

私は隊長のあまりの一言に思わず吐血。いや、血など吐いてはいないのだがあまりの隊長の純粹さに心打たれてしまったのだ。

隊長の態度の変わり様……話に出て来た八雲ツバメとやらに感謝せねばならないな。

「わかりました。末ながら私も協力いたしましょう」

『本当か！？ 助かる！！』

「では、まずこんなはどうです？」

クラリツサの考える織斑一夏と仲直りするシチュエーション。そのの？

学園にある第三アリーナ。そこで織斑一夏とラウラ・ボーデヴィツヒは己のISを纏って対峙していた。

「なかなかやるな。男としては見上げた根性だ」

「そいつはどうも。次で決める！！」

一夏は手にした雪片式型を構え、ラウラに突撃。ラウラも向かって来る一夏を迎え撃つためプラズマ手刀を展開し、突撃した。

ゴオッ！！

両者の武器がぶつかりと辺りに衝撃が走る。そして眩い光が二人を包み勝負に決着がついた。

「ハア、ハア……貴様、強いな」

「ハア、ハア……お前もな」

だが、そこには勝者はおらず、全力を出し切ったお互いがアリーナの地面に倒れていた。

「ほら」

「何だよ？ この手は？」

ラウラは転がっていた地面から立ち上がり、倒れている一夏へと手を差し伸べる。一夏はその真意を理解出来なかったのか不思議そうな顔をしていた。

「お前を認めてやる。織斑一夏、今日から私達は戦友だ^{とも}」

「そうだな。今までの事を水に流そう！」

クスツと一夏は笑い、そしてラウラの差し伸べた手を取る。そして、一夏が手を取った事を確認するとラウラは倒れている一夏の身体を地面から引き上げ、その場に立たせた。

それ以上の言葉は二人の間にいらぬ。なぜなら、闘いを経て二人の気持ちは通じ合ったのだから。

そして、新たに生まれた友情を祝うかのように沈みかけた夕陽が二人を照らすのだった。

『うむ。なかなか燃えるシチュエーションだな』

「そうです。日本男児なら好きな展開です。某少年誌ではこの後二人で協力してさらなる強敵と共に闘うと言う展開が人気らしいです。かなり、燃えるシチュエーションです」

『だが、現在レーゲンは私の手元にはないのだが……』

「あーVTシステムでしたね……では、これはダメですね」

『そうだな』

「では、次はどうでしょう?」

クラリッサの考える織斑一夏と仲直りするシチュエーション。その?
の?

「て、ていへんだー! 織斑くんがIS学園のスケ番に体育館裏に連れてかれた!」

「そ、そんな!」

突然、何故か江戸っ子口調の女子が教室に走り込んでそう叫ぶ。
そんな女子の報告を聞いて教室にいる他の女子達も騒ぎ始める。

「い、一夏が！？ そんな！！ 早く助けなければ！」

彼を救出しようと言う篠ノ之箒。

「で、ですが。IS学園のスケ番は学園最強ですわ！！」

相手の力量に自分達では太刀打ちできないと恐怖するセシリア・オルコット。

「いやああああ！！ 一夏！ 一夏！」

ただ、絶望する凰・鈴音。

「ご、ごめん……ボクがもっとしっかりしていれば」

己の無力さに嘆くシャルル・デュノア。

しかし、そんな中でラウラ・ボーデヴィツヒは冷静に素早く行動に移すのだった。向かうは体育館裏。

弱者を助ける強者がそこへ向かう。

「顔面はよしな！ 腹だよ！ 腹を狙うんだよ！」

体育館裏では数人の女子が男子生徒を羽交い締めにしており、彼の腹に何回も拳をめり込ませていた。

「ぐう…ゆ、許してください」

「男の癖に弱いつたらありやしない！ 私の舎弟になるならやめてやるよ。さあ、どうする？」

「お、俺は」

「そこまでだ！！」

「な、なんだ！？」

一夏がスケ番達に屈しそうになった時だった。少女が現れて問答無用にスケ番一味に襲い掛る。

スケ番達はいきなりの事だったので成す術が無く、全員が同時に宙を舞い、そして地面に激突した。

「ラ、ラウラ………」

一夏はボロボロになった身体を起き上がらせ、自分を助けてくれた人物を見てその名前を口にした。そこにいたのはついこないだまで自分と敵対していたラウラだった。

「大丈夫か？ 織斑一夏」

「な、なんで？ なんで、俺を助けた」

「ふん。私の力は弱き者を助けるために使つと決めたのだ。だから、私がお前を守つてやるよ」

「ラウラ……俺、お前について行く！ 姉さんあねって呼ばせてくださ

い!」

「好きにしる……」

「あ! 待ってくださいよ! 姉さん!」

『……これは違うだろ?』

「む、ダメですか?」

『私はただ織斑一夏に謝りたいだけだ。なんで舎弟などと上下関係を築かなければならないのだ? それにIS学園の最強はスケ番などでは無く、生徒会長だぞ?』

「すみません。この間見た日本のドラマを元に考えたのですが……では、次は」

再び自分が考えたシュチュエーションを言おうとした時。通話の向こうから誰かが隊長を呼ぶ声が聞こえて来た。

『あーすまん。来客が来たようだ。この話はまた今度でいいか?』

「あとレパトリーが62あるのですが……わかりました。では、また連絡をください」

『ああ……ありがとう』

隊長がそう言って通信は切れた。私は通信の切れた端末を乱暴にポイとベッドに放り投げ、横になる。

「（……ありがとう、か）」

IS学園に行ってから隊長は変わった。先程も言った通り、人と関わりたくない人がこうして自分から歩み寄ろうとしている。始めは織斑教官が隊長を変えてくれたのかと思ったのだが違う。通信越しで聞こえて来た隊長以外の声。

『ラウラちゃん！ 御飯を食べに行こう！』

この声、たぶん隊長の話していた八雲ツバメのものだと思う。

「あの隊長をちゃん付けか……。フフ、面白い奴もいたものだ」

不敵に笑ってしまった。そう呼ばれる隊長を想像しただけでおかしく思えて来てしまったのだ。

「さて、部隊に招集をかけて対策を考案しなければな」

そして私は軍服に着替えて、鼻歌を歌いながら部屋を後にした。

後日。

部隊全員で考案した隊長と織斑一夏を仲直りさせる作戦を考え付くも隊長は八雲ツバメの「素直に謝れば？」と言う助言により無事

解決。それを聞いた私達は膝と両手を地面に着き、この苦労はなんだっただと落胆してしまった。

しかし…………

『クラリッサ……私は織斑一夏と言う男に惚れてしまったらしい』

「!?!?!?」

聞けば、謝罪をした際に織斑一夏に優しくされた事で胸がときめいてしまったとか。

いいでしょう。このクラリッサ・ハルフォーフ！サブカルチャー 常日頃から愛読している日本の文化の知識をフルに活用させていただきましよう
!!!!

第二十一話 スニークミッションだ！

七月上旬。

日差しも熱くなつて来た頃。IS学園の一年は来週から臨海学校がある。まあ、臨海学校だけあつて場所は海なのだ。十代の女子達にとってこれほどなイベントは無い。なので、必然的にテンションも上がってくる。

「……………はあゝ」

しかし、そんなテンションの高い集団の中、オレこと八雲ツバメは深いため息を吐きながら寮の廊下を歩いていた。

「あのクソ神……………何が新しい力だ……………全然解析出来ないじゃねえか。一部解析は出来てフォーマット出来たけど何にも起こらんし、一体何なんだよ……………」

まあ、オレがこんなになつている理由は大体こんな感じだ。神様からもらった『E L S D r i v e r S y s t e m A C E U n i t 』なる物は想像以上に解析するだけでも困難だったのだ。この数日で解析出来たのはほんの一部だけ。その一部を見てみるとこのシステムは羽斬のような自立型支援機らしい。まあ、どんな支援をしてくれるかまではわからなかったけどな。

「もういいや……………今日は気晴らしでもしよう」と

なので、今日はもう諦めてどこかに出かける事にした。よし、久々に学園の外にでも行こう！

「……おや？ あれは」

そう決めて部屋で着替えを済ませ、寮の入り口を出ようとした時だった。目の前に妙な集団がいた。

最近では珍しくも無い組み合わせのセシリアと鈴。その二人が物陰で何かを窺っている。そして、二人の視線の先には一夏と女装をしたシャルロットがいた。いや、シャルロットは元々女だから女装は変か？ とにかく、女の子の服を来たシャルロットがそこにいた。

「ツバメ、こんな所で何をしている？」

「おや、ラウラちゃん」

「だからちゃん付けはやめろ」

「まあ、奇妙な光景を目の辺りにしたもので……観察」

「奇妙なもの？ ああ、あれか。何をやっているのだ？」

「さらに前方の二人を尾行しているみたい」

「前方？ む、あれは私の嫁ではないか！」

「……………」

どこでそんな知識を得たのか知らないがそれは間違っているぞ。

一夏に今までの事を謝罪してからラウラの調子はこんなものになってしまっている。まあ、一夏のフラグ一級建築による賜物だ。これが無自覚で周りにいる女性に建築してしまうので困る。

「ツバメ！ 私達も行くぞ！」

「え？ ふえ！？」

グイッとラウラはオレの腕を掴んで引っぱり、無理矢理に二人の後を追うことになってしまった。

「おー、よく晴れたなあ」

週末の日曜日。天気は快晴で素晴らしいお出かけ日より。

僕、シャルロット・デュノアの隣に座る織斑一夏はモノレールから見える風景を見てそう感心していた。

「……………」

しかし、僕の心はこの快晴ほど晴れやかでは無い。

「（はあ……………そりゃ、一夏だもんね。期待してた僕が馬鹿だったのかな？）」

心の中で僕はため息を吐く。

先日、織斑先生に無断ＩＳ使用と室内での飛行がバレて罰として一夏と教室の掃除をさせられた時の事だった。一夏と二人っきりの

シユチュエーションに僕の心臓は破裂しそうな程高鳴り、そんな状況で「付き合ってくれ」などと言われれば誰だって期待してしまう。でも、結果はただ買い物に付き合ってくれと頼まれただけだった。

「（せつかく女の子らしい格好したのに……）」

ツバメが僕に関する問題を解決して、僕は女子生徒としてISS学園に編入し直して来たのだ。まあ、理由はそれだけでは無いのだが。

「どうした、シャル？ 今日はやっぱ調子が悪かったのか？」

「一夏」

「お、おう？」

「乙女の純情をもてあそぶ男は馬に蹴られて死ぬといいよ」

「そうだな、そんなやつは死んでしまえばいい」

「鏡を見なよ」

冷たく、ちよつとした怒りを込めて僕がそう一夏に言う。しかし、

一夏は何を勘違いしたのか自分の前髪をいじりはじめた。

別に髪のことを言った訳じゃないのに。

「はあ……。どうせ、どうせね……。買い物に付き合ってくれ、だと思つたよ。ああん、先月もなんか似たような事言つてたもんね、一夏……。はああ……………」

深海二万マイル並みの深いため息が出て来る。一夏はそんな僕を見てオロオロしていた。どうやら、どうして僕がこうなった理由が解らないらしい。いいさ、そうやって一生悩んでいれば。

「いや、その、悪い。でもあれだぞ、そんなに無理しなくてもいいぞ？　なんだったら帰って休んでてもいいから、体の事を第一に考えてくれ」

「……………」

本気で心配し始めた一夏。ここまで鈍いと本当にわざとやっているのではないかと思えてくる。ツバメに教えてもらった朴念仁ならぬ朴念神だっけ？　まさに、それだ。

そんな、やり取りをしていると目的の駅へと到着。モノレールから降りても一夏は未だに僕の事を心配していた。そして、自分が何か悪い事をしてしまったのではないかとやっと自覚したのか色々物で僕の気を引こうとし始めた。

なので、ちょっとした希望を提案してみることに。

「手、繋いでくれたらいいよ」

「ああ、なんだそんなことか。ほい」

「（え？）」

冗談半分で言ったつもりだったのに。一夏は何とも思わず僕の手を握ってくれた。ヤバイ。想像以上に恥ずかしいかも……。まともに一夏の顔が見れない。

「大丈夫か？」

「ひゃあ！？ な、な、なにがつ！？」

いきなり声を掛けられた物だから思わず声が裏返った。

「いや、シャルが。やっぱり帰って休むか？」

「う、ううんっ！ いいっ、平気っ、大丈夫っ！ い、行こっ！」

こんなチャンス潰せない！ と内心思いながら僕は一夏の前を歩く。それにしても、男の人の手って大きいなあ。またちよつとだけドキドキしてきたよ。

「……………」

「……………」

そんな光景を物影から見ていた鈴とセシリア。

「……あのさあ」

「……なんですか？」

「……あれ、手え握ってない？」

「……握ってますわね」

「そっか、やつぱりそっか。あたしの見間違いでもなく、白昼夢でもなく、やつぱそっか。よし、殺そう」

「よし、じゃない!!」

「きゃうっ!!」

鈴が目の前の光景に対し、握りしめた拳はISアーマーが部分展開され、衝撃砲発射までのタイムラグはおよそに二秒といったところでオレの手刀が鈴の脳天に直撃する。

「「ッ、ツバメ!?!」」

鈴は部分展開を解除して、両手で頭を押さえながらオレの方を見て驚いている。

「お前達も目的は一緒か」

「「あ、ラウラ・ボーデヴィッヒ」」

そして、オレの背後から現れたラウラの姿を見てさらに驚く………
…ことは無く、普通の反応。まあ、一夏に謝罪した時に一緒に二人にも謝罪しているのでいざこざは無くなっているからなんだが。

「二人で何をしているのです?」

「いやゝアタシが出かけようとしてたらラウラに連れられてここま

で来ました」

セシリアの質問にオレは苦笑いしながら答える。

「では、我々は先を急ぐ」

「ちよつ、ちよつと！ 待ちなさいよ！ どうするつもりなのよ！？」

「我々も一夏達と混ざるつもりだが？」

え？ そうなの？ あれに入って行く勇氣はございませんよ？

「ま、待ちなさい。待ちなさいよ、未知数の敵と戦うにはまずはは情報収集が先決。そうでしょ？」

「ふむ、一理あるな。ではどうする？」

軍人的思考を逆手に取ってラウラの行動に規制を掛けた鈴。

「ここは追跡ののち、二人の関係がどのような状態にあるのかを見極めるべきですわね」

「なるほどな。では、そうしよう」

かくして、オレ達四人は何が何だかわからないうちにおかしな追跡チームが結成された。

オレ、帰ってもいい？

『こちら、ブルー。現在ターゲットは女性用水着売り場内にて水着を選んでいますわ。ですがなかなか決まらない模様。どうぞ』

『こちら、ピンク。もう片方のターゲットは男性用水着売り場で水着を購入中。購入したのはシンプルなネイビー色の水着。どうぞ』

『こちら、ブラック。引き続き、追跡を続行。ターゲットから目を離すなよ』

「こちら………ねえ？ 自分のISのカラーでコードネーム決めるとセシィと被るんだけど？」

『天燕はツートンカラーですからホワイトにされればいかがです？』

「なるほど！ こちら、ホワイト。現在、レゾナンス一階のケーキバイキングでお茶を満喫中。とてもおいしいです」

『『『サボるな！』『』『』』

現在、オレ達の間ではISのプライベートチャネルでそれぞれが通信をしている。そんな訳で一夏とシャルロットを追跡する事になったオレ達なのだが………なんか、飽きた。だから、オレは一足先に抜け出して休憩をしていたのだが。

「いやあゝ人は足りているからアタシはいらないかなって思って」

『あ、そんな事よりも二人が合流いたしましたわ。ピンクと合流して再び追跡を開始いたします』

「がんばって」

セシリアの報告を聞いて声援を送る。再度、三人から怒られるが気にせず紅茶を口にする。

「ん？ あれは……」

そんな時間を満喫していると店の外に珍しい人を発見。

織斑先生と山田先生だ。

「あれ？ 八雲さん？」

そして、山田先生がオレを発見。窓越しだったので声は聞こえなかったがそんな事を言っているそぶりだったので何を言っているかが理解できた。

山田先生はオレを発見すると織斑先生と何か話し、店内へと入ってオレの座る席までやって来るのだった。

「こんにちは、山田先生、織斑先生」

「こんにちは、八雲さん。今は職務中って訳では無いので気楽にしてもいいですよ。お一人ですか？」

「あー……友達と来てたんですけど、別行動を取ってて。それでアタシの用事が終わったので合流時間まで暇潰しです」

本当の事を言うと何かと面倒な事になりそうなのであえてウソを言う。山田先生はそんなウソに納得してくれた様子であったが……織斑先生だけはなにかと疑っている目つきをしている。さすが言うべきか、なんと言うべきか……。

「そうなんですか？ あ、御一緒にもいいですか？」

「はい。でも、珍しいですね。何か買い物に来たんですか？」

断る理由も無く。オレが許可をすると二人はオレの向かいに座り、適当に飲み物を注文した。それにしても山田先生は相変わらずニコニコしているが、織斑先生は相変わらず仏頂面だな。虫の居所でも悪いのか？

「ええ、今度の臨海学校の時に着る水着を買いに。織斑先生ったらあまり水着を持って無いつて言うもので」

瞬間。織斑先生から殺意ある視線が山田先生に送られる。その視線を受け取った山田先生はビクツと身体が跳ね上がり、そのまま硬直してしまった。

「……私は今ある水着でも十分だと思うのだが……山田先生が無理矢理な」

「で、でも、織斑先生？ 最近またバストアップして前の水着がキツイって言ってたじゃないですか」

ほゝ、その歳でまだ成長いたしますか。うらやましい限りです。

「山田先生。生徒の前であまりそう言った話は……」

「いいじゃないですか。今は職務中じゃないですし、女の子同士ですし！」

フン！ と両手で拳を作り、ガッツポーズをして力む山田先生。しかし、この人が『女の子』と言うのに違和感が無いのはどう言うことだろうか？ いや、この人だから違和感が無いのだろう。

対して織斑先生は顔を少しだけ赤らめ、若干恥ずかしそうにしている。

普段のイメージからでは想像出来ない反応。

それはそれは、可愛らしいかった。

思わず、携帯のカメラを起動させてカシャリと写真に収めてしまったぐらいだ。

直後、織斑先生に肖像権について何たるかをご教授いただいた。もちろん、携帯を取りあげられ、写真を消されてしまったが大丈夫だ。バックアップはすでに取ってある。

「と、ところで！ 八雲さんはどんな水着を着るんですか？」

織斑先生のお怒りがあまりにも長くなりそうだったので、山田先生が話を元に戻す。

ナイスだ！ 山田先生！ そのキラーパスしかと受け取ります！
そして織斑先生！ わざとらしい舌打ちをしないでください！

「まあ、水着なんて見せたい相手に見てもらうためのものだ。八雲はそう言う相手はいないのか？」

と思ったらインターセプト!?

でも、織斑先生は意外にも話に乗り気であるのに驚かされる。しかも、妙な方向に話を持って行きやがった。

この人、自分の話に免疫無いのに他人の話になるとこう言う話が好きなんじゃない?

「うーん……アタシにはそんな相手いませんからね」

「身近な異性に見てもらいたいと思わないのか？」

「それって一夏くんのこと言ってます？」

「それ以外なにある？」

堂々と言い張る織斑先生。

「……正直わかりませんね」

「ほづ」

「一夏くんはカッコいいと思いますし……最近ではIS訓練に精を出して一段と男らしくなったと思います」

「それじゃ不服か？」

「うーん……やっぱり、よくわかりません。友達として気の許せる相手だと思ってますけど……男として見て無いのだと思います」

一夏を異性として見る。

と言うより、オレは異性を見ると言う行為がよくわからない。理由は自分の性格と状況にあるのだろう。オレの精神には若干ながら男の部分がまだ残っている。まあ『オレ』なんて言っている時点でそうなんだが。とにかく、そんな部分が異性に対する気持ちを邪魔しているのかもしれない。

でも、この世界ではオレは女なのだ。

時間が経てば『オレ』は消えて完全に女になるかもしれない。そして、素敵な相手を見つけて女の幸せを見つけるかもしれない。

「（やっぱり、駄目だ。考えられん…………）」

想像しただけで何か頭の中がモヤモヤしてくる。このハッキリしない感じは嫌いだ。だから、考えるのをやめた。

「まあいい、お前はまだ若いんだ。ゆっくり時間を掛けて考えろ。だが、お前も女だ。それだけは自覚しておけ。…………手始めに一夏の奴でもいいぞ」

「普通、自分の弟を差し出しますか？」

「アイツの性格には私も困っているな。お前は頭が良いからどうしたらいいかわかるだろ？」

「…………考えておきます」

「さて、水着を買いに行くか…………八雲、まだ時間は平気か？」

「はい？」

「一夏の好みの水着を選んでやる」

その時の織斑先生の顔はオレの悩みを楽しむかのように笑っていた。いや、正確には一夏の恋愛成就に対して状況を楽しんでいるのだ。ただでさえ一夏の周りには凄い事になっていると言いつのに、さらに力オスを望むか。この人は……

「おい、何やっている。早く来い」

「はい……」

こうしてオレは織斑先生に連れられて女を磨く修行へと駆り出されたのだった。

『こちら、ピンク！ ターゲット二名が女性水着売り場で同じ試着室に入ったよ！！ 襲撃の許可を！！！！』

あれ？ これってヤバくね？

第二十二話 不思議の国のアリスが襲来

「海っ！ 見えたあっ！」

トンネルを抜けたバスの中でクラスの女子が声を上げる。

臨海学校初日、天候にも恵まれ無事快晴。陽光を反射する海面は穏やかで、心地良さそうな潮風にゆっくりと揺らいでいた。

「おー。やっぱり海を見るとテンション上がるなあ」

「う、うん？ そうだねっ」

バスで隣の席になったのはシャルだった。しかし、どうも出発してからずっとこんな感じで、いまいち話を聞いていない。今も、返事だけしてすぐまた手元に視線をやっている。

「それ、そんなに気に入ったのか？」

「えっ、あ、うん。まあ、ね。えへへ」

左手首にシャルがしているブレスレットは、昨日とある買い物に付き合ってくれたお礼として俺がプレゼントしたものだった。シャルは銀色のそれをニコニコと眺めては、時々思い出し笑いでもするかのような笑みを漏らす。

それにしてもそこまで気に入ってくれれば、逆にあんまり高い物じゃないのが申し訳ない気もする。

「うふふっ」

うーん、ものすごいご機嫌だ。

「まったく、シャルロットさんたら朝からえらくご機嫌ですわね」

通路を挟んで向こう側、セシリアが若干むすつとした顔で言ってくる。

「うん。そうだね。ごめんね。えへへ……」

セシリアの棘のある言葉もなんのその、笑顔で返すシャル。うーむ、ここまでご機嫌だとちょっと怖いぞ。そんなに海が楽しみなんだろうか。いや、俺も楽しみだけど。

「昨日、途中で二人だけ抜けたとおもったら、まさかプレゼントとは……不公平ですわ」

「あー……。まあ、その、なんだ。セシリアにはまた今度の機会にな？」

どうもセシリアさんはプレゼントが欲しかったようだ。そんなに拗ねるなよ。

「や、約束ですわよ？」

「おう。あんまり高いのは無理だけだな」

とりあえずの約束でセシリアは引き下がってくれた。しかし、こーお金を使つとせっかく溜めた貯金があつという間に無くなつてしまふ。またバイトでもするか。

「……………」

しかし、不思議なのはセシリアの隣でずっと大人しくしているラウラだ。体調でも優れないのだろうか、ときどき拳動不審になって周囲をキョロキョロ見ている。

「大丈夫か？ 昨日合流したときからずっとそんな感じだけど、どうした？」

「……………」

「おい、ラウラ。おい」

あんまり反応が無いので席を立ててその顔を覗き込む。

「！？ なっ、なんっ…なんだ！？ ち、近い！ 馬鹿者！」

「ぬア」

鼻を思いつきり手の平で押し返された。ついついおかしな声が出てしまう。どうも風邪を引いたのか熱っぽいのか、ラウラの顔はわずかに赤みがかかっていた。

「ったく。なあ？ 箒。向こうに着いたら泳ごうぜ」

「そ、そう、だな。ああ。昔はよく遠泳をしたものだな」

うん？ なんか箒も箒で様子がおかしい。落ち着かなさそうというか、ソワソワしている。

「そうだな。昔はよく箒のおじさん達に連れられて俺と箒とツバメの三人でよく海に遊びに行ったよな」

「よく覚えてるな？」

「そりゃ、楽しかったからな」

俺はそう言いながら自分の席から箒達が座っている席を覗きこむ。

「って、ツバメは寝ているのか？」

スースーと小さい寝息をたてながら箒の隣で寝ているツバメ。もつたいない。せつかく海が見えてきたと言っのに。

「おい。ツバメ。海が見えたぞー」

「んっ……………」

「起きないと顔に落書きしちゃっぞー」

「んん……………」

駄目だこりゃ。声掛けたぐらいでは起きん。ならば！

プニ

「んっ」

プニ
プニ
プニ

「んんっ」

おおっ！ 試しにほっぺを指で突いてみたけど意外と柔らかくて気持ちいいぞ！ これは癖になる触り心地だぞ。

「い、一夏……貴様……」

ん？ どうしたんだ？ 簀の奴、顔から血の気が引いて真っ青だぞ？

「簀！ ツバメのほっぺモチモチだぞ！ 柔らかくて気持ちいいぞ」

「や、やめろ！！ 寝ているツバメにイタズラすると」

ガブリ！

「ぎゃあああああああああああああ！！！」

ツバメの頬を突いていた指に突然激痛が走る。あまりの痛さに俺は普段出さない悲鳴を上げてしまった。ってか、マジで痛い！ ガチで指が喰い千切られる！

「……ツバメが寝ている時にイタズラすると噛む癖があるんだ。しかもイタズラをした本人をダイレクトに襲う」

「そんな情報はいいかからツバメを起こせ！！ 指がこのままだと無くなる！！！」

「無理だ。一度噛みついたらしばらくは離れない。安心しろ……指が無くなる事はない……たぶん」

「たぶんって言った！？ イダダダダダッ！！」

あ、ヤバい。だんだんと指の感覚が無くなって来た。

「織斑！ もうすぐ到着するから席に座れ！！」

「ならこの状況を何とかしてください！！！！」

目の前の状況を千冬姉は目の当たりにしながらも、相変わらずの指導能力を発揮する。だがそんなの関係無い！ とにかく、この激痛を何とかしなければ今後の生活に支障をきたす瀬戸際なのだああああああ！！！！！！

結局、ツバメはバスが停止するまで俺の指に噛みついたままだった。

「ふあゝ……………よく寝た！」

バスが目的の旅館に到着。寝ていたオレの意識もすっかり覚醒して、固まった身体を思いつきり伸ばす。

「……………」

「一夏くんどうしたの？ 疲れた？」

「……………」

うむ、どうやら質問に答えられない程疲れたらしい。まあ、長距離移動は馴れない人には苦痛でしかないからな。しょうがない。

「それでは、ここが今日から三日間お世話になる花月荘だ。全員、従業員の仕事を増やさないように注意しろ」

「……………よろしく願います」

「はい、こちらこそ。今年の一年生も元気があってよろしいですね」

織斑先生の言葉の後、オレ達が挨拶をすると着物姿の女将さんが丁寧お辞儀をした。歳は三十代ぐらいだろうか、しっかりとした大人の雰囲気漂わせている。仕事柄笑顔が絶えないからなのか、その容姿は女将という立場とは逆にすごく若々しく見える。

「あら、そちらが噂の？」

そして、そんな女将さんがオレの隣で疲れ切った顔をした一夏と目が合い、物珍しそうに見ていた。

「ええ、まあ。今年は一人男子がいるせいで浴場分けが難しくなつてしまつて申し訳ありません」

「いえいえ、そんな。それに、いい男の子じゃありませんか。しっかりしてそんな感じを受けますよ。でも、今は長旅でお疲れなのかしら？」

「なに、気にしないでください。ああなつたのは自業自得ですから」

織斑先生がそう言いながらチラリとオレの方を見て来る。ん？オレが何かやったのか？

「ね、ね、ねー。おりむ」

おー、この独特なあだ名を呼ぶのはのほほんさん（本名は布仏本音）ではないか。相変わらずスローテンポでいろいろ面白い人だよな。

「おりむーの部屋どこ？ 一覽に書いて無かつたー。遊びに行くから教えて」

「いや、俺も知らない。廊下にも寝るんじゃないの？」

「わー、それはいいね。私もそうしようかなー。あー、床つめたーいって」

のほほんさんならやりかねないな。いや、やったらやめさせるけど。

「織斑、お前の部屋はこつちだ。ついてこい」

「あ、はい」

しかし、のほほんさんが一夏の部屋を聞き出す前に織斑先生が一夏を連れてどこかへ行ってしまう。それで諦めたのほほんさんも「また後でね」と言っで一夏を送り出した。

にしても本当に元気ないなあ？ どうしたんだろ？

「ところでヤック」

そしてその場に残されたオレは彼女の付けた奇妙なあだ名を呼ばれた。

「なんだい？ のほほんさん」

「実は例のブツが手に入ったのだよ」

「なんと、そいつは朗報だね。では、今晚あたりにでも……」

「心得た」

ガッシリとオレ達は固い握手を交わし、その場を後にする。

とりあえず、荷物を部屋に置いて海へ繰り出すか。

「……………」

「……………」

「……………」

オレ、箒は更衣室のある別館に向かう途中で一夏とバツタリ出くわした。一瞬、一夏がオレの顔見ると「ひっ！」と声をあげていたがどうしてだろう。いや、それよりも今は目の前にある珍妙な光景を見てオレ達は黙り込んでしまっている。

「なあ、これって」

「知らん。私に訊くな。関係ない」

「でも、これって……………」

一夏が目の前ある地面に埋まった『ウサミミ』見て箒に尋ねるが、箒は即否定する。

「えーっと……………抜くぞ？」

「好きにしろ。私には関係ない」

「あ、箒」

そう言っすたすたと歩き去ってしまった筈。そしてその場に残されたオレ達は仕方なくそのウサミミを思いつきり引っ張ることにした。

すぽっ

「のわっ!？」

「きゃ!？」

一夏がウサミミを力いっぱい引っ張ると、ウサミミは意外にも簡単に抜けてしまった。そして、勢い余って一夏はオレを盛大に巻き込んですっころんで来たのだった。

「いてて……………」

「いったゝ……………」

「大丈夫か？ ツバ」

「んー?……………」

一夏がオレの無事を確かめようとして言葉を掛けるが途中で息詰まる。なんだ? と思ったオレは現状を確認する。

一夏の顔が異様に近かった。

鼻の頭があと数センチで当たってしまいそうなくらい。しかも、ちょうど一夏がオレを押し倒したような状態だ。ここがムードのあ

る場所で恋人同士ならここでキスの一つでもするのだろう。生憎オレ達はそんな間柄ではないし、真っ昼間からそんな不埒な事をする気は無い。

だが、他の女性がコイツに気を取られる理由がなんとなくわかってしまった。

「な、何をしてますの？」

「「おわっ!？」」

いきなり、声を掛けられてオレと一夏はバツと瞬時に離れる。その時間は一秒もかからない。天燕で光速移動は出来るが生身でこれほど早く動ける事にビックリした。

「い、いやゝセシリア。……………今このウサミミを」

キイイイイン……………ドカ ン!

一夏が声を掛けて来たセシリアに言い訳をしようとしてた時だった。突然、空から高速でなにかが向かって来たと思えばいきなり激しい轟音が当たりに響く。そして、先程地面に埋まっていたウサミミがあつた場所にソレが地面に突き刺さつたのだ。

「……に、にんじん……………?」「」

その場にいた皆が同じ言葉を漏らす。目の前に落ちて来たのはイラストチックなデフォルメにんじん。あの人を考えそうなことからわからんが、良い趣味とは言えない代物だ。

「あつはつはつ！ 引つかかったね、いっくん！ ツンチャン！」

パカツと真つ二つに割れたにんじんの中から笑い声とともに登場したのはやはり篠ノ之束だった。

「やー、前はほら、ミサイルで飛んでいたら危なくどこかの偵察機に撃墜されそうになったからね。私は学習する生き物なんだよ。ぶいぶい」

なら常識を学習して欲しい。などと言っても無駄なので心の中だけにとめておく。

「お、お久しぶりです、束さん」

「うんうん。おひさだね。本当に久しいねー。ところでいっくん。篝ちゃんはどこかな？ さっきまで一緒だったよね？ トイレ？」

「えーと………」

「まあ、この私が開発した篝ちゃん探知機ですぐみつかるよ。じゃあね、いっくん。ツンチャンは後で連絡するね！」

などと言いついて残してすったーと走り去ってしまふ。ちなみに篝ちゃん探知機は束さんのトレードマークであるあのウサミミだったらしい。ズバリ篝が去った方向に耳が動き、それに従って束さんは篝の後を追って行ったのだ。

「い、一夏さん？ 今の方は一体………」

「束さん。篝の姉さんだ」

「え……ええええっ！？ い、今の方が、あの篠ノ之博士ですか！
？ 現在、行方不明で各国が探し続けている、あの！？」

「そう、その篠ノ之束さん」

セシリアが驚くのも無理も無い。何せあの世界の理を変えてしまった張本人があんな奇天烈な人だと誰が思うだろうか。大抵の人が本当にあの人がISを開発したのかと疑ってしまう。

しかし、なんでこんな所に来てるんだ？ あ、そうか。アレを届けに来たのか。

「ツバメ？ どうしましたの？」

「んー？」

「先程からボーとしてましてよ？」

「そう？」

「それに、顔も少し赤いですし……」

「赤い？」

セシリアに言われて両手で自分の頬を触ってみる。確かに、オレの顔は少し熱を帯びていた。体調は今朝から万全だったので調子は悪くない。風邪を引いたって事は無さそうだ。太陽の熱にでもやられたか？

「大丈夫か？　なんなら部屋まで送るけど？」

「だ、大丈夫っ！　平気だよ！　さっ！　アタシ達も海に行こっ！」

一夏がオレの肩に触れようとした瞬間。反射的にそれを避けてしまい「あっ」と内心思った。自分でもなぜこんな事をしてしまったのかが解らない。身体が勝手に反応してしまったのだ。

一夏も「え？」と言わんばかりの顔をしてオレの事を見ていた。なんとなく、それが気まずくて、オレはセシリアの腕を引っ張り、無理矢理その場から退散することにしたのだ。

「（ヤバいな……この感情は……）」

だから、オレは芽生え始めた感情を押し殺すことにした。

第二十三話 誤解

「あ、織斑君だ！」

「う、うそっ！ 私の水着変じゃないよね！？ 大丈夫だよね！？」

「わ、わゝ。体かつこいゝ。鍛えてるねゝ」

「織斑くん、あとでビーチバレーしようよゝ」

「おー、時間があればいいぜ」

さて、男子更衣室で水着に着替えた俺はちょうど隣の更衣室から出て来た女子数人と出会ってそのまま浜辺へ向かう。

「あちちちっ」

海に来るのも何年かブリの俺としては、この感触は懐かしくもあり楽しくもある。素足で感じる砂浜の熱にややつま先立ちになりながら、波打ち際へと向かう。

「（それにしてもツバメの奴どうしたんだろ？）」

準備運動をしながら、ふと先程のツバメの態度を思い出してしまふ。

いくら寝ている彼女にイタズラをしたからといってあそこまで嫌われてしまうとは……。でも、そうしたら噛みついたのはわざとなるのか？ いや、とにかくツバメが来たら後で謝ろう。

「い、ち、か~~~~~っ！」

おう？ って、のわっ！？

「あんた真面目ねえ。一生懸命体操しちゃって。ほらほら、終わっ
たんなら泳ぐわよ」

いきなり俺に飛び乗ってきたのは、鈴だった。

ちなみに着ているのはスポーティーなタンキニタイプ。オレンジ
と白のストライプで、へそが出ている奴。何とも活発そうなイメー
ジである。

ってか、しゅるりと俺の体を駆け上がるんじゃない。

「あっ、あっ、ああっ！？ な、何をしてますの！？」

と、言ってやって来たのはセシリアとツバメだった。セシリアの
手には簡単なビーチパラソル。ツバメの手にはシートとサンオイル
を持っていた。

セシリアは鮮やかなブルーのビキニ。腰に巻かれたパレオがちょ
っと優雅で格好いい。ツバメは残念ながら水着の上にパーカーを着
ておりどんな水着かわからない。

「なにつて、肩車。あるいは移動監視塔」

「じっここよ」

「そりゃそうでしょ。あたし、ライフセーバーの資格とか持ってな
いし」

「うーん、そう言われるとそうか」

「でしょ？ まあ、溺れている子がいたら助けるけどね」

「わ、わたくしを無視しないでいただけます!？」

おおう、ついつい鈴と上下で会話してしまった。

「とにかく！ 鈴さんはそこから降りてください!」

「ヤダ」

「な、なにを子供みたいな事を言っ……!」

セシリアがざくつ！とパラソルを砂浜に刺す。なんか知らないが怒りがこもってる。ちなみに、ツバメはサッサと黙って手にしていたシートを広げて、パラソルの日陰へと日光から非難していた。

「なにになに？ なんか揉め事？」

「つて、あー！ お、織斑君が肩車してる!」

「ええっ！ いいなあっ、いいなあ〜!」

「きつと交代制よ!」

「そして早い者勝ちよ!」

騒ぎを聞き付けた女子が何を勘違いしたか俺に肩車してもらおうと詰めかけてくる。

「り、鈴。降りろ。誤解が広まる」

「ん、まあ、仕方ないわね」

よつ、と俺から飛び降りる鈴。ひらりと手の平で着地して、そのまま前方返りで起立。すげえ、猫みてえ。

「鈴さん……………？　今のはいささかルール違反ではないかしら……………」

セシリアはぴくぴくと引きつった笑顔を浮かべている。ってか、ルール違反ってなんだ？

ちなみに俺は、やってきた女子に「そんなサービスはしません」と説明するので忙しい。

ええい、鈴のせいだ。

「そんなこと言って、どうせセシリアだって一夏になにかしてもらうんでしょ？　じゃあいいじゃん。ねえ？」

「いえ、何もしてもらわないんだ。じゃ、あたしが　」

「し、してもらいますわっ！　一夏さん、さっそくサンオイルを塗ってください！」

「……………え！？　……………」

もう少しで誤解だと説得できそうところで、セシリアの言葉に女子が声を揃える。ア……………何でそんな大声で言うんだ。

「私サンオイル取ってくる！」

「私はシートを！」

「私はパラソルを！」

「じゃあ私はサンオイル落としてくる」

塗ってあんならわざわざ俺の手間を増やすなよ。ああ、すでに海にざぶざぶ入って行ったよ。

「コホン。そ、それでは、お願いしますわね」

しゅるりとパレオを脱ぐセシリア。なんだかその仕草が妙に色っぽくて、ついついドキッとしながら視線を反らしてしまう。

「え、えーと……背中だけだよな？」

「い、一夏さんがされたいのでしたら、前も結構ですわよ？」

「いや、その、背中だけで頼む」

「でしたら」

いきなりセシリアは首の後ろで結んでいたブラの紐を解くと、水着の上から胸を押さえてシートに寝そべる。

「さ、さあ、どうぞ？」

「お、おう」

やばい、色々とはずかしくなってきた。セシリアを直視できない。

「じゃ、じゃあ、塗るぞ」

「ひゃっ!? い、一夏さん、サンオイルはすこし手で温めてから塗ってくださいな」

「そ、そうか、悪い。なにせこう言った事をするのは初めてなんで……すまん」

「そ、そう。始めてなんです。それでは、し、仕方がないですね」

ん? セシリアの声がちょっと嬉しそうに聞こえるのは気のせいだろうか?

とにかく、俺はセシリアに言われた通りに手に付けたサンオイルを揉むように温め、改めてセシリアの体に塗っていった。

「ん……。いい感じですね。一夏さん、もっと下の方も」

「せ、背中だけでいいんだよね?」

「い、いえ、せっかくですし、手の届かないところは全部お願いします。脚と、その、お尻も」

「うえっ!?!」

いやいやいや!! 脚はともかくお尻は不味いだろ!

「……………って、あれ？」

「あ、いい感じですよ」

突然のことだった。横で大人しくしていたツバメが俺からサンオイルを奪い、自分の手と鈴の手に付け、それをセシリアに塗り始めたのだ。

「なんだか動きが巧みになりましたわね？」

そしてセシリアは、そのツバメと鈴が自分の体にサンオイルを塗っているとは気付かず、なんだかうつとりし始めていた。

傍から見ていればなんだか面白い光景だった。実際、俺を含めた周りの女子も口を押さえて笑いを堪えていたのだ。

うげえ、手に付けてたサンオイルが口に！

「い、一夏さん？ その、そろそろお尻の方を……………」

うわっ。まだ、俺が塗っていると思ってるのか。ってか、どんだけお尻に塗ってもらいたんだ？

チラリとツバメと鈴の方を見ると目をキラんと不気味に光らせ、ニヤリと三日月のように口を歪め笑い、手をワキワキさせている。

なんとなく、やる事が想像つくぞ。

ガシッ！ むにゅ

「ひゃー！ い、一夏さん！ そんなに強くしないでください」

「「「あ」」」

怒って体を起こすセシリア。そうすると、体から離れていた水着はそのまま下に落ちてしまったのだ。生憎、大事な所は見えなかったものの、セシリアは耳まで真っ赤になってうずくまる。

「「あー……ごめん」」

「い、い、今更謝ったって……鈴さん！ ツバメ！ 絶対に許しませんわよ！」

「「うん、じゃあ逃げる。またね」」

妙に息が合った二人。行動も一緒であればセリフも全く同じなのは驚かされる。

グイッ！

そして、そんな息の合った二人が俺の両腕を掴みその場から退散するのであった。

「つて、おい！ 俺まで巻き込むな！ ああ、まったく……セシリアすまん！ その、見えてないから、な？」

「な、なっ……………！」

さらにボツと赤くなってしまったセシリアは、振り上げた拳をどうにもできずにそのままの格好で固まってしまう。

ああ、後でちゃんと謝っておこう。でないと後が怖い。

「イカン……調子に乗ったな……」

セシリアにイタズラして、鈴と一緒に一夏を連れて退散したオレは二人と別れてビーチから少し離れた岩場へとやって来ていた。まあ、この場所に来たのは気分だ。なんとなく、一人になって頭を冷やしたいと思ったのだ。去り際に一夏が何か言いたそうだったが……まあいいや。落ち着いてから聞き出そう。

「こんなつもりじゃなかったんだけどな……」

セシリアと一夏が一緒にいるのを見て、面白くないと思った。それ故にあんなイタズラをして邪魔をしたくなってしまったのだ。しかし、冷静になって考えてみれば自分はなんて事をしてしまったのだろうと自己嫌悪になってしまう。

せつかく押し殺そうとした感情なものにな……。

「どんなつもりだったんだーい？」

「わひゃっ!!」

不意に背後から声を掛けられて、変な声を出して驚いてしまう。

「た、束さん……」

「やつほ〜！ ツンチャン！ 皆のアイドル天才科学者篠ノ之束さんだよ〜」

「先ぶりですね。箒にはもう会ったんですか？」

「それがね〜。会った瞬間にどこに隠してたのか真剣を振り回して来たから逃げて来たの〜」

「は、ははは……」

なんだその状況。もはや笑うしかないぞ。

「それにしてもツンチャン？ しばらく見ない間に乙女の顔になったね？」

「はあ？」

「なんかね〜。恋する乙女って感じだよ？ もしかして、いつくんに惚れた？」

「なっ なっ なっ！？」

「おお〜！ その反応！ まさしくそれだね。いや〜ツンチャンもついにいつくんの魅力に堕ちてしまいましたかあ〜。いいね〜いいね〜！ でも、私は箒ちゃんのことを応援しているから協力はできないなあ〜」

「ちょ、ちょっと！ 何勝手な事を言っているんですか！？ そんな

な訳ないじゃないですか!？」

「ん〜? 違うの?」

「だってあの一夏くんですよ!？ 優柔不断で八方美人! 変な所で気が利くのには人の気持ちに対しては鈍感で唐変木! 朴念仁ならぬ朴念神ですよ!！」

「ツンチャン……だいたい言っていることの意味が一緒だよ?」

ぐっ……………確かに。

「まあ、その話はまた今度詳しく聞くとして」

「一生聞かないでください」

「ええ〜。お姉さんコイバナと恋話しようよ〜」

「はあ……………」

だめだ。ここで色々ハッキリさせないとこの人は変な誤解をしたままなんらかのアクションを起こしてしまいそうだ。

いや、誤解はしてないか。う〜ん、よくわからん。

「よく解らないんです。今の自分の気持ち。始めは、筈のいる世界が守りたくて、彼女が悲しませないようにしたくて、一夏くんも守ってました。…………でも、織斑先生に女を磨けとか、年相応の事をしろとか言われたりしたら色々考えちゃって…………で、一夏くん、事を変に意識しちゃうんです」

「そつか……ありがとう。私との約束とはちょっと違うけど、守ってくれてたんだね」

「ついでみたいなもんですけどね」

「それから、もう一つありがとう。ツンチャンが篝ちゃんと親友でよかったよ」

いつものふざけた調子ではなく、東さんはオレに向かって深々とお辞儀をした。本当の感謝をオレに向けて来たのだ。

この人もこういう事をするのだと少し驚く。まったく普段の様子では想像出来ない事だった。

「むっ、何か失礼な事を考えてる？」

「そんな事はないですよ」

うおっ、それでいて妙に鋭い。

……あ、そつか。そう言う事なんだ。

「アタシは篝も大好きですけど、一夏くんの事も同じぐらい大好きになっちゃったんです」

篝はオレに居場所をくれた大切な人だ。そして、一夏は十年以上の時を共に過ごして、知らず知らずの内にオレにとって欠けてはならない人になったんだ。二人がいて、初めてオレの居場所が出来るんだ。

だから、箒も一夏も他の人に取られたくないと思ってしまったんだな。

「ツンチャンは私みたいに欲張りなんだね」

「そうですね。独占欲は強いほうですね」

「ふふっ……」

「ははっ……」

「「あははははははは！」」

誰もいない海辺の海岸。オレ達の声は岩場に打ちつけられる波の音に負けないぐらいに辺りに響いた。

「……………」

篠ノ之束の襲撃を見事に返り討ちにした篠ノ之箒は暗い表情をしてビーチから離れた岩場へとやって来ていた。

「…………すこし、大胆な水着だったか？」

自分で選んでおきながら、今更後悔をする。選んだ水着は白いビキニタイプ。かなり肌の露出面積が広く、もはや下着となんら変わらないようなものだった。

さすがに、こんな格好で人前、特に一夏の前に出るのは勇気がいる。だから一人で人気の無い場所へやって来てしまったのだが。

「これじゃ意味が無いだろ……………」

「それにしてもツンチャン？　しばらく見ない間に乙女の顔になったね？」

「ん？」

一人で落ち込んでいると不意に声が聞こえて来た。しかも、聞き覚えのある声だ。

「姉さん？」

そつと岩影から声のした方を覗いて見るとそこには姉さんとツバメの姿があった。私は二人で何を話しているのだろうと思い、聞き耳を立ててしまう。

「なんかねー。恋する乙女って感じだよ？　もしかして、いつくんに惚れた？」

「!？」

姉さんの言った言葉を聞いて耳を疑った。

「なっ なっ なっ!？」

「おおー！ その反応！ まさしくそれだね。いやーツンチャンもついにいつくんの魅力に堕ちてしまいましたかあ。いいねーいいねー！ でも、私は篝ちゃんのことを応援しているから協力はできないなあ」

「ちょ、ちよつと！ 何勝手な事を言っているんですか!? そんな訳ないじゃないですか!？」

「ん？ 違うの？」

「だってあの一夏くんですよ!? 優柔不断で八方美人！ 変な所で気が利くのには人の気持ちに対しては鈍感で唐変木！ 朴念仁ならぬ朴念神ですよ!!」

ツバメは必死に姉さんの言った事を否定しているが、アレは本気で否定しているようには見えなかった。

「（…………ツバメは一夏の事が好き？）」

その事実を知って、私の頭の中は真っ白になり、色々な疑念が頭に浮かぶ。

今まで自分の事を応援してくれていた親友が同じ人を好きになっていた。だとしたら、私は今までツバメになんて酷い事をしてきていたのдарう。そんな素振りを見せなかったとは言え、私はツバメを

今まで苦しめてしまったのではないのだろうか。

「……………ツバメ」

ポツリと彼女の名前を呟いて、私はその場を後にしてしまった。
もちろん、この後二人が何を話していたかは私は知らない。

第二十四話 紅い剣と蒼い翼

『なんかね。恋する乙女って感じたよ？　もしかして、いつくんに惚れた？』

不意にその言葉が頭をよぎる。

現在の時刻は七時半。臨海学校に来たIS学園の生徒は大広間で旅館で用意してくれた料理を食べている所である。そんな中、篠ノ之箒は目の前に出された料理に手を付けず、ただ短いため息を吐いていた。

「（ツバメも一夏が好き……………）」

ツバメと姉との会話を不本意ながら立ち聞きしてしまっただけの言葉が頭から離れない。

「（私は…………ツバメの事を何も知らなかったのだな）」

今思い返せば、私はツバメに関する話を聞いたことがあまりない。悩みにしろ、私が一方的に打ち明けて、ツバメはそれを黙って聞いて後押ししてくれる。いつしかそれが当たり前になっていて、私もそれに甘えてしまっていた。

「（それで親友とは笑えるな……全部ツバメに押し付けて、自分だけが楽をしていたとは……）」

ツバメは私の話を聞いてどう思っていたのだろうか？ 鬱陶しく思っただろうか？ そんな事は考えたくはない。だが、それを否定できる確証が持てない。

私はあまりにもツバメの事を知らな過ぎた。

「（でも、負けたくない。たとえ、親友でも……負けたくない）」

「」

夕食が終わった後、旅館の風呂を浴びてオレは部屋に帰って来ると同室のセシリアが上機嫌に何か支度していた。

「セシィ、どこか行くの？」

「ええ。ちよつと」

「あーあ、せっかく織斑君と遊ぼうと思って色々用意してきたに、織斑先生の部屋じゃあねえ……」

上機嫌なセシリアとは裏腹に同室の女子達はどんよりと暗いオーラを纏っていた。ちなみに、用意したものはトランプにウノ、花札、人生ゲーム、そして男子の（あるいは女子の）憧れことツイスターゲームである。

ってか、ツイスターってまだあったんだな。

「あ~~~~。せっしーがえっちい下着つけてる〜」

そんな中、いつも半開きの目だが、なぜか観察力と洞察力に長けたのほんさんがそう告げる。その言葉を聞いて、さすがのセシリアもギクリとしてしまった。

「なにっ！？ 脱がせ脱がせえ〜！」

「剥け〜。身ぐるみ置いてけ〜！」

「きゃああああっ！？ やっ、やめっ……………引っ張らないで〜！」

女三人集まれば姦しいとはよく言った物だな。セシリアの身ぐるみがどんどん剥がされてゆく。

「わ。本当にエロい下着つけてる……………」

「えろ〜。えろ〜」

「なになに、勝負下着？ 織斑君のところに行けないのにそんなの着ちゃって」

「まあまあ。セシリアつたらおませさん」

口ぐちに好きな事を言いながら、最後に声を揃える女子一同。

「セシリアはエロいなあ」

「え、エロくありません！ こ、これは、その、身だしなみ……
そう、身だしなみですわ！」

顔を真っ赤にしながら反論するセシリア。

だが、もみくちゃにされ乱れた浴衣からあらわになっている黒い下着が見え隠れしているので説得力がまったく無い。いや、マジでエロい。

「はあ……ホラ、セシィ。行くとこあるんでしょ？ 浴衣直して早く行ってきたら？」

「そ、そうでしたわ！ では、皆さん後ほど！」

見るに見かねたオレがそう言うときセシリアはそそくさと乱れた浴衣を直して部屋を退場。その際他の女子達がセシリアを追撃しようとするが、一応阻止する。でないとこの追い剥ぎ集団が調子に乗ると思ったからだ。

「う……ヤツクの所為でせしーに逃げられた」

「はいはい。………それでは皆さん出かけましょうか」

「え？」

「セシイが風呂上がりだと言うのにあんなにキメ細かく化粧をして、おまけに勝負下着まで付けていた。ならば、そのお相手は誰か？ 気にならない？」

まあ、想像はつくのだが。

「なるほど」「」

「では、参りましょ」

そんな訳でオレ達はセシリアの後を追跡することにした。

「ヤックゥ。ここって……………」

「まあ、案の定だね」

セシリアの後を追って、彼女が入って行った部屋の前にオレ達はある。そしてそこは教員用に用意された部屋だった。つまり……………。

「織斑君と会うために自ら鬼門をくぐるとは……………セシリア、恐ろしい子！」

「でも、どうする？」「これじゃ、どうしようにもないよ？」

「そうだね。帰る？」

「あ、なんか声が聞こえる」

「なにになに？」

それぞれが小声でどうするかを決めようとしていると部屋の中から話声が聞こえてきた。なのでオレ達は中でどんな話がされているのかを扉に耳を当てて聞くことにした。

「お前ら、あいつのどこがいいんだ？」

聞こえて来た声は織斑先生の物だった。

「わ、私は別に……以前より腕が落ちているのが腹立たしいだけです」

「（あれ？ この声は箒？）」

「あたしは、腐れ縁なだけだし……」

「（鈴もいるのか？）」

「わ、わたくしはクラス代表としてしっかりしてほしだけです」

「（こちらはセシリアっと……）」

なんとなく、聞こえた会話から中でどんな話がされているのかが想像出来た。現在部屋の中にいるのは織斑先生、箒、鈴、セシリアと声が聞こえないがシャルロットとラウラもいるのだろう。皆、一夏を想う面々が勢ぞろいしている。

「これって織斑先生が織斑君について聞いてるのかな？」

「ってか、今現在織斑君はこの部屋にはいないってこと？」

「「ならば！」」

それは脱兎の如く、素早い行動だった。

聞き耳を立てていた面々がその場を離脱。部屋に一夏がいないのならばここ以外のどこかにいると踏んで、それを探しに行ったのだ。そして発見し次第、部屋に連れ込んで王道のツイスターゲームを繰り広げるつもりだろう。

「ヤツクは行かないの？」

「…………アタシはもうちょっとここにいる」

「そ〜？　じゃ、私達はおりむー探してくるね〜」

他の女子に遅れて相変わらずの移動速度でのほほんさんもその場を去って行く。オレはちよつと中で繰り広げられる会話が気になったのでその場に残ることにした。

「まあ、あいつは役に立つぞ。家事も料理もなかなかだし、マッサ―ジだってうまい。というわけで、付き合える女は得だな。どうだ、欲しいか？」

「「「「く、くれるんですか？」」」」」

「やるかバカ」

「『『『『ええ』……』』』」

「女ならな、奪うくらいの気持ちで行かなくてどうする。自分を磨けよ、ガキども」

たぶん、部屋の中の織斑先生は楽しそうな表情をしながらそう言っているのだろう。オレもその言葉を聞いて内心で力無く笑っていた。

「（奪うくらいの気持ち、か……）」

自分の中で芽生えた気持ちが渦を巻く。心臓も普段より早鐘で鳴り、胸が少しだけ苦しくなった。

「（……罪悪感。とはちょっと違うか。昼間東さんに言っておきながらこれじゃ格好悪いよな）」

なんとなく、その場にいたくないと感じたオレは静かにその場を後にすることにした。

臨海学校二日目。今日は午前中から夜まで丸一日ISの各種装備

試験運用とデータ取りに追われる。特に専用機持ちは大量の装備が
まっているのだからさあゝ大変。

のだが……………。

「ちーちゃ……………ん!!」

突然の来訪者。

ずどどどど！ と砂煙を上げながらやって来る人影によって取
りかかろうとしていた作業が中断される。

「……………束」

「やあやあ！ 会いたかったよ、ちーちゃん！ さあ、ハグハグし
よう！ 愛を確かめ ぶへっ」

そして、織斑先生は飛び付いて来た束さんを片手で顔面を掴み、思いつき指が食い込ませていた。

「うるさいぞ、束」

「ぐぬぬぬ……相変わらずの容赦無いアイアンクローだねっ」

しかし、そんなアイアンクローを物ともせずに束さんはその拘束から脱出。今度は箒の方を向いて笑顔になる。

「やあ！」

「……………どうも」

「えへへ、こうして会うのは何年ぶりかなあ？ って、昨日会ったけど。でも、おっきくなっただね、箒ちゃん。特におっぱいが」

がんっ！

「殴りますよ」

「な、殴ってから言ったあ……。し、しかも日本刀の鞘でえ叩いた！ ひどい！ 箒ちゃん！ ひどい！」

頭を押さえながら涙目になってうつたえる束さん。そんなやり取りを見ている他の皆さんポカンとして眺めている。

しかし、あの箒が持っている日本刀はどこから出て来たのか疑問に思っただけだろうか？

「ツンチャーン！ 皆私に冷たいよう！ お姉さん悲しい！」

そして、今度はオレに抱きついて来る束さん。いくらオレがISスーツを着ているとは言え、この炎天下で人が抱きついて来られると暑い訳で……。

「はいはい。とりあえず暑いので離れてください」

とりあえず、引き剥がす。

「ツンチャンも冷たい！ 暑いとか言っておいて冷たいっ！」

別に面白くねえよ。

「一夏、あの人って………」

「ん？ あー、篠ノ之束さん。箒のお姉さんだ。セシリアは昨日見ただろ？」

「ええ」

「あの人がISを開発した天才………」

束さん知らない面々はその奇天烈なキャラを目の辺りにして啞然としていた。

「さて、皆の愛を確かめた所で早速本題に入ろうではないか！」

もはや周りの人達のことなどお構いなしに話を続けて、束さんはびしっと直上を指さす。そして、それと同時に空で何かが光を放つ

た。

ズズーンッ！

空で何かが光を放った瞬間。何かの金属の塊が束さんの真後ろに落ちて来た。

しかも、二つだ。

そして、その落下して来た二つ金属の塊に割れ目が入り、四方に壁が倒れる。

「まず、こちら！ これぞ箒ちゃん専用機こと『紅椿』！」

「これが、私の……専用機」

金属の塊から出て来た紅いIS。箒はそのISを見て真剣な表情になっていた。が、その表情はどこか浮かれているようにも見えた。

「そして！ こちらがツンチャンのために作った新しい天燕の装甲だよー！」

「……………」

もう一つの金属の塊から出て来たのは箒の紅椿とは対極的なカラーである蒼いIS装甲。

部分的ではあるが天燕と比べて一周りも大きい。いや、これが本来のISの大きさであり、天燕自体が小さ過ぎたのだ。

「紅椿は接近戦闘を基礎に万能型に調整してあるから、フィッティングとパーソナライズが終わればすぐに箒ちゃんに馴染むよ。あと自動支援装備もつけといたから！ で、ツンチャンの方は今まで送

られてきた天燕の稼働データを元に私が再設計したの〜！ パツケ
ージ化されてるから取り付けはすぐに終わるよ！ じゃ、早速やる
うか！ まずは箒ちゃんの方から。ツンちゃん手伝って」

束さんに呼ばれてオレは彼女の元に向かう。箒もそんなオレの後
に続いて紅椿に乗り込み、装着した。

箒が紅椿に乗り込んだのを確認すると束さんは自分とオレの目の
前にディスプレイを投影させ、二人で膨大なデータを処理するため
コンソールを指で素早く叩き始めた。

「（うわっ……………紅椿のスペックが他のISと比べ物にならねえ…
…………）」

バラッと空中投影されたディスプレイに表示されたデータを見て
呆れる。なんだってこんなハイスペックを簡単に作り出してしまう
のだろう。この人は…………。

「はい！ 終了〜！ さすがツンチャン。久々の共同作動だと仕事
が早くて大助かりだよ」

ものの数分。束さんの終了宣言により紅椿と箒のフィッティング
とパーソナラズ作業が終了した。箒は試しに紅椿の動作確認をする
ため、腕を軽く動かしている。

初めて動かす機体なのに妙に馴染むと言ったような顔だ。無意識
なのか小さく微笑んで嬉しそうにしている。

「じゃ、今度は天燕にこれを取り付けちゃおう〜！ ツンチャン、
天燕出して」

「はい」

そして今度はオレの番。束さんに言われるがまま、オレは天燕を展開される。

「じゃ、ちょちょいの！ ほい！」

パアッと天燕の装甲が光に消えて束さんが作った装甲が新しく量子変換されていく。新しく取り付けられたのは腕、脚、そして可変式ウイングの代わりにアンロック・ユニットのスラスタ―。ボディ部分も少しだけ形状が変わっていた。

「はい！ こつちも終了！ さすが私だね。じゃ、試運転も兼ねて二人で模擬戦でもしてみてよ」

「「えっ？」」

相変わらずの早さで全ての作業を終えると束さんがとんでもないことを言い始めた。

試運転でいきなり模擬戦って……貴方はどこの白い悪魔ですか？

「私は構いません」

「え？ 箒？」

しかし、意外にも箒はその提案を承諾。

「よし、箒ちゃんは乗るみたいだしさっさとやっちゃおう！」

しかもオレの意思はお構いならしい。
オレは短くため息を吐き、渋々その提案を承諾することにした。

姉さんからもらった私の専用機『紅椿』。

それは私の思っていた以上に動き、その機動性に私は妙な高揚感を感じた。そして、今その紅椿を纏い、私は空を飛翔している。打鉄とは比べ物にならない加速性。全スペックが現行ISを上回るだけの事はある。

だが、そんな紅椿の機動性に付いてくるISの姿が背後にあった。

「（全スペックがこっちが上とは言え、やはり付いてくるか………ツバメ）」

背後には新しく作られた装甲を纏った天燕の姿があった。

「行け！！ 羽斬っ！！」

ツバメはセイバービットである羽斬を射出する。だが前見た時とは違い、羽斬の数は二本から六本となっていた。

「甘い!!」

襲い掛る羽斬を私はかわし、左手に持っていた『空裂』からわれを横一閃に振る。

そして、斬撃と合わせて帯状の攻性エネルギーが解放たれ、羽斬を四本撃破した。

「やれる！ この紅椿なら！」

この力なら私には誰にも負けないと確信した。

これでツバメと対等でいられる。

今まで離されていた距離が一気に縮まった。遠かった存在がより近く感じられる。

『すごいね、その紅椿』

突如、ツバメからのプライベート通信が紅椿に入る。

「ああ、この力なら……誰にも負けない」

『第?』

「私は……お前にも負けられない！ 行くぞっ！」

イグニッションブーストにも負けられない程の加速。その加速を使っ

てツバメに突っ込む。空裂ともう一つの刀『あまつぎ雨月』を交差させて斬りかかった。

ギンッ！！

「ぐうっ！！」

しかし、そんな斬撃でツバメはやられることはなく、二本の羽斬を手にしてそれを受け止めた。

鏑競り合いになった状態。そんな状態になってツバメの顔が苦痛に歪む。やはり、力はこちらの方が上なのか、ツバメは私の力に押し負けていた。

「ふふっ……………」

思わず小さく声を出して笑ってしまった。

自分が相手を圧倒していることになんとも言えない衝動にかられる。

だが、それが心地よくも感じた。

『二人共そこまでだ』

だが、そんな時に横やりが入る。

千冬さんからの通信で私はハッとなり、腕に入っていた力を緩めた。

『緊急事態だ。すぐに戻って来い』

第二十五話 銀の福音

オレ、箒、一夏の三人は現在旅館から二キロ離れた先にある空域を高速飛行していた。

『もうすぐ、目的のポイントだ。一夏、気を引き締めろよ』

『お、おう!』

そして白式を纏った一夏を背に乗せた状態の箒の声は妙に浮かれていたような気がした。

『なあ？ ツバメ、ちょっといいか？』

「どうしたの？」

『箒の奴、妙に浮かれてないか？』

一夏も箒の異変に気付いたのか、その事を心配してオレにプライベート・チャンネルで話し掛けて来た。

「まあ、専用機を持ってちよつと気持ちが悪いついてるんだよ。アタシ達でうまくサポートしよ」

『あ、ああ……』

『見えたぞ!』

二人でそんな話をしていると、箒がオープン・チャンネルでそう

言う。ハイパーセンサーで幕が指摘した方向を見ると一機のISが見えた。

少し時間が戻って旅館の大座敷。そこにオレ達専用機持ちと教師陣が集められた。

照明を落とした薄暗い室内に、ぽうつと大型の空中投影ディスプレイが浮かんでいる。

「では、現状を説明する。二時間前、ハワイ沖で試験稼働にあったアメリカ・イスラエル共同開発の第三世代型の軍用IS『銀の福音』シルバリオン・ゴスベルが制御下を離れて暴走。監視空域より離脱したとの連絡があった」

いきなりの織斑先生の説明に一夏だけが面食らったような顔をしている。どうやら、説明を受けても現状を理解出来ないでいるらしい。

「その後、衛星の追跡の結果、福音はここから二キロ先の空域を通過することがわかった。時間にして五十分後。学園上層部からの通達により、我々がこの事態を対処することになった」

淡々と説明を続ける織斑先生。

「教員は学園の訓練機を使用して空域および海域の封鎖をおこなう。

よって、本作戦の要は専用機持ちに担当してもらつ。それでは作戦会議を始める。意見のある者は挙手するように」

「はい」

早速、手を挙げたのはセシリアだった。

「目標ISの詳細なスペックデータを要求します」

「わかった。ただし、これらは二カ国の最重要機密だ。けして口外はするな。情報が漏洩した場合、諸君には査問委員会による裁判と最低でも二年の監視がつけられる」

「了解しました」

そして、セシリアをはじめ代表候補生の面々と教師陣に相手のデータが開示された。

……………おいおい、待てよ。

「こ、これって……………ツバメの天燕と一緒にじゃ」

データを見てそう呟いたのはシャルロットだ。開示されたデータには所々オレの天燕と似たスペックデータが表示されている。まあ、さすがにエルドライブまでは搭載されていないが。

「そうだ。相手は八雲の天燕と同等のスペックを持っている。詳細はこちらも把握していなが……………八雲、心当たりはあるか？」

「……………ありません。あるとすれば天燕の開発段階で情報が何らか

の原因で漏洩したか、先月の学年別トーナメントで機体を公開して
ますから観客の中にいた誰かが勝手に機動データを採取したぐらい
の可能性しかありません」

「……………なるほど」

織斑先生の質問にオレが答えると織斑先生はその答えで納得して
くれたようだった。たぶん、この原因が何なのかを予想していたの
だろう。

「とにかく、今回の作戦では一夏を要とした一撃必殺で行く」
「ニアプローチ・ワンダウン」

「え？　なんで俺？」

いまだに現状が把握できていないのか、なんとも間抜けな質問が
された。織斑先生はそんな一夏を見て軽いため息を吐いて告げる。

「この中で最も高い攻撃力を持っているのは白式の零落白夜だけだ。
今回のような作戦には重要不可欠なんだ」

「じゃ、じゃ！　俺が作戦に参加するってこと！？」

「確かにこれは訓練ではない。実戦だ。もし覚悟がないなら、無理
強いはいしない」

そう言われた一夏は少しだけ悩むように俯き、そして再び視線を
織斑先生に戻す。

「やります。俺が、やってみせます」

その表情は真剣で覚悟を決めた表情であり、男前だった。その場にいた専用機持ちのメンバーは若干顔を赤くしているのは言うまでもない。

オレもだがな。

「よし。それでは作戦の具体的な無いように入る。現在、この専用機持ちの中で最高速度が出せるのは……………篠ノ之と八雲の機体か」

先程の模擬戦を見ていた織斑先生がオレ達を見てそう言う。他の皆もそれで納得したような顔をしている。

あれ？ 流れるにオレも作戦に参加するのか？ 皆さんのような代表候補生でも無ければ戦闘のプロでもありませんよ？ ってか、構成メンバーが自分を含めて不安過ぎる！？

「では出撃メンバーは織斑、篠ノ之、八雲の三名。今から三〇分後に作戦開始とする。各員、ただちに準備にかかれ！」

「……………了解！……………」

ああ……………もう、いいや。

「加速するぞ！ 目標に接触するのは十秒後だ。一夏、集中しろ！」

「ああ！」

目標をハイパーセンサーで捉えるとスラスターと展開装甲の出力をさらに上げる筈。背中に俺を乗せたまま、その速度は凄まじく、高速で飛翔する福音との距離をぐんぐんと縮めていく。

「うおおおおおっ！」

零落白夜を発動させ、俺は同時にイグニッション・ブーストを行って一気に福音との距離を詰めた。

「なっ！？」

しかし、福音は最高速度のままこちらに反転、後退の姿となって身構える。

「敵機確認。迎撃モードへ行こう。《銀の鐘》^{シルバー・ベル}、稼働開始」

オープン・チャンネルから聞こえたのは抑揚のない機械音声だった。だが、そこから明らかな『敵意』が感じられる。

嫌な予感がする。

そして、悪い予想は数秒と経たずに現実になった。ぐりん、と。いきなり福音が体を一回転させ、零落白夜の刃をわずか数ミリの精度で避ける。それは慣性制御機能を基準搭載しているISであっても、かなり難易度の高い操縦だ。

「やっぱり、天燕みたいに動くか!？」

スペックがツバメの天燕に似ていたため、予想はしていながら改めてすごいと思った。

「一夏! もう一度だ!」

「おうつ!!」

再度、俺は箒の背に乗り、福音に向かって斬りかかる。だが、またひらりひらりと紙一重で回避されてしまう。

「二人共! 気を付けて!! そいつには」

俺が大振りの一太刀を浴びせよとしていると、ツバメの声が聞こえハツとする。

銀の翼。

スラスターでもあるものの、装甲の一部がまるで翼を広げるように開く。

「ヤバッ!？」

それは天燕と同じ蒼燕そのものだった。原理は違うが高密度に圧縮されたエネルギーで、凄まじい連射速度で光の弾丸が撃ち出される。無理矢理体を捻らせてなんとかそのエネルギー弾をかわすが、背後から凄まじい爆発音が聞こえた。

あれをもろに喰らっていたらと思うと背筋がゾツとする。ツバメの

呼び声が無かったら確実に着弾していたな。

「ツバメ！ 牽制してくれ！ 俺と箒で左右から攻める！！」

「了解！」

俺がそう指示するとツバメは新しく身に付けたアンロック・ユニットの翼を左右に広げ、福音と同じエネルギー弾を撃ち放つ。

福音はその攻撃を複雑な回避行動でかわし、最高速度で逃げ回る。

「「でああああああつ！！」」

だが、福音の回避はツバメの蒼燕で限定され、先回りしていた俺達がお互いの刀を構え福音を斬りつけた。

「くっ！ 浅いか！？」

しかし、それが決定打とはならず、わずかに零落白夜がかすった程度であった。

「La……………」

甲高いマシンボイス。その刹那、ウイングスラスターはその砲門を全て開かれ、全方位に向けて一斉射撃された。

「やるなっ……………！ だが、押し切る！！」

箒が光弾の雨を紙一重でかわし、迫撃をする。

これで隙ができた。

「！」

けれど俺は福音とは真逆の、直下海面へと全速力でむかった。

「一夏！？」

「一夏くん！？」

二人共なぜそんな事をと言いたげに俺の名前を呼ぶ。

イグニッション・ブーストと零落白夜。その両方を最大出力で行い、一発の光弾に追いついてそれをかき消した。

「何をしている！？　せつかくのチャンスに　」

「船がいるんだ！　海上は先生達が封鎖しているはずなのに！」

「密猟船！？　こんな時に！！」

ツバメの一言であの船の正体を知る。けれど、だからといって見殺しにはできない。

キュウウウン……………。

俺の手の中で《雪片式型》の光の刃が消え、展開装甲が閉じる。
……………つまり、エネルギー切れだ。

最大にして唯一のチャンスを失い、そして作戦の要もたった今無くした。

「馬鹿者！　犯罪者などをかばって……………そんなやつらは

「！」

「箒——！」

「ッ ！？」

「箒、そんな そんな寂しい事を言うな。力を手にしたら、弱いヤツのことが見えなくなるなんて……………どうしたんだよ、箒。らしくない。全然らしくないぜ」

「わ、私、は……………」

明らかな動揺をその顔に浮かべ、それを隠すように手で覆う。その時に落とした刀が空中で光の粒子へと消えたのを見て、俺はギリとした。

「（今のは、具現維持限界だ……………！ まずい ！）」

具現維持限界 リミット・ダウン

つまりそれは、エネルギー切れ。

そして今は、IS学園のアーリーナではない。実戦だ。

「箒iiiiiiii——！」

刹那、福音はエネルギー切れを起こした箒に砲口を向け、光弾を撃ち出す。

「ぐあああああ——！」

箒をかばうようにして抱きしめた瞬間。あの爆発の光弾が一斉に俺の背中に降り注いだ。

エネルギーシールドで相殺しきれない程の衝撃が何発と続き、しみしと骨が挙げる軋みが聞こえた。同時に悲鳴を上げる筋肉、アーマーが破壊され、熱波で肌が焼けていく。

だが、それも長くは続かなかった。

「第ー！　一夏くんを抱えて離脱！　一旦引いてー！」

エネルギーフィールドを展開したツバメが俺と福音の間に入って、光弾を防いでくれていたのだ。

「一夏っ、一夏っ、一夏あっー！！」

「う……………あ……………」

「天燕ー！！　アンロック・ユニットを分離ー！！　紅椿に装着させてここから離脱させろー！！」

ツバメがそう告げると天燕についていたアンロック・ユニットが背中から離れ、紅椿の背中に取り付けられる。

「ツ、ツバメー！！　何をするー！？」

「……………ごめんね。アタシが時間を稼ぐから……………一夏くんをお願いね」

「ま、待て！？　　ッ！？」

グイッと何かがつっ張られるような感覚が体を襲った。俺は力無く、第にもたれかかっている状態だったのでどうすることも出来ない

い。しかし、箒は必死に俺を落とさないように気をつけながら何かを叫んでいる。

あれ？ 何も聞こえない？ 箒がこんなに口を動かしているのに何故かその声が俺には聞こえなかった。そして、視界がどんどん暗くなってきた、俺は気を失ってしまった。

「行っただか……」

オレは箒達がこの空域を離脱したことを確認するとエネルギーフィールドを解き、福音の光弾をかわす。

《いいの？ アンロック・ユニットを外しちゃって……ボディに着いているエルスドライバーだけだと高速戦闘は七〇%も落ちるよ？》

「いいよ。それでアイツ等が無事なら……クソっ！ 何が守るだよ……」

一夏がやられたのを見てオレは激しい怒りがこみ上げて来る。オレは目の前にいる福音を睨みつけた。

箒を傷つけようとしたアイツが憎い。

一夏をあんな目に合わせたアイツが憎い。

そして、何も出来なかった自分に腹が立つ。

「敵機A、Bの離脱を確認。……………優先順位を変更。現空域からの離脱を最優先に」

「させるかよ」

逃げようとする福音。機体を反転してスラスターを開こうとした時だった。

オレは、エルスドライブを稼働させ、瞬時に奴の背後に周り、手にした羽斬で斬り付けた。一夏の零落白夜程の威力は無いが、今の確実にダメージが入った。その証拠に福音のスラスターから火花が散っている。

「デメエは許さねえ。オレの大切なもんを傷つけたんだ。落とし前をつけさせてもらう」

《ツ、ツバメ……………怖いよ》

「ああ、久々にキレてんだ。ちょっと、我慢してろよ」

だが、頭の中はクールに……………でないと判断が鈍る。軽く深呼吸をして、気持ちを落ち着かせる。怒りは力に変えてぶつければいい。

「エルスドライブをフルで稼働させたらどれくらい持つ？」

《全ての機能を回せば……………二十秒が限界。戦闘をすれば五秒あるか無いかだよ》

十分だ。それだけあれば倒せる。

た状態だった。

「敵機の攻撃方法を検出。多方向からの高速斬撃によるもの……対処方法を検討」

しかし、オレの攻撃は終わらない。フルドライブ状態には制限がある。だから、一気に決めさせてもらう！

「次で決める！！」

最後の一撃を決めようと、光速状態のまま福音に大振りの一太刀を浴びせよとした時だった。

ガンッ！！

「なっ！？」

福音は両手で羽斬のエネルギー刃で手を焼かれながら受け止めたのだった。そして、福音のスラスタが広がりエネルギーを凝縮させる。

オレはあまりの事に驚愕してしまい、一瞬判断が遅れた。素早く、羽斬を手放して距離を取っていれば問題は無かったのに、それが出来なかった。

「（ハイパーセンサーで捉えられない速度だぞ！？　なんで……まさか！？）」

パターンが読まれた。別に光速での攻撃方法にパターンなど作った覚えは無いが、どうやら無意識に作ってしまったらしい。そして福音はそれを見破り、オレを捉えたのだった。

そして、福音に捕まったことでフルドライブ状態のエルスドライブが停止してしまう。

「ぐっ！！　しまっ
」

《ツバメ！！》

ドドドドドドドン！！

至近距離で放たれる銀の鐘。それをかわす術はオレには無い。だから、放たれた光弾は全てオレに直撃し、爆散する。

「がはあっ……………」

《ご、ごめん……………ツバメ……………残り、のエネルギー使っても、これが限、界だよ》

「……………生きてる、だけでも……………感謝だよ」

《ご、めん……………ね……………》

最後に謝罪して天燕の言葉が聞こえなくなった。ISコア事態は壊れてはいないが、損傷が酷く、機能が停止したのだろう。

かろうじてシールドエネルギーが光弾の威力を弱めてくれたが、それでも全身に痛みが走る。天燕のISアーマーはボロボロに碎け、所々が海面へと落ちていった。オレの体は熱波に肌は焼かれ、肉が裂けて血が止まらない。

ものすごく痛い。

ああ、これが痛みなんだ。誰かを守るってこんなに痛い想いをしなくちゃいけないのか。ちょっと嫌だな。でも、一夏はこの痛みを負って筈を守ったんだよね…………。

「ハハ…………メチャメチャ、スゲエじゃん」

一人で感心していると、福音は訳のわからないと小さく首を傾げた。そして、福音は捉えていたオレをゴミでも捨てるかのように空中で手を離す。もはや飛ぶ力も無く、オレは地球の重力に引っ張られるように下へ落ちていく。

「（ああ…………守るとか言っというて、負けちゃ意味無いよな。おまけにこの高度で落ちたら確実に死ぬだろ…………）」

落下中、意外にも冷静でいられた。

「（ごめん、皆。ごめん、一夏くん）」

そして、心の中で大切な仲間に謝罪する。

「（…………ごめんね。筈）」

そこでオレの意識はテレビを消したみたいにブツツリと途切れた。

第二十六話 力を求めた理由（前書き）

やっと書けた…………。

更新速度が著しく落ちて来てます。

たぶん、これから週に一、二話が限界。

それでは、二十六話です。どうぞ！

第二十六話 力を求めた理由

それは篠ノ之箒がまだ小学校二年の時だった。

「（ああ……………またか……………）」

学校の放課後。教室で帰る支度をしていた箒は同じクラスの男子達が無意味に突っかかってくるのであった。

「おい、男女。今日は木刀持ってないのかよ」

「……………竹刀だ」

「へっへ、お前みたいな男女には武器がお似合いだよ」

「……………」

「しゃべり方も変だもんな」

確かに、他の女子と比べれば私の喋り方は変なのかもしれない。でも、別に気にする事はなかった。家は道場であり、師範である父は私の憧れだった。いつか、父のような強い人になりたいと思っている。

「やーいやーい、男女」

「……………うつせーなあ。てめーら暇なら帰れよ。それが手伝えよ、ああ？」

そんな時折、教室を真面目に掃除していた一人の男子が不機嫌気味に私に突っかって来る男子にそう言い放つ。

同じ道場の門弟である織斑一夏だ。

「なんだよ織斑、お前こいつの味方かよ」

「へっへっ、この男女が好きなのか？」

内心「はぁ……」とため息を吐いた。何とも度し難いからかいだと思ったのだ。

「邪魔なんだよ、掃除の邪魔。どっか行けよ。うぜえ」

「へっ。まじめに掃除なんかしてよー、バツカじゃねーのおわっ!？」

思わず私は突っかって来る男子の胸ぐらを掴んでいた。

「まじめにすることの何がバカだ？ お前らのような輩よりははるかにマシだ」

「な、なんだよ……何ムキになってんだよ。離せっ、離せよ」

胸ぐらを掴まれた男子は女である私の腕力にもどうする事も出来ず、ただもがく。それでも鍛えているのだ。そこら辺の男子にも負けない自信はある。

だが、それとは別に残りの二人はまだニヤニヤと笑みを浮かべていた。

「あー、やっぱりそうなんだぜー。こいつら、夫婦なんだよ。してるんだぜ、オレ。お前ら朝からイチヤイチヤしてんるんだろ」

「だよなー。この間なんか、こいつりボンしてたもんな！ 男女のくせによー。笑っちま　　うわあっ！」

突然だった。胸ぐらを掴んでいる男子を突き放してくだらないことを言っている男子に殴ろうかと考えた時だった。その男子に大量の水が振りかかったのだ。一瞬、何が何だかわからなかった私は思わず胸ぐらを掴んでいた手を緩めてしまう。

「あー、わりい。バケツの水変えようかと思ったらさあゝつまずいた」

水を掛けられた男子の後ろには別の男子がいた。織斑同様に髪は短く、スポーツウエアに短パン、左肩にはスポーツバックといかにも活発そうな奴だった。

「なっ！　何するんだよ！」

「おっ、十円見つけ」

「え？　わっ！」

水を掛けられた男子は怒りまかせにそいつに殴りかかろうとする。だが、そいつは床にある十円を拾おうと身を屈め、それをかわし、勢い余った男子はそのまま床に転がってしまう。

「よ、よくもやったなー！」

「ああ？ 勝手に転んだんだろ？」

「う、うるせっ！」

そして今度は二人がかりでそいつに殴りかかろうとする男子。さすがに私と織斑もヤバいと思い、止めに入ろうとする。

だが、一步踏み出した所で私達の脚は止まった。

「~~~~~ッ！！」

「があ……痛てえ、痛てえよ」

殴りかかろうとした男子二人は……その……自分の股間を押さえて兎のように飛び跳ねていた。

事の経緯はこうだ。まず、スポーツウェアのそいつが床に転がっているモップを足で踏み、グリと回し、柄を立てせるとそれが襲い掛る男子の股間にヒット。しかも柄の先だ。そして、もう一人はそいつが体を一回転すると持っていたスポーツバックがその遠心力で勢いをつけ、それも股間にヒットしたのだ。

その場にいた織斑は何故か股間を押さえ、何もされていないのに痛そうな顔をしている。

何故だろう？

「うわっ…………痛そうだな。まあーわざとじゃないんだ。許せ」

「て、てめえ……………」

「じゃ、帰るわ」

そう言ってそいつはその場を後にする。

「ま、待て！」

「ああ？」

そいつが教室を出てすぐ、私は不思議とそいつの後を追いかけて呼び止めていた。

「あ、その……すまなかった」

「ああ？ なんの話だよ？ オレは何もしてないぜ？ アレは事故だ」

「いやいや、あんな偶然あるもんかよ」

いつの間にか織斑もその場にいた。どうやら、私と一緒にコイツの事が気になったらしい。

「まあーなんだっていいけど……」

「お、お前名前は？」

「ハア？ 聞いてどうするんだよ？」

「なんとなくだ」

「ハア……ツバメ。八雲ツバメだ」

短いため息の後、そいつが名乗ってくれた。

「そっちは？」

「え？」

「オレが名乗ったんだからそっちも教えろよ」

ああ、確かに。これは失態だったな。

「篠ノ之箒だ」

「しののの？　なんか言いづらい名字だな」

「う、うるさい！」

「んじゃ、箒でいいか？」

「い、いきなり呼び捨てにするな！？」

異性に名前を呼ばれて思わずドキッとしてしまった。驚きのあまりに声をあげてしまう。

その、名前で呼び合うのはもっと友好関係を築いてだな。何より、織斑以外の異性とそんなに話したことも無くて……その織斑にすら名前で呼ばれた事も無いのに、いきなり名前を呼ばれると対応に困るのだ。

だが、次にツバメの一言で私と一緒にいた織斑はさらに驚いてしまった。

「いいじゃねえか。女同士なんだし」

これが、私とツバメの初めての出会いであった。

そんな出会いから数日後。学校が終わっていつも通りに家の道場で修行を終えた私と織斑は掻いた汗を流すため、蛇口で顔を洗っていた。

「しかし、ビックリだよな。あのツバメって奴女だったんだな」

「ああ……………」

「でも、格好良かったな！一人で複数をやっつけちまうんだから！」

織斑はシュツシュツと自分の拳を突き出し、ツバメの事を語る。それを見て、私は少しだけムツになった。

「お、お前はああ言う奴の方が……………好きなのか？」

「へ？」

思わずしてしまった質問に織斑は訳のわからないと言ったような顔をしている。自分でもなんでこんな質問をしてしまったのかわからなかった。

「うん……好きって言うより、憧れるって感じだな。千冬姉みたいで！」

「そ、そうか」

両手を組み、首を捻りながら答える織斑。その答えを聞いて私は内心ホッしてしまった。

「別に悪く言うわけじゃないけど。男女ってツバメみたいな奴の事を言うのかな？ だったら、篠ノ之の方がかわいく見えるな」

「なっ！？ か、かわいいだと！！」

「ん？ ああ、かわいいと思うぜ？ だから前してたりボンしろよ。似合ってるから」

「ふ、ふん！ 私は誰の指図も受けない！」

不意打ちな織斑の言葉に思わず反発してしまった。

「よし！ 俺は帰るわ。またな、篠ノ之」

「だ」

「うん？」

「私の名前は箒だ。いい加減、覚えろ。大体、この道場は父も母も姉も篠ノ之なのだから、紛らわしいだろう。次からは名前で呼べ。いいな」

「わかった。俺は割と、身近なやつのは指示は受ける。 じゃあ、一夏な」

「な、なに？」

「だから、名前だよ。織斑はふたりいるから、俺の事も一夏って呼べよな」

「う…………む」

「わかったか、箒」

「わ、わかつている！ い、い、一夏！ これでいいのしろ！？」

「おう、それでいいぜ。…………指図じゃなくて頼みならちゃんと聞いてくれるんだな」

「ふ、ふん！」

織斑…………一夏の名をしてたまらなく恥ずかしくなってしまう。自分の表情は見えないが、きつとほんととも言えない表情になってしまっているのだろう。だから、一夏にそんな表情を見られないように私はその場を後にした。

しかし、この胸の高鳴りは一体何なのだろうと思う。今まで感じたことの無い感情に私は戸惑い、悩んだ。

この抱いた感情が恋だと知るのはまだ先のことであった。

「……………」

旅館の一室。壁の時計は四時前を指している。

ベッドで横たわる一夏は、もう三時間以上も目覚めないままだった。

その傍らに控えている筈は、もうずっとこうしてうだなれている。リボンを失って垂れた髪が、まるで今の気持ちまで表わしているようだった。

「作戦は失敗。以降、状況に変化があれば招集する。それまで各自現状待機しろ」

ツバメに無理矢理取り付けられたアンロック・ユニットが私達を旅館まで運ぶと、アンロック・ユニットは光の粒子となり消えていった。

すぐさま、ツバメの元へ戻ろうとするがそこで千冬さんに引き留められ、そう告げられた。

「待ってください！ ツバメがつ！ ツバメがまだ！！」

「八雲は……墜ちた」

「……………え？」

「お前達を逃がした後……………福音の攻撃で海に墜ちた。現在教師部隊を向かわせて搜索している」

辛そうな顔をしながら千冬さんはさらに告げる。力強く握られた拳は爪が食い込んで血が出ていた。

そんな千冬さんを見ていたら私は何も考えられなくなってしまい、言われるがまま指示に従ってしまった。

「（私のせいだ……………）」

不意に思い出した一夏とツバメとの思い出。ツバメは初めて会った頃に比べて随分女らしくなった。一夏は相変わらず今と変わらない笑顔の絶えない奴だった。

だが、そんな二人は今はいない。目の前で寝ている一夏は、ただ力無く横たわっているだけだ。いつも側にいてくれたツバメもいない。私達を逃がして、どうなってしまったのだろうと考えてしまう。

「……………私が、すっかり、しない、から、二人共！！」

目から大粒の涙が流れた。

「私は……………どうして、いつも……………」

両手で顔を覆い隠し、自分の過ちを後悔する。

力を手に入れるとそれに流される。
それが使いたくて仕方なくなる。
わき起こる暴力への衝動を、どうしても抑えられなくなってしま
う。

「私はもう…… ISには……」

一つの決心をつけようとした時。

《そんなの、だめだよ》

不意に声が聞こえた気がした。

え？　　と伏せていた顔を上げるがここには私と一夏以外はいない。そして、自分の視界がグニヤリと回った。始めは涙で視界が霞んだと思ったが、違う。視界が回ると同時に強烈な眠気が私を襲ったのだった。

箒が目覚ますとそこは一夏の寝ている部屋では無かった。

目の前に広がる光景は室内などでは無く、夕陽が眩しく輝き、ススキが一面を覆う平原。なぜここにいるのだろうと疑問に思っていると素早く、なにかが私の目の前を横切った。

それを目で追うと、それは一羽の燕だった。

燕は翼を休めること無く、延々と自分の周りを飛んでいる。まるで、付いて来いと言いたげに。私はその燕の案内で自分の足を進める。生い茂るススキをかき分け前へ前へと進んだ。

《…………… やつと来たか》

燕を追ってしばらく進むといつの間にか目の前に一人の男が立っている。

その男を現すなら『侍』の一字で十分だろう。

服は時代劇で見えるような着物であり、腰には二本の刀。顔は男が被っている笠の所為で見えない。

だが、私はこの男を知っているような気がした。

延々と飛んでいた燕はその男を見つけると近くまで飛び、その男の肩で翼を休める。

《すまぬ。お主だけが頼りだったのな。…………… 道は開けておいた。あやつの元への道だ。行け》

男がそう言うのと翼を休めていた燕が再び空へ飛翔する。そして、私は飛んで行った燕が見えなくなるまでそれを見ていた。燕が見えなくなると私は再び侍風の男へと視線を戻す。

「…………お前は誰だ？」

《……………》

「……………」

《なぜ、力を求めた？》

侍風の男に質問をするが、男は何も答えず、逆に質問をしてきた。その問いを聞いて、私は内心ズキッとなにか痛みのような物が走る。

《なぜ、力を求めた？》

再度、男が問う。

「…………置いてかれる気がした」

《なにに？》

「私の周りにある全てから」

私の周りには力を持っている人が大勢いる。力の無い私は、そんな人達から守られてそれに甘えてしまっていた。だがそんな自分が許せなくて、自分が重荷になるのが嫌だった。

だから、力が欲しかった。

《だが、力を得てお前は何をした？》

「……………友を。大切な人を傷つけた」

《そして、力を手放すと?》

「力を得ると、理性を抑えられなくなる。ただ、無意味な暴力になつてしまう。だから、私に、力を持つ資格は無い……………友を傷つけてしまう力など、いらない」

《哀れだな》

「……………」

《力を得て、それを極めようとすれば、成功と失敗が問われる》

そう言つて男は腰に差している刀を鞘ごと引き抜き、私に向かつて放り投げた。いきなりの事だったので私は慌てて、刀を落とさないようにそれを受け止める。

《それは人の命を落とすための武器だ。重かるう?》

真剣を握るのは初めてではない。その重さを理解し、私は毎日コレを振っている。だが、男から渡された刀はやたら重く感じられた。

《だが、それは人の命を救う重さでもある》

「え?」

《その重さを背負え。何に向かつてそれを振るべきか、理解しろ》

「……………振るう相手を間違えたら?」

《お主の周りにはそれを導いてくれる者達がいるのではないのか？》

その言葉を聞いて一夏やツバメの事を思い出す。

いつも側にいてくれて、私の背中を押してくれた。そのおかげで私は一步一步前へ進むことが出来た。

ああ、だんだんと思い出して来た。

私が本当に力を欲した理由を。

《もう一度問う。なぜ、力を欲する？》

そんな物、もう決まっている。

「誰ひとり欠ける事無く、大切な人達と共に歩む道を切り開くためだ」

力を得た仲間たちと同じ場所に立つには力が必要だった。だが、そんな事も忘れて、私は力に溺れた。暴力を振るい、内に潜むドス黒い感情を発散させることで満足してしまっていたのだ。

本当は、道に迷ったら一緒に足を止め、一緒に悩み、一緒に答えを導き出すようにしたかった。

《良き答えぞ。…………願え、求めよ。さすれば我が力くれてやる》

男がそう言うと、世界が眩い光に包まれた。

次に筭の意識が覚醒したのは一夏の寝ているベッドの上だった。

のそつともたれかかっていた上半身を起こし、周りを見る。なんの変哲もない旅館の一室。最後に時計を見てからさほど時間は経っていないかったが、どうやら怪我した一夏を看病していたら寝てしまったらしい。

「（……………なにか、夢でも見ていたような）」

とても大切なことを思い出させてくれた夢だった気がする。だが、その内容が思い出せない。それを思い出そうとすると胸の内がもやもやとスツキリしない何かが渦巻く。

だが、ハッキリしたことはある。

左手首に巻かれた金と銀の鈴を見つめ、右手で優しくそれを握りしめた。

「……………一夏、ちょっと行つて来る」

今度は寝ている一夏の手を握り、それだけを呟く。

先程までの後悔はもうない。胸に決意を抱き、私は部屋を後にした。

第二十七話 再戦

ぞあ……。ぞああん……。

「（こっちは……？）」

遠くから聞こえる波の音に誘われるまま、織斑一夏はどこともつかぬ砂浜の上を一人歩いていた。

足を進めるたび、さく、さく、と足下の白砂が澄んだ音を立てる。

足の裏に直接感じる砂の感触と熱気。海から届く潮の匂いと波の音。

それに心地よい涼風と、じりじりと照りつける太陽。

そんな風景の中、俺はとある物を見つけた。

「（燕？）」

一羽の燕が俺の頭の上を飛んでいたのだ。だが、風を捉えていないのか、その飛び方には若干不安定であった。

そして、力尽きた燕は白浜へと落ちる。

俺はその墜ちた燕の元へ駆け出し、白浜の熱気にやられないようにその燕を抱きかかえた。

「 。 」

この燕をどうしようかと考えている時。ふと、歌声が聞こえた。

とてもきれいで、とても元気な、その歌声。

俺はなんだか無性に気になって、声の方へと足を進める。

さくさく。

さくさくと。

足下の砂が軽快に鳴る。

「ラ、ラ、ラララ」

少女は、そこにいた。

波打ち際、わずかにつま先を濡らしながら、その子は踊るように歌い、謡うように踊る。

そのたびに揺れる白い髪。輝き、眩いほどの白色。

それと同じワンピースが、風に撫でられて時折ふわりと膨らんで舞った。

「ピィ……………」

その少女の歌声に反応して手の中にいた燕が動き出す。

必死に飛ぼうとその翼を広げる。

「飛びたいのか？」

言葉なんか通じる訳が無い。だけど、燕は俺の声に反応してこちらを見つめてくる。

「よし！」

俺はぐつと腰を落として、燕を包む手を空に向かって振り上げた。その勢いで手の中にいた燕が空中に放り投げられる。

空中へ投げられた燕は重力に従い、砂浜に落ちそうになる。が、途中で風を捉え、空高く飛翔した。

飛翔した燕は少女の周りを旋回しながら飛ぶ。それに合わせて少女も歌う。

俺はただただぼんやりと目の前の光景を眺めていた。

「目標発見。照準固定。発射っ！！」

海上二メートル。そこで静止していた『銀の福音』は、まる

で胎児のような格好でうずくまっている。

それを見つけた箒達はすかさず先制攻撃。ラウラの大型レールカノン『ブリッツ』が火を吹いた。超音速で飛ぶ砲弾は福音の頭部に直撃、大爆発を起こす。

遠距離からの砲撃・狙撃に対する備えとして、四枚の物理シールドが左右と正面を守っていた。砲戦パッケージ『パンツァー・カノニア』を装備したシュヴァルツェア・レーゲンによる砲撃だった。

「本当にいたはね。なんで、あんたがアイツの居場所を知ってたのよ？」

「紅椿に奴の座標データが送られていた」

「ふん……まあ、いきなりやる気出してあーだこーだ指図するから何かと思えば」

「なんだ？ 嫌なら来なくてもよかったのだぞ？」

「なっ！？ 誰が嫌だなんて言ったのよっ！？」

「おい！ 作戦中に私語をするな！！ 来るぞっ！！」

砲撃を続けるラウラの後ろで箒と鈴が言い争っているとそのラウラが二人を怒鳴りつけた。鈴は怒鳴られたことでシュンとなるが、箒は鋭い視線で福音の方を見る。

「（敵機接近まで……………四〇〇〇……………三〇〇〇　くっ！
予想よりも速い！」

ラウラの放つ超音速の砲弾をかわしながらこちらに向かって来る福音。五〇〇〇あった距離はアツと言う間に一〇〇〇まで縮まり、ラウラへと迫った。

「（だが、墜とされたあいつ等のためにもっ！！）」

ラウラも福音を近づけさせないために福音に向けて砲撃を放つが、エネルギー弾によって半数以上が撃ち落とされた。

「ちいつ！」

砲戦仕様はその反動相殺のために機動との両立が難しい。

対して、機動力に特化した福音は三〇〇メートル地点からさらに急加速を行い、ラウラへと右手を伸ばした。

避けられない！

しかし、ラウラはニヤリと口元を歪めた。

福音の腕が目の前まで迫って来た時。ラウラも福音に向かって右腕を伸ばし、それと同時に福音の動きがピタリと止まる。

A I C。

シュヴァルツエア・レーゲンに備わっている機能の一つ。その網に福音は捕まってしまったのだ。ラウラは福音が止まったことを確認すると両肩に着いている二門の大型レールカノンを福音に向ける。

轟ッ！！ と轟音を響かせ、福音は至近距離から砲撃を直撃し、吹き飛ばされた。

「セシリア！！」

ラウラの砲撃を喰らった福音が吹き飛ばされると、突然上空から垂直に振り降りて来た機体によって弾かれた。

それは青一色の機体 ブルー・ティアーズによるステルスモードからの強襲。

六機のビットは通常とは異なり、その全てがスカート状に腰部に接続されている。しかも、砲口は塞がれており、スラスターとして用いられている。

さらに手にしている大型BTLレーザーライフル『スターダスト・シューター』はその全長が二メートル以上もあり、ビットを機動力に回している分の火力を補っていた。強襲用高機動パッケージ『ストライク・ガンナー』を装備している。

「速い！？ でも 」

セシリアは、時速五〇〇キロを超える速度下での反応を補うため、バイザー状の超高感度ハイパーセンサー『ブリリアント・クリアランス』を頭部に装着している。そこから送られてくる情報を元に最高速からいきなり反転、福音を捉えて 。

「ツバメの方がもつと速かった！！」

引き金を引いた。スターダストから放たれるレーザーが福音に直撃する。

『敵機Bを確認。排除行動へと移る』

「遅いよ」

セシリアを脅威と感じた福音はそれを排除しようとセシリアに向かつて飛ぶ。だが、今度は背後からシャルロットのショットガン二丁による接近射撃を背中^にに浴び、姿勢を崩した。だが、それも一瞬のことで、すぐさまシャルロットの事を三機目の敵機と認識し、シルバー・ベルを放つ。

「おっと。悪いけど、この『ガーデン・カーテン』は、そのくらいじゃ落ちないよ」

リヴァイヴ専用防御パッケージは、実体とエネルギーシールドの両方によって福音の弾雨を防ぐ。

「一夏やツバメには返しきれない程の借りがあったんだ。それを返すまで負けないよ!!」

防御の間もシャルロットは得意の『高速切替^{ラビットスイッチ}』によってアサルトカノン呼び出し、タイミングを計って反撃を開始する。

『……………優先順位を変更。現空域から離脱を最優先に』

ラウラ、セシリア、シャルロットらの三方向からの射撃に、福音はじわじわと消耗されていく。

そして、全方位にエネルギー弾を放った福音は、次を瞬間に全スラスターを開いて強行突破を試みようとしていた。

「させるかあっ!!」

海面が膨れあがり、爆ぜる。

飛び出したのは真紅の機体『紅椿』と、その背中に乗った『甲龍』であった。

「離脱する前にたたき落とす！」

筭が叫び福音に斬りかかる。

その背中から飛び降りた鈴は、機能増幅パッケージ『崩山』。両肩の衝撃砲が開くのに合わせて、増設された二つの砲口がその姿を現し、計四門の衝撃砲が一斉に火を噴いた。

『！！』

「逃がさない！ 親友を！ 大切な人を傷つけたあんたの罪は重いんだからね！！」

肉薄していた紅椿が瞬時に離脱し、その後ろから衝撃砲による弾丸が一斉に降り注ぐ。しかしそれはいつもの不可視の弾丸ではなく、赤い炎を纏っていた。しかも、福音に勝るとも劣らない弾雨。

そのいくつかが福音に直撃する。

「やりましたの！？」

「まだよ！ くっ！ なんだってあんなに堅いのよ！？」

拡散衝撃砲を直撃してもんなお、福音は止まらない。

『《銀の鐘》^{シルバー・ベル} 最大稼働

開始』

両腕を最優いっぱいに広げ、それと一緒に広がった翼から眩い光^{まばゆ}が爆ぜ、エネルギー弾の一斉射撃が始まった。

「くっ!!」

「箒！ 僕の後ろに！」

前回の失敗をふまえて、箒の紅椿は機能限定状態にある。展開装甲を多様したことから起きたエネルギー切れをふせぐため、現在は防御時にも自発作動しないように設定されている。もちろん、そう設定し直したのは、防御をシャルロットに任せられるからだ。集団戦闘の利点を生かした役割分担。

「それにしても……これはちょっと、きついね」

防御専用のパッケージであっても、福音の異常な連射を立て続けに受ける事はやはり危うかった。

「ラウラ！ セシリア！ お願い！」

「言わずとも！」

「お任せになって！」

後退したシャルロットの代わりに左右からラウラとセシリアが射撃を開始する。

「足が止まればこっちのもんよ！」

そして直下から鈴の突撃。双天牙月による斬撃のあと、至近距離からの拡散衝撃砲を浴びせた。

狙いは、頭部に接続されたマルチススラスター《銀の鐘》シルバー・ベル。

「もらったあああっ!!」

福音のエネルギー弾を浴びながら、しかし鈴の斬撃は止まらない。同じく衝撃砲の弾雨を降らせ、互いに深いダメージを受けながら、ついにその斬撃が福音の片翼を奪った。

「はっ、はっ………! どうよ　ぐっ!？」

片翼になりながらも、それでも福音は崩した体制をすぐに立て直し、鈴の腕へと回し蹴りを叩き込む。蹴りを受けた鈴は一撃で腕部アーマーを破壊され、海に墜ちる。

「鈴!　おのれっ　!!」

箒は両手に持った刀で福音に斬り掛った。

「（獲った　!!）」

そう思った刹那、福音は信じられないことに左右両方の刃を手の平で握りしめる。

刀身から放出されるエネルギーに装甲が焼き切れるがお構いなしに福音は両腕を最大にまで広げる。

刀に引っ張られ、箒が両手を広げた無防備な状態を晒す。そして

そこに、残ったもう一つの翼が砲口を開放して待っていた。

「箒！武器を捨てて緊急回避をしろ！」

しかし、箒は武器を手放さない。

「（……………ここで引いて、何のための……………）」

エネルギー弾がチャージされ、光が溢れる。そして、それは一斉に放たれた。

「（何のための力かつ……！）」

エネルギー弾が触れる寸前に、ぐるんと紅椿は一回転した。

その瞬間、爪先の展開装甲が箒の意志に答えるように開き、エネルギー刃を発生させる。

「たあああああつ……！！」

かかと落としのような格好でエネルギー刃の斬撃が決まる。ついに両方の翼を失った福音は、崩れるように海面へと墜ちていった。

「はっ、はあっ、はあっ……………！！」

「無事か！？」

珍しくラウラの慌てた声を聞きながら、箒は乱れた呼吸をゆっくりと落ち着けていく。

「私は 大丈夫だ。それより福音は 」

「私たちの勝ちだ」と誰かが言おうとしたその瞬間、海面が強烈な光の珠によって吹き飛んだ・

「!？」

球状に蒸発した海はまるでそこだけ時間が止まっているかのようにへこんだままだった

その中心、青い雷を纏った『銀の福音』が自らを抱くかのようにうずくまっている。

「これは……………!？一体、何が起きているんだ……………？」

「!？ まずい！ これは 『第二形態移行』だ！」

ラウラが叫んだ瞬間、まるでその声に反応したかのように福音が顔を向けた。

『キアアアア……………!!』

まるで獣の咆哮のような声を発し、福音は筭たちに襲いかかった。

「なにっ!？」

あまりに速いその動きに反応できず、ラウラは足を掴まれてしまった。

そして切断された頭部から、ゆっくり、ゆっくりと、まれで蝶がサナギからかえ孵るかのように

エネルギーの翼が生えた。

「ラウラを離せえっ！」

シャルロットはすぐさま武装を切り替えて接近ブレードへと持ち替え、突撃する。

けれどその刃は空いた方の手によって受け止められてしまう。

「よせ！ 逃げろ！ こいつは」

ラウラのその言葉は最後まで続かず、福音のエネルギーの翼に抱かれる。

刹那、あのエネルギー弾雨を零距离で食らい、全身をズタズタにされてラウラは海に墜ちた。

「ラウラ！ よくもっ……………！」

ブレードを捨てて、シャルロットはショットガンをコールする。

福音の顔面へと銃口を向けて、引き金を引いた。

ドンッ！！

しかし、その爆音はショットガンによる物では無かった。

福音の胸部、腹部、背部、装甲がまるで卵の殻のようにひび割れ、小型のエネルギーの翼が生えてくる。シャルロットはその迎撃によりショットガンを吹き飛ばされて、一緒に体も吹き飛ばされてしまった。

「な、何ですの！？ この性能……軍用とはいえ、あまりに異常な」

再び高機動による射撃を行おうとしていたセシリア。だが、その眼前に福音が迫る。イグニッション・ブーストに寄る加速。それも、両手両足の計四か所同時着火による爆発加速だった。

「くっ！？」

長大な銃は接近されると弱い。すかさず距離を置いて銃口を上げようとするが、その砲身を真横に蹴られてしまう。

そして、次の瞬間には両翼からの一斉射撃。反撃らしい反撃もできず、まともに攻撃を受けたセシリアは蒼海へと沈められた。

「私の仲間を　よくも！」

急加速によって接近した筈は、続けざまに斬撃を放ち続ける。展開装甲を局所的に用いたアクロバットで敵機の攻撃を回避、それと同時に不安定な格好からの斬撃をブーストで加速させる。

「うおおおおっ！！」

互いに回避と攻撃を繰り返しながらの格闘戦。だが、そんな格闘戦も紅椿がわずかに福音を押し始める。

「（いける！　これならつ　）」

キュウウウウン……………。

「なっ！　また、エネルギー切れだと！？　

ぐあっ！」

その隙を見逃さず、福音の右腕が箒の首をしめる。

そして、ゆっくりとその翼が箒を包みこんでいった。

「（すまない、一夏…………ツバメ…………！）」

ざあ、ざあん…………。

さざ波の音を聞きながら、俺は飽きもせず女の子と燕を眺めていた。

その歌は、その踊りは、なぜだか俺をひどく懐かしい気持ちにさせる。

「（…………あれ？）」

ところが、ふと気がつくと少女の歌は終わっていた。

少女の周りを飛んでいた燕の姿も見あたらない。

踊りもやめて、少女はじいっと空を見つめている。

俺は不思議と思って、少女の隣へと向かった。

ざあ、ざあ、と

波打ち際までやってきた俺を、涼しい水の調べが濡らす。

「どうかしたのか？」

声をかけるが、少女はまだじいつと空を見つめたまま動かない。

俺もなんとなく空を眺めると、ふと少女の声が耳に届いた。

「呼んでる……………行かなきゃ」

「え？」

隣に視線を戻すと、もうそこに少女の姿はなかった。

あれ？

きよろきよろと左右を見るが、もう人影は見あたらない。歌も聞こえない。

「うーん……………」

俺は仕方なく戻ろうと体を反転させる。

すると 背中に声を投げかけられた。

「力を欲しますか……………？」

「え……………」

急いで振り向くと、波の中
膝下までを海に沈めた女性が
立っていた。

その姿は白く輝く甲冑を身に纏った騎士さながらの格好だった。

よく見れば、そんな彼女の肩に先程の燕がとまっている。

「力を欲しますか……………何のために……………」

「ん？ んー……………難しいことを訊くなあ……………そうだな。友達を
いや、仲間を守るためかな」

「仲間を……………」

「仲間をな。なんていうか、世の中って結構色々戦わないといけな
いだろ？ 単純な腕力だけじゃなくて、色んなことでさ」

俺は、いまいち自分の中でもまとまっていけないことなのに、妙に
饒舌に喋っていた。

話しながら、「ああ、俺ってそう思っていたのか」と自分に驚き
つつ、言葉は続いていく。

「そういうときに、ほら、不条理なことってあるだろ。道理のない
暴力って結構多いぜ。そういうのから、できるだけ仲間を助けたい
と思う。この世界で一緒に戦う 仲間を」

「そう……」

「だったら行かなきゃね」

「えっ？」

振り向くと、白いワンピースの女の子が立っていた。

人懐っこい笑み。無邪気そうな顔でじいっと一夏を見つめている。

「その子に付いて行って。あなたが行くべき所に案内してくれる」

女の子がそう言つと燕が再び空を飛び、俺の頭の上を旋回している。

「ああ」

俺がうなずくと、いきなり変化が訪れた。

「な、なんだ？」

空が、世界が、眩いほどに輝きを放ち始める。

その真っ白な光に抱かれて、目の前の光景が徐々に遠くぼやけていく。

夢の終わり、なんて言葉がふいに浮かんだ。

「（ああ、そういえば……）」

あの女性は、誰かに似ていた。

白い 騎士の女性。

「どこだ？ ここは？」

八雲ツバメは教会の礼拝堂の中にいた。

礼拝堂には長椅子が均等に左右に並べられ、奥には巨大な十字架とその下には大きなパイプオルガンがある。そして、自分以外の人間はここにはいない。

つい先程まで銀の福音と戦い敗れたオレは大怪我を負いながら海に落ちてしまったはずだ。だが、体には傷らしい傷は無く、いつの間にかIS学園の制服を身に纏っている。

ああ、自分は死んだのか。と一瞬考えたがどうやらそうではない。それは、オレはこの場所を知っているからだ。正確にはこと似た場所を知っている。

「……………天燕の世界？」

天燕の世界。

ISコア内にある意思なような物が作り出す精神世界。と言った

所か。オレは依然これに似たような体験をしたことがある。

初めて天燕を手にした日。オレはこの世界に呼ばれた。いや、あの時は無理矢理連れて来られたんだっけか？ まあいいや。

「おい！ 天燕！ どこだー？」

とりあえず、ここが天燕の世界であるなら当の本人がここにいるはず。

「ぐすつ…………ぐすん……………」

だが、天燕を探そうとした直後。どこからか女の子の泣き声が聞こえてきた。

「どうした？」

泣き声ができる方に行ってみると、礼拝堂に置かれている長椅子の最前列で女の子が泣いていた。

腰の辺りまで伸びた銀色の長髪。フリルのついた白いドレス。どこかのお嬢様をイメージさせる女の子。オレはそんな女の子の隣に座り、そつと背中を擦った。

《あ、ありがとう…………お姉ちゃんは誰？》

「アタシは八雲ツバメ。君は？」

女の子はまだ涙目でしゃっくり交じりの声だったが、だんだんと落ち着きを取り戻し、自分の名前を口にする。

《

福音。銀の福音

》

第二十八話 鐘の音の導き

礼拝堂。そこでオレは銀の福音と名乗る少女と出会った。

福音はただ泣いている。

泣きながら、福音は謝罪している。

《ごめんなさい…………ごめんなさい…………ごめんなさい》

オレはそんな福音を見て、少しだけ辛い気持になった。

《ごめんなさい…………ごめんなさい…………ごめんなさい》

一夏がやられた時。オレは自分の怒りをこの子にぶつけていたのだと思うと心が痛む。

《どうしても、止められなかったの…………戦いたくないのに、あの人を守りたかっただけなのに、体が言うことを利かなかった…………》

この子は何も悪くなかった。この子も被害を受けていたのだ。

抑えられない何かによって自身を蝕まれ、苦しんでいた。

ただひたすらに自分が見る脅威から何かを守ろうとしていただけなのに。

「……………もういいよ」

オレはそつと福音の体を包み込む。

「君のしたことは許されたことじゃない。でも、君は必死に自分を止めようとしたんだろ？ 君の大切な人を守ろうとしたんだろ？なら、オレは君のこと許すよ」

《う、う、うわああああああああん！！》

礼拝堂内では福音の泣き声だけが木霊する。

罪悪感に押しつぶされ、泣いたのか、罪を許された事が嬉しかったのか、オレにはわからない。

わかるのはコイツにも守る物があつて、自分なりにそれを守ろうとしていただけだったと言う事だけ。

そんな奴をオレはせめる事ができなくて、福音が泣きやむまでオレは彼女を抱きしめた。

私は悪意という闇に吞まれそうになった。

必死に、迫りくる悪意から逃げ、私はここへ逃げ込んだ。

それからただ泣いていた。

私はあの人を見捨ててここへ逃げ込んだ。

私を止めに来た人達を傷つけてしまった。

止めようにも言うことの利かない体。

私は、なにも出来なくて、ただ泣いていた。

《う、ぐすつ……》

「落ち着いたか？」

だが、そんな時に私はこの八雲ツバメと言う人間に出会った。先程の戦いで彼女がどれだけ怒っていたかを知っている。許してもらおうとは思わない。でも、私は謝った。

私が無力であったこと。

あなたとその友達を傷つけてしまったこと。

だがあるうことが、ツバメと言う少女は私の事を許してくれた。

「よしよし。いい子だ」

私の頭を触れる、ツバメの手。

抱きしめた時もそうだが、これが人の温もりというものだろうか。

《くすつ…………ツバメはなんだが男みたいだね》

その優しさが、温かくて、心地よくて、何かから解放された気がした。

「わりいな。普段は猫かぶってるんだ」

《猫ってかぶれるの?》

不思議なことを言う。

だが、私の質問にツバメは少々困った顔をしていた。

「さて、君がここに來た理由を教えてくださいか?」

《ううん。ツバメがここに來たんだよ》

「え?」

《ここは私の世界。残った自我でここを作ったんだけど…………閉じ込められちゃったの》

「ああ…………なるほど、だからか」

《え？》

「似たような所は知ってるんだけど……なんか、違和感みたいなを感じたから」

ISと心を通わせられる。と言ったことなのだろうか？
だが、この人ならもしくは……

《お願い！ ツバメ！！》

「ん？」

《今の私は誰にも止められない。私を止めて！ あの人は助けて！
！》

ツバメなら私の事を止めて、あの人を救ってくれと思った。

「あの人って？」

《ナターシャ・ファイルス。私の操縦者で、私の大切なパートナー》

「お前はとうするんだ？」

《……私はここから出られない。出てしまったら、この体は完全に蝕まれ、暴走を抑えられなくなってしまう。もっと酷い事をツバメ達にになってしまう。だから、なにも出来ない私の代わりに
》

「いやだ」

え？

「それはオレがする事じゃない」

なんで、そんな事を言うの？ どうして、助けてくれないの？

「それはお前がすることだよ」

《え？》

「何かを守ることは人に任せる物じゃない。自分で守って、やっと意味がある物になるんだよ」

《意味がある物？》

「福音はこのままここでジッとしてられる？」

そんなもの………出来るなら、自分であの人を助けたいよ。

《でも、出来ないよ………私にはそんな事………もう、自分で飛ぶことも出来ないんだよ？》

「だったら、オレ達がお前の翼になってやる」

ツバメは私の手を握って、礼拝堂の扉へと歩き出す。

《な、なにをするの!?!》

「何って? ここから出るんだよ」

《そ、そんなのダメだよ! 今、ここを解放したらアレに飲み込まれる!?!》

「なあ、福音。……………オレを、オレ達を信じてくれないか?」

《……………信じる?》

「そうだ。……………飛ぶために翼が必要なら一緒に飛んでやる。勇気が出ないなら手を繋いで一緒にいてやる。助けたい人がいるなら一緒に助けてやる。人もISも一人で出来ないことを一緒にやれば何だってできる」

握られた手は、優しく私の手を包み込んでいる。

だが、ツバメの強い意志はその手を伝わって私の中に流れ込んで来る。

「だから、一緒に行こう!」

ああ、また泣きそうになる。

だけど、今度は後悔して泣くのではない。
嬉しくて、たまらなく嬉しくなって涙が流れてしまう。

《うん!》

私の返事にツバメは笑ってくれた。そして、礼拝堂の扉を開き、

外へと飛び出す。

大きく鐘の音が鳴り響き、私達は暗闇へと身を投じる。

「ぐっ、うっ
」！

ぎりぎりと締め上げられ、圧迫された喉から苦しげな声が漏れる
筈。

第二形態移行した福音によって筈以外のメンバーは撃墜。
最後まで耐えた筈はエネルギー切れによって捕まってしまったの
だ。

福音の手は硬く筈の首を掴んで離さず、さらにはエネルギー状へ
と進化した『銀の鐘』が紅椿の全身を包んでいた。

（これまでか 情けない ）

ぼうつと光の翼が輝きを増していく。

一斉射撃への秒読みがはじまる中、筈の頭の中には昔の笑い合う
一夏とツバメの姿。

会いたい。

一夏に、会いたい。

ツバメに、会いたい。

すぐに会いたい。今会いたい。

ああ、ああ、会いたい。

「いち、か……………ツバ……………メ……………」

知らず知らず、その口からは一夏とツバメの名前を呼ぶ声が出た。

「一夏……………ツバメ……………」

さらに輝きを増す翼に、箒は覚悟を決めてまぶたを閉じる。

『!?!?』

突然、福音は箒を掴んでいた手を離す。

いきなりの出来事に混乱している箒が、瞳を開けた時に見たのは強力な荷電粒子砲による狙撃。それを受けて福音の体は吹き飛んでいた。

「（な、何が起きて）」

戸惑う箒の耳に届いたのは、さっきからずっと願って止まない声だった。

「俺の仲間には、誰一人としてやらせねえ！」

箒の視線には、白く、輝きを放つその機体がある。

そして、その横には

「あ、ああ……………一夏！ ツバメ！」

夜空で蒼い装甲は影となり、月明かりで銀の装甲がより一層強い輝きを放つ機体がいる。

白式第二形態・『雪羅^{せつら}』を纏った一夏と、

天燕第二形態・『斑鳩^{いはるが}』を纏ったツバメ。

私が一番会いたかった二人がそこにいたのだ。

第二十九話 雪羅と斑鳩

箒が福音にやられそうになって、咄嗟に撃った荷電粒子砲が福音を吹き飛ばした。

「（……………よかった。射撃の練習をしてて）」

実は内心ドキドキの俺である。これで箒を巻き込んでしまったらどうしようかと思った。まあ、結果オーライって事で……………

「結果オーライじゃない！！」

ドガツ！！ と隣にいるツバメの拳が俺の脳天を直撃した。つてか、心の声が読まれた？

「イツテエ……………何するんですか？ ツバメさん」

「射線上にアタシがいただろうが！！ アタシごと殺す気か！？」

「いや、それは、その……………箒がやられそうになっていて……………思わず……………」

「思わずで殺されかけたの！？ バカじゃないの！？ ああ、バカでしたね！！ 死にかけてもバカは治らないんですね！！」

「わーわー！ ごめんなさい！！ 本当にごめんなさいって！！」

うう……………酷い言われようだ。一応、ツバメには警告したんだけどな。警告から狙撃までの時間差が短かったか。こりゃ、いかん。

俺、反省。

「はああああ………もういいや。ホラ、篝の所に行ってあげなよ。アタシは他の皆を拾って来るから」

「ああ、ごめん。本当にごめん」

「い・い・か・ら・行・け！」

ゲシッ！ と今度は俺のケツを蹴るツバメ。

よほど御立腹なのか蹴られたケツはかなり痛い。

うーん、なんて格好悪いんだ。せつかく、かつこよく復活劇を決めたと言つのに………。

「い、一夏？」

「ん？ ああ、篝。大丈夫か？」

「あ、ああ」

俺達のやり取りを見ていた篝はキョトンとした顔をしている。

「ごめん。待たせたな」

俺がそう言うのと呆気にとられていた表情が変わり、篝は今にも泣きそうな顔になる。

「うう………よかった………よかった………本当に………」

「なんだよ、泣いてるのか？」

「な、泣いてなどいないっ！」

ぐしぐしと目元をぬぐう簀に、俺は優しく頭を撫でた。

「心配かけたな。もう大丈夫だ」

「し、心配してなどっ……………」

どうも強がりばかりが出てくる様子の簀らしい。俺は頭を撫でながら、ポニーテールではないその髪型がやっぱり気になった。

「ちょうどよかったかもな。これ、やるよ」

「え？」

俺は持つてきていたものを簀に渡す。

「り、リボン……………」

「誕生日、おめでとうな」

「あ……………」

七月七日。今日は箒の誕生日。

「うーん………本当はもっと気の利いたやつでも送ろうかと思ったんだけど。何を送っていいかわかんなくて。せっかくだし、それ使えよ」

「あ、ああ………」

「じゃあ、行つて来る。」

まだ、終わってないからな」

「一夏！」

「ん？」

俺が箒に誕生日プレゼントを渡し、再び福音の元へと飛ばうとした時だった。

箒が俺を呼び止める。

「あ、ありがとう………大事にする」

若干恥ずかしいそうに俯きながら箒がそう言う。そんな箒の仕草を見て一瞬ドキッとしてしまった。普段強気な分、素直な一面を見ると可愛く見えてしまったのだ。

「終わったら、誕生日会でもやるうぜ？ ツバメが色々用意してるみたいだし」

「ああ」

そして、俺は再び福音と向き合い、再び戦場へと舞い戻る。

一夏を箒の元へ向かわせたオレはヤツに墜とされた鈴達の元へ向かった。

「皆さん、大丈夫？」

「つ、ツバメ？」

鈴達はオレの姿を見ると、まるで幽霊でも見ているような表情をしている。

「アンタ！ 大丈夫なの！？ 福音に墜とされたって……………」

「んー？ 墜とされたけど……………アタシはこの通りピンピンしているよ」

とりあず、自分は元気だとピースしてアピールする。

「ひつ……………ふえええん！ バカア！ どれだけ心配したと思って

いるのよー!!」

そして、そんなオレを見て、鈴が抱きついて来た。
泣きながらオレの事をポカポカと叩く鈴。

甲龍の装甲を纏っている所為で地味にそれが痛い。
でも、それよりも仲間にこんな心配を掛けてしまった方がもっと痛く感じられた。

「ごめんね。心配してくれてありがとう」

「でも、本当に良かったですわ」

セシリアも目元に溜まった涙を拭いながら近づいてくる。

「しかし、その姿は……………」

ラウラはオレが纏う斑鳩を見て、不思議そうな顔をしていた。

「ああ、天燕が第二形態になったの」

「だが、その姿は……………福音そのものだぞ」

「元々、天燕と福音は同系統の設計プランで作られた機体だからね。
形が似ててもしょうがない」

ラウラの言う通り、天燕の姿は今の福音と酷似していた。
本当の理由はたぶん、天燕の中にある福音の意思の所為だろう。

「いや、詳しい話は後にしよう。それより今は……………」

他の皆も揃い、ラウラの一言でオレ達はヤツの方を見る。

現在、ヤツは一夏と戦っている。一夏は第二形態となった雪羅のシールドモードで福音のエネルギー弾を無効化している。

「すごい、零落白夜のシールドで攻撃を無効化している……………」

シャルロットは一夏の戦いぶりを見てそう呟いた。

実弾攻撃を持たない福音にとって、零落白夜のシールドほど厄介な物はない。戦況は一夏の方が有利だった。

『ツバメ！！ 福音の全方位攻撃がくる！！』

「了解。任せて！」

福音はエネルギーの翼を回転させながら一斉に開き、全方位に対して嵐のようなエネルギーの弾雨を振らせる。

《 斑鳩、『銀翼』展開 》

ボウツと排出していたエルスの粒子が固まる。

福音と同じエネルギーの翼へと。

現れた銀翼で皆を覆い、弾雨から皆を守る。

「い、これは……………」

「福音と同じ……………」

「でも……………」

「……………うん、綺麗」

弾雨が止むとオレは広げた銀翼を元に戻した。

「じゃ、先に行ってるね」

それだけを言い、銀翼を羽ばたかせ、暴走する福音の元へと飛んで行く。

「（一夏が駆け付けてくれた……………ツバメが無事でいてくれた！）」
箒は心の中で喜んだ。それはもう、嬉しさを飛び越えてしまう程に。

心が躍動する。熱を持って、跳ねる。

そして、戦う一夏とツバメの姿を見て、何よりも強く願った。

「（私は、ともに戦いたい。あの背中を守りたい！）」
強く、強く願った。

ならば、力を貸そう。

「え？」

不意に聞こえて来た声。それと同時に紅椿の展開装甲から赤い光が混じって黄金の粒子が溢れだす。

「これは……………！？」

ハイパーセンサーからの情報で、機体のエネルギーが急激に回復していく。

《 『絢爛舞踏』、発動。展開装甲とのエネルギーバイパス構築……………完了》

項目に書かれているのは単一仕様能力の文字。

「（まだ、戦えるのだな？　ならば　）」

一夏から渡されたりボンで髪を縛り、気を引き締めて福音を見る。

「ならば、行くぞ！ 紅椿！」

赤い光に黄金の輝きを得た真紅の機体は、空へ舞った。

『キヤアアアアアアッ！！』

獣のような雄叫びをあげる暴走した福音だったIS。自分の光翼を最大に広げ、接近するオレをその翼で包み込もうとする。

「おっと、そうはいかないよ」

瞬時にオレは垂直に上昇してヤツの攻撃範囲から離脱。そして、奴を見下ろしながら自分の背中に生えた銀翼を左右に広げる。

《『銀の星光』^{シルバー・シュテル} 最大稼働》

広がった銀翼から複数の光球が形成され、一斉に解放された。

銀の鐘の発展型『銀の星光』。

計三十六門ある砲口から光の線がヤツに襲い掛った。

『！！？』

だが、ヤツは被弾しながらもオレの攻撃を回避するが、それでいい。

「ぜらあああつ！！！」

零落白夜の光刃で斬りかかる一夏。

白式・雪羅のダブルグニッション・ブーストで突撃した一夏はヤツの光翼の片方を切り裂く。だが、もう片方の光翼を切り裂くのは至難の業であり、うまく行かない。一夏を危険と判断したヤツは一気に一夏から距離を取り、エネルギー弾を放つ。

「ぐっ！？ クソ！！」

シールドを展開させてヤツの攻撃を防ぐが、何故か苦しそうな表情をする。どうやら、活動限界が近づいているようだ。

「一夏！」

「箒！？ お前、ダメージは」

「大丈夫だ！ それよりも、これを受け取れ！！」

一夏の元へやってきた箒が一夏の手に触れる。

「な、なんだ…………？ エネルギーが回復！？ 箒、これは」

「今は考えるな！ それよりも、今は」

「だったら皆で協力しましょうじゃないですか」

「「っ、ツバメ!?」」

オレが二人に声を掛けると何故か驚かれた。

「あ、ああ、本当にお前なんだな！ 幽霊とかじゃないんだな！」

そして箒は、オレの姿を見るやいなや抱きついて来た。
声を殺して泣く箒をオレは箒の頭を撫でる。

「ひどいな。ツバメさんは親友を置いて死んだりしませんよ」

「う、うう……………」

「……………心配させてゴメンね。でも、今は」

オレは銀翼を広げて箒と一夏を覆う。

瞬間、オレ達にエネルギーの弾雨が降り注いだ。

「感動の再会に水を差すヤツにはお仕置きが必要だね！」

《 斑鳩、天ノ羽斬を展開》
あまのはねきり

ハイパーセンサーがその情報を表示するとオレの手に二本の光剣が現れる。剣は質量化されていない。エルのエネルギーだけで生成された剣。

「行こう！ 箒！」

「ああ！」

天ノ羽斬を構え、ヤツの元へ飛び出す。それに続いて箒も展開装甲を開放し、後続く。

「「やあああああつ！！！」」

天燕と紅椿の二刀が並び、左右から一断の斬撃を浴びせる。

「「一夏っ！！！」」

「うおおおおおっ！！！」

オレと箒の攻撃を受け、ヤツが体勢を崩した所で今度は一夏が零落白夜の刃を突き立てながら突進した。

「おおおおおっ！！！」

白式的全ブースターを最大出力まで上げ、ヤツは零落白夜の剣先を受けながらその勢いに押された。最後の抵抗なのか、ヤツは一夏の首へと手を伸ばす。一夏の首にその手が触れようとしたところで

やっとその動きを止めた。

「はあっ、はあっ、はあっ……………！！！」

アーマーを失い、スーツだけの状態になった操縦者が海へと墜ちていく。

「しまっ

！？」

「はいはい、ちゃんと確保してるよ。一夏くんは最後でツメが甘いね」

そんな墜ちていく操縦者をオレは海面接触ギリギリでキャッチした。

「終わったな」

「ああ……。やっと、な」

「さあ〜帰ろう!」

こうして、オレ達の長い、長い、戦いは終わった。

皆がお互いの無事を確かめ、オレ達は帰るべき場所へと帰ることにした。

第三十話 本当の気持ち（前書き）

やっと出来た三十話……。

お待たせしました。

第三十話 本当の気持ち

カラン、コロン、カラン、コロン

暴走して福音と戦いを終え、オレ達は無事に旅館へと戻ってきた。

だが、待っていたのは織斑先生によるお説教。

長い間、他の生徒が見ている中で七人仲良く正座をさせられた。やっと解放されたのが午後の9時。そして、それからしばらくしてオレは旅館を抜け出して一人浜辺へと続く道を歩いていた。

海から流れてくる潮の匂いが鼻を刺激し、夜風が心地よかった。

《ツバメ？ 元気無い？》

「そんなことないよ。ただの気分転換だ」

《よく考えたらツバメが怒られる理由って無かったよね？》

「確かに」

頭の中に天燕の声が聞こえてくる。天燕が二次移行してからISを展開しなくてもこうしてコンタクトを取れるようになった訳なのだが、他人にはこの声が聞こえるはずも無く、油断していると独り言を言っている痛いヤツだと思われるしまう。

そして、よくよく考えればオレは織斑先生からお叱りを受ける理由が無かったことに気付く。なにせ、オレは待機命令を受けていない。墜とされたとは言え、オレはずっと継戦状態だった訳なんだが、怒る織斑先生が怖かったので甘んじてお説教を受けてしまった。

《あ、あの！ 私もここにいていいの？》

「んー？」

そして、今度は福音の声が聞こえてくる。

「今あのボディに戻してもまた暴走する可能性があるからな……
……しばらくは、天燕の中にいてもらうよ」

《で、でも！》

「早くあの人の元へ戻りたいのはわかるけど。今戻って、福音がまた暴走でもしたら大変なことになるんだよ？」

《あう……………》

「大丈夫だよ。アメリカはなんだかんだで優秀だ。すぐに戻してあげるから」

《うん……………》

若干寂しそくに返事をする福音。

あれから福音の意思も天燕の内に潜むようにしている。

まあ、理由は福音に言った通り、再度暴走しないための処置である。

ハッキングにより福音を蝕んでいたウイルスのような物はISCOにある意思を暴走させる物。ならば、暴走させないようにと一時的に意思だけをこちらに避難させたのだ。後はアメリカ・イスラエルの共同開発チームが完全にウイルスを取り除けば万事解決。

「でも、うるさく言われそうだな……………」

ちなみに、こんな処置をオレはアメリカ側には何も言っていない。

え？　なんでって？

だって面倒なことになるのは必然じゃん。ISコアにある意思とコンタクトを取れるって実はかなり稀なことで、それがバレた日にはモルモット並みの扱いを受けるかもしれない。

八雲ツバメ、十五歳！　まだまだ花の女子高生として青春を謳歌したいのです！

《あーツバメ！　あそこに誰がいるよ？》

「スルーかよ！？」

まあ、いいけど。

オレは天燕が指摘する方向を見ると一つの人影を見つけた。

「箒？」

そこにいたのは篠ノ之箒だった。

その姿は昨日の昼間には見れなかった水着姿であった。大胆にも白のビキニ。恥ずかしがり屋の箒としては勇氣ある選択と言ったところか。あ、いや、それだと箒に失礼か。

そして、箒は何やらソワソワした様子でいる。何かを気に掛けているのか、ある方向をチラチラと岩陰から覗き込んでいた。オレも気になって箒の見る方を見てみるとそこには海で泳いでいる一夏が

いる。

「ああ……なるほど」

《青春だね》

《え？ どこですか？》

箒の様子を見て青春だと言う天燕。その意味を理解出来ないでいる福音。つてか、天燕の奴また変な知識覚えやがったな。

このまま見ているのも面白いと思ったが、とりあえずオレは箒の元へ向かうことにした。

夜の海。満月の光は海面を照らし、真夜中にも関わらず明るかった。

「（ど、どうしよう……）」

そんな海辺にある岩場で篠ノ之箒は岩陰からある一点を覗きこみ、悩んでいた。

「（かなり緊張する……ただ、謝りたいだけなのに……）」

視線の先には真夜中にも関わらず、海で泳いでいる一人の少年がいる。

織斑一夏だ。

夜の海で泳いでいるといきなり一夏の姿を目にし、慌ててこの場所へと隠れてしまった。

「筈、なにしてるの？」

「ひゃい!？」

突然背後から声を掛けられて変な声が出てしまう。

私は慌てて声のした方を振り向くとそこには八雲ツバメの姿があった。

「いやゝ散歩してたら姿が見えたからね。来ちゃったゝ」

「あ、ああ……………」

テヘへと笑うツバメ。

「一夏くんに話しかけないの？」

そして、その言葉を聞いて内心ドキッとした。

「……………ツバメはいいのか？」

「え？」

「ツバメは、私が一夏に話しかけてもいいのかと聞いている」

「??? 何を言っているの?」

ツバメは首を傾げながら不思議そうな顔をしている。
自分でも何を言っているのだろうと思った。

「ツバメは一夏の事が好きなんだろ? なのに、私が一夏の側にいてもいいのか?」

…………… ああ、言ってしまった。

だが、聞かずにはいらなかった。

一夏と離れ離れになってから私達を繋ぎ止めてくれたのはツバメと言う存在があったからだ。そして、この想いを今でも抱いていることが出来るのもツバメのおかげ。私がこの想いに悩まされている時は優しく手を差し伸ばしてくれた。

しかし、それはツバメの気持ちを押し殺してしまっているのではないかと思う。自分を押し殺してまで、私達の仲を繋ぎ止めてくれる。私はそれが嫌でまた悩んだ。

ツバメを犠牲にしてまでこの気持ちを成就させるべきかと言う気持ち。

ツバメが恋敵となって一夏を取られてしまうかもしれないと言う気持ち。

この気持ちが身の内で渦巻き、正確な判断を鈍らせた。そして、紅椿を手に入れてこう思ってしまった。

これで、堂々とツバメと肩を並べられる。

私に出来ないことを平然とやってのけるツバメ。

そんな彼女に憧れ、嫉妬した。

力を手にして対等でいられる気がした。同じ力を持てば私は親友にも負けないと自負していたのだ。だが、それは間違いだと気付いた。

力を手にした私はその力に流され、無意味な暴力を振る。周りを見ずに目の前の敵だけを倒そうとし……………大切な人に大怪我を負わせ、その事実から逃げ出そうとした。

でも、力を得て何をしたかったかを思い出し、私はこの罪を背負う覚悟をした。

もう、迷わない。この力がなんのためにあるのか。何のために使うべきか。だから、手始めに私は親友の本当の気持ちを知らうと思つて先程の質問をした。

だが、ツバメは……………

「いいよ」

実にあっけなく答えた。

「なっ！　なんで!?!」

「なんでって言われても」

「昨日の昼。姉さんと話している所で聞いたのだぞ！　ツバメはー夏が好きだと！　私はツバメの気持ちを犠牲にしてまでこの想いを

成就させる気は無い！」

「んー？ ああ……………いやいや、箒さんはなにか勘違いしているよ」
「え？」

「確かにアタシは一夏くんが好き。でも、それが恋愛とかの好きかと聞かれたら……………よくわかんないの。だって、彼に抱いた気持ちは箒にも抱いているものだから」

「私に？」

「親友以上恋人未満？ うーん……………これもちよつと違うかな？
アタシは織斑一夏と篠ノ之箒って存在に惚れてる？ いや、でも……………それも……………」

「存在に、惚れる？」

ツバメも悩みながら自身で抱いた気持ちを渡しに話してくれる。
だが、その意味を私は理解出来なかった。もちろん、ツバメ自身もわかっていない様子だ。

「あーうー……………よくわかんない！ とにかく！ アタシは箒も一夏くんも同じぐらい好きって事！ 二人がアタシの側にいてくれればいいのー！」

ついに発狂気味に本音を言うツバメ。月明かりの所為でその表情は恥ずかしさで赤くなっていたのがわかった。

「クス……………あははははははー！」

そんな本音を聞いて私は笑ってしまった。

「わ、笑わないでよ！」

「す、すまん…………でも……………」

若干涙目になりながら怒るツバメは初めて見た。なんでもできるツバメでもこんな表情をするのかとなんだか新鮮な気持ちになる。

そして、自分はなんてくだらないことで悩んでいたのだろうつと思った。だから、おかしくて笑えてくる。

ただ単純に『好き』になった。

それは恋愛でも友情でも表現しにくい感情で、もし仮に『好き』と言う言葉が恋愛や友情と言うカテゴリーだけに当てはまらない物があるなら、たぶん、ツバメが言う『好き』はそう言うことなのだろう。

「はあ……………悩み悩み抜いた結論を親友に笑われてしまうとは……………ツバメさん、悲しい」

「あ、いや、ツバメの言ったことを笑ったのでは無くて……………その、あの……………」

「……………ぷっ、あはははは！」

いかん、笑い過ぎてしまったかと思った時。悲しそうな顔から一転、ツバメは声を上げて笑い出した。

「あ！ からかったな！？」

「いやゝあたふたする筈が可愛くて、ついですねゝ」

「つ、ツバメ!!」

「笑ったお返しだよゝ」

「だから！ お前の事で笑ったのでは無くて」

「でも、よかった」

「え？」

私が最後まで言葉を口にしようとしたら先にツバメが喋ってしま
う。

「……………よかった。いつもの筈に戻って」

「あ……………」

心の底から安堵した表情。

月明かりのおかげでそれはハッキリと見えた。いつも見せてくれ
る彼女の笑顔。その笑顔を見ると私の目から涙があふれ出して来る。

「ぐす……………本当に良かった……………ツバメが無事で」

「筈？」

「ごめん、なさい……………私の所為で……………危険な目に」

今更になってツバメの無事を喜んでいた自分がいる。

もちろん、ツバメが無事だとわかった瞬間も喜んだ。

その喜びがまた蘇ってくる。

「もう、迷わないから…… ツバメも、一夏も、グス…… 守れるように強くなるから……」

両手で溢れる涙を拭き取る。だが、それでも涙は止まらない。

「もう、私を…… 一人にしないでくれ」

それでも、しゃっくり混じりで言葉を詰まらせながら己で導き出した決意と願望を口にする。

「うん、ごめんね…… 心配掛けさせちゃって」

「いい、いいんだ。これからは私が二人を守るのだから」

「ううん。それはダメ」

「え？」

ツバメはそつと私の両手を掴み、真っ直ぐ私の事を見つめる。その眼には若干涙が溜まっていた。

「アタシも二人を…… 皆を守れるようになる！ もう、墜とされないから。悲しませたりしないから！ …… 二人で強くなる？」

「…… うん、うん！」

私は力強く頷いた。

これから、剣の修練に磨きをかけよう。

それは、弱い己を鍛えるために。

これから、自分の気持ちに素直になろう。

それは、友と楽しい時間を過ごすために。

これから、大切な人の側にいよう。

それは、脅威からその人達を守るために。

「あ、そうだ。箒！」

二人で強くなると心に決めた時。ツバメが何かを思い出したかのように私の名を呼ぶ。そして手にしていた巾着袋から赤い小さな箱を取り出した。

「誕生日おめでとう！」

変わらぬいつもの笑顔でツバメはそう言い、その小箱を私に手渡す。

「これは？」

「プレゼントだよ」

「あ、ありがとう……開けていいか？」

「もちろん」

ツバメの許可を得て、私はその赤い小さな箱を開ける。

そこに入っていた物は

。

「ふうっ……………」

海から上がって、俺は近くの岩場に腰を下ろした。

銀の福音との戦闘後、千冬姉の説教を受け、食事を取り、軽い休憩の後、コッソリ旅館を抜けて夜の海へと繰り出していた。

「い、一夏……………」

そして、運動の後の休憩中に突然名前を呼ばれた。

声のした方を振り向けばそこには水着姿の箒がそこにいた。

「箒……………？　　そういえば、昨日海で見かけなかったけど

」

「あ、あんまり、見ないで欲しい……………。お、落ち着かないから…

……………」

「す、すまん」

慌てて体の向きを元に戻す。

箒の水着姿にドギマギしていると、箒が俺の隣に座る。

い、いかん、これはかなり気恥ずかしい……………。

何とか気持ちを整理させようとするが、上手くいかない。
意識と反して、横目でチラチラと箒を見てしまう。

「ん？　なあ、箒」

「な、なんだ？」

「その箱なんだ？」

チラチラと箒を見ているとその手にしている小箱が気になった。
赤くて小さな箱。

俺の隣に座ってから両手で大事そうに持っており、時折それを見
ては恥ずかしそうな顔をしたり、嬉しそうにしたりしていたのだ。

「ツバメがさつき誕生日プレゼントだって言って……………くれた」

「へえゝ。何が入ってたんだ？」

俺がそう質問すると箒は黙って小箱の中身を見せてくれる。

「ネックレスかぁゝ。綺麗だな」

小箱の中に入っていたのは小さな赤い宝石が埋め込まれていたネ
ックレスだった。

「付けないのか？」

「ひ、一人だとうまく付けられない……………」

「じゃ、貸せよ。付けてやるから」

俺がそう言うと箒はビクツと体をすくませ、顔を赤くしながら俺にそのペンダントを手渡した。

「た、頼む……………」

ペンダントを付けるために箒は髪を掻き上げ、俺の方に背中を向ける。

またなぜかドキドキと胸が高鳴った。

現れたうなじが異様に色っぽく見え、鍛えている割には女性らしい身体のラインを目がいつてしまう。

口に溜まった唾を飲み込み、俺はなるべくそれを意識しないようにした。

「じ、じゃあ、付けるぞ」

箒の背後から前へ手を回し、ネックレスを付ける。緊張してか、何度かネックレスのフックがかからなかったがそれも無事に繋がる。

「ど、どうだ？」

ネックレスを付けると箒はそれを見せるように俺の方へ身体に向

きを変える。

「……………に、似合ってるぞ。うん！ 似合ってる！」

「あ、ありがとう……………」

「……………」

「……………」

それから言葉が続かなかった。俺達が沈黙をしている中、ざざあと波の音だけが聞こえる。なにか他の話題でも切り出そうかと考えるがうまく頭が働かない。でも、やっぱり何か話した方がこの妙な緊張感から解放されると思って口を開いてみる事にした。

「「なあ……………」」

なんとタイミング悪い。喋ろうとした矢先に簾と声が被ってしまった。おかげで、話すきっかけを潰してしまう。だが、不意に簾と視線が合ってしまった。

「（あ……………」」

そして見とれてしまう。

夜の海で聞こえてくる波音。空から降り注ぐ月明かり。その月明かりがツバメからもらったネックレスが光を反射させ、一段と簾を綺麗だと思わされてしまう。

「ん……………」

え？

ええええええええええっ！?!？

ほ、箒、さん？　なんで目を閉じて、やや唇を上向きに突き出すんですかね、出すんですかね！？

「……………」

静かに待っている箒の顔は、やっぱり綺麗だった。

やばいと思いつつ、俺は箒の体に触れ、目を閉じながらゆっくりと顔を近づけ

じじじ。

「……………ん？　なんだ？」

改めて顔を近づけて

「っっっ。」

箒に顔を近づけようとする度に何か額にぶつかる。なんだ？
と思って閉じた目を開けるとそこには……………。

「……………ブルー・ティアーズ……………」

キュイイイ……………。

「ぬああああっ！？」

ズバシュッ！！

間一髪でBトレザーがのけぞった俺の髪を焼き切った。

「ほう……………」

「よし、殺そう」

「一夏、何をしているのかな……………？」

「ふふっ、うふふふふっ」

回避行動で振り向いた俺を待っていたのは、四人の突き刺さるような視線。

ちなみに順番はラウラ、鈴、シャル、セシリアだった。しかも、

ちやつかり己のISをフル装備で展開している。

「え？ あ、いや…………あの…………」

「なんてことをしてくれるんじゃないやあああああああ！？」

「え？」

そして、今度は別の方向から叫び声が聞こえてくる。そちらを振り向けばツバメがそこにいた。そしてなぜか非常に怒っていらつしやる。

「もう少しで、もう少しでいい所だったのに！！……………テメエら、あんまりオレを怒らせるなよ」

やばい、アレは非常にやばいぞ！

「ツバメ！ これだけは譲れませんの！ 邪魔をしないでただけですか！？」

「そうだ。こいつは私の嫁だ！ 誰にも譲る気は無い！！」

「邪魔をするっていうのなら……………ツバメでも容赦しないよ」

何を邪魔だの譲るだの言っているのかわからないが、やめろ！！火に油を注ぐようなものだぞ！！それ以上ツバメを刺激しないでくれ！！

「せ、戦術的撤退！！ あたしは一抜けたー！！」

「「「え?」「」」

先程まで皆と一緒に俺を狙っていた鈴は怒ったツバメを目の前にして脱兎の如く逃げ出した。セシリア、ラウラ、シャルの三人は鈴の突然の逃亡で呆氣に取られてしまっていた。

「箒! 行くぞ!」

「え? きゃあっ!」

俺は鈴同様。すぐさまこの場を離れようと箒を抱きかかえて逃げ出す。箒らしからぬ可愛い悲鳴が聞こえた。だが、そんなのは気にしてられない。

ああなってしまったツバメの側にいれば……下手したら殺されるかもしれない。

つまり、本気で怒ったツバメさんはもはや恐怖の象徴とでも言うべきか、とにかく怖い。中学の時、俺と鈴は過去にああなったツバメを目にしている。その時は教室にある机や椅子を軽々と投げ、教室を半壊させた。ツバメを怒らせた生徒は傷こそ負わなかったがまるで悪魔でも見たかのように怯え、必死にツバメの怒りを鎮めようと床に何度も額を打ち付けながら土下座して謝っていた。

そして、その現場に居合わせた俺達は「ツバメを怒らせてはいけない」と心に決めたのだった。

「あ、待ちなさい! この」

そして、セシリアが俺を逃がさないように手にしている銃で俺達

を狙い撃とうとした時。いきなり、バカンと銃身が輪切りにされた。

「え？ なっ！？」

「な、なんだ！？」

「う、うわあああああっ！！」

それからの事は俺は何も知らない。

必死に安全地帯に避難する事だけを考えていたから後ろを振り向く余裕が無かった。聞こえて来たのは爆音とあの三人の悲鳴。

そして、高らかと笑うツバメの声だけだった。

「アーハッハッハッハッハッハ！！」

もちろん、このあと騒ぎを聞き付けた千冬姉に皆でこっぴどく叱られたのは言うまでもない。

第三十一話 再び飛ぶために（前書き）

これにて原作三巻が終了です。

7 / 17

すみません。タイトルを変更いたしました。

第三十一話 再び飛ぶために

ツバメが暴れる少し前。

「紅椿の稼働率は絢爛舞踏けんらんぶとうを含めても四二パーセントかあ。まあ、こんなところかな？」

空中投影のディスプレイに浮かび上がった各種パラメータを眺めながら、その女性は無邪気に微笑む。

子供のように。天使のように。

月明かりが照らすその顔は、いつもと変わらない。

いつだってどこか退屈そうな顔の、篠ノ之束その人だった。

「んー……ん、ん」

鼻歌を奏でながら、別のディスプレイを呼び出す。そこでは白式第二形態の戦闘映像が流れていた。

それを眺めながら、束は岬の柵に腰掛けた状態でブラブラと足を揺らす。

目の前にはただ海が広がり、高さは三〇メートル近い。落ちれば無事では済まないその場所でも、束の表情はけして変わることはない。かい。

「はー。それにしても白式には驚くなあー。まさか操縦者の生体再生まで可能なんで、まるで」

「まるで『白騎士』のようだな」

束の背後から突然声がする。

「コアナンバー001にして初の実戦投入機、お前が心血を注いだ一番目の機体に、な」

「やあ、ちーちゃん」

束の背後から声を掛けたのは織斑千冬だった。漆黒のスーツに身を包んだその姿は、夜の闇全てを引きつれているかのような静かな威厳に満ちている。

二人は互いの方を向かない。背中を向けたまま、束はさっきまでと同じ用にブラブラと足を揺らし、千冬はその身を木に預ける。

どんな顔をしているのか、別に見なくてもわかる。

そんな確かな信頼が、二人の間にはあった。

「ところでちーちゃん、問題です。白騎士はどこに行ったんでしょうか？」

「……………白式を『しろしき』と呼ばば、それが答えなんだろう？」

「ぴんぼーん。さすがはちーちゃん。白騎士を乗りこなしたただけのことはあるね」

かつて『白騎士』と呼ばれた機体は、そのコアを残して解体され、第一世代作成に大きく貢献した。そしてそのコアは、とある研究所

襲撃事件を境に行方がわからなくなり、いつしか『白式』と呼ばれる機体に組み込まれていた。

「それで、うふふ。たとえばの話、コア・ネットワークで情報のやり取り取っていたとするよね。ちーちゃんの一番最初の機体『白騎士』と二番目の機体『暮桜』が。そうしたら、もしかしたら、同じワンオフ・アビリティを開発したとしても、不思議じゃないよねえ」

「……………コアナンバー000か」

ボソリと答える千冬。

「コアナンバー000かあ。たしかに、アレは特別なコアだね。何も染まらず、なんにでもなれるコア。コア・ネットワークを使って他のコアに干渉して同じ世界を構築する。でも、結局何にも出来なくて、世界を構築する手段も無かったから機体にも組み込めない失敗作」

「だがお前はそれを『あの機体』に組み込んだ」

「ちーちゃんはするどいね」

「なぜアレにナンバー000を組み込んだ」

「……………あの子ならナンバー000を完成させてくれると思った。からかな？」

「お前にしては曖昧な答えだな」

「えへへ、あの子に会ってからこんな調子だよ。あの子と出会って

私の知らない世界を見せてくれるの。だから、ちょっとは世界が
おもしろく見えてくるんだ」

「そうか……………」

「でも、

」

岬に吹き上げる風が、一度強く唸りを上げ、束の声をかき消した。
そして、その姿は消えた。

忽然と。突然と。

「……………」

千冬は息を吐き出して、後頭部を押しつけるように木に寄りか
かる。

その口元から漏れる声は、潮風と遠くの方で聞こえてくる爆音に
流されて消えた。

翌朝。

臨海学校が無事？終了し、IS学園の生徒全員がクラス別のバス
に乗り込み、帰宅をする。昼食は帰り道のサービスエリアで取るこ
とになっているのだが……………

「や、やってしまった……………」

そして、そんなサービスエリアに設置されているベンチに腰掛けながらオレこと八雲ツバメは酷く落ち込んでいた。

理由は昨晚、自分がブチキレたからだ。

アレから一時間近く、セシリア、シャルロット、ラウラの三人を追いかけて、途中で見つけた鈴も一緒に制裁を加えてしまった。

そして、その後すぐ織斑先生からまたお叱りを受けた。そして、ちよつとやることがあったので睡眠は取っていない。いや、睡眠時間はさほど問題ではない。問題なのはオレがキレてしまったことだ。

《ドンマイとしか言えないね》

「……………はあ、皆に嫌われなければいいけど」

《大丈夫だよ。あの後話し合っただんでしょ？》

「話し合っただけど……………皆オレの目を見てくれなかった」

《はあ……………ツバメって大胆な行動する割にはガラスのハートだよね》

「ぐう……………何も言い返せないのが悔しい」

もはや深いため息しか出て来ない。そんなオレの様子を天燕も心配してくれるのは嬉しいが、あまり元気は出ない。

「あなたが八雲ツバメさん？」

「え？」

そんな落ち込んでいる所へ誰かに声を掛けられる。伏せていた顔を上げるとそこには一人の女性が目の前に立っていた。

《ナターシャ！！》

「ナターシャ・ファイルス……………さん」

「あら？ 知ってたの？」

目の前にいたのは銀の福音の操縦者であるナターシャ・ファイルス本人であった。

「あ、いや……………資料を拝見しましたから」

まあ、本当は今さっき福音が教えてくれたのだが。

「そう。隣いいかしら？」

「あ、どうぞ」

オレが横へ移動するとナターシャはオレの隣へと腰を下ろす。そして、じーっとオレの顔を見つめていた。

「な、なんでしょ……………」

「ふーん、君がああの八雲ツバメかあゝ」

なにやら興味深そうにオレの事を眺めると品定めをしてくる。ど

うやら、オレについて何かを知っているらしく、事前に聞いていた情報と実際に目にした印象を照らし合わせているらしい。

「白いナイトくんもそうだけどあなたも私の事を助けてくれたのよね？」

「白いナイトくん？ ああ、一夏くんですか」

「ええ、さっきお礼をして来たところよ」

「お礼？」

「キスの一つよ」

大人びた風貌と裏腹に子供っぽく笑うナターシャ。

よし、後で一夏からちよつと詳しい話を聞きましょう。

「うーん……残念だわ。あなたがIS学園に入っていなかったら是非にでもウチにスカウトしたかったのに」

「スカウト、ですか」

「どう？ 今からでも考えておいてくれない？」

「考えるだけなら」

「あら、素っ気ない」

オレの返事を聞くとナターシャはクスリと笑った。

「それにしてもあの事件の後に動いても大丈夫なんですか？　その、怪我とかは……………」

「それは大丈夫よ。私はあの子に守られていたから」

「あの子？　ああ、福音ですか」

「あら、あなたはそう言うこと信じるの？　……………そうね。あの子は私を守るために、望まぬ戦いへと身を投じた。強引なセカンド・シフト、それにコア・ネットワークの切断……………あの子は私のために、自分の世界を捨てた」

ナターシャは言葉を続けるうちに先程までの陽気な雰囲気は薄れ、その身体に鋭い気配を纏わせていく。

たぶん、今回の事件を引き起こした張本人を許せないのだろう。

「だから、私は許さない。あの子の判断能力を奪い、全てのI.Sを敵に見せかけた元凶を　必ず追って、報いを受けさせる」

福音は、そのコアこそ無事であったが、暴走事故を招いたことから今日未明に凍結処理が決定された。

つまり、福音はもう空へと舞い上がれない。

「……………何よりも飛ぶことが好きだったあの子が、翼を奪われた。相手が何であろうと、私は許さない」

悔しそうにするナターシャ。

それだけ福音の事を愛していたのかが手に取るようにわかる。

だから、オレは…………。

「ならばあなたにコレを託します」

「え？」

オレは制服のポケットから一枚のディスクを取り出す。

「福音の翼は奪われていません。あの子はちよつと遠くへ飛び立って、別の所で翼を休めているだけです。元の場所へ帰れるようになつたら帰ってきますよ」

「……………これは？」

「銀の福音の再設計プランです。それを使うかの判断はあなたに任せます」

ディスクの中身は銀の福音の設計プランが入っている。

まあ、昨日はコレを作るために徹夜してしまったわけなのだが、こんなにも早く手渡せるとは思ってもいなかった。

「ただ、それを使うなら一つだけ約束してください」

「約束？」

「それには銀の福音のコアを使ってください。そうすれば、前の子があなたの元へ戻ってきます」

「……………どうして、そこまでしてくれるの？」

ナターシャは若干の驚きと不可解と言った表情をしながら質問してくる。オレはちよつと時間を掛けて考える。

《もう一度、ナターシャと飛びたいからだよ》

だそうだ。

「あの子がもう一度あなたと飛びたがっているからです。アタシはそれを叶えてあげたい。それに、あの子に守られたのはアタシも一緒ですから」

「……………まるであの子と会って聞いたような口ぶりね」

実際に代弁してましたし。

「……………ありがとう。ねえ？ やっぱり、今すぐにもウチに来ない？ 私あなたの事気にいっちゃった」

ナターシャの様子は先程までの鋭い気配は無くなり、陽気な雰囲気に戻る。

「ハハ、ごめんなさい。アタシはあそこで今やらなきゃいけないことがあるので」

「うーん、残念。まあ、いいわ。また別の機会にラブコールをするわ」

そう言つてナターシャは立ち上がり再びオレの前に立ち、自分の右手をオレに差し出した。

「いつか、アメリカにも遊びに来なさい。その時は歓迎するわ」

「じゃ、その時はお言葉に甘えさせていただきますね。あ、でもそのまま拉致なんてことはしないで下さいよ？」

冗談でオレはそう言い、彼女の右手を掴んだ。

「……………」

おい、なぜそこで黙るんだ。

「じゃ、私はそろそろ行くわね。バイー！」

そそくさと逃げ出すように立ち去るナターシャを見送る。手にはしっかりとディスクが握られ、その顔はとても嬉しそうだった。

《……………ナターシャ》

「……………ごめんな。本当ならすぐにでも帰してあげたかったけど」

《うつん。凍結処理されちゃったならしょうがないよ。それに、その事を予想してアレを作ってくれたんでしょ？ 私はそれだけでも嬉しいよ》

「そうだね。ナターシャさんならすぐにでもアレを作ろうとするだろうね。……………さあゝって、オレ達も戻ろうか」

そしてオレもベンチから立ち上がり、学園のバスへと向かい自分の居場所へと帰ることにした。

「ど、どうしたの？ 一夏くん」

「っ、ツバメ……………」

バスに戻れば一夏が顔を押さえながらのたうち回っていた。オレは何があつたのだろうと思い周りを見る。

床には500ミリペットボトルが四本。しかも、中身が満タンになった状態で転がっている。

そして、箒、セシリア、シャルロット、ラウラを見れば何故か怒ったような表情をしていた。

最後にナターシャが一夏に何をしてきたのかを思い出す。

「ねえ、一夏くん」

「な、なんでございましょう?」

「さっき金髪のカジュアルスーツのお姉さんがここに来なかった?」

「えーっと……その、はい……来ました」

「何をしてっただのかな?」

「……お礼をして、行きました」

オレは床に転がっているペットボトルを拾い上げ、ポーンポーンと手遊びをする。

「どんな?」

「え? ってか、そのペットボトルをどうする気で?」

「どんなお礼をしてっただの?」

「……………」

どうやら言えないらしい。

まあ、答えを知っており、やることは変わらないのだが。

「あ、ほっぺに口紅」

「えっ!?! 嘘っ!?!」

「ぐはっ!?!」

もちろん嘘だ。一夏の頬にはそんな物は付いていない。

だが、反応からして事実を認めたのでオレは手にしたペットボト
ルを一夏に投げつけた。

「ぐおおお……………何故だ？」

「フン！」

苦しむ一夏をほっておいてオレは後方にある座席へと向かう。

途中、箒、セシリア、シャルロット、ラウラがグッとサムズアッ
プをしていたのでオレも皆と同じように力強くサムズアップでそれ
に答えた。

第三十一話 再び飛ぶために（後書き）

ちょっとしたお知らせです。

皆さまのおかげでこの作品もついに50万PVアクセスを突破いたしました。

なので、次の話はそれを記念した本編とはなんの関係も無いオリジナルストーリーを書こうかと思っています。

まあ、思いついたネタをやってしまおうって訳ですよ。

なので次回はいつも以上に時間が掛るかもしれませんが、それでも、楽しみにしていただければ幸いです。

つまらなかったらごめんなさいww

第三十二話 犬猿の仲 前編（前書き）

大変お待たせしました。

やっと、やっと更新できました……。

50万アクセス記念企画をやるって言っておきながら普通の話になってしまった。

ごめんなさい……。

でも、色々考えたんです。ネタが浮かんではボツになっての繰り返し、結局オリジナルストーリーで落ち着いてしまいました。

ネタの引き出しでもあればいいですね。

それでは（一応）50万アクセス記念ストーリー！ どうぞ！

第三十二話 犬猿の仲 前編

「さて、ここに@クルーズの季節限定メープルバナナがあります」

IS学園にあるカフェ。

俺、織斑一夏の前で一同はテーブルに置かれた五つのアイスカップを取り囲み真剣な表情をしている。もちろんメンバーはツバメ、箒、鈴、セシリア、シャルロット、ラウラの六人である。

「これが手に入れるのにどれだけの労力が必要とされるだろう。よって、一つはコレを手に入れた者。つまり、アタシが食べる権利を得るわけなんだけど」

「……異議ありっ！」「……」

うおっ！ 皆凄い反論だな。そんなにコレが食べたいのか？ どうも女子達は季節限定と言う言葉に弱いらしい。

さて、彼女達が現在何をしているかと言うと見ての通りである。五つしか無いアイスを六人で取り合っているのだ。

「たしかに、ツバメがこの季節限定メープルバナナを手に入れたことは褒められることだ！ だが、それとこれとは話は別だ！」

と何故か拳に力を込めて言い張る箒。

「そうですね。そんなのは横暴です！」

「いくら親友だからってここで引き下がる程あたし達はお人よしじ

やないのよ!」

「そうだよ。これだけは平等に決めない」と

「うむ。何事も平等に決めねばならない時がある」

そして、セシリア、鈴、シャル、ラウラの順に反論する。

「世界に平等などない!!! だけど、ここは公平にジャンケンで決着を決めましょう!」

何気に飛んでもないことを口走ったツバメ。しかし、皆は『公平』
と言っ言葉でその手法で納得する。

「「「「ジャンケン

「「「「」

IS学園のカフェ。十代乙女の声が響いた。

「「「「「うつまゝい!!」「「「「」

「.....」

戦利品を片手に何とも幸せそうな顔をする一同。だが、そんな中で一人だけ今にも泣きそうな顔をしているヤツがいる。

凰・鈴音だ。

「あたしも……食べたかったのに……」

「鈴、そんなにしょげるなよ。また買えばいいじゃないか」

「……………」

あれ？ いつもなら「バカじゃないの！！」とか言って食って掛ってくるのに。これはマジで落ち込んでいるぞ。

「しょうがないな。鈴ちゃん、アタシの半分あげるから。元気を出しなさい」

「つ、ツバメ……………」

そんなツバメの申し出を耳にすると鈴は態度を一変。ほぼ泣きながらツバメへと抱きつくのであった。

「ツバメ！ 愛してる！！」

「箒どうしよう！ 告られた！！」

「結婚してしまえばいい」

なにか色々変なことになっている。

箒も箒で普段しないようなツツコミを入れているし。
アイスってそんな魔力がある物だっけ？

「はい。あゝん」

「あゝん」

「どう？」

「んー！ 幸せ〜！」

本当に幸せそうな顔をする鈴。

よほどこのアイスがうまいと見た。

「なあ、箒」

「ん？ なんだ？」

「俺にも一口くれないか？」

「なっ！！ 何を言っているんだ！？」

いや、だって、皆しておいしいおいしいと横で言われれば食ってみたくなるだろ。

「そ、その…… スプーンに口を付けてしまったのだぞ」

「ん？ 別に気にしねえよ。くれないのか？」

「…… いや！ そうではなくて！ お前がいいなら」

「おっ、サンキュー」

「で、では……」

箒は何故か顔を赤くしながらスプーンでアイスをすくい、それを俺の方へ差し出す。俺も差し出されたアイスを食べようと口を開けてスタンバイするのだが…………。

「わたくし（僕）（私）のもあげますわ（る）（ぞ）！！」

「うおっ！」

いきなり、セシリア、シャル、ラウラが声をあげた。

それぞれの口調で同時に喋るから殆ど何を言っているのか理解できなかったが、何事かと思って閉じていた目を開けると目の前には四本のスプーンが差し出されている。

「お、お前達！？　一夏は私に頼のんだのだぞ！　邪魔をするな！」

「あら、食べる物は一緒ですわ。ですから、わたくしのを食べてもなんの問題ありません」

「それより一夏。はい、あゝん」

「ぬっ！　シャルロット！　それは夫である私の仕事だ！」

再び、ギャーギャーと騒ぐ十代乙女達。なんだかんだで、いつもの光景が目の前に広がる。

いや、それよりも俺はアイスを食べたいわけなのだが。

「い、一夏……………」

「ん？」

「はい」

箒達が騒いでいる間にか鈴が俺の目の前にスプーンを差し出していた。そして、スプーンにはお目当てのアイスがすぐわれている。

「しょ、しょうがないからあげるわよ」

「お、サンキュー。あむっ」

お、皆が言うだけあって確かにうまい。

メープルと聞くと甘ったるいイメージであるがそんな事も無く、程良い甘さ。あんまり甘い物は食べない俺であるがこれなら普通に食べられる。いやはや、素敵な出会いをしてしまった。

「「「「あーーーーー！！！！」」」」

「うおっ！？ 今度はなんだよ……………」

「何故鈴のを食べたのだ！？」

「そうですわ！ わたくしのお食べになってください！！」

「一夏のバカ！」

「嫁としての自覚がなつとらん！！」

え？ あれ？ 何故に皆さんそんな凄まじい憤怒オーラを放って

おられるのですか？ 俺はただアイスが食べたかっただけなのですが……………」

俺、何か悪いことした？

「あう……………酷い目に遭った……………」

さて、カフェで酷い目に遭った俺は現在へ学園内の第二アリーナで第二形態となった白式の特訓中。いつものメンバーと一緒に模擬戦をしていたのだが、いつも以上に皆が張り切っており、フルボツコにされたところだ。

「うゝん……………まだまだ、弱いな」

「一夏」

「ん？ 箒？」

そして休憩を取ろうと白式の展開を解除し、持参してきたスポーツドリンクを口にしようとした時に箒がやってきた。

「紅椿の調整は終わったのか？」

「フィッティングは済んだ。後はツバメが調整するだけだ」

「そうか」

臨海学校が終わってから紅椿の整備はツバメが担当することになった。と、言うのも紅椿は特定の企業、研究機関が開発した物では無くあの篠ノ之東博士が直々に開発した物である。しかし、肝心の東さんはアレからまた行方を眩ませ、紅椿の整備が出来る人間がない。

そこで白羽の矢が立ったのがツバメであった。

理由は単純。東さんの直々の指名だ。筈、ツバメ以外の人間に紅椿を触ることを許さないと言い残して消えてしまったのだ。ために学園内の研究者が触ろうとしたら紅椿にあらじめ仕込まれていた防衛プログラムが作動して、学園内にあるシステムがハッキングされてしまう事態に陥ってしまった。

あれにはさすがの千冬姉も顔を青くしてたな。もう少しで学園内にある情報が各国に漏洩されてしまうところだったらしい。

「ツバメ」。ちょっとお願いがあるんだけど？」

「んー？ どうしたんだい？ 鈴ちゃん」

「甲龍の出力がいまいち上がらないのよ。ちょっと、見てくれない？」

「りょうかい。こっちが終わったら見てあげるね」

「ありがとう」

少し離れた場所を見れば無人となった紅椿を調整しているツバメ

に鈴が後ろから抱きついていていた。

「あいつ等はホント仲がいいな」

「ああ、まるで姉妹みたいだな」

そんな二人を見ていた篤は何故か不機嫌そうだった。

「でも、不思議だな。あれでもあの二人出会った頃はケンカばかりだったんだぜ」

「え？」

「鈴が転校して来た初日から大喧嘩。そんでもって、鈴が帰国する直前までずっと喧嘩してたんだ。だから俺と弾の二人でいつも仲裁してたんだ」

「それが何故あのように仲良くなれるのだ？」

「うーん……なんでだろう？」

「知らないのか？」

「ああ、気付いたら仲良くなってたな」

そう言えば、なんであの二人はあんなに仲良くなっただんだろうな……。

それは中学三年の時だった。

凰・鈴音が親の都合で日本から中国へと帰ってきた時。現地の学校で受けたIS適性が基準より高かったことから叔父が所属している軍に配属され、日々ISに関する訓練を受けていた時のこと。

「（最悪だ………よりによってなんであいつが………）」

世間一般で言う夏休み。学生的身であればこれほど嬉しい物はないのだがあたしにとってはあまり関係ないもの。と、言うのも日々ISの訓練で忙しいからだ。

「鈴。では、頼むぞ」

そして、この軍服を着た中年男性があたしの叔父である。それなりの地位におり、何かとあたしの我が儘を聞いてくれる優しい叔父さん。

だが、今日ほどこの人を呪ったことは無かった。

あたしの目の前には叔父さんの他にもう一人いる。

「では、八雲さん。後の案内はこの子がしてくれるので」

「……………」

「そ、それでは、私はこれで」

そう、あたしの目の前にいるのはあの八雲ツバメだった。

日本にいた時は何かと一夏にまわりついていた鬱という女。
何故、コイツがここにいるのかと疑問に思っていると叔父さんが
開発中の第三世代ISを視察に来たとか言っていた。そして、あた
しがコイツの案内役に任命されたのだった。理由は至って単純、日
本にいた時からの顔見知りと言っただけだった。

「ふん。まさかあんたがここへ来るとわね。知ってるISの理論つ
てバカには理解できないのよ？」

「まさか、鳳さんがISに乗れるとは思ってもみなかったよ。しか
も、代表候補生って」

自分が言った嫌みに対して、皮肉そうに笑う八雲ツバメ。

「なによ」

「そっちこそなによ」

「ガルルルルルルルルッ」

犬猿の仲。

これほどあたし達の仲を現すのにピッタリな言葉は無いだろう。
日本にいた時もそうだが顔を合わせればいつもこうだ。なんの因果
か、コイツとはウマが合わない。

とにかくあたしはコイツのことが嫌いだ。

「それよりサッサと案内してよ。こっちだって暇じゃないんだから」

「ハア？　なんであたしがそんな事をしなくちゃいけないのよ！？」

「アタシ、お客さん」

「ぐぐつ……………」

「ふふん」

腹立つ！　腹立つ！　腹立つうううう！！！！

立場なんて物が無ければこの場でハッ倒してやりたい！

それにしてもなんでコイツが開発中のISを視察に来るわけ！？
あれは完成まで軍内部でもトップシークレットなはずじゃないの
！？

ああっ……………！！　もう！　とにかく、ム力つく！！　な
にか、コイツを叩きのめす方法はないの！？

「へえ……………あれが白狼はいろんかあ」

「え？」

あたしがイライラとしているといつの間にか軍のIS訓練所へと
やって来ていた。

訓練所内にあるグラウンドには中国量産型IS『白狼はいろん』を使って何
人かが訓練をしている。

そ
う
だ。
い
い
事
思
い
つ
い
た。

第三十二話 犬猿の仲 前編（後書き）

と言う訳で前編終了。

今回は鈴が主役のストーリー！。

そして、勝手に作ってしまった中国量産型IS『はいろん白狼』。

詳細は次回明らかに！

第三十三話 犬猿の仲 後編（前書き）

後篇です。では、どうぞ。

第三十三話 犬猿の仲 後編

「……………どうしてこうなるの？」

「なに？ 怖気ついた？」

現在オレは中国量産型『白狼』を身に纏い、中国軍のIS訓練場にいる。

そして、オレに対面するように同じ白狼を纏った鈴がそこにはいた。

中国の第三世代開発の視察。

それが今回のオレの目的であつた。それがなんでこんなことになったのかと聞かれれば……………鈴の軽い挑発に乗ってしまったからだなんだが。

「所詮、IS研究者。勝手に理論組んでISの何を理解しているのかしら？」

「にしても、この白狼ってリヴァイヴより動きやすいね。……………なるほど、装甲を犠牲にして機動性に特化しているのか。ふんふん」

中国量産型IS『白狼』。リヴァイヴには劣るがこちらも操縦しやすい機体。そして、格闘戦闘を視野に入れ、複数の接近戦闘用の武器が後付けされている第二世代量産型IS。特徴は中国武将が身に纏っていた甲冑のような外装。どちらかと言えば日本の『打鉄』に近い感じた。

オレは鈴の話を聞かずに白狼の具合を確かめていた。

「ぐっ……こつちの話を聞きなさいよ！ このIS馬鹿！」

「馬鹿とは失礼な。それより、さっさと始めない？ こつちはいつでもいいんだけど？」

「ならこつちから行くわよ！！！」

轟ッ！！

鈴の白狼が地面を蹴ると素早くオレへと特攻を仕掛けてくる。両手には白狼の接近戦闘用の中国刀『麒麟牙』が握られており、それでオレに斬りかかろうとしていた。

「ハッ！！」

「おっと」

左右から一閃。鈴が放つ斬撃がオレを襲う。だが、オレは上半身を反らしてかわし、自分の白狼に搭載されている武器を展開する。選んだのは槍の『竜胆^{りんと}』。すかさず槍の間に鈴を入れ、竜胆を連続で突き出す。

「くっ！ こつっ！！」

「うわっ！ 無理に間合いを詰める！？」

しかし鈴はオレの連続突きを麒麟牙で弾きかわしながらも前に進んで来る。

劍は槍にも劣ると言われるがそれは間合いだけの話。相手を近づけさせず、槍の間合いで戦えば相手は手出し出来ないのだから。だが、そんな間合いも懐に入られてしまえばなんてことも無い。

鈴はその事をよく理解していた。ここで恐れて後退していれば追撃しやすかったのに。怖がらずに突っ込んで来やがった。

「もらっ
たあ
ああ
ああ
！！」

「なんの!!」

特攻を仕掛けてくる鈴。麒麟牙を横一閃へと放と全身の筋肉を使い、渾身の一撃をオレに喰らわせようとしてくる。

だがその斬撃はオレに当たるとは無かった。

「こ、後退しながらのイグニッション・ブースト!?
やっ!」

白狼のスラスターを後方では無く、前方に噴射させての瞬間加速。そのおかげでオレは瞬時に鈴との間合いを広げる事に成功した。おまけに、スラスターの噴射の余波が鈴に直撃し、強い衝撃を喰らったかのように鈴を吹き飛ばす。

「あ、コレいいかも」

「ぐうう！　まだ、負けてない！！」

吹き飛ばされた鈴もすぐさま体勢を立て直し、同じくイグニッション・ブーストでオレに特攻を仕掛けてくる。

「はああああああっ!!」

「特攻ばかりで勝てると思わないでね!!」

「そんな能無しなら代表候補生なんてしてないわよ!!」

「
なっ!？」

イグニッション・ブーストで最大加速した鈴の体が急停止した。

白狼のスラスターを前方に噴射させて急ブレーキを掛けたのだ。

そしてその両手には先程の麒麟牙では無く、連装ショットガン『レイン・オブ・サタデー』が握られている。鈴はショットガンを構えて狙いをオレに定め、ためらいも無くその引き金を何度も引く。オレは特攻する鈴に対してカウンターを狙っていたがそれが裏目に出た。予想外な事をされ、反応が遅れる。

気付いたら弾丸の雨を浴びてしまっていた。

「くう……やるっ!!」

「伊達に代表候補生って名乗ってないわよ! あんたこそ、アレを凌ぐとはね!」

「お褒めに預かり光栄だよ! ならばこっちも!」

なんとか、散弾の雨を凌いだオレは再び鈴との距離を取り、今度はアサルトカノン『ガラム』を展開する。

ドンッ！ ドンッ！ ドンッ！

一定の間隔を空けて渴いた発砲音がグラウンドに響く。

白狼は長距離射撃には向かない機体である。だからそんな弾丸が鈴に当たるはずも無く、鈴は左右上下に体を動かし、オレとの距離を確実に詰めて来た。

「これで終わりよ！！！」

そして、完全に鈴の間合いにオレが入ると鈴は再び麒麟牙を構えて斬りかかってくる。

「残念」

「へ？ があっ！？」

不意にオレの言った言葉を鈴が理解しようとした瞬間。強い衝撃が横から鈴を襲う。鈴にとって一体何事かと思っただろう。吹き飛ばされて尚、理解が出来ていない表情をしていた。

「…………アサルトライフルで殴った！？」

そして、やっと理解した。

鈴の言った通り、オレはガルムの砲身を持ち野球のバッターの用にガルムで鈴を殴ったのである。

うん、やっぱりフルスイングって気持ちいいな。

「ぶざけてるの！？」

「いたって真面目だよ。白狼は接近戦主体の機体なのにこんな狙撃銃をインストールしてもしょうがない。でも、下手な射撃でも相手の行動を制限するくらいは出来るんだよ。それにアタシ、武装切り替え苦手だからこのまま殴った方が早かったし」

「そ、そんな戦い方」

「あるわけ無い？」

「……………」

「さて、続きをしょ」

戦闘の再開。

それと同時にオレは右拳を握り、右脇を閉め、腰の辺りまで拳を引く。左手は鈴に向けて突き出す。

ガシユンと白狼の腕アーマーが変形する。

白狼の固定装備であるヒートクロー『はいろん白狼』。この機体の名前を由来する武器。手の甲から伸びた獣のような三本の爪は熱を帯び、空気を焼く。

「決着、ね」

短く、鈴がそう言う手にした武器を捨て、オレと同じような構えを取り、白狼を展開する。

「同じ土俵に上がる？ さすがは代表候補生」

「研究者ごときに後れを取る訳にはいかないのよ。あたしの実力を
見せつけてやるわ」

その会話を最後にオレ達の間には沈黙が場を支配する。自分も鈴
もその場から一步も動かずに相手の様子を窺い、攻めるタイミング
を見計らっていた。

どこかで何かの音が聞こえた。

それを合図にオレ達はイグニッション・ブーストで距離を一気に
詰め、両者の武器がぶつかり火花を散らした。

「はあ………疲れた」

中国軍IS訓練所のグラウンド。

あたしはISを纏ったままグラウンドに仰向けに倒れていた。

そして、そんなあたしの横では同じISを纏っている八雲ツバメ
が同じ用に仰向けに倒れていた。

「悔しいな………後ちよつとで勝てたのに」

「代表候補生なめるな。………でも、正直あんたがここまでやると
は思わなかったわよ」

そう、あたし達は先の模擬戦を終えて疲労した体を休めていたの
だ。

結果を言っしまえばあたしの勝ち。

だが、ギリギリの勝利だった。白狼のエネルギー残量を見れば残り53と表示されている。

「うん……もっと強くないとな」

「……………ねえ？」

「なにさ？」

「なんで強くなりたいの？」

八雲がボソツと呟いた言葉にあたしは不思議に思った。

なぜ、こいつはそこまで強さにこだわるのだろうと。

「うん……………」

八雲は少し考えるようにして悩む。

「自分の夢と大切な人を守りたいから」

そして、若干恥ずかしそうに答えた。

「夢？　大切な人？」

「うん」

「大切な人って……その……」

『大切な人を守りたい』その言葉を聞いてあたしは胸がチクとした。

あたしが思いつく中でこいつが守りたいと思えるような人物は一人しかいない。

あたしの想い人である織斑一夏だ。

八雲はいつも一夏の側にいる。そして、傍から見ればまるで恋人のような感じであった。一夏を狙っていた女子はその光景を見て半分以上がその恋を諦めてしまう。そして、残りは勇気を振り絞ってアタックするが、一夏の唐変木ぶりに撃沈していった。もちろん、あたしもその一人だ。

だが、それでも諦めることが出来なかった。織斑一夏と言う存在はあたしにとって特別な存在なのだ。

彼と出会って色々楽しい思い出が出来た。笑ったり、泣いたり、怒ったりすることもあった。そして、その全てがあたしの掛け替えの無い物となり、そして、もっとも彼とそんな思い出を作りたいと思った。

もし、八雲が一夏の事をあたしと同じ気持ちでいたらきつとそれは叶わぬ恋になってしまう。正直、八雲に喧嘩を吹っ掛けていたのはその恋が潰えないようにと邪魔者を排除しようとしていたのだ。今、思えばなんとも馬鹿らしい理由だと思う。けど、小学生だったあたしはその事が理解できず、感情のままに行動をしてしまった。

「あー安心してよ。一夏くんでは無いから」

「え？」

「アタシが守りたいのはアタシの親友。あ、一夏くんとは別のね」

しかし、意外とアツサリとあたしの疑問は解決されてしまった。

「あんたは、一夏の事が好きじゃないの？」

「はあ？　なんで？」

本当に意味が解らないと言った顔をする八雲。

「だって、あんなに仲良くて……恋人みたいだったし……」

「無い無い。それは、無い。アタシは一夏くんに対して恋愛感情はもってません」

「じゃ！　なんであんなに仲よさそうにしているのよ」

一夏と八雲は恋人では無いと言う言葉に反応して、あたしは横にしていた体を起こし、八雲に詰め寄る。

「別に仲良くてもいいじゃん。友達なんだし」

「友、達？」

「そつ。友達」

その言葉を聞いてあたしは全身の力が抜けたようになってしまい、再び地面に寝転んでしまう。

「あはははははははははは！」

そして、声を出して笑ってしまう。同時に大粒の涙が溢れてくる。

自分はどれだけ馬鹿な事をしてきたのだろう。

何も確かめず、勝手にこいつを妬んで、八当たりをしてしまった。

なんて醜い醜い醜態をさらしていたのだと思い、それがわかると笑いと涙が止まらなかった。

「何笑いながら泣いてるの？」

「……………うるさいわね」

いつの間にか八雲があたしの顔を覗きこむようにして見ていた。
あたしは咄嗟に手で自分の顔を隠すようにする。

「……………ね？ 八雲」

「何？」

「今までの事……………謝る。ごめんなさい」

「どうしたの急に？」

素直に謝ろうと思った。

あたしが一夏に抱いた感情を、八雲に抱いた感情を、全て話して謝ろうと思った。

今まで酷い事言っでごめんなさい。

あたしの勘違いでいろいろ迷惑をかけてごめんなさい。

本当に、本当に、ごめんなさい。

「じゃ、許す」

「え？」

あたしが全てを話し終えると八雲はあまり悩む素振りを見せず簡単にそう言った。

「だから、許すって」

「ちょっと待ちなさいよ！　なんだって簡単に許せちゃうの！？」
あたしはあんに色々酷い事してきたのよ！！」

「でも、悪い事したって自覚したんでしょ？　それで謝ってくれた。これからどうするかもわかってるんでしょ？」

「え？　…………二度とあなた達の前には現れない」

「はい！　0点！　やっぱり、許さない！」

「なっ！？　じゃ、どうすればいいのよ！？」

簡単に許すと言う八雲。その言葉にあたしは戸惑いが隠せなかった。そして、これからどうすればよいのかを聞かれ、それに答えれば違うと言われた。

八雲はそんなあたしを見てため息を吐いて立ち上がる。

そして、あたしに向かって右手を差し出した。

「この手を取るだけじゃん。ねえ？　『鈴ちゃん』」

「あ……………」

ああ、どうして一夏や他の奴がこいつに心を許すのかがわかった。

長い年月。あたしと八雲の間に出来た壁のような物が一瞬で壊された様な気がした。そして、八雲はあたしに向かって歩み寄り、手を差し伸べる。敵意や悪意と言った感情を持たず、純粋な気持ちでだ。

八雲ツバメと言う人物はそれが簡単にできる奴なのだ。

だからみんなこいつに惹かれるのだろう。

「ありがとう……………『ツバメ』」

そして、あたしはツバメが差し出した手を握る。それと同時にツバメはあたしの手を引き、あたしの体を引き起こす。

その際、ツバメはあたしが名前で呼ぶと嬉しそうな顔をした。今までいがみ合って怒った表情しか知らないあたしにとってそれはとても新鮮だった。

こいつはこんな風に笑うんだと思った。

「うん、やっぱり笑った顔の方がいいね」

「え？」

気付けば、顔の筋肉、特に口の辺りに妙に力が入っていた。だがそれは無意識であり、自分でやろうとしたわけではない。

自然な笑みだった。

自然に笑ったのは一夏といた時ぐらいしか思い浮かばない。

よもや、今までいがみ合っていたツバメにこの表情を晒すとは思わなかったので不思議な感じがする。

でも、これからあたしはツバメの前でこんな表情を見せて行くのだとこの時思った。

「鈴ちゃん。スラスタの出力値を変えてみたよ」

「サンキュー。早速試してみるわ」

IS学園のアリーナ。甲龍の調整を手伝ってもらったあたしは早速甲龍を装着してみた。

「なあ？」

「んー？」

そして、今から飛ぼうとした時に一夏が話しかけて来た。

「お前らってなんでそんなに仲良くなったわけ？」

「え？」

突然の質問。あたしとツバメはお互いの顔を見合わせ、自然に笑みになる。

そしてその笑みのまま。一夏に向かってこう言った。

「「内緒」」

第三十三話 犬猿の仲 後編（後書き）

白狼^{ぱいろうん}の補足設定。

中国量産型IS。世代は第二世代であり、リヴァイヴ、打鉄とは総合評価では劣るが接近戦闘ではトップを誇る機体。

イメージは作中の通り中国武将の鎧を模した物。ただ、頭部に付けるバイザーの様な物は獣耳であり、腰の付け根辺りから尻尾が生えている。

ツバメが説明していたように後付け武装は接近戦闘用武器がメイン。ただ、鈴が使った連装ショットガンやツバメが使ったアサルトカノンも装備可能である。

そして、機体の名前の由来となるヒートクロー『白狼^{ぱいろうん}』はシャルロットが使っていた『盾殺し』に続く破壊力を持つ。イメージはザクのヒートホークが爪になったと考えてください。

ざっとこんなもんです。

第三十四話 One day of Summer (前書き)

原作四巻へと突入です。

第三十四話 One day of Summer

八月。

IS学園でも少し遅めの夏休みが始まり、在学する生徒は各々の夏休みを過ごしていた。

そしてアタシこと八雲ツバメもそんな夏休みを満喫している……はずだった。

「じゃ、これからコアに直接リンクして稼働させますね」

『よろしくお願いね。でも、本当にそこから出来るの?』

「天燕は特別製です」

現在アタシはIS学園にある地下施設の一室にいる。

目の前には無人となった天燕があり、無数のケーブルが取り付けられ、室内の機械と繋がれている。そして、アタシは電話の相手と話しながら目の前にあるキーボードのボタンを軽快に叩いていた。

ちなみに電話の相手はナターシャ・ファイルス。臨海学校の時、暴走した銀の福音シルバリオ・ゴスペルのパイロットである。

なぜ、彼女とアタシが連絡を取っているかと言うと、永久凍結されたシルバリオ・ゴスペル計画がアタシの渡した再設計プランにより再起動が決定したからだ。

その知らせを聞かされた時は心底驚いた。いくらなんでも早すぎるだろうと。しかも話を聞かされた時にはもうすでにコア以外は完成していると来た。一体何をしたのだろうと思うが、今は気にしな

いでおう。

「（じゃ、天燕。後は頼むな）」

《りょうかい！ちゃんと送り届けて来るね》

《つ、ツバメさん。短い間だったけど、本当にありがとう》

「（何時になるかわからないけど、その内アメリカとかに遊びに行くよ）」

《はい！お待ちしてます！！》

それを最後に天燕内にいた福音の声が聞こえなくなった。

アタシは座っていた椅子に体重を預けてもたれかかる。作業が一段落ついたことで体の力が抜けたのだ。

『やったわ！ ツバメ！！ 福銀が起動した！！』

「おめでとうございます」

『……………ありがとう。本当にありがとう。この子に再び翼を与えてくれて』

「頑張ったのはナターシャさんじゃないですか。じゃ、アタシはこれで失礼しますね」

『うん、本当にありがとう。また連絡するわ』

ナターシャさんも少し鼻声になりながら電話が切れる最後までアタシにお礼を言ってきた。アタシも彼女達の力になれた事を喜んだ。

「んっ！これにて一件落着っ！」

電話が切れた後からは固まった体をほぐすように伸ばした。長時間椅子に座っていた事から体が固まり、背筋がポキポキなるのが気持ちよく感じる。

《ただいまっ！無事に送り届けて来たよ》

「ああ、おかえり。そして、御苦労さま」

《えへへ》

「さて、今日はこれぐらいにして部屋に戻るか」

《そうだね。なんだかんだで三日もここに籠りっぱなしだしね》

そう、実はこの地下施設には三日間も籠っており、その間食事以外では外に出ていない。

「はあ……だつて、フランス政府に提出する書類とお前の第二形態についての資料、第の紅椿の稼働データをまとめるので大忙しだったんだよ。後、明日は一夏くんの白式・雪羅のデータ採取とかで付き合わされるし……世間は夏休みだつて言うのに……まったく遊んで無いのはアタシだけだよ。……きつと」

自分のやることを指を折り曲げながら呟くとその数の多さにアタシは深いため息を吐いた。

《……そう言えばツバメって最近『オレ』って言わなくなったよね?》

「ん? そうか? ……………そう言えばそうだな」

《気付かなかった?》

「気付かなかった」

言われてみればそうだな。

臨海学校から帰って来た辺りから『オレ』では無く『アタシ』と自分の事を呼んでいる。今までまったく自覚していなかった事が不思議なくらいだ。

《ツバメもついに女の子を自覚したんだね。僕は嬉しいよ!》

「……………バラすぞ」

《ごめんなさい!!!》

とても女子が出す様なドスの利いた声でアタシがそう呟くと天燕は即座に謝罪した。

しかし、心境の変化とでも言えばいいのだろうか。まさか、自分がこんな風になるとはな。

まあ、どうでもいいけど。

さて、久々に外へ出てみると夏の蒸し暑さがアタシを襲う。

「ああ……………これが夏なんだね」

冷房が利いた地下施設で冷え切った肌は一瞬で焼かれ熱を運び、額から滝のように汗が流れてきた。

よし、途中でアイスでも買ってクーラーの利いた部屋で涼もう。

「ふっふん」

そんな熱い日差しの中。アタシの正面から軽快にスキップをしてくる一人の少女がいた。

凰・鈴音だ。

この暑さなど気にせず、なんとも上機嫌。

「機嫌いいね。鈴ちゃん」

「あ、ツバメ」

アタシが声を掛けるとやっところちらの事に気づく鈴。

そして、この暑さにも関わらず鈴はアタシに抱きついて来る。どうやらこの子のスキップはこの暑さをもとしないらしい。

「うわっ、汗かいてるじゃん」

……そんな事もなかった。
アタシが汗だくと気づくとすぐさまアタシから離れる。

「黙らっしゃい！ この暑さで涼しい顔が出来る人が見てみたいわ
！！」

「心頭滅却。火も又涼し。……でも、確かにこの蒸し暑さは嫌よね」

「その割には肌が冷たいですね。一体どこで涼んでたのかしら？」

そんな質問をすると鈴はあからさまにギクリと言った感じに体をビクつかせる。

んー？ これは何かありますね。

「べ、別にっ！ あたしがどこで涼んでようと勝手でしょ！」

「ん？ なに、この紙」

「あっ」

不意に鈴の服のポケットから落ちた長方形の紙切れを拾い上げるアタシ。鈴はそれを見てしまったと言いたげな顔をし、動揺していた。

「ウォーターワールドの入場券？」

そして、拾い上げた紙切れに書かれている文字を読み上げ、それが何かを理解した。

そう言えばテレビで今月からオープンされたウォーターワールドがあると耳にした事がある。たぶん、これはそのチケットであり、鈴はこれを使って遊びにでも行こうとしていたのだろう。

「か、返して！」

「あっ」

鈴はアタシが拾い上げたウォーターワールドのチケットを奪うようにして取り戻す。

「ど、どうしたの？」

「な、なんでもない！　じゃ、あたしは行くねー！」

あからさまに何かを隠している鈴であるが、それを問い詰めようとしようとしたら脱兎の如く走って行ってしまった。

「なんだったんだ？　あれは？　……………まあ、いいや」

色々と疑問に思うところはあるが、この暑さでそれを深く追求する気力は現在のアタシには無い。

「とにかく……………クーラー利いてるところに……………」

どこかのゾンビ映画のように腕の力を抜き、おぼつかない足取りでアタシはこの暑さを凌げる自室へと向かった。

その際、正門の方でセシリアと一夏がいたようだったが気にしな

い。

「……………なんか怒られた」

「でしょうね。ちゃんと連絡しないからだよ」

翌日。

IS学園の第二アリーナのISピット内で鈴に電話を終えた一夏が肩を落としながらやって来た。

どうやら、昨日鈴がご機嫌だったのは今日一夏とウォーターワールドへと遊びに行く約束をしていたらしい。しかし、今日は白式の稼働データを取る予定だと把握していなかった一夏は当日になってドタキャン染みた断りの電話を鈴に済ませたのであった。

「一応、昨日から連絡入れてたんだぜ？ でも、鈴の奴電話に出ないわ直接部屋に行ってももう寝たとか言われるし……………」

よほど、今日と言う日が楽しみだったのだろう。

鈴よ、行動がおかしくなっているぞ。

「まあ、代わりにセシリアに行ってもらったから大丈夫だろ」

「……………アホだ。アホがいる」

「あ、あのゝそろそろ始めたいのですが……………」

「あ、すみません」

二人でそんな会話をしていると今度は数人の大人を連れて山田先生が登場。

アタシ達に話しかけるタイミングを窺っていたのか少し落ち着きが無い様子だった。

「では、織斑君。白式の展開をお願いします」

「はい」

山田先生に言われて一夏はピットの中央へと向かう。
そして、大勢の大人の視線の所為で少し緊張しているのか深呼吸をしてから一夏は意識を集中させた。

「……来い！ 白式！」

掛け声と共にガントレット状になっている白式が光を放ち一夏の体を包み込む。そして、一夏の体を包み込んでいた光の粒子が形になり、第二形態と変化した白式・雪羅が姿を現す。

「……おおおおー！！」「」「」

そんな白式の姿を見てデータ採取に來た研究員達が歓喜の声を上げた。

「では、性能テストを行います。グラウンドに出てとりあえず最大加速で適当に飛んでください」

「適当にですか？ 了解！」

山田先生の指示で一夏は白式の大形ウイングスラスタを広げピットから飛び立つ。

一夏が飛び出すと同時にアタシも自分の端末を操作して、検査項目を順々に計算し答えを導き出していく

「初期動作から最大加速への到達時間、第一形態時より25%上昇。最高速度も50%上昇。エネルギー安定率……… - 30%です」

「え？ マイナス値ですか？」

「マイナス値です」

アタシの報告を聞いて山田先生をはじめとする研究員達がざわめき始めた。

まあ、確かに各性能の向上には成功しているが、その所為で余計にエネルギーを食ってしまう機体になっていると知って誰も喜べない。それより、この問題をどう対処しようかと勝手に話を進めようとしていた。

「先生。稼働時間が第一形態より落ちてますから早く次の項目やりましょう」

だが、それは今する事では無いとアタシは判断し、燃費が悪くなった白式を考えて提案する。

「そ、そうですね。織斑君聞こえますか？」

『あ、はい！』

「次の性能テストを開始します。グラウンド上にあるバルーンを雪羅の荷電粒子砲で狙い撃ってください」

『わかりました』

山田先生がそう言い、目の前にある端末から操作するとグラウンド上空にはいくつかのバルーンが浮く。一夏は左手を前方に構え、バルーンに狙いを定め、雪羅の荷電粒子砲を発射する。

「バルーン10個に対して18発の砲弾を使用。命中精度は操縦者の技量不足と推定。砲弾速度1050m/sec。連続発射は出力により比例。エネルギー安定率はこちらもマイナス値です」

「またですか…… やっぱり、燃費が悪いですね」

「まあ、筈 篠ノ之さんの紅椿とセットと考えればそうでも無いですけど」

「単独ではなんとも不安定ですね」

「うーん……」

さてはて、どうしたものかと悩むアタシと山田先生。

まさか、第二形態となった白式がこれほど不安定な機体とは思わなかった。能力的には第一形態より優れているがその分エネルギーを消費してしまう。アタシが言った通り、エネルギーを供給してくれる紅椿の『絢爛舞踏』と一緒に問題は無いと思うのだがいつでもそれに頼る訳にもいかない。

「織斑君、とりあえず、白式にエネルギーを充電しますからピットに戻って来てくださーい」

『はい』

まだ、30分も稼働していないと言うのに殆どのエネルギーを使った白式を充電するため、山田先生は一夏にピットに戻るようにつた。

それから白式に何度か充電を繰り返しながらも稼働実験は進む。が、一向にいい結果は得られずにいるアタシ達。外部からやってきた研究者たちもだんだんと肩を落とすように落ち込み始めていた。

《ねえ？ ツバメ》

「（なに？ 天燕）」

《上空から何か来るよ》

「はあ？」

天燕が指摘した方を見る。

そして、突然の事だった。

キイイイイン

どこかで聞いた事のある飛来音。それが、アリーナ上空から聞こえてくる。

ドカアアアアアアアアアアン！！！！

そしてそれは、アリーナ上空に展開していたシールドを突き破ってグラウンド中央に落下して来た。

「「「……………にんじん？」」」

落下して来たのは巨大なあの人参。

臨海学校で東さんが乗っていたイラストクなデフォルト人参だ。アリーナにいる一同がそんな人参を見て啞然としていると今度はピット内にあるモニター全てになにかの映像が映し出される。

映像は始めこそ荒れて何が写っているのかわからなかったが、次第にそれはクリアになり、とある人物が写し出された。

そこで、アタシ達はさらに驚愕してしまう。

「東さん！？」

『はっはっはっ！！ やーやー！ 久しぶりだね。いっくん、ツンちゃん。皆のアイドル篠ノ之束さん、見参！』

モニターに写ったのはあの篠ノ之束であつた。相変わらずの不思議の国のアリス風の洋服にウサ耳を頭に付けている。

そんな大物人物が映像とは言え姿を現したことによりピット内の研究者たちに動揺が走る。ある者はあまりの事に腰を抜かし、見つともなく尻もちをつき、ある者は純粹に憧れの眼差しでモニターに釘付けになっており、ある者はこの事実を外に伝えようと電話で連絡をしようとしていた。

『おっと、そうはいかんだよ。現在、このアリーナ内にある通信手段は全て私が掌握しました。それと、色々メンドクサイ事になりそうなので外部からの干渉も受け付けないようにしたからねえ』

つまり、アタシ達はアリーナ内に隔離されたと？

「束さん。一体どうしてこんなことを？」

『んー？ 今日白式の稼働実験と聞いてとある贈り物を届けに来たのだよー！！』

「贈り物？」

そんな一夏の質問に束さんは元気よく答える。そして、贈り物と言う言葉を聞いてピット内にいる全員がグラウンドに落ちてきた巨大人参へと視線を送る。

『ふっふっふっ！ ではでは、ご登場していただきましょう！！
ツンちゃんが開発したELSドライブ搭載機！ 天燕の兄弟機！
『クリムゾン・レイヴン』だよ』

巨大なデフォルト人参が束さん掛け声と共に半分に割れ、そして、人参の中からは一体のISが姿を現す。

紅と白のボディ。それが一番早く目に入った。箒の紅椿と似た色合い。背中には四枚羽根のウイングスラスタと大型ブースターのようなものが付けられている。それら一つ一つからはELSの粒子が噴き出されていた。そして、操縦者と言っているのか？ そこに人がいるべき場所には頭から足の先まで装甲を纏った人型がいた。

『いつくんの白式稼働テスト。このクリムゾン・レイヴンで試してあげるよ』

実に楽しそうに言う束さん。しかし、この状況に追いつけず、ピット内の山田先生を含む大人たちは混乱していた。

「えーっと……………」

「山田先生。下手に動いたら何されるかわかりません。ここは従った方がいいかと……………」

「そ、そうですか？ ……………そうですね。でも、大丈夫なのでしょうか？」

「大丈夫ですよ。あの人にとってイタズラ程度の事ですから」

「い、イタズラって……………わかりました。では、急いで白式の充電

を済ませてしましましょう」

とりあえず、山田先生に白式の充電を急ぐようにお願いするとすぐさまその作業に取り掛かってくれた。

「東さんもそれでいいですね？」

『もちろん OKだよ』 全力で来ないといつくんでも酷い目に遭うよ〜なんならツンちゃんも一緒にやる？』

「暑いのでパスします」

『ブーブー！ つれないなあ〜』

嫌だよ。ピット内は冷房が利いてて涼しいし、何度も外に出てる一夏なんて帰って来る度に「ああ〜涼しい〜」って汗だくになりながら言ってるんだぞ。

「ツバメ。本当に大丈夫なのか？ アレ」

ピットからグラウンドを眺めている一夏。モニターで拡大されたあのISを見ず、肉眼であるISを見ていた。

「んー……………わかんない」

「わからないって……………毎度のことながら東さんにはビックリさせられるよ」

「今に始まった事じゃないじゃん。いつも通りだよ」

「そんなもんかあ？」

「そんなもん」

ハハハッ。とお互い小さく笑ってしまう。

「織斑君！ 白式の充電が完了しました」

「了解しました。じゃ、行つて来る」

「サポートは出来るだけするよ。頑張つて」

「おう」

一夏はグツと親指を立てて白式の元へと向かう。アタシはそんな一夏を見送り、再びクリムゾン・レイヴンの方を向く。なんとなく、クリムゾン・レイヴンと視線が合った気がした。

そして、アタシは空中にいくつものディスプレイを投影して自分の出来る事を始めた。

第三十五話 クリムゾン・レイヴン（前書き）

急展開！！　とだけ言っておきます。……たぶん

第三十五話 クリムゾン・レイヴン

夏休みがもう終わろうとしていた時。俺は白式の稼働データを取っている最中の事だった。

束さんの突然の来訪。

グランド中央に降り立った謎のIS。

そして、俺は訳も解らずソイツと模擬戦をする事になってしまったのだ。

『一夏くん。あのクリムゾン・レイヴンはアタシと同じELSドライブを搭載した機体。束さんが提示してくれた情報だと見た目よりも早く動ける。射撃、格闘戦も出来る武装があるみたい』

「了解」

ピットからグランドへと降りた俺の白式にツバメからの通信が入って来た。そして、ハイパーセンサーにもその情報が表示される。

「クリムゾン・レイヴン……カッコいい名前だな」

『そんな事言っていないで目の前に集中しなさい！』

「あ、ごめんごめん」

ツバメの注意を受けて俺は目の前のクリムゾン・レイヴンに意識を集中させる。右手に雪片二型を展開し、それを構える。しかし、クリムゾン・レイヴン（メンドイから以下レイヴンな）はそんな俺を無視して戦う準備をしない。

とある方向を見つめたまま動こうとしないのだ。

一体何を見ているのだろーと思ひ、俺もレイヴンの見る先に視線を動かして見る。視線の先にはツバメ達がいるピットがあった。

「（ピット？ 何を見ている？）」

ハイパーセンサーで視線の先を拡大投影するとそこには一人の人物が写った。

「（ツバメ？）」

俺と相手の情報収集をするため、束さんが使っていたような空中投影されるモニターを操作しているツバメの姿がそこにはあった。

あのレイヴンはツバメの事を見ている？ でも、一体なぜ？

『では、これより模擬戦開始』

そんな疑問について考えていると突然束さんの開始合図がグラウンドに鳴り響いた。

しまったと思った。

それは一瞬の油断だった。開戦直後、一番警戒しなくてはならない場面で余計な事を考えていた俺は完全に出遅れる。だから、慌てて雪片を両手で構え戦闘態勢に入る。相手の初手をやり過ごし、隙を見て間合いを広げ体勢を整えるために。

だが、レイヴンからの攻撃はなかった。

模擬戦が開始されたにも関わらず、相変わらずツバメの方を見て俺の事を完全に無視している。

「ぐっ！ 舐めるなあああああ！！」

その態度が気に食わなかった俺は白式の大型スラスターを吹かし、レイヴンに向かって斬りかかる。

だが、レイヴンは依然として動かない。ツバメを見たまま俺の方を振り向かない。この腕を振り下ろせば雪片の刃が届く位置に来てもだ。完全に舐め切った態度に俺は怒りにまかせて縦一閃に雪片を振り下ろす。

ガキイイイン！！

「なっ！？」

「……………」

しかし、振り下ろした雪片の刃はレイヴンに届かず俺の意思に反して途中で止まってしまう。

よく見ればレイヴンのウイングスラスターの一つが雪片を受け止めていたのだ。

「スラスターじゃ無い！？ こいつは」

以前、ツバメの天燕が使っていたセイバービット。

セシリアのブルー・ティアーズが使っている空飛ぶ砲身では無く、空飛ぶ剣。

その事を理解すると俺は反射的に体を動かしていた。

瞬間、俺のいた位置に三本のセイバービットが地面に突き刺さる。

「……………」

そして、やっとレイヴンが俺の方を見る。目の前に敵がいる事をやっと理解したのか地面に刺さった二本のセイバービットを手に取り、それを合わせるように連結させ、構える。

合わさったセイバービットからELSの粒子がエネルギーを凝縮させ、巨大なエネルギー刃を形成された。

「やっと……………その気になったか」

「……………」

相変わらず一言も喋らないレイヴン。その寡黙さがその存在を不気味に思わせる。

俺は再び雪片を構え、レイヴンと同じエネルギー刃を展開させる。

そして、お互いが相手の出方を様子見していると先に動いたのはレイヴンの方だった。背部に付いている本当のスラスターを噴射させ、一気に距離を詰めてくる。俺はレイヴンが振りかざした大剣を雪片で受け止め、鏖兢り合いとなった。

「ぐっ！ このっ！！」

刀身の殆どがエネルギー刃でその重量はそれほどでもないのに大剣による斬撃は想像以上に重量を感じた。

これが、一撃の重みと言うやつだろうか。その一撃で俺はレイヴンの戦闘技量がどれほどの物か理解する。

「強いっ！」

この状況が続くのはまずい。

そう思った俺は渾身の力でレイヴンの大剣をいなして、体勢を崩させる。体勢を崩されたレイヴンはそのまま地面に転がりそうになった。

「チャンス！」

すかさず、雪片に零落白夜を展開させ、レイヴンを斬ろうとした。

が、それは出来なかった。

「くっ！ またか！？」

レイヴンの体を守るようにセイバービットが前に立ちはだかる。そして、それは俺を斬り付けるように襲い掛ってくる。

「クソ！ 後少しだったのに！！」

セイバービットの相手をしている内にレイヴンは体勢を整え、後方へスライドするように移動し、俺との距離を空けた。

「（ん？ 何故そこで距離を空ける必要がある？）」

この状況だったらセイバービットと一緒に自分も攻撃を仕掛ければ幾分か有利になるはずだ。なのに、あいつはわざわざ有利になる条件を捨ててまで距離を取った。俺はその意味が理解出来ずに頭が混乱する。

レイヴンは大剣を前に突き出した。

一瞬それは突撃の様な構えだった。が、それは違うとすぐに気づく。

大剣からはエネルギー刃が消え、刀身が二つに割れる。

キュイーン……………バシューーンッ！！

「うわっ！！」

咄嗟に俺は雪羅のシールドモードでそれを防ぐ。

「何だ！ 今のは！？」

よく見ればレイヴンの手には巨大な銃が握られている。

先程まで使っていた大剣が形を変えてあの銃へと変わったのだ。

それにしても凄まじい威力だった。零落白夜のシールドで防いだにもかかわらず、白式のシールドエネルギーが一気に削られてしまった。もう、後が無い状態に陥ってしまう。

レイヴンは残った二本セイバービットを戻し、それを合わせもつ一つの大剣を手にする。

「はははっ…………おもしれえ！」

危機的状況にも関わらず、自然と笑いが込み上げてきた。

雪片を構え俺は再びレイヴンへと特攻する。

「バスターライフル！？ 凄い威力です！！」

「白式の零落白夜のシールドで相殺は出来ますけど、その分エネルギーが消費されてしまう。たぶん、次にあれを防ぐことは無理でしょう」

ピット内で山田先生が一夏とレイヴンの戦いを見て驚愕していた。

「離ればピットとバスターライフル。近づけばあの太剣。織斑君にはどうする事も出来ないのですか！？」

「……………」

近距離、中距離、遠距離で戦える理想的スタイル。山田先生の言う通り、そんな相手では今の一夏では勝つ見込みが見あたらない。

『ふっふん どう？ 私が作ったクリムゾン・レイヴンは？
ちなみに、あのセイバーピットの名前は『倶利伽羅^{くりから}』って言うんだよ。一つの武器に三つの役目を与えた武器。でも、ツンちゃんも凄
いねあんな武器を考え付くんだもん』

「え？」

束さんがそう言うと山田先生はまたビックリした顔でアタシの事を見る。

確かに、少し前まで多目的武器を設計した事がある。だが、それはアタシの技量では持てあます物であり、作り出すのは不可能だと判断した代物。それを開発してしまうとはやはり束さんは天才だと思ひ知らされた。

『うんうん。やっぱり、いつくんは変なテストより実践の方が白式の性能を引きだしてくれるね』

「……………あう」

そして、束さんの余計なひと言で山田先生の心に傷が付いた。

「あ、別に先生がいけないってわけでは……………」

「……………いいんです。どうせ、変なテストしか思い浮かばないような人なんです」

ああ。完全に塞ぎこんじゃった。体育座りしながら人差し指で地面をなぞるとか、なんとも漫画チックな落ち込み方をしている。よし、メンドクサイからほっとくしよう。

「エネルギー安定率がマイナス値だったのに今は若干プラス値になっています。……………直感で白式の動かし方を理解している」

『なんか、『男の子』って感じだね』

「ぷっ……………」

『でも、あの子も負けないよ』

「そう言えば聞いたかったんですけど。あのクリムゾン・レイヴンのパイロットって何者ですか？」

『ふっふっふん それはまだ言えないのだよ』

「ええ……………」

『後のお楽しみだよ』

そう言われてしまうと深く追求できない。と言うか、上手くはぐらかされてしまうだろう。だから、追求する気が起きなかったのだ。アタシは再びディスプレイに目をやる。コンソールを軽快に操作しながらデータを処理して行っただけ。

「あの……………出来れば我々にもそのデータを閲覧させていただけないでしょうか」

アタシがデータ処理をしていると白衣の男が声を掛けて来る。

すっかり忘れていたが今日は外部から白式の稼働データを取りに来ていた研究員がいたのだった。気付けばアタシの後ろでは数人の研究者達がディスプレイに釘付けになっている。

テロリスト紛いの状況だと言うのに、それでも自分達の研究に執着する辺りがすごいと思った。まあ、悪く言えば職業病だろうな。

「あ、すみません。そっちの端末に送信しますのでそちらで閲覧いただけますか？ その…………この状態だと操作しにくいので」

「あ、あのっ！ あのクリムゾン・レイヴンを作成するにあたってあなたも関わっているって本当ですか！？」

「え？」

「見た限りではエネルギーも安定してますよね！？ あの粒子のよ
うな物が動力となっているのでしょうか！？」

「え？ え？」

「それとあの武装！ イギリスのBTシステムと似ていますが原理は別なんですかね！？」

「え？ あゝえゝっと……………」

アタシがそう言うのとゾロゾロと後ろにいた研究員達は言われた端末の方へと向かう。が、一部の研究員はアタシの元に残り、どんな質問をして来る。

なんか、それがもう怖い。質問してくる皆さんの目がもうマジで怖い。もう欲望むき出しのオーラさえ見えてくる。

「み、皆さん！ 質疑は後で受け付けますから！ 今は作業の邪魔をしないでください！」

おおおっ！！ さっきまで落ち込んでいた山田先生が復活なされ

た！ もはや自分の不甲斐無さを八つ当たりするかのように怒ってらっしゃる。研究員達もそんな山田先生の気迫に負けてイソイソと他の研究員達がいる所へと戻って行く。

先生！ ごめんなさい。少なくとも明日からはリスペクトさせていただきます！

「あつ！ 白式のエネルギーシールドがレッドゾーンに！？」

「一夏くんそろそろ決めないとヤバイよ……………」

「ぐっ！？ このー！」

レイヴンの攻撃。

左手に持っている大剣をまるでナイフのように扱い、俺に襲い掛って来る。

「うおっ！ っ」と

猛攻から逃げるように下がる。が、レイヴンは俺が距離を空けると今度は右手のバスターライフルを俺に向け、引き金を引く。

キューーン……………バシューーンッ！！

「うわっー！！」

白式のエネルギー残量を考え俺はそれを防がず、射線から逃げるように横に飛んだ。

レイヴンはバスターライフルを発射させるとそれを分解し、ビットに戻してそれをしまった。代わりに左手の大剣がバスターライフルへと変化し、再び俺を狙い撃ってくる。

「（ライフルをしまった？ 弾切れか。威力が強大な分、弾数は少ないみたいだ）」

覚えている限りではバスターライフルで撃てる数は5発。

弾切れになったらああやって充電をして再び撃てるようにするのだろう。

そして、充電している間はもう一本のライフルで攻撃。

「なら戦い用はまだある！！」

狙いは今手にしているバスターライフルが撃ち終わる時。俺はひたすらにバスターライフルの射線からずれるように動き回る。

キューーン……………バシューーンッ！！

1 発目！

キューーン……………バシューーンッ！！

2 発目！

キューーン……………バシューーンッ！！

3 発目！

キューーン……………バシューーンッ！！

4 発目！

キューーン……………バシューーンッ！！

5 発目！ 今！！

レイヴンが今手にしているバスターライフルをしまい、充電していたもう一本を取り出そうとした。

「はああああああっ！！」

大型になった白式のウイングスラスター。そこから発するイグニッション・ブーストは第一形態の比にならない。50mぐらい離れていた距離があっという間にゼロとなる。俺はその勢いを使って取り出したバスターライフルを構える前に雪片でそれを弾く。バスターライフルはレイヴンの手から離れてしまった。

「チェックメイトだ。この距離ならはずさない」

そして左手に備わっている雪羅の荷電粒子砲を突き出し、発射させた。

ドオオオオオオオオオオオオ！！！！

光の閃光がレイヴンを包み、凄まじい爆煙が目の前で広がる。

「……………ヤバイ。やり過ぎたか？」

いくらISが操縦者の命を守ってくれと言ってもこれはやり過ぎたと思った。俺はすかさず荷電粒子砲をともに食らったレイヴンの姿を探すように辺りを見回した。

『初期設定終了。一次移行いたします』
ファースト・シフト

「え？」

爆煙の中から電子ボイスが聞こえてくる。

一体なんだと思い電子ボイスが聞こえた方を見してみる。

白式のハイパーセンサーが何かを爆炎の中で捉えた。

「な、なんで……………」

爆煙が晴れるとそこには無事ではいるはずのないレイヴンがそこにいた。

「今のはごつつう危なかったわ……………」

初めて聞く声。同じ日本語で関西独特の喋り方。

「自分マジで殺す気か？ 一次移行せんかったらどないするつもりやったねん？」

先程までの寡黙さとは違い、目の前にいるレイヴンのパイロットは悠長に俺に話しかけてきた。

「…………ご、ごめん。まだ、コイツを扱いきれなくて」

「まあええわ」

ガラランとパイロットを覆っていた仮面以外の装甲が地面に落ち、レイヴンは自分の顔に付いている仮面に手を伸ばし、それを取り外した。

だが、そこで俺はさらに驚いてしまう。

「ふー。やっとこの暑苦しいのから解放されるわ」

「…………え？ あ、え？」

「初めまして織斑一夏君」

いきなり、挨拶をしてくるレイヴン。

「オレは瀬戸晃輝。せと こうき 世界で二番目にISを操れる『男』や」

第三十五話 クリムゾン・レイヴン（後書き）

ここへ来てオリジナルキャラ。しかも、ISが使える男です。

さて、これからどうしよう……

第三十六話 瀬戸晃輝

「男！？ 男でISを使えるのは織斑一夏だけではないのか！？」

「だが、現にあそこにいるのは男だぞ！？」

「おい！ それより篠ノ之博士との通信が切れてるぞ！！」

「くそっ！！ 詳細を聞き出せないではないか！？」

現在、ピット内では外部から白式のデータを取りに来た研究者達が騒ぎだしている。

無理も無い。突然現れた謎のIS。そして、そのパイロットが女性しか扱えないISを扱える『男』なのだから。

「や、八雲さん……………どうしましょう？」

「……………」

山田先生はこの混乱を目の辺りにしてどう対処していいのかわからない様子だった。もちろん、アタシだってこの状況をどうにかする術がある訳ではない。それよりも、この人達同様にアタシも混乱していたのだ。

「全員動くな！！」

そして、混乱の中、ピット内にあるロックされていた扉が開く、そこから現れたのは織斑千冬だった。

「お、織斑先生!!」

織斑先生を先頭に数人の教師陣を連れて中へ入ってくる。山田先生はそんな織斑先生が救世主などに思えたのか膝を地面につき、神様に祈りを捧げるようにしていたのは気にしない。

「ここにいる全員は無事か？」

「あ、はい! ……あの、織斑先生達はどうしてここに？」

「突然第二アリーナのセキュリティが誰かにハッキングされてな。山田先生達が中にいるのは知っていたから急いで駆け付けた。で？状況は？」

「はい、え〜っと……………なんと言いましようか……………」

それから山田先生は事の経緯を織斑先生に説明を始めた。

白式の稼働データを取っていると東さんからコンタクトがあった事。

謎のISと一夏が模擬戦をした事。

そして、そのISに乗っていたのが男だった事。

全ての説明を聞いた織斑先生は頭を悩ます様になっている。しかし数秒で立ち直り、テキパキと他の教員達に指示をし、この後処理を始めるのであった。

指示を受けた教員達も織斑先生の指示に従い行動する。まず、ピ

ット内にある端末を持参した別の端末に繋げ、異常が無いかを調べる。別の教員は外部から来た研究者を外へ誘導させていた。若干の小競り合いがあったもののアタシと山田先生以外の当事者はこの場を去って行ってしまう。

「グランドにいる二人！ 至急ピット内まで戻れ！」

『え？ 千冬姉？』

「織斑先生だ馬鹿者。さつさと戻れ！」

『は、はい！！』

そして、今度は先程までグランドで模擬戦をしていた二人を呼び戻す。一夏とクリムゾン・レイヴンのパイロット瀬戸晃輝はそれに素直に応じ、ピット内に戻ってくる。二人は自分のISの展開を解除し、織斑先生の前に並ばされた。

「本当に男……」

誰かがそう呟いやいた。

皆、瀬戸晃輝の姿を見てその場にいる一同が驚愕している。

織斑一夏以外にISの使える男。瀬戸晃輝。

アタシも含め、皆物珍しそくに彼の事を見ていた。

「瀬戸晃輝だな」

「はい」

「貴様が来るのは2学期からだと言いたが？」

「「「え？」「」」

唐突に始まった織斑先生と瀬戸との会話。その内容にピット内にいるアタシと一夏、山田先生は声を揃えて驚いてしまう。

話から察するにこの瀬戸と言う人物は織斑先生を含む数人の教師達に知られている人物らしい。おまけに、2学期からここに編入する事になっているとか。

あれ？ だったら山田先生も知っているはずなのでは？

「山田先生……君には事前連絡はしてあったはずだが？」

「えっ！？……あっ！ ああー！！」

忘れてたんかいっ！！

「あの……」

「なんだ？ 瀬戸」

「東さんからはここへ来ればなんとかなるって聞いていたんですが……」

「……先程も言った通り、貴様の受け入れは2学期からだ。今ここに来られても準備が出来たらんからどうにもならん」

「うえ！？ ほんまですか！？」

「事実だ。何故今日ここに来たんだ？」

「いや、束さんにオレのＩＳクリムゾン・レイヴンの最終性能テストを兼ねて皆さんに挨拶しておいで、って言われたもんやったから………
てつきり、もう転校できるもんかと………」

「はあ………毎度面倒事を………」

眉間にしわを寄せながらため息を吐く織斑先生。束さんの予測不能な行動に頭を悩ませどうするかを必死に考える様子だった。

そして、仕方ないと言った顔で視線を一夏に向けその名前を呼ぶ。

「織斑」

「はい」

「貴様は明日から帰省だな？」

「え？ はい」

「こいつを連れて今帰れ」

「えっ!？」

「部屋割の出来てない状態でここに寝泊まりさせる訳にはいかん。ホテルで泊まると言う手もあるが学園はそう言った援助はできません。家にいてもらった方がいい」

「俺はいいけど………千冬姉はいいのかよ？」

「織斑先生だ。私がそう提案しているのだ。駄目だと言う理由がない」

「わかったよ。じゃ、準備をしてくる」

「敬語を使え。馬鹿者」

「……………すみません」

「瀬戸もいいな？」

織斑先生は確認を取るために今度は瀬戸に声を掛ける。

「嫌も何も……………こつちとしてはありがたい申し出です」

「なら、決まりだ。よし、教師陣はこの事態の対処を！ 瀬戸晃輝の存在は学園編入当日まで内密に！ 情報操作！ 口外！ 全てにおいての規制を厳とする！」

「……………はい！！」「……………」

ああ、なんか妙なことになるって来たな。

「八雲、お前にも協力してもらってからな」

うえ……………。

オッス！ オレ瀬戸晃輝！ いきなりやけどなんか世界で二番目にISが使える男やねん。

「瀬戸。こつちこつち」

「おう、すまん」

で、今オレを案内してくれてるコイツが世界初のISを動かしたと言われる男、織斑一夏や。

「なんかすまん。いきなり、お宅にお邪魔する事になってもうて」

そう、現在オレ達はIS学園を出て織斑の家に向かっている。

東さんの話からてつきり今日からあの学園で生活するもんかと思とったからその気でおったんやけどなんか勘違いだったらしい。生憎、ホテルで宿泊なんて出来る金は無く、どないしようかと思つた所に天の助け。織斑の姉さんである織斑千冬さんの提案で家に泊めてもらえるようになった。

「気にするなよ。でも、嬉しいぜ。男でIS動かせる仲間ができて」

「…………織斑。お前ええ奴やな」

「ははっ。あ、ここが家だ」

そんなこんなでオレ達は織斑の家に到着。隣家と変わらぬ、普通の一軒家がそこにあった。

「自分の家だと思って寛いでくれよ」

「ほな、お邪魔しまゝす」

織斑の案内でオレは家の中へと上がらせてもらう。上がらせてもらった家は人がいないにも関わらず、生活習慣が残つとる。家を空けてもこまめに掃除しに帰つて来とる事が窺える。

そして、リビングで適当に寛ぐように言われオレはその言葉に甘えソファ―に腰掛けた。ちなみに織斑は一人で二階に上がって行つてしまった。

「はあゝ……………東さんの所為でいろいろ滅茶苦茶やつたな……………」

これからどうしようかと正直思う。ちよつとしたきつかけでISが動かせるようになり、いきなりあのIS学園に編入させられる事になってしまったのやから。似たような境遇である織斑一夏は始めわこないな気持ちやったのやろか？

「瀬戸」

「あ、なんや？」

「すまん、ちよつと出かけなきゃいけない用事が出来たんだ。一応、部屋は用意したから。後、ベランダに瀬戸が使う用の布団が乾してあるけど適当な時間に入れて貰えないか？」

「かまへんよ。むしろ言ってくればオレがやったのに」

「そんな事させれるわけないだろ。ここでは瀬戸は客なんだから。じゃ、行ってくる」

慌ただしく、織斑は自分の家を後にしオレはそれを見送った。

「んゝ客か……よし！　まずは織斑と打ち解けよう！」

先の事なんてどうなるかわからへん。とりあえず、オレの学園生活が楽しくなるように色々するとしよ。

「ヤバイ。すっかり遅くなった」

急な学園からの呼び出し、なにかと思えば白式の書類に不備があったらしくその手直し、それからなぜか学園外でトラブルを起こした鈴とセシリアを迎えに行ってたらこんな時間になってしまった。

「瀬戸の奴怒ってないかな？」

本当なら明日から帰省する予定であったが、今日はこっちの方でもトラブルがあった。いきなり現れたISを動かせる男、瀬戸晃輝の面倒を家で見ることになったのだ。

だが、現在の時刻は午後7時。いきなり他人の家に招かれ、勝手がわからない瀬戸にしてみれば苦痛だ。だから俺は急いで家へと向かって走っていた。

「晩飯は適当にコンビニで買ったし……大丈夫だよな？」

普段ならコンビニで食事を済まさないのだが、時間が時間だ。そんな事言ってもらえない。

「ただいまー！ すまん、瀬戸！ 遅くなった！」

家に着き、俺は玄関で大きな声を出しているはずである瀬戸に帰って来た事を伝える。

「おおー織斑、おかえり。息切らしてどうないした？」

「すまん、こんなに遅くなるとは思ってなくて。腹減ってるだろ？ 悪いけど夕飯コンビニで買って来たから」

「ああ……………夕飯なんやけど……………」

「ん？ もしかして、もう済ませたのか？ あれ？ なんか匂いが

……………」

俺がコンビニ二袋を瀬戸に差し出すと瀬戸は何故か申し訳なさそうな顔をしていた。やはり、コンビニなどで済まそうと言うのが気に食わないのだろうか？ それはすまない事をしてしまった。

だが、そんな事を考えていると何やらいい匂いが家の中に漂っていた。俺はそれが何かと思いい匂いのする方へと向かう。そして、辿り着いた先は台所だった。

「すまん！ 台所を勝手に使わせてもらった！」

瀬戸は両手をパンと合わせて頭を下げる。

食卓に並んでいたのは夕飯だった。メインはトンカツ。それに御飯と味噌汁が並んでいる。

「いやー帰って来るのが遅いし、悪いと思ったんやけど……………飯作

「っておいたらうかな〜って思ったんよ」

「それは全然構わないけど……………これ全部瀬戸が作ったのか？」

「せや！ オレの一番得意な料理や！」

自信満々に言う瀬戸。うん、確かにうまそうだ。

「まっ、食べてみ！」

「ああ、いただくよ」

瀬戸に言われるがまま俺は食卓の椅子に座り、箸を手取る。そして、トンカツの一切れを摘み、口に運ぶ。

「……………うまい」

「ほんま！？ やーよかったワ〜！！」

本当にうまい。

衣はサクサク。そして、肉のうま味もちゃんとしている。俺もトンカツを作ったりするがここまでうまく作れる自信が無い。いや、トンカツ作るならやり方はそんなに変わりはないはずなのに。

「さ〜て！ オレも食おうっと！」

「料理うまいんだな」

「んー？ まあ〜ガキの頃から作っとたからな〜」

「え？ 親とかは？」

「オレ親おらへんねん。生まれた時から孤児院暮らしやった。料理はその手伝いで作ったりしてたねん。あ、でも養子として育ててくれた人もおるから別寂しい思いはせえへんかったワ」

「……………あ、いや、すまん」

「あー別に悲観せんでええよ。オレもそない気にしてへんし。ってか、そう言う態度が一番傷つくんやで？」

自分の触れられない過去のはずなのに冗談ばく言う瀬戸。

「うん、よくわかるよ」

その気持ちはよくわかる。

俺も親がいないから。

物心着く前に俺と千冬姉を置いて蒸発してしまった両親。それを理解する歳になると周りの態度が異様に気に食わなかったりもした。同染染みた優しさ、哀れみの目線。問題を起こせば「これだから親のいない家庭は」などと言われる。

「この話は終いや。飯が不味くなる」

「そうだな」

「それ以外やったらなんでも答えるでえー。タイプの女性から好きな女優まで」

「はははっ、なんだよそれ」

「お、やつとツッコミ入りよったな。上出来、上出来」

「やっぱ関西とかってそう言うノリなのか？」

「全員がそう言う訳やあらへん。オレはツッコまれんと寂しくて死んでしまっや」

「ウサギかつ」

「おー調子出て来たんちゃう？」

「はははっ」

それから俺達は色々な事を話しながら食事をした。

瀬戸について、俺について。本当に女の子の話になった時は若干恥ずかしかった。それでも、お互い面白可笑しく笑って、男同士でしか出来ない話もあって本当に楽しい食事だった。

瀬戸と弾を会わせてみたらどうなるだろう？ 本格的な漫才が見れるかな？

「では、後ほど一夏の秘蔵コレクションを拝見させていただきましょ」

「いやいや、先にそっちの厳選コレクションの拝見を……あれ？ 今名前で呼んだ？」

「せや。オレは友達と思った奴は名前で呼ぶようにしとるねん。あ

「かんか？」

「……………いや、いいぜ。俺も晃輝って呼ばしてもらっけどな」

「なら決まりや」

女子だらけの生活で色々悩まされる所もあつたIS学園。

それでも、楽しい事はあつた。だが、晃輝と一緒になら俺の学園生活はより楽しくなるような気がする。

「なあ？ 晃輝」

「なんや？ オレの『夜の診察室』はやらんで？」

「じゃなくて。明日近くの神社でお祭りあるんだ。それに行かないか？」

「なるほど。一夏は和服物が好み……………ええチヨイスや！」

「だーもー！！」

本当に楽しくなりそうだ。

一方、その頃ツバメは……………

「なああああああー！！！！！！！！！！ 書類が終わらない！！！！！！！！！！」

「！」

「八雲さん後少しです！ お互い頑張りましょー！！」

「夏休み！！ アタシの夏休みがあああああ！！！！」

「ああ！ せつかく並べたのに」

本日の後始末（書類の山）を山田先生と共に行っていたのである。

「あれ！？ アタシここでしか喋ってない！？」

第三十七話 織斑家での一日 前編（前書き）

懲りずにまたもや前・後編。

……いや、もしかしたら三分割になるかもしれません。

第三十七話 織斑家での一日 前編

「……………」

ドキドキとしながら、その表札を見つめる少女がいる。

『織斑』と書かれたそれを、シャルロットは何回も読み返しながら、深呼吸をした。

「（大丈夫、大丈夫……。今日は家にいるって言ってたし、一夏は迷惑がたりしない……。よね、たぶん）」

現在僕がいるのはIS学園一年生寮の廊下ではなく、路上。『織斑』の表札とその下のインターホンと睨めっこをして10分。じりじりとした日光は容赦なくその金髪を照らしている。

「（うー、あー、えっと、本日はお日柄も良く……。じゃなくてっ）」

そして、なんて切り出そうかと考えては、またボタンに伸ばした手を引っ込める。

「あゝ……………」

「ひゃっー!!」

そんな事を繰り返していたところで、急に声を掛けられた。慌てて僕は声のした方を振り向くとそこには一人の少年がいた。

「この家に御用ですかあ？」

「えっ、あ、えーっと……………」

見た目は僕とそんなに変わらない歳の男の子。身長は一夏よりやや高めで整った顔立ちをしている。長めの前髪はピンで止めており、寝癖なのか無造作へアーなのか毛先が所々跳ねていて、目が少しづつり上がっていた。

「あーもしかして一夏の友達かなんか？」

「え？ は、はい」

「なんや、それならそう言ってくればええのに。ちょっと待ってなあ。今呼ぶさかい」

「え？ え？」

突然現れた少年の口から一夏の名前が出たのにビックリして思わず「そうです」と正直に答えてしまった。

関西弁と言うやつだろうか？ その独特な喋り方をする少年はなんの躊躇も無く織斑と書かれた表札の下にあるインターホンを押してしまう。

『晃輝か？ 鍵なら開いてるぜ？』

「あー一夏？ なんかお客さんが来とるんやけど」

『客？ ちょっと待ってる』

インターホンから聞こえる声。それが終わると家の玄関が開き、一夏が中から姿を現した。

「あれ？ シャル？ どうした」

「あ、あつ、あのっ！ ほ、本日はお日柄も良くつ じゃなく
て！」

「？」

「え、えつと、ええつと……………」

まだ心の準備が出来ていないと言うのに一夏の登場。僕の頭の中はパニックになりなにかいい言葉が無いかを脳内で検索した。

「き……………」

「き？」

「来ちゃった」

「ぶふっ！」

えへっ と笑みを添えて 言った後、とてつもなく後悔した。しかも、名前も知らない人に笑われる始末。

「（う、う、うわあああああつ。僕のバカっ、僕のバカっ！）」

「そっか。じゃ、上がって行けよ。あんまり盛大なもてなしはできないけどな」

「う、うんっ？ 上がっていいの!？」

「そりゃいいだろ。追い返す理由もないし。晃輝もいいよな？」

コウキ？ と一瞬思った。

そういえば、一夏はこの人の事をそう呼んでいる。近所に住む友達かなんだろうか？ 先約があったのにも関わらず、僕を招いて大丈夫なのだろうかと思ってしまう。

「かまへんよ。えゝっと……………シャルさんでええんか？ オレは瀬戸晃輝や。よろしゅう」

「あ、シャルはあだ名です。名前はシャルロット・デュノア。よろしく瀬戸くん」

「しっかし、一夏も隅に置けへんなあゝ。こない可愛い彼女さんがおるとは」

「か、彼女!？」

「ん？ なんや、違うんか？」

いや、将来的にはそうなりたいなあゝって思ってるけど……………その、えっと、あの……………。

「何言ってるんだよ。シャルは俺のクラスメイトで友達だよ」

……………そうですね。はい。

「それよりも早く入れよ。外だと熱いだろ？ ほら」

「……………うん」

あからさまにため息と一緒に肩を落とす。先程までのウキウキ気分も半減してしまった。

「ああ……………シャルロットさん、一夏はああ言う奴さかい、これめげたらあかんよ」

「……………うん。……………え？」

彼の言葉を聞いて僕は耳を疑った。

今の言い方、僕が一夏をどう思っているかを知っているかのような口ぶり。初対面なのになぜわかったのかと思ってしまうのだった。

だが、そんな考えも一夏の家に上がってからどうでもよくなった。

「（こ、ここが一夏の家かあ……………）」

よくよく考えれば男子の家に上がったこと自体初めてだ。そんな事を思い出すと心拍数が上がっていくのを自覚する。

「しかし、今日も暑いなー。ちょっと座って待っていてくれ、飲み物出してくれるから」

「あ、一夏。これさっき買ってきたアイス。ついでにスプーン持ってきてくれへん？」

「お、サンキュー。でも、そうしたら千冬姉の分なくなるな……」

「後で夕飯の買い出し行ってくるからその時また買ってくる」

「悪いな。じゃ、三人で食べちまおう」

リビングのソファ―に腰掛けてそんな二人のやり取りを見る。
本当に仲のいい友達なんだなと思った。

「ねえ？ 瀬戸くん」

「ん？」

「瀬戸くんって一夏と仲がいいよね？ 付き合い長いの？」

なんとなく気になったので質問してみることにした。

だが、彼から帰って来た言葉は意外なものであった。

「一夏とはついこないだ会ったばかりやけど？」

「え？」

「あーオレの親と千冬さんが知り合いで、親が夏の間旅行に行くことになってん。そんで、夏の間この家に居候させてもらってるんや」

「へーそうなんだ。それにしても仲いいよね」

「せやろ？ 初日からオレと一夏はマブダチになったんや」

「ま、まぶだち？」

「親友って意味や」

「親友かあゝ」

素直に感心してしまう。出会った時間は短かくても一夏は誰とでも仲良く出来る事が可能である。異性同性問わずそれが可能なのは凄い事だと思う。でも、異性に対しては少し自重してもらいたい。

「晃輝。変な事をシャルに吹き込むなよ。シャル、俺達は別に親友って訳じゃないぜ」

そんなこんなでアイスを小皿に乗せてやってきた一夏。瀬戸くんが言っていた親友宣言を何故か否定している。

「なにっ！？ 一夜を通して新境地について語り合ったやないか！ 兄弟！」

「ば、バカ！ シャルの前でその話をするな！？」

一体なんの話をしているのだろうと不思議に思い首を傾げる。

「ちなみに昨夜の議題は『ブラのホックはフロント派？ バック派？ どちらの方がそられる？』やった」

「だあああああ！！ 言っんじゃないやねえ！！」

ボンっ！ 頭が爆発したような気がした。

冷房が入っているはずなのに急に温度が上がったように頭が暑くなる。

「で？ フロント派の一夏くん。オレのアイスのスプーンが無いんやけど」

「があああああ！！ 俺の派閥までバラすんじゃない！！ もう黙ってるよ！ そして自分で取って来い！」

「へーい」

瀬戸くんの途方もない話で一夏は珍しく声を荒げた。やっぱ男の子同士だとそう言う会話をするだね。

それに一夏はフロントホックの方がいいのか。

今度からそう言うのを身に付ける事にしよう。

「はあ……… シャル、ごめんな。気分悪くしただろ？」

「えっ！？ そんな事ないよ！！」

一夏が忘れたスプーンを瀬戸くんが台所に取りに行っている間、二人きりになった状況で一夏が僕の心配をして来てくれる。僕としては恥ずかしい思いもしたけど、むしろいい情報を聞けたと思います。

「でも、悪い奴じゃないんだ。だから、晃輝の態度は気にしないでくれ」

「う、うん」

やっぱり、一夏は優しいな。だから、好きになったんだけど。

ピンポーン

「お？ 宅配便でも来たのか？ ちょっと出てくる」

「う、うん」

一夏が席を立って廊下に消えてから、ようやく肩の力が抜けた気がした。

どうも緊張してしまうと行動がうまくいかない。瀬戸くんがいたおかげでなんとか話題には困らなかったけど、二人つきりになるとやっぱりだめだ。

「（そういえば、一夏の趣味ってなんなのかな？ 後で訊いてみよう）」

次こそは自分からと思い、話題を再び考えておく。

「……………なんやこの状況？」

それはオレが台所でスプーン探しに手間取ってやっこの思いでお目当ての物を見つけた後やった。

一夏とシャルロットさんのいるはずのリビングに見馴れぬ少女がもう一人。

シャルロットさんと同じ金髪でまるで人形みたいに可愛らしいお嬢様がそこにおった。

「あ、晃輝。遅かったな」

「えーっと……お友達？」

「ああ、こっちはセシリア・オルコット。シャルと一緒に俺のクラスメイトだ。セシリア、こいつは瀬戸晃輝。夏の間俺の家で居候してる」

一夏の紹介でセシリアと呼ばれた少女は腰を上げてお辞儀をする。オレもそれにつられてお辞儀する。

「初めまして、セシリア・オルコットですわ」

「あ、ども。瀬戸晃輝と言いますう」

そしてお互いに自己紹介したところでオレはリビングの床に腰を降ろし、自分のアイスに手を付ける。

「晃輝。セシリアがケーキ持って来たんだけど食うか？」

「はあ？ でもそれ三つしかあらへんやん」

一夏が差し出した箱には三つのケーキが入っておった。だが、四人いる状況で三つのケーキでは数が合わん。必然的に一人ケーキに

ありつけへん。

チラリと女子二人を見ればなにか考え込む様にしとった。

きつと、二人共一夏目当てで二人きりゝみたいな事を考えて来たんやろ。それが、思わぬ邪魔者がいて計画破綻してしもつて、威嚇し合つとる。

一夏め、このハーレム野郎。

「オレはアイスだけでええわ。三人で食えや」

そのオレの言葉を聞いて少女二人の表情が明るくなった。

「そつか。じゃ、準備してくるから待つててくれ」

「ほいほーい」

「晃輝。セシリアに変な話をするなよ」

「善処いたしますう」

妙な釘を打つといた一夏はケーキの箱を持って台所へと姿を消して行った。そして、残されたオレ達三人の間では妙な空気が漂う。

誰一人喋ろうとしないひん。なんや、この盛り上がりらん合コンみたいな雰囲気は！？ お兄さんごつつう嫌いやねん！ こういうの！

「あ、あの………」

しかし、そんな空気を打ち破ったのはセシリアさんやった。

「瀬戸さんは一夏さんとはどう言ったご関係で？」

ありきたりな質問。だが、それがいい！

「オレの両親が千冬さんと顔見知りで、両親が旅行に行つとる夏の間こっちでお世話になってるんや。出会い事態はついこないだ知り合つたばかりやけど」

もちろん、嘘である。

シャルロットにも同じことを言っていたがこれはISが使える男という事を隠すための千冬さんが考えた設定や。

まあ、学園に通うようになればすぐバレるんやけど…………。

「……………変わった喋り方をされますのね？」

「なんや？ 関西弁って聞いた事あらへん？ 言葉の訛りみたいなもんや」

「はあーそうなんですの。では、ご出身は関西なのですか？」

「せや。大阪って言うよりどっちかって言うと京都寄りなんやけどな」

「京都……………あのゲイシャで有名な！」

あながち間違つてへんけど……………やっぱり、外人にはそっちの方が有名なんかな？

「京都かあゝ一度行ってみたいね」

「そうですわね。日本の『和』を司った街とお聞きしますし。着物と言つ物も一度袖を通してみたいですね」

意外と京都と言つ街に食いつく二人。

それから二人の間でガールズトークが始まり、たまに二人からの質問にオレは答える。

先程の沈黙が嘘のようにリビングには笑いが絶えへんかった。

「お、なんか盛り上がってるな？」

そして、ケーキの用意が出来た一夏が登場して二人はより一層笑顔になったんのは気にせんでおこつ。

「じゃ、ケーキどうする？」

一夏がアイスティーといっしょに持ってきたセシリアさんのお土産ケーキは、苺のショートケーキとレアチーズケーキ、それに洋なしのタルトやった。

「セシリアのおみやげだし、セシリアから選べよ」

「そ、そうですわね。では、わたくしはタルトをいただきます」

「ん、了解。シャルはどうする？」

タルトの皿をセシリアに渡し、一夏は続けて尋ねる。
その気遣いが一夏らしいちゃゝらしいのやけど。

「い、一夏が先に選んでいいよ。僕は最後でいいから」

「そう言うなって。お客さんなんだし、ほら」

「じゃ、じゃあ、その……… 苺のいいな」

「そっか。じゃあ、はい」

「あ、ありがとう。その、セシリアも、ごちそうさま」

「いえ、どういたしまして」

セシリアさんは笑顔でニツコリと笑う。それを見たシャルロット
自分が手ぶらで来た事を悔やんだのか少し暗い表情になりながら
も渡された苺ショートケーキを小さく切り、口に運ぶ。

「わ、すつごくおいしい………」

「うん。うまいなー、これ。家で作れないもんかなあ」

たしか、箱に書いてあった店の名前は『リップ・トリック』。そ
このシェフは国際大会に出て受賞しよったっていう人気のあるお店
やったな。

って、ああ……… シャルロットさんがまた落ち込んでる。

しゃあないなあ。

「一夏、せっかくやから他のケーキも食ってみたらどうや？ ショ

「トケーキぐらいならうまく作れるかもしれへんで？」

「「え？」」

「あゝそうかもな。シャル、一口くれよ」

「「えっ！？」」

「え？　だめか？　なんなら、チーズケーキと交換でもいいぞ」

「そ、それは食べさせ合いつこ……………みたいな？」

「おう」

「……………！！」

さりげなく出した提案。

女子二人には願ってもおらん状況であり、カップルならやりたいシチュエーションの一つ。

まあ、これはオレの願望でもあるんやけどな！

くそっ！　自分で言っというてアレやけど目の前でやられる所を見るのは腹立つわ！！　そして、羨ましい！！

「あれ？　晃輝、どうしたんだ？」

「あゝ実はコンビニでアイスもう一つ食ってなあ。さすがに連続二つはキツイわ。腹が冷えたからちよっと部屋で横になっとる」

「おいおい。いくら暑いからって冷たいもん取り過ぎだろ」

「オカンみたいな事いうなや。じゃ、シャルロットさん、セシリアさん、後はガンバテなあゝ」

「「っ！?!?」」

「??？」

去り際、女子二人はオレの言葉を理解したのか顔を赤くして俯いてしまう。唯一、オレの言葉を理解出来なかったのは一夏だけだった。首を傾げてどう言う意味だつと言わんばかりに悩んどった。

とりあえず、一夏に付き合わされて早起きしたからこつつう眠い。

せやから、オレはこの眠気を覚ますために自分の部屋で仮眠を取ることにした。

IS学園の一室。大量の紙媒体の資料に埋もれる少女がいた。

「ま、まだ終わらない……………」

机に伏せていた状態から顔を上げたのはアタシ、八雲ツバメである。

ちなみに現在アタシがしているのは天燕、白式、紅椿、そして新しく来たクリムゾン・レイヴンの稼働データの整理であった。

さすがに一人でやるとこの量はかなりの重労働であり、山田先生が手伝ってくれる事になったのだがアタシと同じ様に机に伏せたままピクリとも動かない。

「もう、駄目だ。死ぬ……………」

ピリリリリリリ

意識が朦朧として来た時、自分の携帯に着信が入った。なんだ？
と思いつつアタシは渾身の力を振り絞って手を伸ばし、携帯を掴み取る。

携帯の画面を見れば着信は箒からであった。

「もすもす……………」

「もす？ ツバメか？ 今大丈夫か？」

「現在進行形で死にかけてます」

「え？ それは、大変だな……………」

「で？ どうしたの？」

「いや、これから一夏の家に行こうかと思ったのだが……………」

なん、だと？ あの箒にしては思い切った行動に出るな。

「一人じゃ不安で……………それで、ツバメを誘おうかと思ったんだが、無理か？」

「いえ！ 行きます！！ 40秒で支度いたします！！」

『え？ でも、大丈夫なのか？』

バカ野郎！！ ここから抜け出す口実が出来たんだ！ コレを逃したら本当に死んでしまう！！

「えーつと。アタシは今学園にいるから駅前集合でいい？ 今から出れば10時ぐらいに着くけど？」

『構わない。では、10時に駅前で』

「了解！！」

やつほー！！ これでこの地獄から抜け出せる。悪いが山田先生、後は頼みました！！

あ、一応置き手紙は置いて行こう。えーつと、なんて書こうかな
(…………)。

『山田先生へ アタシはまだエンジョイしていない夏休みをエンジョイしてきます。しばらく戻るつもりは無いので後の事をお願いします。 八雲ツバメより』

完璧だ。よし、いざ出発！！

あれ？ なんか大事な事を忘れているような……まあ、いい
つか！！

第三十七話 織斑家での一日 前編（後書き）

次回に続く

第三十八話 織斑家での一日 中編（前書き）

やっぱり、三分割にしました。

第三十八話 織斑家での一日 中編

織斑邸は現在力オスな事になっている。

「しかし、来るなら来るで誰か一人くらい事前に連絡くれよ」

と、先程簡単に出来ると言ってざるそばを調理していた一夏が麵をすすりながら言う。

「仕方ないだろ、今朝になってヒマになったのだから」

適当な言い訳をするのは筈。

「そうよ。それとも何？ いきなりこられると困るわけ？ エロいものでも隠す？」

無理矢理、話題を変えようとする鈴。

コラ、箸で人を指さない。

「エロいと言えば、勉強机の引き出しを改造して二重底に入れてあったなあ。後は押し入れの奥にあるいらなくなった教科書の下に隠してあるのもまだ持つてるの？」

「ぶふっ！？ な、なんで知って あっ」

そして、鈴の話に乗っかりアタシが止めを刺すと見事に墓穴を掘る。

一夏はしまったと言いたげな顔をしているが時遅く、アタシ以外の女子から非難の視線がビシバシと浴びせられた。

「わ、わたくしは、ケーキ屋さんに寄っていて忙しかったので」

「ご、ごめんね。すっかりしちゃって」

わさび抜きのみそをちゅるんと食べ、セシリアとシャルロットもそれっぽい言い訳を言う。

「ちなみに私は突然やってきて驚かせてやろうと思ったのだ。どうだ、嬉しいだろう」

そばつゆに次の麺を入れながら、しれっとラウラがそう告げる。その際、アタシ以外の女子四人はラウラを見て何か羨ましそうにしていたが気にしない。

「はい、ご馳走様。空いた食器片付けてくるね」

「あ、そんなの俺がやるって」

「自分の分だけだって」

一夏が申し訳なさそうにしている所、アタシは半ば強引に自分の食器を重ねて織斑家の台所へと足を運ぶ。

しかし、箒にここに行くと言われて来てみれば、見事に他の皆が勢揃いしていたのには驚いた。

駅で箒と待ち合わせをしていれば偶然鈴と出会い、結局三人で一夏の家に向かえば今度はラウラが一夏の家の前にいたのだ。そして家の中に入ると先に来ていたセシリアとシャルロットがいるときた。

恋する乙女達の思考は皆一緒とでもいうのかな？

それと、アタシはここへ来る途中から何か大事な事を忘れており、それが何だか未だに思い出せない。

「（一体なにを忘れているんだろ？）」

台所のドアを開け、アタシは中に入る。

「「あつ」「」

そして、何を忘れていたのかを思い出した。

「な、なんで！？」

「おー八雲さんやん」

そこにいたのはつい先日現れた瀬戸晃輝の姿があった。

Tシャツに短パン。長く鬱陶しく伸びた前髪はピンで留められ、おでこがさらされている。

そして、なぜかさも当たり前かの様に台所で自分用の昼食を作っていた。ちなみに、作っていたのはアタシ達と同じざるそばであった。

「ちょ、ちょっと！？ あんた！？ 今、学園の人が来てるんだよ。こんな堂々としていて」

「あーそれは心配あらへん。千冬さんが万が一、一夏の友達が遊びに来た時は適当な嘘を言えって言われてるねん。ちなみに、設定は『千冬さんとオレの両親が顔見知りで両親が旅行に行ってる夏の間、

「ここで居候させてもらう』っや」

「……………あ、そう」

瀬戸の話を聞いてアタシは納得する。

瀬戸の存在がバレないようにしろと言われているがそれはあくまで「ISが使える」と言う事であり、「彼自身の存在を隠し通せ」と言う訳ではない。

「んー。こんなもんかな？」

ちゅるりと麺を一つ摘み瀬戸はそれをすすする。

茹で加減でも見ているのだろうか？

そんな様子を横で見ながらアタシは持ってきた食器を流しへと入れた。

「あー八雲さん。そこにある麺つゆ取ってくれへん？」

「え？ あ、うん」

「あんがとう。……………ほな、いただきます」

そして、台所のテーブルに出来あがったそばを置き、一人で食べ始めた。

「向こうで皆と食べないの？」

「いきなり、オレみたいなのが現れても気まずいやろ？ 食ったら挨拶はする」

「ふん」

意外と空気が読めて律義な奴と思った。
アタシは台所での用事は済ませたが、一夏達の所には戻らず瀬戸の座る真正面にある椅子に腰を降ろす。

「な、なんやねん？」

「うん、特には。一人で寂しいかなあと思って」

「そこまでガキやない」

ムツとしたのか瀬戸はそばをすすする音をより一層強くした。

「まあゝあなたとは色々話してみたかったし」

「話せる事なんて限られとるで？」

「そうだね。じゃ、初めの質問」

「するんかい」

「クリムゾン・レイヴンはどう？」

「どうって？」

「感じたまんまを聞きたいの」

あれにはアタシの開発された技術が詰め込まれている。まあ、技術だけで形にしたのは束さんであるのだが。

今まで技術提供などは色々な所でやってきた。だが、クリムゾン・レイヴンを調べればあれは天燕と同じELSドライブが積みこまれている。その技術だけはどこにも出していないので単純にそれを使う他の人の感想が聞きたかったのだ。

「八雲さんが考えたんやつてな、アレ。……その、自分の体によ
う馴染む。他のISとチゴうてホンマ自然に。あれで空飛んだ時は
メツチャ感動した。束さんからレイヴンの動力源を考えたんはオレ
と同じ年の女の子って聞かされた時には正直驚いたで」

正直に嬉しかった。

瀬戸はアタシを真っ直ぐ見てそう告げた。嘘偽りも無く。
それが、妙に照れくさくも感じ、口角が緩むのがわかる。

きつと変な顔になっているのだろうと思い、思わず顔を伏せてし
まった。

「なんや？ どないした？」

「な、なんでも無い！」

そんな事を悟られないようにアタシはすぐさまいつも通りに振る
舞った。

「あれ？ 晃輝。もう、起きたのか？」

「え？ 瀬戸くん？」

二人でそんな話をしていると家の主である一夏とシャルロットが
台所に姿を現す。二人の手には先程までざるそばの乗っていたざる
と麵つゆが入って皿、それと箸があった。

「おう、なんや賑やかになつとるな？」

「ああ、なんかかなりの人数になつちまった。あ、シャル皿洗ってくれるか？」

「うん、任せて」

やってきた二人はまるで新婚夫婦の様に流しで作業をして行く。

「ところでツバメ。ツバメは瀬戸くんと知り合いなの？」

一夏からスポンジを手渡され、皿を洗っていたシャルロット。アタシがここにおいて瀬戸と話をしていたのを不思議に思い、そんな質問をして来たのだった。

「うっん。台所に来たらいたから自己紹介がてらお話してたの」

「せやねん。あ、シャルロットさん、この皿もお願いできる？」

「はい」

シャルロットはそんな嘘を疑いもせず、それを信じ込む。そして、瀬戸から空いた皿を受け取り、一緒に洗い始めた。

「うっし！ 洗い物完了っつと！」

「じゃ、お茶淹れるね。暖かいのでいいんだよね？」

「おう、サンキュー。そうだ、晃輝。皆に紹介するからリビング来

いよ。会ってない奴もいるだろ？」

「せやね。ほんなら、行こうか」

「じゃ、アタシはシャルロットの手伝いする」

「うん。じゃ、ツバメはコップを人数分出して」

一夏と瀬戸は台所から出て皆の所に戻り、残ったアタシとシャルロットは人数分のお茶を用意する事になった。

「始めまして。ちょっとした理由でこの家に居候させていただいてますう。瀬戸晃輝と申します」

「そう言う訳だ。セシリアはさっき紹介したけど鈴とラウラは初めてだろ？ 篝はこないだの祭りの時に会ったし」

そんなこんなでオレは現在一夏の紹介で自分の自己紹介を目の前にいる少女達にひとつた。

「先日ぶりだな。瀬戸」

「せやね」

話の通り、オレは篠ノ之さんとは以前会ってる。一夏の案内で連れられた神社の境内の娘とか。祭りのメインである神楽舞かぐらまいの後三人

で祭りを周り、それなりに仲良うなった。

そう言えばあの神楽舞は凄かったなあ。あれを一言で表現するんやったら『美しい』やね。それだけ篠ノ之さんは格好よくて、綺麗やった。

「ほー、それが関西弁と言う奴か。貴様、漫才というやつは出来るのか？ 関西人は皆コメディコントが出来ると聞いたが」

突然の無茶ぶりをして来るのは銀髪眼帯の少女ラウラ・ボーデヴィツヒさん。どこでそのような事を学んだんかは知らんが、それは間違った解釈やで。

「なんでやねん！ 関西人皆がそんな訳ないやろ」

だが、ビシッと手の甲で隣にいた一夏を叩いてもうた。

「おお、それがツツコミと言うやつか！」

そして、そんなツツコミを見て異様に嬉しそうにしまった。

「嫁よ！ 今度一緒に漫才をやろう！ そして、私に突っ込んでくれ！」

「え？ ナニを？」

「下ネタかつ！！」

ガスッとオレのボケに一夏がオレの脳天にチョップを喰らわす。しかも、割と本気のチョップである。

「フツ、やるやないか、一夏。瞬時にオレのボケを理解してツッコミを入れるとは……………もう、教える事は何もない」

「俺はお前から何も学んだ覚えは無いんだけどな」

なん……………だと……………。

「はい。漫才以前の馬鹿をやってないでお茶でも飲みな」

と、これから一夏との漫才書ショーがヒートアップすると言う所に八雲さんが割って入って来る。

「お、サンキュー。やっぱ、食後は緑茶だな。はい、落ち着く」

夏であるうと熱茶なのは、一夏のこだわりやった。食前は冷茶、食後は熱茶。

何ともジジ臭い。

「今ジジ臭いって思ったか？」

「己はエスパーか。その鋭さを他に回せや」

「はあ？」

オレの言葉の意味を理解出来なかったのか一夏は不思議そうに首を傾げる。ちなみに、一夏以外の女子はそれを理解したのか、黙ってウンウンと頷いとしたのは言うまでもない。

「それで、この後はどうしたもんかな。うちはあんまりみんなで遊

べるものとかないぞ」

「まー、そう言うだろうと思って、アタシが用意してきてあげたわよ。はい」

そう言っつて、凰さんは一夏に紙袋を手渡し、一夏は紙袋の中身をテーブルに並べた。

並んだのはトランプ、花札、モノポリーに人生ゲーム、その他様々なカードゲームとボードゲームが溢れておった。

「ほう、我がドイツのゲームもあるのだな」

そして、ドイツ国旗が描かれていた箱を見つけたラウラさんが腕組をしながら少し嬉しそうにしまった。

「あー……それは……」

「うーん……」

しかし、一夏と凰さんはそのゲームを見て何故か口ごもる。

一同、どうした？　と言いたげな顔をし、一夏がその理由を答えた。

「そのゲームだと。ツバメに勝てない」

「ふっふん」

えっへんと腕を組みながら自慢気にする八雲さん。

「どう言うこと？」

そして、その理由を聞こうとシャルロットさんが質問し、凰さんが答える。

「このゲームはカラー粘土で何かを作って当てて行くゲームなの」

「え？ それでは、作る人間の技量に左右されるのではなくて？」

「そんなことないわよ。むしろ逆。上手く作り過ぎると、すぐに正解されてポイント入らないから。適度にわからないくらいがいいわけ」

「んん？ と言うことはつまり、下手過ぎるとやはり不利なのではないのか？」

「いや、質問次第なんだよ。答えに当たりをつけて、質問で埋めていけば大丈夫だ。どっかって言うと、造形どころよりどう言う質問をするかがこのゲームの鍵だぞ」

それぞれの質問に経験者である一夏と凰さんが説明役に回り、それに答えてった。

「それで？ なして、八雲さんには勝てへんのや？」

「ツバメは戦略的に攻めてくる」

「はあ？」

最後にオレが質問をすると二人が声を揃えてそう答えた。

なんやねん。戦略的に攻めるって？

「実際にやってみるか」

「そうね」

「久々だから腕がなるねえ」

そんな訳で皆でカラー粘土をこね始めた。

こねこねこねこね……………。

「できたっ」

「それじゃ、スタートね」

シャルロットさんからサイコロを振り、ゲームが開始される。

「えーっと、一、二、三、っと」

「あ、宝石を得ましたわ」

「アタシの番だね。……………お、質問マスだ。では、シャルロットに質問」

「僕？ いいよ」

「ちなみに回答は『はい』『いいえ』『わからない』よ。『いいえ』

を出されるまで質問出来るから、最初は大分類で始めるのがお得ね」

シャルロットさんの目の前にあるカラー粘土は四本の支えがある何かやった。つっても、それはとてもわかりやすく、瞬時にそれが何かを連想させる。

ああ、なるほど。そう言うことかいな。

「それは馬だね！」

「あ、正解」

つまり、八雲さんは確実にポイントを取得する方法で攻めてくる。それぞれの造形物から一番わかりやすい物を選び、質問をするんや。それに、質問の仕方も上手い。凰さんのアドバース通りに大分類から質問をし、確実にその範囲を絞り、確実に正解していく。

そんな調子でゲームが進行し、中盤。八雲さんがオレの『ダルマ』と篠ノ之さんの『井戸』を言い当て、確実にポイントを重ねていった。ちなみに八雲さんはシャルロットに『東京タワー』と言い当てられとる。

だが、それも計算の内。このゲームの特徴として中盤で正解されることにより、正解者だけではなく制作者にも得点が入るらしい。

しかし、さすがの八雲さんもこの二人の造形物には手を焼いたらしい。

「……………バクテリア」

「違います」

「あう……………」

思わぬ伏兵とでも言うんやろうか。

未だ言い当てられていないのはセシリアさんとラウラさんの二人だけ。

セシリアさんの粘土はこれまた奇妙な造形をしており、どんな質問をしてもかすりもしないひん。

ラウラさんも円錐状の造形物を作られておった。セシリアさんよりは形になっとったさかい、質問はしやすかった。それは、何かの道具の様に思えるが、つい先程篠ノ之さんの質問で「人より大きい」事がわかつとる。だが、それ以上の事は何もわからずじまい。

結局全員がギブアップした。

「で、ラウラ、これはなんなんだ？」

ずっと聞きたくて仕方なかった一夏が早速口を開く。

「何？ わからんのか。嫁失格だぞ」

「いやまあ、それはいいから。答えは？」

「山だ」

……………。

「は？」

「山だ」

重要なので二回言いました。

「いやいや待て待て！　こんなに山は尖っていないだろ！」

ツツコム所はそこやない気がするが何も言わないでおく。

「むっ……。失礼な事を言う奴だな。エベレストなどはこんな感じだろう」

「それならエベレストに特定しねーとわかんねーって！」

「エベレスト以外にもこういう山はある」

えらい自信で自分の粘土に間違いは無いと言い張るラウラさん。

「ま、まあ。ラウラ、正解されなかったから減点ね。それで、セシリアのは？」

「あら。誰もわからないのかしら？」

いや、これを理解できるんやったらすでに正解されとるはずなんやけど。

「我が祖国、イギリスですわ！」

.....。

そして、ラウラさんの時同様に沈黙がこの場を支配する。

「まったく、みなさん不勉強には驚きますわ。一日一回世界地図を見る事をお勧めします」

『イギリスの形を知らないわけじゃねーよ!』とは、全員が思ったやろう。しかし、ラウラさん以上に自分の造形物に自信を持つとるセシリアさんを見とつたらそんな気が失せてもうた。

「じゃ、じゃあ。今度はあたしと一夏が参加してもう一回やりましよう」

そして再度全員が手渡されたカラー粘土をこね始めるのであった。

なんだかんだで、そないな事でオレ達の時間は過ぎて行つたのであった。

IS学園でのとある一室。

「や、やっと終わりました……………」

私、山田真耶は八雲さんに押しつけられた資料整理をやっと終えたところである。

あまりの多さに八雲さん一人では辛いだろうと思い、手伝ったのが間違いだった。おかげで途中から意識が飛んでしまう。そして、次に目が覚めた時には八雲さんの姿は無く、代わりに置き手紙だけがあった。

それを見た時は再び意識が遠のくかと思った。この量を一人でやれと？

だが、そんな絶望に絶句している私でも励みがあつたからこそ頑張れた。

織斑先生からの連絡があり、飲みに行かないかと誘われたのだ。

それからは今までにないハイスピードで膨大な資料をやっつけた。

あの織斑先生が私を誘ってくれた！

これは滅多にないことだ！！

全身全霊で手を動かせ！！

この苦の先にあるのは祝福の一時なのだ！！

頑張れ！ 山田真耶！！

結果、後三日は処理に掛ると言われる量が彼女の手によって処理

されたのだっ
た。

第三十八話 織斑家での一日 中編（後書き）

まだ、続く。

第三十九話 織斑家での一日 後編（前書き）

ちよつと長目です。

第三十九話 織斑家での一日 後編

死地へと赴く士たち。^{つわもの}それはどんなイメージなのだろうと聞かれれば、たぶん俺の目の前にある光景がそうなのだろう。

「んっ……………しょ。ああもうつ……………このっ、ジャガイモっ、切りにくいっ」

鈴が、危なつかしくはないものの、ざっくりざっくりとジャガイモの皮の実ごとそぎ落としていた。

その横では、ハッシュドビーフを作っている『はず』のセシリアが、ケチャップを豪勢に鍋へと流し込んでいた。

「おかしいですね。写真と色が違います。赤色が足りませんわね」

「お、おい。そんなに大量に……………。ああっ！ 火が強すぎる！」

「ご心配なく、篝さん。わたくしの料理は最後で挽回するのが常です」

「料理は格闘や勝負ではないぞ……………」

はあっとため息を漏らす篝は割烹着^{かつぽうぎ}にほっかむりという和エプロン姿で、料理自体もしっかりと作っていた。メニューはカレイの煮付けである。

「シャルロットは何を作っているのだ？ 焼き鳥か？」

「違つよ、ラウラ。これは唐揚げ。今下味をつけてるところなの」

「ふむ、そうか」

言いながら、ラウラは大根のかつらむきを見事に行っている。その手つきは手馴れたもので、プロでさえ息を飲む。………使っている刃物がサバイバルナイフなのだから。

「ら、ラウラ、なんかすごいね。そういうの、どこで覚えたの？」

「見よう見まねだ。テレビでコックがやっていたのを真似してみた」

「真似ただけでそこまで鮮やかになるものなんだ………」

「ナイフの扱いには長けているのでな。ジャングルでは、木を加工できなければトラップの一つも作れない」

「そ、それはともかく、メニューはなに？」

「おでんだ」

………。

「おでんだ」

「に、二回言わなくてもいいよ……。でも、あれって冬の料理じゃないの？」

「夏に食べてはいけないという決まりはない」

「それはそうだけど……。あ、ラウラ、大根余ったらわけくれるかな？ 前に一夏が言ってた大根おろしを混ぜる唐揚げにしたいから」

「……………」

「ラウラ？」

ダンッ！ と、いきなりラウラが大根を真つ二つに叩き斬る。

「ああ、すまない。集中していたのできこえなかった。なんだ？」

「え、えつと、大根が余ったら欲しいなって……………」

「そうか。わかった」

ダンッ！ 正確に、五センチ幅でラウラのナイフが大根を分断していく。

「
斬る！」

ダンッ！ ダンッ！ ダンッ！ と、エプロンドレス姿の眼帯少女が大根を斬っていく様は、異様を通りこしてシュールだった。

そんな女子一同の料理風景が、とにかく気になってしょうがない様子で俺は何度もキッチンの方を振り向く。

「余所見しとる余裕があるんか？ 今や！ ハイパーモード!!」

「あ、ズリイ！」

リビングのテレビ画面。上下に二分割された画面には『YOU WIN』と『YOU LOSE』の文字が表示されていた。

「よっしゃっ！　コレで3戦2勝！」

「くそ……………」

「なんや、そないに台所が気になるんか？」

「まあ……………不安要素があるもんだから」

誰とは言わないが……………。

さて、なぜこのような状態になったかと言うと、それはちょっと前まで時間が遡る。

俺達がバルバロッサでそれなりの盛り上がりを見せていると、その途中で千冬姉が帰って来たのだ。だが、帰って来て早々にまた出かけてしまい、せっかく作ったコーヒージェリーをどうしようかと思っていた所。結局皆に振る舞うことになった。

そして、女子達が昼とゼリーののお礼と言う形でこうして手料理を振る舞ってくれることになったのだ。

「はい、一夏くん交代だよ」

「ところでツバメは料理しないのか？」

女子達が料理をしている間、暇な俺達は「IS/VIS」で対戦を

していた。しかし、そんな女子の中で料理をせず、俺達と暇つぶしをしている女子がいる。

八雲ツバメだ。

ツバメは俺からゲームのコントローラーを受け取ると鼻歌交じりに機体を選択しながらここにいる理由を告げる。

「だってアタシ料理なんて簡単なのしか出来ないんだもん。皆みたいに手の込んだのは出来ない！」

「いや、胸張って言われても……………」

「いいじゃん。あ、今度はテンペストで行こー」

こうして、ツバメと晃輝の対戦が始まる。俺はする事が無くなったのでソファーに腰を降ろし、その対戦を観戦するのだった。が、やはり、台所の様子が気になって気付けば視線はそっちに行ってしまう。

「出来たー！」

そして、時がやってきたのだった。

そんなこんなでやってきた最後の晩餐　　もとい、夕飯。

俺の目の前にはツバメ以外の女子が作った手料理の数々が並べられている。

「おおっ！　みんなメツチャ旨そうやん！」

「……………」

「ん？　どないしたんや？」

「……………いや、なんでも」

俺の隣に座る晃輝がみんなの料理を見て絶賛していると女子達は少し照れくさそうにしていた。その間俺はツバメと目を合わせ、苦笑いする。

そう、並べられた食事に異様な皿が一つだけあったのだ。言わずもがな、セシリアのハッシュドビーフだった。見た目こそは普通のハッシュドビーフ。しかし、それが放つ匂いは異常なまでに鼻を刺激するのである。

「（辛い！　セシリアの奴ケチャップの代わりにタバスコでも入れたのか！？）」

「んじゃ、これから頂こう！」

「あっ」

晃輝はよりによってセシリアの作ったハッシュドビーフを手にしてしまった。

さらに、勢い良くそれを口に入れて行く。

「ほな、いただきます!」

そして、俺とツバメは手を合わせて合掌した。
別に日々の食事に感謝しているわけではないぜ。

「なんや? 念入りに、がしよ……………う……………し、よ……………って……………」

ボタン。

晃輝が召されないようにと祈っていたんだ。

「……………うわっ、なんか一段と破壊力が増してない?」

「い、いかん! なんか拒絶反応を起こして体が痙攣しているぞ!」

「わー！ 瀬戸君！！」

「まさか、これが噂に聞く体を張ったリアクション芸と言うやつか！？ 実におもしろいぞ！ 瀬戸！！」

晃輝が前乗りに倒れると二次災害が起こる。またもや、よりによってセシリアのハッシュドビーフに顔をつつませて気を失ってしまったのだ。箸の言う通り、体がビクンビクンと跳ねあがっている。

それとラウラ。これは芸でも何でもない。必然的なリアクションだ。

「……………そうまでしてわたくしの料理が食べたかったのかしら？」

……………。

本当に、本当に不思議そうに首を傾げるセシリア。自分の所為でこうなった事を自覚していない所に思わず言葉を失ってしまう。

お前は一度自分の料理を口にしてみた方がいいぞ。

「……………ってか、ヤバイよ。瀬戸くん」

「うわー！！ そうだった！ 晃輝！！ しっかりしろ！！」

ツバメに言われて俺は晃輝の体を起こし、顔に着いたハッシュドビーフを拭き取る。そして、晃輝の意識を覚醒させるために往復ビ

ンタをお見舞いした。

え？ それじゃ余計に気が沈むって？

大丈夫だ。問題無い。

「……………うう」

「晃輝！ 良かった！？ 無事なんだな？」

「……………ああ、ばあちゃん。今そっちに行くさかい」

「わーーーーー！！ 無事じゃない！？ 晃輝！！ そっちに行くな！！ ってかお前、ばあちゃんの顔は知らないだろ！！ きつとそれは人違いだ！！」

何かがいけなかったらしく、晃輝は危険な状態だった。

有りもしない光景を見ているのだろうか、晃輝はとんでも無い事を口にしており、俺は必死に晃輝の意識を覚醒させようと頑張った。

「ハッ！！ オレは今何を……………？」

「よかった！ 今度こそ無事だ！」

「なにを言っ　　うおわっ！？　　なんや！？　　口がメツチャ辛い！！ 痛い！ 辛痛い！？」

「とりあえず、水を飲め。それで、少し横になってろ。な？」

口を手で抑えて晃輝は激しく首を縦に振った。手渡されたコップ

の水を一気に飲み干し、落ち着きを取り戻した晃輝は、ツバメが用意した濡れタオルを口に当ててソファーに横になるのだった。

「凄まじいわね。……あ、一夏。見たいドラマあるからテレビ付けていい？」

「別にかまわないけど……あんまりうるさくするなよ」

「わかってるわよ」

セシリアの料理が起こした騒動がひと段落つくと俺達は食事を始める。

もちろん、セシリアの料理には手を付けずに。

その途中で鈴が俺にテレビを見る許可を求め、それを承諾するとリモコンを持ち、テレビの電源を入れた。

『臨時ニュースです。先程、世界的有名なIS開発者、篠ノ之束博士からの各国の政府、メディアに衝撃的な事実が通達されました。なんと、世界で唯一ISを動かせる男性、織斑一夏君に続き、新たにISを動かせる男性の存在が公表されたのです。その男性の名は『瀬戸晃輝』君です』

「……………え？」「……………」

そして、俺達は絶句した。

テレビでは緊急特番がやっている。番組テロップには『世界で二番目にISを動かせる男。その正体は！？』などが書かれており、晃輝の顔写真も一緒に写し出されていた。

「な、なによ。これ……………」

「これは瀬戸なのか？」

「え？　ISを動かせるって……………」

「瀬戸さんって瀬戸さん？」

「そんな馬鹿な事が……………」

順に鈴、箒、シャル、セシリア、ラウラが言い、己の目を疑っていた。

これは何かの間違いだろうと思っているのだ。

だが、番組は晃輝がISを動かしている映像を流し、それは明確になってしまう。

ちなみに、ツバメはしまったと言わんばかりの表情で深くため息を吐いていた。

「うゝん……………」

その場にいた一同は現在ソファーに横になって、うめき声を上げている男子を見つめて言葉を失ってしまう。

「お待たせしましたっ」

駅から少し行ったところにある商店街の、その地下にあるバー息を切らしてやってきたのは山田先生事山田真耶だった。

「すまないな、急に呼び出したりして」

「いえいえ。どうせ部屋で通販カタログ眺めていただけですから」

もちろん、嘘である。

つい先程まで八雲さんが放りだした資料の片付けをして、体力的にキツイのであるが、目の前にいる織斑先生　　千冬さんに余計な心配をさせないために嘘をついた。

そして私が席に着くと千冬さんがマスター注文をし、出てきたビールで私達は乾杯をする。

「でも、今日はどうしたんですか？　お休みだから、帰省されたんじゃない？」

「そのつもりだったんだがな、家に女子がいてな」

「女子！？　おおー、もしかして織斑君のですか？」

「ああ、そうだ。うちの生徒　　というか、いつもの面々だ」

「ということは専用機持ちが七人ですかあ。戦争が起こせる戦力ですね」

「一人忘れてるぞ。瀬戸も家にいるから八人だ」

「ああ、そう言えばそうでしたね。どうです？ 瀬戸君の様子は？」

「ただで世話になるのが癪しやへなのか一夏と分担して家事をしてくれている。アイツの料理も一夏に劣らず、なかなかだぞ」

「へえ、料理が出来る男子はカッコいいですからね」

織斑一夏君は優しく、とても良い生徒だ。それでいて女子に人気がある。ただ女子高に唯一の男子と言う事で人気があるのかと思えばそれだけでは無い。単純にあの子の子といえると楽しいと思える生徒もチラホラいると聞く。

瀬戸晃輝君はどうだろうか？

一夏君同様に世界でISを動かす事が出来る男子。まだ、ちゃんと話した事が無いので何とも言えない。だが、千冬さんの話を聞く限りでは一夏君同様に優しい印象を持てる。それでいて、一夏君よりは気が利く所があるとか。

「アイツが学校に通うようなれば、一夏にもいい刺激になるだろう」

「と言いますと？」

「勉学、実技、何でもだ。瀬戸の人生観は一夏よりも大人だよ」

「へえ」

意外。と言つては失礼だがあの歳で大人びた考えが出来るのは難しい物がある。

自分が高校生の時は色々悩まされて、考え、成長し、今に至るの

だと思っている。

「っと、なんだこんな時に？ すまん、ちょっと電話に出てくる」

「はい」

そんな会話をしていると突然千冬さんの携帯に着信が入ったのだ。電話に出るために千冬さんは席を立ち、店の外へと出て行く。

つと言つか、私の携帯にも着信が入った。さすが、最新機種。地下にいても電波はしっかりと来ている。

携帯の表示画面にはIS学園と書かれている。

「もしもし？ 山田です」

『山田先生！ テレビ見てください！ 大変なんです！！』

「え？ ちょっと、なにが……」

『いいからテレビ！！』

「は、はいっ！！」

電話の向こうからは慌ただしい声が聞こえ、テレビを見るようにと指示をする。生憎、店内にはテレビなどは無く、携帯のワンセグ機能を起動させた。

そして、驚愕する。

『臨時ニュースです。先程、世界的有名なIS開発者、篠ノ之束博士からの各国の政府、メディアに衝撃的な事実が通達されました。』

なんと、世界で唯一ISを動かせる男性、織斑一夏君に続き、新たにISを動かせる男性の存在が公表されたのです。その男性の名は『瀬戸晃輝』君です』

それを見た時、自分の目と耳を疑ってしまった。

情報操作は完璧だった。

あの時来ていた研究者達にも厳重に口外しないようにと契約書を書かせた。

学園内の誰かが口外したとは考えにくい。

しかし、ニュースでも言っていた通り、『この人物』だけはどうしようにもなかった。

篠ノ之束博士。瀬戸晃輝を学園に送り込んで来た張本人。

目的は何と考えるが、凡人にあの人の考えなどわかるはずもなく、早々にそれについて考えるのを止めた。

それよりも、この事態に対する対策を早急に実行しなければならぬ。

「『山田先生』。仕事だ」

そして、すっかり仕事モードになった千冬さんが戻ってくる。

「はい、連絡は受けました。私はすぐに学園に戻ります」

「私は家に帰ってアイツを確保してくる」

「わかりました。では」

ああ、せつかくの千冬さんと一緒に楽しい時間を過ごせると思ったのに……。

「あ、そうだ。織斑先生」

「なにかね？」

大事な事を忘れるところでした。

「八雲さんがまだいたら連れて来てください」

私がそう言うとは何か織斑先生は顔が蒼白になり、顔を引きつっていた。

場所は変わって織斑邸。

「なあ？ なしてこうなつとるんや？」

「知るかよ」

「……………なんで、アタシまで」

現在リビングの床には俺の左右に正座させられた完全復活した晃輝とツバメの姿があった。もちろん、俺も二人に挟まれ正座をしている。

事の始まりは例のニュースを見て女子達が「正座」と一言冷たく言ったのが始まりだった。そして、目の前にあるソファアーには鈴、セシリア、シャル、ラウラが真剣な顔をしてこちらを見ていた。ちなみに、箒は台所から持ってきた椅子に腰を降ろし、こちらも真剣な表情をしている。

「あのニュースはなんだ？」

口を開いたのは箒だった。だが、凄まじいまでの気迫をこちらに送って来るので自然と俺は身を小さくしてそれに答えた。

「そのままの事でございます……………」

「瀬戸がISを動かせると？」

「はい」

「なぜ黙っていた？」

「それについてはアタシが話す」

なぜ、自分達に秘密にする必要があったのかと言う質問をする箒。だが、その理由を答えるのは俺では無く、隣にいるツバメだった。

「男性でISを動かせるって事は一夏くんがIS学園に入学する前

みたいな騒動が起こるんだよ。マスコミ、政府、各研究所から人が雪崩のように彼に押し寄せてくる。だから、学園側は瀬戸君の存在を彼が編入するその日まで内密にしようと考えたの」

「学園に入ってしまったえば手出しできんからな……………」

ツバメの説明に納得したのはラウラだった。だが、続けてラウラは言う。

「だが、それを私達に秘密にする必要がどこにある？ 学園に入れば私達にはバレるだろう？」

「学園側から情報規制が引かれていたの。軍でも良くあるでしょ？ 秘密事項を知った人は例え身内や親しい人でもその内容を喋ると処罰を受けるって」

「……………なるほど。たしかに」

「まあ、学園からの処罰なんて反省文の様な物を何十枚と書かされて期限付きで監視されるってぐらいだと思っけど」

いや、それはそれで嫌な気もするなあ……………。

「加えて瀬戸くんのISはアタシの天燕と同系統の設計プランを採用した『東ブランド』と来てる」

「……………各国が喉から手が出る程欲しい逸材ですわね」

「セシイの言う通り、もしかしたら強行手段を取る人だっているかも知れない」

「それなら早く学園に匿ってもらった方がいいんじゃない？」

「政府が運営しているとは言え所詮は『学校』。生徒一人が入るにしてもそれなりの手続きで時間が掛る。まあ、それはもう大丈夫なんだけど。もう学園側が動いてると思うし、もうすぐ迎えが来ると思うよ」

ツバメはテキパキと皆の質問に答えていた。それを横で見っていた俺と晃輝はその鮮やかさにはあーと息を吐き、素直に感心してしまう。ってか、いつの間にそこまでの手はずをしていたんだ？

「……………せやけど、やっぱり皆さんを騙しとったのには変わらない。ホンマ。すみませんでした！」

「うん、確かに騙していると思うと気が引けたな……………皆、ごめん」

「規制が敷かれたとは言え、やっぱり友達に隠し事は、ね？」

そう言って、俺達は素直に皆の前で頭を下げた。

そんな俺達の態度を見ると女子達はお互いの顔を見て、一斉にため息を吐いた。

「別に怒ってなんかいないわよ」

「……………え？」「」

鈴の一言に俺達は声を揃えて反応してしまう。

「そうですわ。わたしくし達はただ事情を聞きたかっただけですわ」

「え〜っと……………怒ってらっしゃらないのですか？」

「そこまで器は小さくありません」

セシリアは相変わらず凜とした態度でそう告げる。正座をして頭を下げていた俺達はお互いの顔を見合わせ、これは一体どう言うことなのだろうと考えた。

「もしかして、皆が真剣な顔をしてたから怒っていると思った？」

そして、そんな疑問に答えてくれたのはシャルだった。

「事が事なんだよ？ そりゃ、皆も真剣な顔になっちゃって」

「それに事情を理解しなくてはこちらも手助けできん」

シャルの話しに続いてラウラが言う。

「確かに貴様が抱えている事態は深刻な物だ。それを人に喋るなど出来る訳が無い。だが、私達は知ってしまった。それ故、私達に出来る事があるのではないか？」

そう告げるラウラの瞳は真っ直ぐ俺達の方に向いていた。

それは、他の女子も一緒に、力強かった。

そして、理解する。

そうか、こいつらは真剣に晃輝の事を考えてくれていたんだな。

真実を伝えなければ、今日一日だけの出会いだと思っていた彼女達。

たったそれだけなのに事情を知ればこうやって手を差し伸べてくれる優しい奴等。

「……………ハハッ」

力無く笑ったのは晃輝だった。
そして、いつもの笑顔で俺の首に腕を回し、寄り掛って言う。

「一夏、みんなええ子やな」

ああ、そう思うよ。

「当たり前だろ。俺の大切な『仲間』だからな！」

俺がなにがなんでも守り通そうと誓った『仲間』達。皆優しくて、いい奴なんだ。

でもな、晃輝

「お前だってその『仲間』になるんだぜ」

これから共に過ごす、新しい『仲間』。

晃輝はそんな俺の言葉を聞いて少し目を見開いていた。が、それは一瞬で元の笑顔に戻り、首に回していた腕をグイッと引き、俺の

首を引っ張る。そして、ガシガシと俺の頭を掻いた。

「はっ、よう言うわ。模擬戦でオレを仕留め損なったくせに」

「邪魔が入らなかつたら俺が勝ってたね！」

「あぁン？ それは聞き捨てならんなぁ……………もういっぺんやってもええんやで？ こんにゃろ」

「うわっ！ やめろよ！ ハゲる！」

「生意気な事言う奴はハゲてまえ！」

必死の抵抗により解放された俺は肩で息をしながら晃輝から離れた。晃輝はギャハハと笑っており、そんな俺達のやり取りを見ていた女子達もクスクスと笑っていた。

こうやって馬鹿な事やって笑えるっていいよな。

「お、そうだ。晃輝」

「なんや？」

新たに加わる仲間にこの言葉を送ろう。

「！.>園字HS..」

おまけ

千冬「よし、瀬戸。今日からは学園の方で宿泊してもらっからな」

晃輝「了解しました」

千冬「それと八雲」

ツバメ「はい？」

千冬「山田先生が大変ご立腹だった。よってお前も来い！」

ツバメ「いいい！？」

千冬「それと、どうやら追加で処理をしなければいけない資料がある。なに、今から寝ずにやれば終わるだろ」

ツバメ「げえっ！？」

千冬「だが、机にかじり付くのもいかん。よって、明日は私が特別に実技講習をしてやるう。どうだ、嬉しいだろ？」

ツバメ「大変恐縮ですが遠慮いたします！！」

千冬「答えは聞いていない。さ、行くぞ」

ツバメ「ぎゃーーーー！！ 御助けをーーーー！！！」

一同「南無……」

第三十九話 織斑家での一日 後編（後書き）

次回から二学期。ついに、あの人が再登場！

第四十話 始まり、そして早くも再戦。(前書き)

くて、ていへんだー！！ ツバメちゃんの活躍がまったくない
！？

くな、なんだってー！！

本当にごめんなさい。じ、次回こそは……

第四十話 始まり、そして早くも再戦。

「と言うわけで今日からこの学園で勉強する事になりました。瀬戸晃輝です。皆さんよろしゅうお願いします」

「「「「「キャーーーーー！！！！！！！！！！」」」」」

ぬわっ！？ なんや、この超音波染みた怪音は！？

「今度こそ本物の男子！！」

「織斑君並みの美形！！」

「今こそ思える！ 地球に生まれてよかったーーーー！！！！」

IS学園の二学期。その初日にオレ、瀬戸晃輝は編入したクラスで自己紹介を済ませると今のように女子達が騒ぎ始めるのやった。

にしても、ホンマ女子しかおらへんな。

え？ 一夏はって？

「「「「「『二組もこれでかつる！！！！』」」」」」

そないな訳です。

なんの勝負をしているんやろ？

「ねえねえ？ 瀬戸君ってISを動かせるからここにいるんだよね？」

「趣味はなに！？」

「今度学園を案内してあげるよ」

「あはは……………え〜っと……………」

窓際に並ぶ一番後ろに並ぶ席。そこを中心に人だかりが出来ている。それを囲む女子達は中心にいる男子を囲んで騒いでいた。

それを離れた席から見ている女子は思う事があるらしく短くため息を吐いている。

凰・鈴音だ。

「……………あいつが、うちのクラス……………」

瀬戸晃輝とあたしはちょっとした機会があつてアイツと顔を合わせている。その時は一夏の友達と言う事もあつて一緒に遊び、結構楽しい奴でいい奴だと思つた。だが、アイツもISを動かせると言う事実を知つて驚かせる。

一夏以外にISを動かせる男子。それがあたしと同じクラス……………。

「へえ〜！ 瀬戸君つて関西出身なの？」

「せや。でも、大阪やのうて京都の方やで」

「京都つて中学の修学旅行で行つたよ〜」

「あかん、あかん。学校の規則で回つとつたら京都の素晴らしさはわからへん。もし、京都に遊びに行くようやつたら声掛けてや。とつておきの場所案内したるよ」

「うんうん！ 絶対だよ！」

さつきまで女子に囲まれてあたふたしていたにも関わらず、今では状況に順応している瀬戸。

「（何と言うか、意外と軟派？ なんだか弾みみたいな奴ね。でも、色々と馴れてるのかな？）」

そう思うと、あたしはまた短くため息を吐いてしまう。

一夏もアイツみたいにもう少しあたしに気を使わせるスキルを身に付けて欲しいと思う。まあ、誰構わず話しかけるのは遠慮しても

らいたい……。』

「なあ？ 鳳さん」

「ッ！？」

色々と考え込んでいるといつの間にか瀬戸の奴があたしの目の前に現れた。

「いやゝ知つとる顔があるって安心するわあ。一年間……って、半年もあらへんか。とにかく、よろしゅう！」

「え？ あ、そ、そうね。これからよろしく」

不意に出された瀬戸の右手。一瞬何が何だかわからなかったがすぐさまその意味を理解した。だから、あたしはそれを自分の右手を差し出してそれを握る。

「おゝい！ 晃輝！」

「あ、織斑君」

「なに？ 二人って知り合いなの？」

そして、あたし達が改めて挨拶をしていると隣のクラスからやってきたのだった。思わず、あたしは瀬戸の手を握っていた手を慌てて引いてしまった。

「おう、一夏どないした？」

「なに言ってるんだ？ 一時間目は一組、二組で合同実技だぞ。男子は専用の更衣室で着替えなといけないから迎えに来たんだよ。ってか、急げ！ ここから更衣室まで遠いから時間がギリギリなんだよ！」

「うお！ マジか！？ ほな、またな～鳳さん」

「う、うん」

あたしは慌ただしく出て行く二人を見送って思わずため息を吐いてしまうのだった。

「者ども！！ であえー！！！！」

「うわっ！？ 来た！！ 急ぐぞ、晃輝！！」

「どこの武家屋敷やねん！？ うわー！ 男としてこの状況は嬉しいんやけどなんか怖い！！」

「それでは瀬戸。ISを展開しろ」

さて、早速だが妙な展開になった。

実技講師である織斑先生に指名され、周りにおける女子の視線がオレに注がれる。

……やりづらい。なんや、この空気は!?

クラスでの自己紹介もそうだったがもう一つクラスが加算された事によって人数は倍。それが一斉にこちらを見とる。

先日会った一夏達も一緒や。皆、オレの事を見とる。

「どうした。さっさとしろ」

「はい」

織斑先生に言われるがままオレは集団の前に立たされる。

さらに視線が注がれ、気まずさが倍増しよる。

よし! ならばここで一発!!

「へんし　ぐばっ!？」

「普通にやれ」

織斑先生は手にしていた出席簿を大きく振り被ってオレに投げつけた。出席簿は見事にオレの眉間にヒットし、オレは地面に倒れた。

人は第一印象。それが見事に失敗した。

「はい」

そして渋谷ISの展開をすることに。

光の粒子と共に現れたのはオレのパートナーであるクリムゾン・レイヴン。

「あれ？ 前と形が違う？」

「前のは初期設定だよ。そして、あれは一次移行した姿」

「なるほど、それでか」

そんな会話をしとつたのは一夏と八雲さん。

にしても、なして女子のISスーツってあないにエロいんやろ？
もう、体のラインが丸わかりやん。

「よし、それでは織斑……と、凰、オルコット。クラス別にタッグを組んで模擬戦をしろ」

「……え？」「」

「はやくしろ。時間が無いぞ」

「……は、はい！」「」

おおー怖っ……………。

織斑先生は三人を気迫だけで威圧すると三人はビビりながらも自分のISを展開させる。そして、凰さんはオレの元へやって来て、残りの二人はオレ等から離れた場所でスタンバイをするのやけど……。

「……………なんで、こないな事になってまうんやろ」

「こつちが聞きたいわよ」

何故か少し不機嫌な凰さん。何かを見ながらぶくーつと頬を膨らませて不満そうにした。なんやろ？　と思いオレは凰さんが見とる先に視線を向け、納得した。

「セシリア、よろしくな」

「え、ええ。ではフォーメーションは」

和気あいあいとオレ等に対する作戦会議をしとる一夏とセシリアさん。

凰さんはそれが気に入らないらしく、ギリギリと不快感を立てて歯ぎしりしとる。

「しかし、アレは確かに気に食わんな」

「え？」

「よし、決めた！　ボコす。とりあえず、ボコす。そんでもってボコす！」

「え？　ええー！？」

「自分以外でいい思いをしとる野郎はとりあえず爆発しろやーーー！」

オレの魂の叫び。

だが、そんな叫びも空しく隣にいる凰さん以外には聞こえていない。もちろん、それはISによるプライベート・チャンネルの所為なのだが。

そして、そんなどうでもいい叫びを聞いていた凰さんはキョトンとした顔をしてオレを見て、軽いため息を吐いた。

「はあ……まあいいわ。一夏をボコすのには賛成だし」

「あ、うん。せやったら、いい考えがあるんやけど」

「なに？」

「え〜っとな……………ゴニョゴニョ……………」

オレは自分の考え付いた作戦を耳打ちする。そして、その内容を聞いた凰さんはそれを理解して、不敵にも笑った。

「うおっ、なんか寒い」

ゾクッと何か冷たい物が俺の背筋を舐める様な感じがした。

「一夏さん、大丈夫ですか？ 体調が悪いのでしたら見学されていた方が……………」

「いや、大丈夫。平気だ」

そうだ。こんな所で休んでられない。

なにせ、あの時の決着をここでつける事が出来るのだから。

「よう、一夏。あの時のケリ……………ここでつけようや」

「ああ、前は邪魔が入っちまったからな」

「ぬかせ。あの時とは違うんやで？」

晃輝がそう言い終えると俺達は所定の位置に付き、スタンバイする。

『それでは！ 始め！！』

「うおおおおおおおっ！！！！」

開戦の合図。それと同時に俺と晃輝の雄叫びがグラウンドに響く。

初っ端からのイグニッション・ブースト。一気に距離を詰め、零落白夜の間合いへと持って行く。晃輝もそれをわかっていたのかクリムゾン・レイヴンのウイングスラスターを吹かしていた。

そして、俺達の距離は一気に
た。

開い

「え？」

「後退しながらのイグニッション・ブースト!？」

セシリアの解説によって俺は晃輝が何をしているかを理解した。

晃輝はあれだけ啖呵を切っておきながら俺から逃げるように飛んで行ってしまったのだ。しかも、バック走の様に体の正面はこちらに向けて。

「なっ!？ 逃げるのか!! 晃輝!？」

「わーはっはっはっは!! なに言ってるんや! あの時とは違っ
って言うたやろが!!」

「は? ぐはっ!？」

そんな晃輝に呆気にと取られていると突然の衝撃が俺を襲う。

「一体なんだ!？」

何事だと思い、その原因を探る。が、すぐにそれが何かがわかった。

「一夏。これはタッグマッチなのよ?」

俺に衝撃を与えたのは不敵に笑う鈴だった。

甲龍のアンロック・ユニット『龍咆』。見えない砲身と弾丸が特徴のソレが俺に向けられていたのだ。

いや、見えないのに向けられていると言っるのはおかしい話なのだが…………。

「でしたら、こちらの事もお忘れな」

「ああ、忘れとらへんよ」

「え？ きゃっ！！」

そして、今度は俺のパートナーであるセシリアに凄まじいビーム光線が襲う。

それは晃輝の『？梨伽羅』のバスターライフルモードによるものだった。凄まじいエネルギーの光線を撃ち放つそれはブルー・ティアーズのビット格納ユニットである肩部の片方が吹き飛ばされ、爆散した。

「おろ？ 一撃で決めるつもりやったのに……………やっぱ、精密射撃はあかんな」

「馬鹿！ 今ので決めなさいよ！」

「んな殺生な！？ でも、これで」

「「好き勝手に暴れさせてもらっ！！」」

お前等何気に仲いいだろ？

それよりも、晃輝の後退のイグニッション・ブーストは俺との距離を空けるだけでは無く、セシリアの背後に回り込み、チャンスを作り出すためのアクション。一見、ふざけた様でしつかりとしている戦法。おかげで、俺はセシリアの射撃支援を失い、鈴と一对一の状況に置かされてしまう。

「やっぱり、晃輝は強いな……………」

「一夏さん！ 呑気にしている場合じゃないですわよ！？」

「ああ、すまん」

セシリアの一喝により、俺は展開した雪片を強く握る。

とりあえず、あいつとの決着の前に目の前にいる強敵を何とかするか。

「ふむふむ、二人共なかなかやるね」

一年一組と二組のタッグマッチ。それが行われているアリーナのピット内で一人の少女がモニターを見て感心していた。

「織斑一夏。ISの操作には難あり。が、光る物を感じさせられる

わね」

少女は手にしている扇子を開き、思わずニヤついてしまう口を隠すようする。

「そして、新しく来た瀬戸晃輝。織斑一夏よりはISを上手く操作できるものの、やはり不慣れな部分がある。まあ、それをカバーできる戦略と分析能力は合格って所かしら？」

モニターが映す模擬戦の分析を終えると少女は扇子を閉じて、イタズラっぽく笑う。

それは新しいオモチャを見つけたかの様な子供の笑み。

それでいて、大人の様な色気を感じさせる笑み。

矛盾した二面を持ち合わせる少女はどこか不透明な雰囲気を持ち、神秘的だった。

「時期も頃合い。そろそろ接触してみましようかしら？ それに久々にツバメちゃんともお話したいしね」

そして、少女はピット内にあるモニターを背にし、出口の方へと歩いて行く。

「IS学園生徒会長、更識たてなし 楯無たてなし。この私が鍛えたら君達はどこまで高みへと登る事ができるのかな？」

第四十話 始まり、そして早くも再戦。(後書き)

久々に登場した生徒会長様。

さて、どうやって話しに絡ませようか悩みます。

第四十一話 会長様は気まぐれ？

二学期早々に始まった一組と二組の合同実技。

現在それが終わってオレ達は一夏と常に一緒にいるメンバーで学園の学食へとやって来ていた。

「……………のう、一夏」

「……………なんだ？」

「オレ等って……………滅茶苦茶弱い？」

「……………それを言っな」

だが、そんな中でオレ等はガラにも無く落ち込んでる。

結果を言えば模擬戦は二組の勝利。

タッグマッチにも関わらず、事実上一対一で対戦をしていた四人一夏はエネルギー切れにより凰さんに敗北。オレはセシリアさんと接戦を繰り広げ、ブルー・ティアーズのビットを全て撃破するも最後の最後で敗北。残ったセシリアさんと凰さんの勝負ではオレによってかなりエネルギーを消耗したセシリアは成す術も無く、鈴が勝利を収めたのだった。

「ふっふっふ！ これであたしは一夏に二連勝ね！ ほらほら、何か奢りなさいよ」

「ぐっ……………悔しい」

本当に悔しそうする一夏。鈴さんはそんな一夏を見て調子に乗りながらもゲスゲスと男のプライドを踏みにじっていく。

おう……………オレの心まで痛い……………。

「ちょっと、コウ。あたし達が勝ったんだからシャキっとしなさいよ」

「ああ？　ってか、コウってなんや？」

「晃輝のコウ」

……………単純やな。

「そうですね。わたくしに敗北したとは言え、晃輝さんは立派な実力をお持ちですわ」

「ん〜名前と呼ばれた？　……………なして？」

「べ、別によいではないですか！？　このわたくしが一夏さんに続いて認めた男性なのですから」

「なんや知らんけど……………そっか〜そいつは光栄や」

「そ、そうですね」

おめでとう、オレ。皆から名前と呼ばれるようになった。

いやはや、女子だらけの学園でうまくお友達が出来るか不安やったけどなんとかなっとるみたいやね。よかった、よかった。

「コウかあゝ確かにそっちの方が呼びやすいかも」

「そうか？ 私は瀬戸の方が良い気がするが？」

「ラウラ。あだ名や下の名前で呼ぶ事はその人との親密性を現すんだよ？」

「ほう、そうか。なら私もそうしよう」

そして、シャルロットさんとラウラさんも進んで名前で呼んでくれると言ってくれた。

あかん、お兄さん涙が出ちゃう。

本当に皆いい子やねん。そんな皆に想われている一夏は幸せ者で正直うらやましいと思う。もう、本当に体の奥底からドス黒い感情が湧き出るくらいに……。

「なあ？」

「ん？ どうした筈」

沸々と湧き出る負の感情をその内にやどらせてとると、突然篠ノ之さんが一夏に話しかけた。

そう言えば先程から辺りをキョロキョロと見渡して何かを探しとった気がしとったけど。

「ツバメの姿が見えないのだが………」

そんな篠ノ之さんの言葉を聞いて一同は「あっ」と声を揃えて気づくのだった。

いつも一緒にいるはずの八雲さんの姿が確かにそこには無かった。その事に不安があるのか篠ノ之さんは少し元気が無く、トレイに乗せている昼食にはあまり箸を付けていない。

にしても、ホンマ八雲さんはどこに行ったんやろ？

なぜ、こうなった……………。

「では、これより八雲ツバメの尋問を始める！！」

「始めるうゝ！」

合同実技が終わった後、更衣室で着替えを済ませて食堂に向かう途中の事だった。何か薬品の様な匂いがしたと思ったら意識がブラックアウトしてしまい、今の状況に陥っている。

暗闇に閉ざされた一室。アタシは手錠で椅子に固定され、それに座らされていた。

部屋の中にある唯一の光はアタシに向けられ眩しい。そして、そんな暗闇の中から声が聞こえてくる。

「あ、あの……やっぱりこういう事はやめませんか？」

「ええーもうちょっと遊んでみたかったのに」

「遊びでこういうことをしないでください！」

まったくだ。

どうやら、相手は複数。内一人は常識的な思考を持っているらしく、首謀者らしき人物を叱かり始めた。

「本音！ カーテン開けて！」

「はい」

トテトテと何ともスローテンポの足音が暗闇から聞こえてくる。そして、その足音が止まるとシャーっとカーテンが開き、部屋の中に光が差し込む。

「やっぱり、あなたでしたか……」

アタシは目の前にいる人物を見てそう呟いた。

「あらあら、まるで始めから解っていたみたい」

「こんな事するのはあなたしか思い浮かびませんよ。ってか、手錠はずしてください！ 楯無先輩！」

部屋全体に光が行き届いた事により、アタシをこんな目に遭わせ

た張本人の素顔があらわになる。

更識楯無。 IS学園現生徒会長にして学園最強の称号を持つ人。

そんな彼女がどこから取り出した扇子を開いて口元を隠すようにしていた。だが、口元を隠そうと楯無先輩の表情は手に取るように解る。

「ご、ごめんなさい！ 今、はずしますからね！」

「あ、どうもです」

そして、慌ててアタシに駆け寄ってくれたのは三年生のリボンをしている女性だった。その人によってやっと解放されたアタシは自分の手首をさすりながら楯無先輩を睨む。

「なんのつもりなんですか？」

「やん、怖い。せつかくの可愛い顔が台無しよ？」

「誰の所為ですか。誰の」

「ほら、本音ちゃん。ツバメちゃんが怒ってるから謝って」

ええーっと自分の所為ですかと言わんばかりに声を上げたのは同じクラスの布仏本音。通称、のほほんさんだった。

「私は会長の命令でヤックを連れて来たんですよ」

「ちょっと、まって。アタシここまで連れて来られた記憶が無いん

「だけど」

「そこは〜。この薬をハンカチに付けて〜。口を抑えればぐっすりなんだよ〜」

何気に恐ろしいことするな！？ それって立派な犯罪者のやる事じゃん！？

しかし、普段のんびりした口調をしているのほほんさんからは想像が付かない行為。完全に油断していたよ。以後、この子の行動には目を張るようにしておこうと決意するアタシだった。

「さて、そんなことより本題に入りましょう」

「何気に話を進めようとしなくてください！」

「まあまあ〜でね？ 今日ツバメちゃんを呼んだのはちょっとお願い事があったの」

「はああああ……………そんな事で誘拐染みた茶番に付き合わされたんですか。それなら、素直に呼んでくれればいいのに」

「普通に呼んだらつまらないじゃない？」

命の危機にさらされるよりはマシだよ。

「で？ お願い事ってなんですか？」

「今度の学園祭でイベントをしようと考えているのよ。で、ツバメちゃんにも手伝ってほしいなあ〜っと思った訳です」

「イベント？」

「そうよ、実はね」

「

「ほなつ、一夏。先行くで！」

「あつ！ もう少しだけ待ってくれよ！」

「そないな事しとつたら遅れるわ！ 始めからISスーツ着とつたらええやろうが」

「だあああつ！ 俺もそうしておけば良かった！！」

午後の実習。相変わらず男子にあてがわれた更衣室はアリーナからかなりの距離があり、急ぎ足で向かわなければ授業開始のベルに間に合わない。

その事を予見しとつたオレはあらかじめISスーツを制服の下に着込み、素早く着替えて更衣室を後にする。もちろん、着替えに戸惑っている一夏を置いて。

「ん？」

更衣室を出た途端の事だった。

どこからともかく誰かの視線を感じる。

「誰かおるんか？」

思わず、足を止めて声を掛けてしまった。

「……………」

しかし、オレが声を掛けても返事は無い。

「気のせいか……………」

いや、誰かいたのは気のせいやない。だが、向こうから何かせえへん限りこちらから関わりたくなかった。

嫌な予感しかせえへんからの。

だから、勝手に気のせいだと結論付けてオレは再び速足で廊下を歩いて行くことにした。

その後、授業に遅刻して来た一夏が妙な言い訳をしてシャルロットさんの高速切替ラビット・スイッチの的にされたのは言うまでも無い。

さて、一夏がシャルロットの的になっている頃。学園のとある一室。

「ふっふん」

「嬉しそうですね。お嬢様」

私、布^{のほとけうつほ}仏虚はお嬢様である更織楯無に紅茶を差し出すためカップに紅茶を入れていた。そして、お嬢様は鼻歌を歌って嬉しそうにしているのに気づき、どうしたのだろうと思いついてみたのだった。

「あれ？ そう見える？」

「はい、例の二人ですか？ 接触は上手く行きましたか？」

「うん。織斑一夏はからかいがあるわね。瀬戸晃輝は……」

お嬢様は私が淹れた紅茶を受け取り、口を付け、少し悩むようにしていた。

「瀬戸晃輝は？」

「何とも未知数ね。ちょっと気を緩めたら逃げられちゃった」

「お嬢様の尾行を？」

それは驚いた。お嬢様はこれでも『裏』に通じる技術を身に付け

ている。いくら手を抜いていたとは言え、お嬢様の気配を読み取る事が出来るとは…………。

「うんうん、断然興味が湧いてきたよ」

それはどちらに対してですか？ とは聞けなかった。

「そうですか。では、予定通り……………」

「ええ、ツバメちゃんも手伝ってくれるみたいだし。明日の全校集会でね」

「準備をはじめておきます」

「よろしくね。……………ふっふん」

私が準備のために部屋からまたお嬢様の鼻歌が聞えてきた。よほど、彼等に興味を持ったのだろう。

さて、明日からまた忙しくなりそうです。

翌日。SHRと一限目の半分を使って全校集会が行われた。

内容は今月中に行われる学園祭についてだ。

「にしても、さすが女子高。異常なまでの女子の多さやな」

「だな。この中で男一人だったら絶対浮くだろうな」

「いやいや、二人だけでも十分浮いとるわ」

オレの横にいる一夏と一緒に周りを見渡して見る。さすが、女子高と言っただけあって見事に女子ばかり。

その中で男子が二人だけとは何とも心もとない。

「それでは生徒会長から説明していただきます」

静かに告げたのは生徒役員の人やろうか。その声で、騒いどった女子の声はさーっと引き潮のように消えていった。

「やあ、みんな。おはよう」

「あつ」

壇上に青いリボンをした女子生徒が上がると隣の一夏が声を上げる。

「なんや？ どないした？」

「あの人だよ。昨日、更衣室で絡んできた人」

ほーそれはまたうらやましい事ですな。っと内心呆れながら思い、視線を壇上の方へ戻した。

「さてさて、今年は色々立て込んでいてちゃんとした挨拶がまだだったね。私の名前は更織楯無。君たち生徒の長よ。以後、よろしく」

につこりとほほ笑みを浮かべて言う生徒会長さん。その笑顔は異性同性を問わず魅了してしまうものやっただけ、列のあちらこちらから熱っばいため息が漏れた。

「では、今月の一大イベント学園祭だけど、今回に限って特別ルールを導入するわ。その内容というのは」

閉じた扇子を馴れた手つきで取り出し、横へとスライドさせる。それに応じるように空間投影ディスプレイが浮かび上がった。

「名付けて！ 『各部対抗織斑一夏、瀬戸晃輝争奪戦』！」

ぱんっ！ と小気味のいい音を立てて、扇子が開く。それに合わせて、ディスプレイにはオレと一夏の写真がデカデカと写し出された。

「.....はい？」

第四十二話 更織家

時間が経過して放課後。俺と晃輝は各クラスでやる出し物の報告を各担任に報告をし終えた時だった。

「やあ」

職員室を出るとそこには例の生徒会長さんが待ち構えていたかのようにいる。

この人によつて色々理不尽な思いをしているので睨み返すように警戒をしていた。

「生徒会長さんがなしてここに？」

だが、自分がイベント景品にされたにも関わらず、晃輝は俺と対極的な態度を取っている。

なに、この余裕な態度。俺って器小さいのかな……………？

「君達を迎えに来たのだよ」

「「迎え？」」

「「ここではなんだし。場所を変えましょう？」」

と、その時だった。

「覚悟おおおおおつ！！」

「なっ!？」

いきなり粉塵を上げる勢いの女子が竹刀を片手に襲い掛ってきたのだ。

反射的に俺は会長とその女子の間に立つが、それすらをかわされてしまい先輩に向かって竹刀を振り下ろされる。

「迷いのない踏み込み……いいわね」

しかし、先輩は扇子で竹刀を受け流し、左手の手刀を刺客へと叩き込む。

そして、今度は窓ガラスが破裂した。

「こ、今度はなんだ!？」

もはや、何が何だか解らない。

割れた窓の方を見れば和弓を射る袴姿の女子が見えた。どうやら、あそこから先輩を狙ったらしい。

「つてか、晃輝!？」

思わず、床に伏せて俺は晃輝の事を探すが、その姿は他の女子と一緒に安全地帯へと避難していた。

あれ? 俺、見捨てられた?

「もらったあああ!」

「おわっ!？」

バンツ！ と廊下の掃除道具ロッカーの内側から、三人目の刺客が登場。

その両手にはボクシンググローブが着用され、軽やかなフットワークとともに体重を乗せたパンチで襲い掛ってきた。

「ふむん。元気だね。……………ところで織斑一夏くん。って。瀬戸くんはちゃっかり避難しているか」

「は、はい」

「これから君にコーチを付けてあげようと思ってるんだけどどうかな？」

「な、なにを言って……………」

「生徒会長と言う肩書はIS学園において、一つの事実を証明しているんだよね」

先輩は半分開いた扇子で口元を隠しながら、楽しげに話す。

その間も、ボクシング女の猛ラッシュを紙一重でかわし続けているのだからすごい。

「生徒会長、即ち全ての生徒の長たる存在は

」

振り抜きの右ストレートを円の動きで避け、とんっ……………とその足が地面を蹴って身を宙へ躍らせる。

「最強であれ」

そして、突撃槍ランスのようなソバットの蹴り抜き。ボクシング女は登場したロッカーに逆再生よろしく叩き込まれて沈黙した。

「……………とね」

ソバットの際に手放した扇子を一回転のあとで床に落ちる前に手に取り、ぱんつと開いてスカートの裾を押さえる。

「見えた？」

「みつ、見えてませんよっ！」

「それはなにより」

フフ、と笑みを添えて先輩は扇子を畳む。

「……………で、これはどういう状況なんですか？」

「うん？ 見たとおりだよ。か弱い私は常に危機に晒されているので、騎士の一人でもほしいところなの」

嘘だ！！

「さっき最強だと言っていたくせにですか」

「あれ、ばれた」

そしてまた楽しそうに笑う。

……… どうでもいいけどこの人、笑い方が異常に上品な上に、しかも似合っている。

「つて！？ 危ない！！」

先輩の背後に手刀を決められた刺客もう起き上がり、どこかに隠していた脇差サイズの木刀を持って襲い掛って来ていたのだ。さすがの先輩も突然の事だったので反応が遅れる。助けようと思って自分の体を動かそうとするが向こうの方が早い。

「きゃっ！？」

突然、女性の短い悲鳴のような声が聞こえた。

声を上げたのは意外にも会長である。

会長はいきなり腕を引つ張られ、グンと後ろに下がり、会長を引つ張った人物と位置が入れ替わったのだった。

「こ、晃輝？」

会長と女子の間に立ったのは先程まで安全地帯に逃げていた晃輝だった。

「なっ！？」

「ちょ、瀬戸くん!？」

いきなりの事態に驚く先輩と刺客。しかし、刺客の勢いは止まらずそのまま木刀を突き出したまま晃輝に突っ込んでしまった。

そして、刺客が晃輝の体に寄りかかるようにぶつかり、その動きが止まる。

「晃輝!！」

「ぎゃーぎゃー、うっさいわ」

「へ？」

しかし、心配して俺が声を上げるとアッサリとした表情で晃輝は返事をしたのだった。

いや、だって。木刀が腹に

あつ。

「はいはい、終いや。お宅もこないな物騒なことせんで女の子らしくしようや？　なあ？」

「え？　あ、はい」

よく見れば、晃輝に刺さったと思われた木刀は寸前の所で白刃取りの様に掴まれていた。刺客も必死に木刀を引き抜こうとするが晃輝の掴む力が勝っている所為でそれが出来ない。そして、晃輝の言葉で戦意喪失したのか木刀を持つ手を緩めて少し顔を赤らめていた。

「ほな、場所変えましょう。騒ぎ過ぎたみたいやし」

「え、ええ……」

あれ？ 先輩なんかしおらしくなつてない？

ミステリアスと言う先輩のイメージとはかけ離れたような態度。
突然の出来事にちよつと戸惑った様子であつた。

うゝん……よくわからん。

しかし、晃輝の言う通り俺等の周りには大勢のギャラリイがいる。
だから、晃輝は床に座り込んでいた俺を起こし、そのまま会長の案内でその場を去る事にしたのだった。

「うわ……」

IS学園にある道場。現在、アタシはここに足を運んでいた。

なぜ？ と聞かれればここにアタシを呼び出した張本人がいるわけ、その張本人つてのが生徒会長である楯無先輩である。

初めは生徒会室まで足を運んだのだが、生徒会室には虚さんとのほほんさんしかおらず、事情を聞けば一夏くんの提案で二人が勝負する事に。その場所がここだと聞いてやって来たのである。

しかし、アタシは目の前の光景を目の辺りにして絶句した。

「おねーさんの下着姿は高いわよ？」

物の見事に空中コンボを決めている楯無先輩。そして、それを喰らっている一夏くんは空中で気を失っている。

「やあ、八雲さん」

「瀬戸くん？」

道場入り口近くの壁にもたれかかって座っている瀬戸くん。アタシ同様にこの状況に若干引きつつも声を掛けてきたのだった。

「なんや？ 八雲さんも学園最強を狙いに来たんか？」

「そんなのに興味はないし。ってか、これなに？」

「一夏が会長さんの袴を剥いで会長さんの下着があらわに。んでもって、ああなってます」

「……………なるほど、それじゃ仕方ない」

あのラッキースケベ野郎め。後でとっちめてやる。

「あれ？ ツバメちゃんも来たの？」

「来たの？ じゃないですよ。先輩から呼びだしたんでしょ？」

「あーそうだった。ごめん、ごめん」

「ってか、いい加減に一夏くんを降ろしてあげてくださいよ。もう、ライフはゼロですよ」

アタシの存在に気付いた楯無先輩。
アタシと喋りながらも一夏くんへの攻撃はやめずにいるのであった。

「いやーここまで見事に決まると記録更新してみたくなって」

「ちなみに現在は？」

「64 Hitよ」

「目指せ100まで」

「了解」

実に楽しそうに空中コンボを続ける楯無先輩を見て、アタシは道場に上がり、瀬戸くんの横に腰を降ろした。

「次は瀬戸くんもやるの？」

「やるわけないやろ。あんなもん食らいたくないわ」

「だよね」

「にしても、いくら学園最強とは言え………なんや、あのデタラメな強さは？ あの人、ホンマに人間か？」

「少なくとも人間はやめてないはず？」

「なして疑問形？」

「いや、アレを見てたらどうなんだろうって思って」

「確かに」

「あ、ミスっちゃった」

二人で楯無先輩について話をしていると空中コンボが終了した。
一夏くんはドサツと空中へと投げだされて畳みの上に落ち、ピクリとも動かなくなってしまうっている。

あれ、本当に大丈夫かな？ あ、一応生きてる。

「まあ、いいや。記録更新よ」

「おおー」つとアタシは瀬戸くんと一緒に歓声を上げ、パチパチと楯無先輩に拍手を送る。吹き飛ばされた一夏くんなど忘れて。そして、楯無先輩はそれに答えるようにしてお辞儀をした。

「さて、瀬戸くんもやる？」

「遠慮いたします！」

「ええー。でも、お姉さんの下着見たよね？」

「イエ、見テナイデスヨ……………」

見たんですね？ 目が泳いでいるし、方言になってるよ。瀬戸くん。

しかし、そんな瀬戸くんを楯無先輩は残念そうに短くため息するだけで何もせず、アタシ達の前に正座する。

「まあ、いいや。では、役者も揃ったし……………瀬戸くんには話おきましようか」

話を始めると目つきが変わる楯無先輩。

いや、目つきだけでは無かった。

いつもの人をからかうような態度はどこにも無く、目の前にいるのは『本当』の更織楯無本人であった。

特になにもされていないのに、アタシ達は気迫だけでその場に釘付けにされる。

「改めまして、更識家十七代目当主。更識楯無でございます」

「あ、ども」

楯無先輩の丁寧なお辞儀に対して瀬戸くんはサラリーマンの様に反射的に頭を下げた。

つてか、ええええええええええ！？

この雰囲気の中をどうして普通でいられるのよ！？ 思考が吹っ飛んでるんじゃないの！？ アタシなんて背中に変な汗かいて気持ち悪いんだから！！

「では、早速お話なのですが」

「

「ちょっとタンマ」

話が切り出されそうになった時。

話を聞かなければならない瀬戸くんがその腰を折る。そして、ピツと一夏くんを指差して言う。

「この話に一夏を加えんでええのですか？」

「彼には時期が来た時にお話いたします。………続けても？」

「わかりました。ただ、その喋り方なんとかありません？ こっちまで緊張しますさかい」

「承知いたしました。………いやゝ瀬戸くんは話がわかる子でいいわね。この話し方って窮屈な感じがして嫌い」

切り替え早ッ！？ いや、確かにそっちの方が馴れていいんですけど。

「さて、では本題です。私達、『更識家』は裏社会に存在する暗部組織に対抗するための対暗部用暗部なのよ」

そして、楯無先輩は自分がどう言った存在なのか瀬戸くんに語った。

ちなみに、アタシは先輩が初めて接触して来た時に聞かされているので全てを把握している。おかげで、化け物の先輩と組手をする日々を送るようになったのは言うまでもない。未だにこの人から一本も取れないのが悔しい。

「私が得た情報によると一夏くん、篝ちゃん、ツバメちゃん、そして瀬戸くんのISがとある組織に狙われている事が解ったのよ」

「とある組織？ それはどこですか？」

「教えてもいいけど……二度と日常には戻れないわよ？」

「なら、遠慮いたします」

「ふふふ、冗談よ」

「ハッハッハ！ ……………全然笑えまへん」

確かに、楯無先輩が言う冗談はまったく笑えない。

「で、会長さん一人で四人も守る事は難しいから一人で何とか出来るようにしろって訳ですか？」

「やっぱり瀬戸くんは理解力があっていいわね」

「はあ。じゃ、会長さんのトレーニングにオレも参加すればええんですね？」

「それもいいけど、あなたのコーチはツバメちゃんよ」

「へ？」

「同じ特性を持ったIS同士なんだからそっちの方が効率いい。それにお姉さんの手はそんなに無いのよ」

楯無先輩は手にした扇子を開き、口元を隠すように笑っている。ちなみに開かれた扇子には『残念』と言う文字が書かれていた。

「あゝなるほど……そう言う訳なんですか」

「そう言う訳なのです。だから、よろしくね」

「こちらこそ。よろしゅう、八雲さん」

「ツバメでいいよ。皆そう呼んでいるし」

「そうか？　なら、オレは晃輝でええ」

そう言うて瀬　晃輝くんは微笑みながら自分の右手を差し出して来た。アタシもそれに答えるように自分の右手を差し出し、彼の手を握る。

うん、やっぱり名前で呼び合う間柄とはいいい物だ。

「さて、お姉さんは一夏くんを保険室に連れて行くわね」

「あ、運びましょうか？」

「あら、瀬戸くんって紳士的ね」

「そいつはどうも。ほな、行きましょ」

晃輝くんはまだのびている一夏くんを担ぎ、立ち上がる。そして、アタシ達は道場を後にして保健室へと向かったのだった。

とりあえず、晃輝くん向けの訓練内容考えておかないとね。

第四十三話 立場

楯無先輩による一夏くんの初特訓が終わった後の事だった。

「お願いします。ツバメ、ツバメさん、ツバメ様。どうかご慈悲を………」

一年生の学生寮。

八雲ツバメと書かれた表札のある自分の部屋の前でアタシは驚きと呆れが入り交ざった感情が頭を支配される。

「なにやってるの？ 晃輝くん」

「見ての通りや……土下座………」

そう、今アタシの目の前にいる晃輝くんはアタシに向かって土下座をしているのであった。

「ああ〜ごめん……質問が悪かった……どうしてそんな事してるの？」

「実はカクカクジカジカなんや」

なるほど、特訓が終わって一夏くんと一緒に部屋に戻ったら部屋の中に裸エプロン姿で出迎えてくれた楯無先輩がいて、しばらく一緒にの部屋で寝泊まりすることになったと……。

ちなみに、晃輝くんが編入してから部屋は一夏くんと一緒になったのである。

「で？　なんで晃輝くんがこっちに来るの？　普通先輩じゃないの？」

「……………それを提案したら、決め文句を言われてもうて口出しできへんのや」

「決め文句？」

「……………生徒会長権限」

まさかの職権乱用。虚さん辺りが頭痛で悩まされそうだな……………。

「しかも、部屋が二人部屋って事を理由にオレを追い出しよったんや……………頼む！　ツバメしかおらへんのや！」

「うわっ！？　いきなりすぎるように抱きつくな！　まだ、シャワー浴びてないんだから！？」

「いーやー！　抱きつかないでー！！」

「このままやとオレ！　野宿やねん！　お願い！　泊めてくれえ！」

「もー！　わかったから！　わかったから！　離れてよー！」

とりあえず抱きついてくる晃輝くんを引き剥がすため、アタシは自分の部屋に彼を泊める事を承諾してしまう。その言葉を聞いた晃輝くんは半泣き同然だった表情から一変してパーっと笑顔になったのだ。

その笑顔を見てアタシはしてやられたと思った。

「いやーおおきに！ マジで助かるわ〜」

「……………くっそー、今開けるから待つて」

「ほーい」

アタシは晃輝くんを部屋に入れるために自分の部屋の鍵を開けた。

「うつわ〜、エライことになったるやん」

「……………うつさいな」

早速部屋に入れると晃輝くんは部屋の惨状を見て呆氣に取られていた。

床一面に散らばっている紙の山。

洗面台は洗われていないコップがいくつか放置されていた。

勉強机は人一人が使えるスペースだけが空いており、後は分厚い本や何の原型が何だったのか思い出せない分解された機械などが山が積まれている。

そして、使われていないもう一つのベッドは自分の洗濯物が脱ぎ捨てられ、これも山積みそのままである。

「とても女の子の部屋とは思えへん……………」

「うつさいなあー。嫌なら出てってもいいんだよ？」

「……………しゃーない、片付けますか」

「え？」

突然、晃輝くんは洗濯物が山積みになっているベッドへと歩き出した。

って、ちょっと待て！！

「ん？ なんや？」

だから、アタシは晃輝くんが洗濯の山に手を付ける前に彼の目の前に立ちはだかる。

「な、何をしようとしているのかな？」

「なにつて、洗濯物を……………」

「いい！ しなくていいから！ こっちはアタシがやる！！」

「はあ？ なして……………あつ」

どうやらアタシの言いたい事が理解出来たらしい。

そして、なぜか晃輝くんの顔はみるみる内に真っ赤になって行くのだった。

「やつ、その……………すまん……………気付かんで……………」

なぜだか気を使われてしまった。なんだか惨めになって来るし、こっちまで恥ずかしくなってくる。

そりゃ、いくらずばらでも女の子な訳ですよ。で、放置されている洗濯の山には必然的にアレもあるわけで……ホラ、わかるでしょ？ アレ、ね。アレ。

「……………床の方からお願いします」

「……………おう」

こうして始まった部屋の掃除。掃除をしている間アタシ達は気まぐずくて一言も喋らなかったのは言うまでも無い。

大体一時間ぐらいして部屋の片づけは終了した。

晃輝くんは自分が使うベッドに座り、ヘッドホンを付けて音楽を聞きながら何かの本を読んでいた。

「はい、コーヒー。インスタントだけど」

「お、サンキュー」

部屋を綺麗にしてくれたお礼も込めて差し出したコーヒー。晃輝くんは笑顔でそれを受け取り、ゴクツと一口飲んだ。

「うわっ……………ブラックかいな」

「ん？ ブラック駄目？」

「駄目やないけど……好きでは無いな」

「そっか、ごめん。ミルクと砂糖出すね」

「ああーすまん」

ふむ、晃輝くんは意外と甘党らしい。

そんなわけでアタシは晃輝くんにシュガースティックとミルクを手渡し、晃輝くんは豪快にそれらを全部ブラックコーヒーの中へと入れていく。

「にしても、あの会長さんはどないなつもりなんやる？」

晃輝くんはコップの中に入っていた真黒だったコーヒーが程良い茶色へと変色し、それを口にする。そして、それを一口だけ口にとコップを置き、喋り出した。

「え？ なにが？」

「なして会長さんは『裏』の事をオレに話したって事」

ああ、なるほど。確かにそれは気になるね。でも、一応自分がどう言う立場にいるのか把握してもらわないといけないからなあ……。

「晃輝くんはアタシ達のISにどんな価値があると思う？」

「価値？」

「天燕とクリムゾン・レイヴンにはE L Sドライバーが積みこまれている。そもそも、E L Sドライバーってどんな物かわかる？」

「えーっと……エネルギー動力源やつけ？」

「ただのじゃ無いよ。『どんな物にでもなれるエネルギー源』なんだよ」

「??? どんな物にも？」

「説明すると物理学の位相欠陥とか力学とかの話になるけどいい？」

「あー……………出来るだけ簡単をお願いします」

やっぱり、そう言う専門的な話だと解らないか。

うーん……………どうやって説明していいのやら。

「えーっと……E L Sドライバーにはとある特殊な金属結晶、アタシは『インフィニット・クリスタル（I C）』って呼んでるけど、それを粒子加速器で加速させてあげると天燕やクリムゾン・レイヴンが放出する光の粒子『E L S』が出来るの。で、その粒子つてのが生成方法次第で何にでもなる。空飛ぶための推進剤、ビーム兵器とかに」

「ん？ それって他のI Sとなんも変わらへんやん？ I Sは内蔵されとるエネルギーで空飛んだり、武装を展開したりするやんか」

確かに晃輝くんの言う通り、I Sは独自のエネルギー源がある。それを推進剤として空を飛んだり、量子変換で武装を展開し、一夏

くんの様な零落白夜の様な特殊なエネルギーを作り出したりする。そして、それは先程アタシが説明した通りの役割を果たしているのだ。

だが、ELSにはもう一つの特徴がある。

「確かにそれはISを動かすための動力だね。でも、ELSはさつきも言った通り『生成方法次第では何でもなる』事が出来る。それはつまり、生成方法を知れば『同じICを作る事ができる』んだよ」

「……………それってつまり？」

「ELSDライバーはICを粒子加速器で粒子を放出して消耗していく。だけど、同時に同じICを生成してあげればどうなる？」

「……………おい、それって」

どうやら、晃輝くんはアタシの言いたい事を理解し、言葉を詰まらせていた。

「つまり、ELSDライバーは『半永久的に莫大なエネルギーを生成出来る装置』。人類が夢見る無限機関ってわけ」

エネルギーの分解と再構築の繰り返し。それがELSDライバーの特徴。

説明したとおり、ELSDライバーの内部にはELSを生み出すICがある。それを粒子加速器で加速させることによって特殊な粒子を生み出し、それをエネルギーとする事が出来る。

天燕・斑鳩も銀翼の様なエネルギーの塊を生成出来るのはこれのおかげだ。まあ、第一形態の時はエネルギー形成、維持の仕方が解

らなく、蒼燕のように圧縮、放ぐくらいしか出来なかったが銀の福音と接触したことからその方法を得る事が出来ただけだ。

「ちょい待ち！ 無限機関って………それでもオレのクリムゾン・レイヴンやツバメの天燕かってエネルギー切れはあるやる？ 全然、無限やないやん！？」

「だって、これは未完成だもん」

「……………はあ？」

そう、実の所このE.L.Sドライバーはまだ完成されていない。あくまで完成したら無限のエネルギーを作り出せると言うだけで、現在では少し長持ちするエネルギー動力源にしかなっていないのだ。

まあ、改良は続けているのだがこれがなかなかうまくいかない。

「なんや、知らん内にけつたいなもん持たされとったんやな。オレは……………」

そして、現状を理解した晃輝くんはあからさまに肩を落としていた。

気持ちには解らないが、それが今の君の現状だよ。

「まあ、そう言う訳だから。完成していないとは言え、そこら辺の人からしたら喉から手が出る程ほしい物だから気を付けてね？」

「……………はい」

それから晃輝くんはふて寝したようにベッドに横になり一言も喋

らなくなってしまった。

なのでアタシも今日はもう寝る事にした。

「(って！ 男子が横にいるのに寝れるかあああああ！)」

ちょっと前の自分なら気にはしなかっただろう。

箒やシャルロット達はこんな気持ちで一夏と共に同じ部屋で過ごしていたのだろうか？

さて、ツバメから自分の状況を聞かされてから数日。本日の特訓も無事終了し、現在は寮食堂で夕飯を食べようと思っていたんやけど…………。

「あ……………」

丁度、本日の焼き魚定食を運んでいつもの席に座ったらオレの隣にいる男子、織斑一夏は力無き声を出しながらべちゃりとテーブルに伏せつつた。

そして、いつもの面々はそんな一夏を見て苦笑いしとる。

「一夏、お疲れ様」

「おー……………シャルか……………」

「お茶飲む？ ごはん食べられないなら、せめてそれだけでも」

「おう……………サンキユ……………」

「コウもいる？」

「お、ええんか？ なら、もらうわ」

うーん、いつにもましてシャルロット（オレが名前で呼ばれるようになったてからさん付けはやめた）は気の利くええ子やね。

「にしても一夏はどないしたんや？ 会長さんと同じ部屋になった所為でお疲れか？ 色んな意味で」

瞬間、女子達の鋭い視線が一夏とオレに向けられた様な気がした。

わゝ怖い……………。

「色んな意味ってなんだよ？ でも、確かに疲れた。なんか、毎晩からかわれて休んだ気にならないんだよ」

「具体的には？」

「……………言いたくない」

「なるほど。下着の上にシャワー一枚姿でマッサージを要望され、マッサージしてたら思わず鼻血を出したり、シャワー浴びている最中に水着姿で乱入され、くすぐり攻撃を受け、恥ずかしめを受けたかうらやましいな、おい」

「なんで、具体的に知ってるんだよ!？」

ドンツ！ と一夏がテーブルから顔を起こすと同時に目の前にお茶の入った二つの湯飲みが勢い良く置かれる。

「はいっ！ お茶!」

「お、おう………ありがとう」

「ふんっ!」

お茶を運んで来てくれたシャルロットはプリプリ怒つとる。ちなみに、この会話を聞いていた他の女子もシャルロット同様の様子だが、オレはそんな事を気にせず味噌汁をすすする。

あー味噌汁が美味い。

「それで、あの女はどうした？」

少しピリピリした様子でラウラ（こちらもさん付けをやめた）が言う。

「ん？ 生徒会の仕事があるって出て行ったぞ？」

「そーそー。書類がちよお溜まってるんだよね」

間延びした声、のんびりした口調が聞こえてくると一同はその声が聞こえた方を振り向く。

「よー本音ちゃん。元気かあ？」

「やーセットン。今日も今日とて私は元気だよ」

どこの宇宙怪獣やる？

声の主はやはり布仏本音やった。本音ちゃんは自分の夕食、鮭の切り身が豪快に乗ったお茶漬けをお構いなしにオレ等のテーブルの上に置き、ちゃっかりその場に座る。

「私はね、いると仕事が増えるからね。邪魔にならないようにしているのだよね」

「自分で言っなよ……」

確かにそれは生徒会としてどうなのだろうと一夏の言葉に賛同する。

大方、事務仕事は虚さんと会長さんの二人で回しとるんやろう。

「えへへ、お茶漬けは番茶派？ 緑茶派？ 思い切って紅茶派？
私はウーロン茶派」

ちなみにオレは玄米茶派やで。

「そしてこれ」

「……………これに?」

「卵を入れます」

何をするかと思つて興味身心にそれを見ていた一夏。だが、本音ちゃんが卵をお茶漬けに入れて掻きまわした時点でドン引き。

ふむ、それは未知なる領域や。今度やつてみよう。

「食べまーす。じゆるじゆるじゆる……………」

「本音ちゃん。さすがにそれは引くわ……………」

「えー。むりっぽー。ずぞぞつていくのが通なんだよ」

「そりゃソバだけや」

「じゃあ努力しますー。ちゆるちゆる……………」

オレの忠告を聞き入れてくれたおかげで本音ちゃんは控えめなすすり音を立てながらお茶漬けをすすった。

「こほん。……………一夏さん?」

「ん。なんだよ、セシリア。改まって」

「あの部屋にいるのがつらいなら、仕方なく、人助けということで、武士の情けということで、わたくしの部屋にいらしても構いませんわよ?」

本音ちゃんの乱入により大きく脱線した話がセシリア（くどいがさん付けは無しだ）の言葉によって軌道修正される。一夏としては再びこの話題に戻るのかと少し気まずい表情をしていた。

「ちょっとセシリア！ 待ちなさいよ！ 一夏、あんたこっちの部屋に来なさいよ。トランプあるわよ？」

「トランプで釣られるとか、小学生か！」

「じゃあ金平糖^{こんぺいとう}」

「幼稚園児か！」

「なによ、豆が いいわけ？」

「ハトか！」

おお、見事なボケとツツコミの攻防。やはり、この二人は息がぴったり合うんやな。

「なあ？ 晃輝」

「ん？ なんや？」

そんな漫才を横で見ているといきなり筈が話しかけてきた。

「ツバメが見あたらないのだから……」

「あー………しばらく、整備課の方で寝泊まりするらしくてそっち

に行っている見たいやね。なんも聞いとらへん？」

オレがツバメの部屋で寝泊まりするようになった初日。ツバメはなにやら慌てて整備課の方に行ってしまい、現在ではツバメの部屋を寝る時だけオレ一人で使わせてもらっとる。

やはりと言うべきか、なんや悪い事をしてしまったようで申し訳ない気持ちでいっぱいや。今度、お詫びになんかしてやらなあかな。

「いや、メールが来たから知っている。……その、お前は今ツバメの部屋で寝泊まりしているのだろう」

「ああ」

いつにも増して、真剣な顔でオレを見てくる筈。オレは丁度夕食を食べ終え、シャルロットの淹れてくれたお茶をすすりながら筈の話聞いてった。

「変な事したら私が許さないからな！」

「ブフツ―!!」

盛大に口に含んだお茶は噴き出された。

もちろん、女子達に被害が及ばないように隣に座る一夏に向けて。

「ゲホツ！　ゴホツ！　だ、誰がそないな事するか!？」

「ツバメに手を出したら許さないと云っている」

「はあ!？　なして、そんな事せなあかのや!？　オレは本人の

意思を無視して手出す程の甲斐性無しとはちゃうわ!!」

「その言葉に偽りは無いのかな？」

「あらへん!!」

まったく、ホンマなにが言いたいねん。予想外の人から指摘を受けてビックリしたわ。

そりゃ、女の子の部屋ですよ。青春真っ盛りの男子高校生としてはこれまでに無いイベントですが、部屋の主は殆どおらんし、オレも寝る時以外はなるべく他の所で暇潰すようにしてる。コレなんてエロゲー？ みたいな事もないねん。

いや、あつたらあつたで嫌やけども…………。

「はあ………… もう部屋に帰るわ」

「あつ、俺も…………」

なんやろ？ 一気に疲れた。こういう時はもう寝るに限る。なので、オレと一夏は食堂を出て各々の部屋へと向かって行ったのだ。

「んじゃ、一夏。お疲れ」

「おう」

ツバメの部屋に到着したオレは一夏に別れを告げて部屋に入っていた。

「……………」

「……………」

だが、それがあかんかった。

オレの目の前にはシャワー上がりのツバメさんがおり、タンクトップとパンツ一枚だけと言う何とも男心をくすぐる格好をしている。ツバメもオレがいきなり部屋に入ってきた事にビックリしているのか、目を見開いてこちらを見てくる。そして、次第にその目には涙が溜まり、今にも泣きそうな顔をしてプルプルと体が震えておった。

あー…………… あったよ。男子としてはこの上無いお色気イベントがハハッ、全然嬉しくねえ。

「これは……………セーフ？」

「……………アウト」

「ですよー」

瞬間、彼女の背中からエネルギーの羽が現れ、三十六本の光線がオレに向けられて放たれた。

そこから先の事は逃げるのに必死でなんも覚えとらへんねん。

第四十三話 立場（後書き）

単なる自己解釈です。ツツコンだら駄目です……

第四十四話 霧纏の淑女と月夜の円舞曲（前書き）

ふ、ふ、フラグが建ったぞー！！！！

第四十四話 霧纏の淑女と月夜の円舞曲

さて、ツバメとのドキドキハプニングから小一時間。なんとか、ツバメから逃げ切ったオレはアリーナの観客席で一休みしながら乱れた息を整えとる。

「ぜえ、ぜえ、さ、さすがに……………キツイわ……………」

あー、シャツが汗でグショグショや。部屋に戻ってシャワー使いたいんだけど、戻ったらツバメと鉢合わせになるかもしれんし、大浴場でも行こうかの？

「つと、あれは……………」

そんな事を考えながら辺りを見てみるとグランド中央に何かがいるのを見つけた。生憎、グランドの照明は全て落とされているためそれが何だかは良く見えへん。

だが、数秒後。雲に隠れていた月が現れてそれが何かが解った。

「……………更識会長？」

そこにおったのは他でも無い更識楯無本人やった。自主練なのかその姿はISスーツであり、そして、足元が月灯りで照らされると自分のISを展開させ、空を舞う。

それはもう神秘的やった。

例えるなら会長さんはそんなIS（衣装）を着た舞台女優。月光と言うスポットライトを浴び、空と言う舞台上で優雅に、そし

て大胆に踊る女優の様やった。

「……………」

あー……………もうアカン。ずっとこのまま彼女の舞いを見ていたい。もう、汗でグショグショの服とかどうでもええ。魅了されるって言っのはこう言う事を言っんやろか？

『あら？ 瀬戸くん？』

しかし、そんな魅力的な時間も会長さんがオレの存在に気付いたところで終わる。

IS同士のプライベート・チャンネルで会長さんはオレに話しかけて来たのだ。

「ども」

『み、見てた？』

ん？ なんや、見られとうなかったんか？

「えっと……………すみません。だいぶ前から……………お邪魔でしたらもう帰ります」

『うつん、邪魔なんて思ってないわよ。……………ね？ あなたもこっちに来ない？』

「え？ ええんですか？」

『もちろん』

では、遠慮なく。

オレは会長さんの誘いを受けると観客席からグラウンドへと飛び、そのままクリムゾン・レイヴンを展開して空へ飛翔する。

「へえー、展開速度はなかなかのものね」

「ツバメに偉くしごかれましたから」

ここ最近のトレーニング内容は地獄の基礎訓練だった。まず、始まったのがISの展開と解除の反復練習。5秒で10回は出来るようにしろと言われた時は「んな、無茶な」と反論したが、反論した瞬間にツバメは鬼コーチへと変身、おかげで5秒で7回は出来るようになり、難しい部分展開も造作じゃありません。

「じゃ、特訓の成果がどれだけの物になったかおねえさんが見てあげましょう」

「えー……………」

「文句を言わない。じゃ、付いて来てね」

そう言いて会長さんは一人でぐるぐるとアリーナ内を飛び始めよった。確かあれは円状制御飛翔サークル・ロンドやったけ？ 仕方ないのでオレもその後が続く。

「わお！ もう追いついた？ さすがね」

「散々やらされましたから」

地獄の特訓その二。ISをマニュアル制御で動かすこと。

機体制御のPICをマニュアル制御に変えて細やかな動作を可能とする特訓である。

この特訓をする時、ツバメにオートへの切り替えをロックされた時はさすがにビビったわ。おかげで、飛ぶ度に壁や地面に激突して痛い思いをした。まあ、今ではオート時の様に飛べるようにはなっ
たんやけどな。

「うんうん。短期間でこれだけ上達できれば上出来ね。さ、最後まで
でおねーさんの後に続けるかしら？」

「生憎、女の尻を追いかけるのは大好きなんで」

「いゃん」

轟ッ！

今までの速度でも十分速かったのに会長さんはさらに速度を上げてオレとの距離を引き離して行く。負けじとオレも速度を上げて会長さんを追うのだが……。

「（ぐっ………スピードを上げると機体バランスがいまいち安定せえへん。かと言って、安定させようと意識を集中させると速度が落ちる）」

「あれ？ ちょっとスピード出し過ぎたかな？」

「へ、平気ですー！」

いや、平気やないけど………女子の前で弱音を吐く訳にはいかん。

だから、強がつて意識を集中させ、現在の速度を維持しながら機体を安定させるようにする。

「んー、まだ高速飛行は物に出来ていないって。それじゃ、無理矢理にでも早く飛んでもらいましょう」

「は？」

突然、高速で飛んでいた会長さんがその場で宙返りをしよった。そして、会長さんはオレの後ろへと周り、巨大な突撃槍を構える。

おい、まさか…………。

「逃げないと痛いわよ」

会長さんがそう言った瞬間。突撃槍に内蔵されているガトリングガンが火を噴く。

「のわっ!？」

「あ、うまいうまい」

「ちょ!？　なに、悠長に言つとるんですか!？」

「ほらほら、意識を集中させないと」

ガトリングガンは相変わらず継続的に発砲されとる。オレはそれをロールでかわしたり、狙いを定めさせないようにと変則的な飛行を繰り返していた。

「（ただでさえ飛ぶのに必死やちゅうのに！ 余計に意識が分散されるわ！）」

「ちなみに、私に抜かれたら罰ゲームよ」

「んな殺生な！？」

ええい！ こうなればままよ！！

「うおおおおおおおおおおおっ！！！！！！」

背部にあるスラスターユニットに大部分のエネルギーを回し、安定制御をPICでは無く主翼だけで制御する。さしずめ、ジェット機のような飛行方法。だが、これが案外安定した飛行を可能とし、オレと会長さんとの距離はみるみる開いて行った。

「おっしゃ！！ これで勝った！！」

『あ、前』

「へ？」

ほんの少しの余所見。どれだけ距離が開いたか後方における会長さんを見つとたら会長さんがなにかを指摘してきた。なんだと思い、視線を前に戻すとアリーナのシールドバリアーが目の前に迫っていたのだ。

あ、コレ無理。

そう判断した瞬間。オレはシールドバリアーに激突し、強い衝撃に襲われ、意識がブラックアウトした。

もし、車に乗れるようになったら。絶対、脇見運転はせえへと誓った瞬間やった。

「
　　」

歌が聞こえてくる。それはとても優しく、それでいてオレの心を落ち着かせる。

「ん……………」

そんな歌が聞こえてオレの意識は覚醒する。そして、なんだかとても懐かしい気分やった。誰かの温もりを感じ、頭をそつと優しく撫でられる感覚。小さい頃……………つっても、あまり覚えとらんが誰かにこうされていた様な気がする。

「あ、やっと目覚めた」

「……………会長さん？」

ぼんやりした視界がクリアとなり、意識もハッキリして来ると會長さんがオレを覗きこむ様にしとった。

「えーっと……………これは？」

「ビックリしたよー。いきなり壁に激突してピクリとも動かなくなっちゃうんだもん。ここまで運ぶのも大変だったし」

気付けばそこはアリーナ内のグラウンドでは無く、アリーナの観客席の長椅子の上やった。そして、オレはそこに寝かされとる。しかも、會長さんの膝枕で……………。

「うわっわっ！ ごめんなさい！」

膝枕されている事を自覚すると急に恥ずかしくなり、慌てて体を起こそうとする。が、まだぶつかった時の痛みが残っているのか体は思うように動かへんかった。

「あん、駄目よ。もう少しジッとしてなさい」

「……………ぐっ」

「ISの絶対防御があるとは言え、衝撃事態は残るんだから」

「……………はい」

「でも、驚いた。フラフラと飛んでいたと思ったらいきなり安定して、しかも私より速く飛ぶんだもの。君はISの操作が下手なのか上手いのか良く解らないわね」

「……………精進しますわ」

にしても、この人の膝枕は反則的に気持ちがええ。意識がハッキリして来たばかりやっちゅうのになんだか眠くなってくる。

「ねえ？ 瀬戸くん」

眠りそうな意識を保とうと何かを喋ろうと考えていたところに會長さんが先に話しかけてきてくれた。

「なんですか？」

「この学園は楽しい？」

「楽しいです。オレにはもったいないぐらいに」

正直にオレはその質問に答えた。

ISに出会って、一夏と馬鹿やって、皆と笑って楽しくて。こんな気持ちになれたんは『前におった居場所』だけやった。

「これも皆、学園を守るために動いてくれる會長さん達のおかげなんですかね？」

「へ？」

おや？ 珍しくスットンキョとした顔をなさってますね。

「だって、そうでしょ？ こんな宝の山が埋まっている場所に手を出さない人はおらんでしょう。それが無いって事は学園側が色々頑張ってくれてるって思うんですけど？ ちゃいます？」

「……………間違ってはいないわね」

「なら、オレは会長さんにお礼を言わなあきませんね」

「え？ あっ」

心地のいい膝枕が名残惜しかったけど、オレは会長さんの膝から頭を上げて向き合うように座り直す。

「色々ありがとうございます」

「え、あ、うん……………どう、いたしまして」

「オレはヒーローって柄じゃないんですけども……………今より強くなります。その時はあなたの事を守らせてください」

「へあ！？ ま、守って……………」

あれ？ なんや？ オレ、変な事でも言ったか？ いつものひょうひょうとした態度はどこ行ったんや？ あ、今度は顔が赤くなりよった。

「どないはりました？」

「な、なんでもないよ！　そ、それより夜も冷えて来た事だし！　そろそろ、帰りましょう！」

「え？　あ、はい」

そして会長さんはすぐさまその場を立ち上がり、ツカツカと早歩きでアリーナの出口に向かってしまった。しかも、一連の動作がスムーズであり、そんなスムーズな動きにオレは対処できるはずも無く一人アリーナの観客席に置いてかれてしまう。

「ハックションー！！」

あーそう言えば汗掻いたままやった。あかん、残暑があるとは言え、さすがに夜風は寒い。早く部屋に戻ってシャワーでも浴びよ。

……………あれ？　何か忘れてるような。……………まあ、いいや。

1025号室。現在そこは私が使っている部屋だ。そこへ帰って来た事を再確認すると私はドアの取っ手に手を掛けて、その部屋に入る。

「あれ？　先輩？　今戻ったんですか？」

そしてそんな私を出迎えてくれたのはこの部屋の住人である織斑

一夏であつた。

「あら？ 裸エプロンで出迎えてくれないの？」

「……………男がそんな事やったらキモイだけです」

「残念。おねえさん、一夏くんの裸エプロンなら歓迎しちゃうのに」

「はあー……………まったく、この人は」

「フフフ。じゃ、おねえさんシャワー浴びるわね。……………覗いてもいいのよ？」

「そんな事しませんからサッサと入ってください」

「ああん。ノリが悪いわね」

「はあ……………」

一夏くんをからかい満足すると私は替えの下着とシャツを持ってシャワーに入ることにした。

しかし、洗面所に入っても着ている衣類は脱がず、目の前の鏡で自分も顔を見してみる。

「い、いつもの感じよね？」

洗面所の鏡に映っていた私の顔はなんの変哲もない、いつも鏡で見る自分の顔だった。だが、とある事を思い出すとその顔はどんな赤くなっていく。私はそんな変わり様を素直に見る事が出来ず、

私はその場にうずくまってしまふ。

「（はうゝまさか、あんな面向かってあんな事言われるなんて思ってもなかった）」

ちなみに、とある事とは先程瀬戸くんに言われたことである。

瀬戸くんの言う通り、私は影ながらこの学園を守ってきた。合法、非合法、全ての面に対してだ。だが、所詮それは影の仕事。誰にも知られず、誰からも称賛されない仕事である。

彼に暗部について話したのは少なくとも一夏くんよりは己の身は守れる技量を持っていると思ったからだ。だから、あえて自分の正体を明かし、瀬戸くんがどんな状況にいるかを話して、警戒心を持たせようと思った。

「（あ、あんな笑顔で言うなんて卑怯よ！ それに、そんな事言われたら……………甘えなくなるじゃない）」

とくん、とくんといつもより高鳴る胸に手を当ててその鼓動を感じる。

馴れない感情に戸惑いながらもそれはどこか心地良かった気がする。

これが俗に言う『恋』と言う感情なのだろうか？

「（だとしても、あんな一瞬でこんな気持ちにさせられるとは思わなかった。……………不覚だ）」

度々、一夏を想う女子達をからかっていたけれど、なんだか悪い事をしたと思えてくる。

うん、これからは少し自重しよう。

「（そう言えば……瀬戸くんって一夏くんよりは女子に対する常識を持っているみたいだけど……バレなかったかな？ バレてないよね？）」

普段と違う態度で接してしまった事で自分の抱いた気持ちぐがバレないかと心配になる。

自分のしている事は褒められる様な事では無い。だがそれでも、彼は私に心からの感謝を言葉にしてくれた。さすがの私も戸惑ったけど、一方で嬉しさが込み上げてきた。

そして、極めつけは……

あなたの事を守らせてください。

その言葉を思い出すとまた顔に熱が帯びて来た。

「（……………たぶん、そんな気があって言ったんじゃないと思うけど。イヤイヤ、もしそうだったら嬉しいんだけど、でも、えっと、うーんっと……………」

ただいま混線中の思考をリセットさせようと思いつき頭を左右に振ってみる。が、少し力を入れ過ぎたためかすぐに気分が悪くなるのでやめてしまった。

「……………瀬戸、晃輝か」

名前を口にするとまたとくんと心地良い鼓動が聞こえてくる。

それがあまりにも心地よくて、私はしばらくその音に耳を傾けているのだった。

「……………完全に忘れとった」

ツバメの部屋に戻ってきたオレは現在正座中である。

「さあ、O H A N A S I。しよつか？」

ああ…………その可愛らしい笑顔がもう怖いです。

「すみませんでした!!」

潔く土下座。

日本古来より怒り狂った人はこの手法でその怒りを鎮める事が出来る最強の手段!

これでツバメさんもオレの心からの謝罪で怒りを納めてくれるはず!

「いいよ。いいよ。そんなに誠意を込めなくて、暴走したアタシも悪かったしね。でも、寮内でISを展開させて、寮長である織斑先生にこつてり怒られて、なんだかムシヤクシヤするの? ねえ? この気持ちをどこにぶつけたらいいかな?」

「…………えーっと、オレに?」

「えっ!? いいの? わー晃輝くんって優しいね。じゃ、遠慮なく」

言っんや無かった! 誰や、土下座なんて考えた人! 全然効果無しやん!

だが、そんな後悔もすでに遅く、オレの死刑宣告は見事に判が押され、今まさにそれが執行される所やった。

ああ……………そういえば、明日は学園祭やったな……………オレ、無事に出れるかな?

第四十四話 霧纏の淑女と月夜の円舞曲（後書き）

この小説を書いている事を知っている友人、そしてたまに読者様から寄せられるカップリング案。

それを考慮していたらこうなりました。

と言う訳で瀬戸くんは楯無会長にフラグを建てやした。

友人A（・・） チョイチヨイ

え？ なに？ まだ増える？ …… ハハハ！ そんな馬鹿な！

ジー（・・）ー

………… マジで？

グッ d（・・）

第四十五話 学園祭（前書き）

大分遅くなりました。申し訳ない……………。

第四十五話 学園祭

そんなこんなで学園祭当日。

「うそ！？ 一組であの織斑くんの接客が受けられるの!？」

「二組は瀬戸くんがお菓子作ってくれるんだって!!」

「一組はゲームあるらしいわよ?」

「しかも勝ったら写真を撮ってくれるんだって! ツーショットよ、ツーショット! これは行かない手はないわね!」

「二組の瀬戸くんは普通に写真一緒に撮ってくれたわよ?」

「あーいいなー! 私も一緒に撮ってもらう!」

アタシのクラス一年一組の『ご奉仕喫茶』と隣の二組の『中華喫茶』は盛況で、朝から大忙し。

特に男子二人は引つ張りだこな状態で、他の女子達はわりと普通に楽しそうにしている。

「いらっしやいませ こちらへどうぞ、お嬢様」

「シャルロットは楽しそうだね?」

「だってメイド服だよ? 可愛いよね? ツバメも似合ってるよ」

「ありがとう」

接客班（コスプレ担当）はシャルロットとセシリア。そして意外なことに箒とラウラ、そしてアタシもだ。

そして、一夏くんは執事服を着て裏方でスタンバイ。特別メニューがオーダーされた時だけフロアに姿を現し接客をする。

「ちょっとその執事、テーブルに案内しなさいよ」

どこかで聞いたような声が聞こえた。

教室の入り口の方を見れば、チャイナドレスの鈴ちゃんが外を覗こうとしていた一夏くんに声を掛けていた。

「きゃー鈴ちゃんセクシー！」

「うわっ！ ツバメ！ 抱きつかないでよ！」

何を言いますか。一枚布のスカートタイプのチャイナドレスでかなり大胆にスリットが入っているのですよ。それでいて頭のシニヨンがこれまた可愛い。抱きつかずに何をしろと？

「ええい！ とにか、案内しなさい！ ちなみに二人だから！」

「え？ 二人？」

鈴ちゃんに抱きつく事に夢中になっているとその一人が教室の中に入ってくる。

『儲かってまっか？』

「「「「「.....パンダ?」「」「」」」」」

教室に入って来たのはパンダだった。

いや、もう見事なまでのパンダのきぐるみだった。

『反応薄っ!?!』

そして、パンダのきぐるみを着ている何者かは胸から下げている
ホワイトボードにセリフを書き込み、何を言いたいか教えてくれている。

「鈴ちゃん。あれ、誰?」

「誰って.....コウだけど」

アタシがあのパンダの正体について鈴ちゃんに聞いてみると予想
していた答えが帰って来たのである。

「ぎやははははは!! なんだよ晃輝!? その格好!」

『うつさいねん! やつともらえた休憩やつちゆのに店の宣伝を兼ねてコレ着ろって皆が言うんや!』

一夏くんはパンダの中身が晃輝くんだとわかると大爆笑しており、
晃輝くんはホワイトボードで文句を書く。

ってか、きぐるみ着てても喋れるんじゃないの?

「コウ、もういいわよ。店の中では脱いでいいから」

『マジで？ そりゃ、助かる！ そんな、鈴が好きだ（笑）』

「やっぱ脱ぐな」

『ごめんなさい！！（涙）』

「ほら、一夏。さっさと案内しなさいよ」

「くくくく、ああ〜いいもん見れた。…………ふー、それでは、お嬢様、御主人様。席へと案内いたします」

一夏くんが店のルール通りに執事役を演じると二人は鳩が豆鉄砲を食らった様になり、鈴ちゃんは次第に顔が赤くなって俯き、晃輝くんは首から下げてるホワイトボードに「w」の文字を一杯に書いていた。

「あーあー！ これが店のルールなんだよー！！」

一夏くんも自分でやっておきながら、逆ギレしている。どうやらこの接客にまだ慣れず、恥ずかしいと思っているのだろう。さっさと二人を席に案内して注文を取ろうとしている。

「この、『執事にご褒美セット』って何よ？」

「オレはこっちの『メイドにご褒美セット』ってのが気になる」

そして、二人を席に案内し、メニューを手渡すといきなり気になったメニユーを口にしたのだった。ちなみに晃輝くんはパンダのきぐるみを脱いで普通にしている。

.....。

「当店おすすめのケーキセットはいかがですか？」

「なんでしたら、サービスでドリンクおかわり出来るようにいたしますよ？」

「「おいこら、誤魔化すな」」

無理に話を逸らそうとしたが失敗に終わった。

「執事はきつと一夏絡みと見た！」

「メイドはこのフロアにいるメイドをチョイスして何かさせるのね！」

客として来ている中華コンビは楽しそうにお互いのメニューの内容について勝手な解釈をしていく。もはやそれはイタズラを思いついた子供の様なしやぎ様。それでいて、その勝手な解釈が見事に当たっているから怖い。

「じゃ、あたしは『執事にご褒美セット』！」

「ほんなら、オレは『メイドにご褒美セット』！」

そして、オーダーが言い渡された。

閻魔大王に地獄行きの大鼓判を押されたような、空から終焉のラッパが聞こえて来た様な気分だった。

いや、実際はどんなのか知らないけど。

まあ、一夏くんはとにかくアタシはまだ助かる術があるのだからいいとして、さっさと厨房班にブローチ型マイクでオーダーを伝える。キッチンテーブルには二つのアイスハーブティーと二つの冷やしたポッキーが用意され、アタシと一夏くんはそれをワンセットずつ受け取り、中華コンビの元へと戻る。

「お待たせしました、お嬢様、御主人様」

「う、うむ。くるしゅうないわよ？」

「それでは、まず『執事にご褒美セット』の説明をいたします」

アタシがそう言うで一夏くんは渋々鈴ちゃんの正面へと座る。

「では、お嬢様。この執事にご褒美をあげてください」

「……………はい？」

「ですから、目の前に用意されたポッキーをこの執事にお与えください」

「えええええっ!？」

簡潔な説明を終えると鈴ちゃんはいちくりまばたきをして、顔がポツと赤くなる。

「それから、『メイドにご褒美セット』ですが……………」

パン！　パン！

これから説明を始める前にアタシは手の平を叩いて皆に知らせる。ちなみに、皆とはフロアに出ているメイド達、シャルロット、セシリア、ラウラ、箒のことである。それが合図と解っている皆はすぐさまアタシの後ろへと並び、待機する。

「な、なにするん？」

「アタシ達の中から一人をお選びになってそこの執事同様のご褒美をお与えください」

つまり、こういう事です。

『執事にご褒美セット』は一人しかいない執事にお客がポッキーを食べさせる事が出来るセットであり、『メイドにご褒美セット』は五人いるメイドの中から一人を選びポッキーを食べさせると言うセットである。

確立は五分の一。晃輝くん次第でアタシがこの恥ずかしい思いをしなくて済むと言っわけなのだ。

「ええー…………マジかあ。それは、恥ずかしいなあ。うーん、どないしよう……………」

晃輝くんは目の前にいるメイド達を品定めするように見て悩む。

一方、鈴ちゃんは顔真っ赤にしながら一夏くんにポッキーを食べさせており、それを見ていた四人のメイドからは羨ましそうに見ていた。それはもう、解りやすくギリギリと歯ぎしりをしながら、呪詛の様な声までもが聞こえてくる。

立ち位置の関係で先頭にいるアタシは背後から感じる多大なプレシャーに苦笑いするしかない。対面している晃輝くんもアタシ同様の気持ちなのか、同じ様に苦笑いしていた。

「あ、そや」

そして、何かを閃いたらしい。

「なあ？ 内容変更はできひん？」

「変更とは？」

「ほい、一人一本取って」

晃輝くんはコップに入った冷えたポツキーを一本ずつ渡してくる。アタシを含めた皆はその真意が解らずに受け取り、全員にポツキーが行き渡るのを晃輝くんが確認するとニツコリと笑顔になって変更内容を告げた。

「じゃ、それでそこにおける執事に食べさせろ」

「うえっ！？」

「……え？」

なんとも間抜けな声で驚く一夏くん。そして不可解な発言にメイド五人は声を揃えて驚いてしまう。

だって、意味が解らないんだもん。なんで、そんな事をしなければならなんだよ。っとメイド達が顔を見合わせどうしようと悩んでいたらその発言の意味を晃輝くんは教えてくれた。

「メイドに『ご褒美』やる？ ほれ、『ご褒美』やるから執事に食
わせろや」

「「「「「あつ」「」「」」」」

そして、理解した。なるほど、これは間違いなくご褒美だ。

「ご、御主人様の命令となればしかたありませんわね」

「そ、そうだね。これはご褒美だもんね」

「うむ、褒美となればしかたないな」

「……………一夏に……………ポツキー……………」

順にセシリア、シャルロット、ラウラ、箒はその命令に戸惑いな
がらも納得する。

それよりもこの後の展開を妄想爆発で乙女オーラと言すべきか、ピ
ンクオーラと言すべきか、とにかく見つともなく顔がニヤけていた。

そして、アタシ以外のメイド達の熾烈な戦い（ジャンケン）が幕
を切ったのだった。

「面白い事をしているわね？」

「あ、楯無先輩」

「やあ ツバメちゃん。かわいいメイド服ね」

「ありがとうございます。…………でも、なんで先輩までメイド服に？」

「可愛いでしょ？」

答えになってません。

突然やってきた楯無先輩はさっきも言った通りにアタシ達と同じメイド服姿なのである。しかも、このクラスで使用している物と一緒のだ。それが気に入ったのかやけに上機嫌だ。

「おろ？ 会長さん？」

「ひゃ！？ せ、瀬戸くん！？」

「むっ、なんですか。その反応は？ 傷付くわ」

「えっ！？ そんなつもりは無かったのよ！ 本当よ！」

「冗談です。うーん、ヒョウヒョウとした態度の会長さんもええですけど、取り乱す会長さんも新鮮でええですね」

「なっ！？ からかわないでよ！！」

なんだが勝手に二人で盛り上がっております。

ほんの数秒ですっかり蚊帳の外にいるアタシはどうしようと悩んでいるとちょうどメイド達が一夏くんにポツキーをあげ終えていた。

「にしても、メイド服ええですね」

「ほ、ほんと？ に、似合ってるかな？」

「ええ、メツチャ似合っとなりますよ。これぞ生徒会長 メイド様」

「それ、あんまり伏せてないわよ？ でも、ありがとう」

ほーれ、一夏くーん。ポッキーですよ。あ、やけくそ気味に食いついて来た。

「あ、あのね、瀬戸くん！ 良ければなんだけど、この後一緒に学園祭を周らない？」

「ん？ 別にええですけど。今の休憩も後少しやし……次の休憩が昼前やから……まあ、その時に連絡でもしますよ？」

「お昼前かー……うん、大丈夫。ステージは何かなる……。わかったわ、それじゃこれ私の携帯の番号ね」

「どうも。……ところでステージってなんです？」

「ふふふ、それは後のお楽しみ」

うわー、なんかりスミたいにコリコリとポッキーを食べてる。なんか、可愛い。あ、なんか周りのお客が写真を撮り始めた。

アタシもデジカメ持てればなあ。お、薫子先輩一眼レフで一夏くんの写真ですか？ 焼きまわしてくださいよ。え？ 一枚300円？ 先輩、それは高いですかい？ でも三枚分予約しておきます。

「さて、そろそろ戻りますわ」

「あら？ もう行っちゃうの？」

「せやったら店の方に来てくださいよ。とびっきりの胡麻団子を用意しますさかい」

「ふふ、じゃーその時はサービスしてね」

「はいはい」

おや？ いつの間にか二人だけの空間は終わったみたいですね。

晃輝くんも皆に挨拶して鈴ちゃん引張って自分の教室に戻ってちゃうし、残された楯無先輩なんかも顔がデレデレしてる。

どうやら二人の間に何かあった事が窺える。

「『IS学園生徒会長に春が訪れる！』うゝん……………ありきたりでインパクトがいまいちかしら？ ツバメちゃんはと思うっ？」

「いや、十分じゃないですかね？」

そんな楯無先輩の浮かれ様を記事にしようとしていた薫子先輩を別に止めようとは思わなかった。

だって、その方がおもしろそうじゃない？

「はあ〜……………やっと休憩だ……………」

「と言っても先輩に代わってもらって抜け出ただけなんだけどね」

「……………えっと、ツバメさんはどうして着いて来るのでしょうか？」

さて、やつともらえた休憩なわけだが。

現在、俺はツバメと二人で学園校門へと歩いていた。

「やー『ゴハン』くんが来ると聞いては会わねばならないでしょ〜」

そう、俺はこれからこの学園祭に招待した友達を迎えに行く所である。

名前は五反田^{ごたんだ}弾^{だん}。

なにやらこの学園に来たがっていたようだったし、今回の学園祭で外部の人を一人招待出来るとの事で招待してやったのだ。

電話越しではあったがアイツの喜びようには弱冠引いてしまったのは言うまでも無い。

ちなみに、ツバメが弾の事を『ゴハン』と言うのは五反田^{ごたんだ}の五反^{ごはん}部分を五反普通に呼んでしまったのがきっかけである。

実にどうでもいい。

「あの〜……………」

「はい？」

そして正面玄関へと向かう途中、階段の踊り場で女性に声を掛けられた。

「失礼しました。私、こういうものです」

スーツの女性は手早く名刺を取り出して渡してくる。

「えっと…… IS 装備開発企業『みつるぎ』 渉外担当・巻紙礼子まきがみ れいこさん？」

「はい。織斑さんにぜひ我が社の装備を使っただけなにかと思ひまして」

「（ああ…… またこういう話しか……）」

正直な話し、白式の装備提供を名乗り出してくる企業は後を絶たない。夏休みも半分以上そういう人達と会っのに費やしてしまったぐらいに。

「（って言ってもなあ。白式が嫌がるからどうしようにもないわけだが）」

実の所、俺の白式に後付武装が使えないのは『白式自身の好み』によるところがある。射撃武器も全滅、楯もダメ、雪片式型以外の格闘武器もノーなのだ。

まあ、今は第二形態である『雪羅』があるから射撃、防御、格闘と幅広くこなせるように設計されているから問題は無い。

「どうです？」

「えーっと……そう言うのはちょ」

「はい！　そう言うのは学園の方から許可を得てやってください」

「「え？」」

押し寄る巻紙さんにたじろいていた所にツバメが割って入って来てくれた。

「巻紙さん『みつるぎ』の人ですよね？」

「え、ええ。そうですが？」

「先日お渡しした白式に関する資料見ました？　色々と条約とかが書いてあったんですけど？　後付武装の開発特許は倉持技研が有しているんですよ？　もし、これが無断によるものだったらみつるぎは倉持と学園と国に慰謝料を払ってIS開発資格を剥奪されます。後、この場合巻紙さんは契約違反とみなされ、司法裁判のちにそれなりの処罰がくだります。まあ、最低でも5年は牢屋ですね。あ、好きでやっているならどうぞ？　別にアタシは止めませんから」

「し、失礼します！！」

なんとまあ、ツバメの見事なまでの説明により巻紙さんはその場を去ってしまった。

ってか、白式ってそんなことになっているのか？　あれ？　そう

言えば夏休みにそんな紙切れ見たような気がするけど…………。

「夏休みに書類にサインしたでしょうが？　ちなみに一夏くんも契約違反したらブタ箱行きになるからね」

「…………マジか」

「マジ」

これから契約書は内容を読んでからサインする事にしようと思い決めた今日この頃である。

「つと、予想以上に時間取られたな。サッサと弾の所に行こう」

「それもそうだね。ゴハンくんもいい加減待ちくたびれちゃうもんね」

「ふ、ふ、ふつ……………」

IS学園の正面ゲート前で、一人の男子がチケットを片手に笑いをこらえている。

それは一夏の友人こと五反田弾である。

「ついに、ついに、ついにっ！　女の園、IS学園へと……………来

たあああああ！！」

遡る事三日前。いつものように友人である御手洗^{みたらいかずま}数馬の家でベースの練習をしていた時に一夏からのES学園へのお誘いがあったのだ。

あの時は心の底から喜んだね。いやー、マジで友達は大切にすべきだぜ。

「（ああ、ここからでもたくさんの女子が見える……。レベル高いよなー、正直）」

若干気合の入った私服を着てはいるが、やっぱり女の園に十代男子がいるのは目立つのだろうか。先程から女子の視線がこちらに向けられて気になってしょうがない。

「（どこか変な所でもあったか？）」

「そこのあなた」

「はい！？」

キョロキョロと自分の格好を再確認している所に不意に声をかけられて、思わず背筋を伸ばしてしまった。おまけに声が裏返った。マジで恥ずかしい……。

「あなた、誰かの招待？　一応、チケットを確認させてもらっていいかしら？」

「は、はいっ」

「配布者は……あら？ 織斑くんね」

「え、えっと、知っているんですか？」

「この学園生で彼のことを知らない人はいないでしょう。はい、返すわね」

「（こ、この人、むちゃくちゃ美人……いや、可愛い！ なんとかお知り合いに……話題、話題……）」

目の舞いにいるのはメガネと手に持ったファイルがいかにも堅物そうなイメージをした人であった。だが、雰囲気から来るお姉さんのオーラとんだか優しそうな表情が見事に俺の心を驚掴みにするのである。

「あ、あのっ！」

「？ 何かしら」

「い、いい天気ですね!？」

「そうね」

会話終了。自分のセンスの無さに心底呆れるぜ。こんなことならもつと雑誌とか読んで勉強してくればよかった……。

「あら？ あれは……」

「ん？」

一人で落ち込んでいると、彼女が何かを見つけたらしくそのままトコトコとこの場を去ってしまうのであった。

ああ、もう少しお話してみたのに……。俺の馬鹿！

俺の馬鹿！ 俺の馬鹿ああああああああああああ！！

『兄さん大丈夫か？』

「へ？」

つと、一人で地面に向けて顔ドラムをしていると、今度は突然そんな文字が書かれたクリップボード俺の目の前に差し出されたのであった。

一体何事だ？ と思いながら打ちつけた額をさすりながら視線を上に向けて見る。

「……………パンダ？」

そこにいたのは紛れもないパンダのきぐるみだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4355t/>

IS ~Blue Swallow~

2011年10月16日22時27分発行